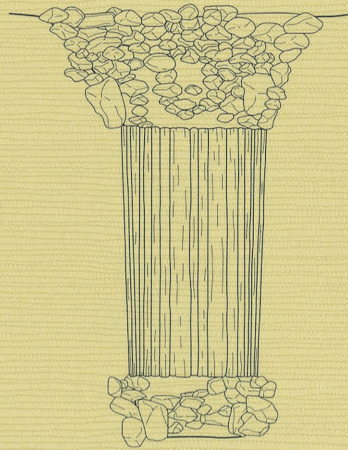
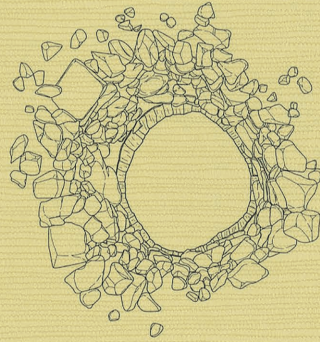


徳王子広本遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅵ

(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ)



2014.3

高知県教育委員会
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

徳王子広本遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅵ

(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ)

2014.3

高知県教育委員会
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

徳王子広本遺跡が所在する香南市香我美町は香宗川左岸に位置しており、太平洋に面した沿岸部から平野部、山間部まで各時代の遺跡が数多く存在しています。これまで香我美町内では下分遠崎遺跡や十万遺跡など数多くの発掘調査が実施されており、これらの発掘調査成果によってこの地域の歴史が明らかになってきています。

また、国の重要文化財である木造十一面観音立像や木造大日如来坐像(金剛界・胎蔵界)が所蔵されている恵日寺や県の指定文化財である木造地蔵菩薩立像が所蔵されている金水寺などが所在しており、遺跡のみならず数多くの文化財も香我美町内には残されています。

本書は平成19・23年度に発掘調査を実施した高規格道路南国安芸道路に関連する徳王子広本遺跡の発掘調査報告書です。南国安芸道路関連では東から口槇ヶ谷遺跡、坪井遺跡、徳王子前島遺跡、徳王子大崎遺跡、花宴遺跡、東野土居遺跡と多くの発掘調査が平成16年度から実施されており、発掘調査報告書も順次公刊されています。本遺跡からは弥生時代から中世までの遺構・遺物が確認されており、これらの調査成果は香南市香我美町の歴史を考えるうえで貴重なものとなります。これまでこの地域で行われた発掘調査の成果とともに地域の歴史遺産として本書を活用して頂きたいと考えております。

最後に本遺跡の調査にあたり多大なご理解とご協力を頂いた国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、高知県教育委員会、地元関係者の方々、発掘作業・整理作業に従事して頂いた作業員の皆様には心よりお礼申し上げます。

平成26年3月

公益財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 森田尚宏

例言

1. 本書は南国安芸道路の建設に伴い、平成19・23年度に実施した徳王子広本遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）が発掘調査を実施した。
3. 徳王子広本遺跡は高知県香南市香我美町に所在する弥生時代から中世にかけての複合遺跡で、中世の屋敷跡などが確認されている。発掘調査は調査対象区域の買収状況に応じて平成19年度と平成23年度の2カ年にわたって実施し、平成19年度の調査面積は9,740㎡、平成23年度の調査面積は1,030㎡で、発掘調査延べ面積は10,770㎡であった。
4. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成19年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 汲田幸一
総務：同次長 森田尚宏, 同総務課長 戸梶友昭, 同主任 谷真理子
調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：同調査第四班長 藤方正治, 同専門調査員 井上昌紀・小川博敏, 技術補助員 宮地啓介, 測量補助員 都築愛
事務補助員：松吉佐和

平成23年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚弘
総務：同次長 嶋崎るり子, 同総務課長 里見敦典, 同主任 黒岩千恵
調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：同調査第四班長 出原恵三, 同調査員 下村裕, 測量補助員 岩原明美
事務補助員：友永可奈

平成25年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚宏
総務：同次長 宮田謙輔, 同総務課長 野田美智子, 同主任 黒岩千恵
整理総括：同調査課長 廣田佳久
整理担当：同調査第一班長 出原恵三, 同主任調査員 下村裕
事務補助員：廣内美登利・小八木美佐子

5. 本書の執筆と編集は下村が行い、現場写真は平成19年度は井上・小川、平成23年度は下村が撮影し、遺物写真は下村が撮影した。また、遺物観察表については整理作業員の方に指定した設定で変換作成して頂いた。
6. 遺構についてはSB(掘立柱建物跡)、SA(柵列)、SK(土坑)、SD(溝跡)、P(柱穴)、SE(井戸跡)、SX(性格不明遺構)で表記した。掘立柱建物跡の一部については模式図(S=1/200)を掲載している。また、掲載している遺構平面図の縮尺はそれぞれに記しており、方位Nは世界測地系のGNである。
7. 遺物については原則として縮尺1/3で掲載し、一部の遺物については縮尺を変えているが、各挿図にはスケールを表記している。また、遺物番号は通し番号とし挿図と図版の遺物番号は一致し

例言

ている。

8. 現地調査及び報告書作成をするにあたっては、下記の方々のご指導及び貴重なご教示、ご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。

公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター、バリノ・サーヴェイ株式会社の諸氏

9. 調査にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所のご協力を頂いた。また、地元住民の方々に遺跡に対するご理解とご協力を頂き、厚く感謝の意を表したい。

10. 発掘調査及び整理作業については、下記の方々のご協力を頂いた。

発掘調査

平成19年度

植田秀夫, 植田和子, 上田豊, 加治正一, 加治宣子, 加治正敏, 上屋福美, 川野孝典, 川村正広, 小松清一, 小松弼, 小松悠悦, 島村雄二, 竹崎芳子, 田所千治, 田村明, 田村美贇子, 畠中浩子, 畠山緑, 溝渕進一郎

平成23年度

安達俊光, 小笠原正貴, 小川保雄, 北村博, 小松悠悦, 斉藤孝夫, 濱田啓, 六久保克史

上記の方々には酷暑・酷寒のなか、労を厭わず現場作業に従事して頂いた。記して感謝の意を表したい。

整理作業

中西純子, 内村富紀, 岩貞泰代, 横山めぐみ, 黒岩佳子, 川添明美, 澤田美弥, 西山麻美, 久家朋子, 若江紗映, 西内広美

上記の方々には整理作業を担当して頂いた。記して感謝の意を表したい。

11. 出土遺物は「07 - 1KH」, 「11 - 2KH」と注記し、高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章 序章	1
1. はじめに	1
2. 調査の契機と経過	1
(1) 契機と経過	1
(2) 試掘調査及び確認調査	2
(3) 調査の方法	3
3. 遺跡の地理的・歴史的環境	3
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	4
第II章 調査の概要	7
1. 調査の経過	7
(1) 調査の経過	7
(2) 調査日誌抄	7
2. 調査区の概要	11
(1) I区	11
(2) II区	35
(3) III区	45
第III章 遺構と遺物	49
1. I区	49
(1) 上面検出遺構	49
(2) 下面検出遺構	53
2. II区	59
(1) 上面検出遺構	59
(2) 下面検出遺構	77
第IV章 自然科学分析	85
1. はじめに	85
2. 試料	85
3. 分析方法	85
(1) 放射性炭素年代測定	85
(2) 珪藻分析	86
(3) 花粉分析	86
(4) 植物珪酸体分析	86
(5) 微細物分析	87
(6) 貝類同定	87
4. 結果	87
(1) 放射性炭素年代測定	87

本文目次

(2) 珪藻分析.....	87
(3) 花粉分析.....	90
(4) 植物珪酸体分析.....	96
(5) 微細物分析.....	98
(6) 貝類同定.....	101
5. 考察.....	101
(1) 層序と堆積環境.....	101
(2) 古植生.....	107
第V章 考察.....	113
1. 弥生時代.....	113
2. 古代.....	113
3. 中世.....	113
4. まとめ.....	114

挿図目次

図1-1	徳王子広本遺跡位置図	1
図1-2	試掘及び確認調査トレンチ配置図(S=1/2,000)	3
図1-3	調査区配置図(S=1/2,000)	4
図1-4	周辺の遺跡分布図(S=1/25,000)	5
図2-1	I区中央バンク南壁セクション図	12
図2-2	第I層出土遺物実測図	13
図2-3	第II層出土遺物実測図	13
図2-4	第IV・VII層出土遺物実測図	14
図2-5	第VII層出土遺物実測図1	15
図2-6	第VII層出土遺物実測図2	16
図2-7	第VII層出土遺物実測図1	16
図2-8	第VII層出土遺物実測図2	17
図2-9	第VII層出土遺物実測図3	18
図2-10	第VII層出土遺物実測図4	19
図2-11	第VII層出土遺物実測図5	20
図2-12	第VII層出土遺物実測図6	21
図2-13	第VII層出土遺物実測図7	22
図2-14	第VII層出土遺物実測図8	23
図2-15	第VII層出土遺物実測図9	24
図2-16	第VII層出土遺物実測図10	25
図2-17	第VIII層出土遺物実測図1	27
図2-18	第VIII層出土遺物実測図2	28
図2-19	第VIII層出土遺物実測図3	29
図2-20	第VIII層出土遺物実測図4	30
図2-21	第VIII層出土遺物実測図5	30
図2-22	第VIII層出土遺物実測図6	31
図2-23	第VIII層出土遺物実測図7	31
図2-24	第VIII層出土遺物実測図8	32
図2-25	第VIII層出土遺物実測図9	33
図2-26	第VIII層出土遺物実測図10	34
図2-27	II区中央バンク南壁セクション図	36
図2-28	第I・V層出土遺物実測図	37
図2-29	第VII層出土遺物実測図	38
図2-30	第VIII層出土遺物実測図1	39
図2-31	第VIII層出土遺物実測図2	40
図2-32	第VIII層出土遺物実測図3	40

挿図目次

図2-33	第Ⅷ層出土遺物実測図4	41
図2-34	第Ⅸ層出土遺物実測図1	41
図2-35	第Ⅸ層出土遺物実測図2	42
図2-36	第Ⅸ層出土遺物実測図3	42
図2-37	第Ⅸ層出土遺物実測図4	43
図2-38	第Ⅸ層出土遺物実測図5	43
図2-39	第Ⅸ層出土遺物実測図6	44
図2-40	Ⅲ区北壁セクション図	45
図2-41	Ⅲ区全体図(S=1/500)	46
図2-42	第Ⅲ層出土遺物実測図	47
図2-43	第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物実測図	48
図3-1	SK-5	49
図3-2	SK-5出土遺物実測図	49
図3-3	SD-17	51
図3-4	SD-17出土遺物実測図	52
図3-5	SD-20	52
図3-6	SD-20・21出土遺物実測図	52
図3-7	SD-21	53
図3-8	SX-2	53
図3-9	SX-2出土遺物実測図	53
図3-10	SK-13	54
図3-11	SK-13・15出土遺物実測図	55
図3-12	SK-25・26出土遺物実測図	56
図3-13	SD-23	57
図3-14	SD-23・24出土遺物実測図	57
図3-15	SD-26	58
図3-16	SD-26・27出土遺物実測図	59
図3-17	SB-1	59
図3-18	SB-2	60
図3-19	SB-3	60
図3-20	SB-4	60
図3-21	SB-4～6出土遺物実測図	61
図3-22	SB-5	61
図3-23	SB-6	62
図3-24	SB-7	62
図3-25	SB-8	62
図3-26	SB-9	63
図3-27	SA-1	63

図3-28	SA-1・2出土遺物実測図	63
図3-29	SA-2	63
図3-30	SA-3	64
図3-31	SK-1	64
図3-32	SK-1出土遺物実測図	64
図3-33	SK-3・4・7出土遺物実測図	65
図3-34	SK-5	65
図3-35	SK-8	66
図3-36	SD-1・3	66
図3-37	SD-9出土遺物実測図	68
図3-38	SD-12	68
図3-39	SD-12出土遺物実測図	68
図3-40	SD-25出土遺物実測図	70
図3-41	SD-26	70
図3-42	SD-30	71
図3-43	SD-34	71
図3-44	SD-34・42出土遺物実測図	71
図3-45	SD-37	72
図3-46	SE-1	74
図3-47	SE-1出土遺物実測図1	75
図3-48	SE-1出土遺物実測図2	75
図3-49	SE-1出土遺物実測図3	76
図3-50	P-1～4出土遺物実測図	77
図3-51	SB-10	77
図3-52	SB-11	78
図3-53	SB-12	78
図3-54	SK-11出土遺物実測図	78
図3-55	SK-12, SD-54	79
図3-56	SK-12出土遺物実測図	79
図3-57	SK-18	80
図3-58	SK-22	81
図3-59	SD-54・57出土遺物実測図	82
図3-60	SD-57	83
図3-61	P-5出土遺物実測図	83
図3-62	P-6～11出土遺物実測図	84
図4-1	分析試料採取位置図	85
図4-2	I区開析谷内1地点の主要珪藻化石群集の層位分布	89
図4-3	1・3地点の主要花粉化石群集の層位分布	97

挿図目次

図4-4	1・2地点の植物珪酸体含量.....	98
図4-5	調査地点周辺の地形起伏と自然化学分析を実施した主要な周辺遺跡.....	102
図4-6	遺跡の位置図と自然科学分析を実施した主要な周辺遺跡.....	103
図4-7	遺跡周辺の地形分類図・地形横断面図.....	104
図4-8	徳王子広本遺跡周辺の地形分類図.....	105
図4-9	I区における堆積層累重の状況.....	106
図4-10	花宴遺跡の東西方向の堆積物累重状況(廣田編, 2010より).....	107
図4-11	花宴遺跡2地点の主要珪藻化石群集の層位分布(廣田編, 2010より).....	108

表目次

表1-1	周辺の遺跡地名表.....	5
表4-1	放射性炭素年代測定結果.....	87
表4-2	暦年較正結果.....	88
表4-3	珪藻化石の生態性区分と環境指標種群.....	90
表4-4	珪藻分析結果1.....	91
表4-5	珪藻分析結果2.....	92
表4-6	珪藻分析結果3.....	93
表4-7	珪藻分析結果4.....	94
表4-8	花粉分析結果1.....	94
表4-9	花粉分析結果2.....	95
表4-10	植物珪酸体分析結果.....	96
表4-11	種実分析結果.....	99

遺物観察表目次

遺物観察表 1.....	117
遺物観察表 2.....	118
遺物観察表 3.....	119
遺物観察表 4.....	120
遺物観察表 5.....	121
遺物観察表 6.....	122
遺物観察表 7.....	123
遺物観察表 8.....	124
遺物観察表 9.....	125
遺物観察表10.....	126
遺物観察表11.....	127
遺物観察表12.....	128
遺物観察表13.....	129
遺物観察表14.....	130
遺物観察表15.....	131
遺物観察表16.....	132
遺物観察表17.....	133

遺構計測表目次

遺構計測表1～3.....	137
---------------	-----

写真目次

遺構計測表4・5.....	138
遺構計測表6.....	139
遺構計測表7～9.....	140

写真目次

写真2-1 発掘調査風景.....	7
写真2-2 発掘調査風景.....	8
写真2-3 発掘調査風景.....	11

図版目次

- 図版 1 調査前全景(北東より)
中央バンクセクション(南より)
- 図版 2 上面(東側)遺構検出状態(西より)
上面(西側)遺構検出状態(東より)
- 図版 3 上面(東側)遺構完掘状態(西より)
上面(西側)遺構完掘状態(東より)
- 図版 4 下面遺構検出状態(東より)
下面遺構完掘状態(東より)
- 図版 5 第Ⅶ層木製品(33)出土状態, 第Ⅷ層木製品(118)出土状態, 第Ⅷ層木製品(119)出土状態, 第Ⅷ層木製品(126)出土状態, 第Ⅷ層須恵器(176)出土状態, 第Ⅷ層瓦質土器(188)出土状態, 第Ⅷ層石製品(192)出土状態, 第Ⅷ層木製品(199)出土状態
- 図版 6 第Ⅷ層木製品(203)出土状態, 第Ⅷ層木製品(205)出土状態, 第Ⅷ層木製品(206)出土状態, SD-1バンクセクション(南より), SD-5バンクセクション(南より), SD-10バンクセクション(南より), SD-21木製品(341)出土状態, SD-22バンクセクション(北より)
- 図版 7 調査前全景(西より)
中央バンクセクション(南より)
- 図版 8 上面遺構検出状態(北西より)
上面遺構完掘状態(北西より)
- 図版 9 下面遺構検出状態(南より)
下面遺構完掘状態(北西より)
- 図版 10 SB-2完掘状態(北より)
SB-5完掘状態(北西より)
- 図版 11 SB-12完掘状態(南より)
SK-1石組検出状態(北より)
- 図版 12 SK-1完掘状態(北より)
SE-1完掘状態(西より)
- 図版 13 第Ⅶ層須恵器(221)出土状態, 第Ⅷ層灰釉陶器(244)出土状態, 第Ⅸ層弥生土器(266)出土状態, 第Ⅸ層緑釉陶器(282)出土状態, SK-4バンクセクション(西より), SK-5バンクセクション(西より), SK-8バンクセクション(西より), SK-17バンクセクション(西より)
- 図版 14 SK-18バンクセクション(東より), SK-22バンクセクション(南より), SK-23バンクセクション(西より), SD-12バンクセクション(西より), SD-34瓦質土器(375)出土状態, SD-44バンクセクション(南より), SD-48バンクセクション(東より), P-11須恵器(415)出土状態
- 図版 15 調査前全景(西より)
北壁セクション(南西より)
- 図版 16 完掘状態(西より)
完掘状態(南より)
- 図版 17 第Ⅲ層弥生土器(315)出土状態
第Ⅲ層弥生土器(316)出土状態
- 図版 18 第Ⅴ層弥生土器(328)出土状態
第Ⅴ層弥生土器(334)出土状態
- 図版 19 弥生土器(甕)
弥生土器(甕)
- 図版 20 弥生土器(鉢)
弥生土器(壺)
- 図版 21 弥生土器(鉢)
弥生土器(鉢)
- 図版 22 庄内式土器(甕)
須恵器(壺)
- 図版 23 土製品(土錘)
弥生土器(壺)
- 図版 24 土師器(羽釜)
弥生土器(壺)
- 図版 25 木製品(下駄・鍬・斎串)
- 図版 26 木製品(箱・鍬・鋤)
- 図版 27 木製品(楯・舟形・木鍬)

付図目次

- | | | | |
|-------|--|-------|--|
| 図版 28 | 弥生土器(壺・甕), 石製品(砥石) | 図版 40 | 弥生土器(壺・甕), 石製品(石庖丁) |
| 図版 29 | 弥生土器(壺・鉢・高杯), 石製品(叩石) | 図版 41 | 弥生土器(壺・甕), 土師質土器(杯), 瓦質土器(搗鉢) |
| 図版 30 | 弥生土器(壺・甕) | 図版 42 | 土師器(甕), 土師質土器(小皿), 白磁(碗), 近世磁器(碗), 土製品(土錘), 木製品(椀・杯・把手・付札) |
| 図版 31 | 弥生土器(甕), 瓦器(椀), 瓦質土器(三足鍋) | 図版 43 | 弥生土器(甕・鉢), 緑釉陶器(椀), 土師質土器(杯・小皿・鍋), 石製品(石鏃), 木製品(鳥形) |
| 図版 32 | 須恵器(杯・壺), 石製品(叩石・砥石), 木製品(紡錘車) | 図版 44 | 須恵器(杯), 土師質土器(小皿), 青磁(碗), 石製品(石鏃・石庖丁), 土製品(土錘) |
| 図版 33 | 弥生土器(甕), 須恵器(杯・椀), 灰釉陶器(水注), 石製品(柱状片刃石斧・叩石) | 図版 45 | 弥生土器(甕), 土師器(甕), 緑釉陶器(椀), 土師質土器(杯・椀・皿・鍋) |
| 図版 34 | 弥生土器(甕・高杯・支脚), 石製品(砥石), 木製品(部材) | 図版 46 | 弥生土器(壺・甕), 須恵器(杯・皿), 土師質土器(杯・小皿・鍋), 瓦質土器(鍋) |
| 図版 35 | 弥生土器(壺・甕), 石製品(叩石・砥石) | 図版 47 | 珪藻化石 |
| 図版 36 | 弥生土器(壺・甕・鉢), 青磁(碗) | 図版 48 | 花粉化石 |
| 図版 37 | 弥生土器(壺・甕・器台), 土師質土器(杯・椀・高台付小皿), 土製品(土錘), 木製品(田下駄) | 図版 49 | 植物珪酸体 |
| 図版 38 | 弥生土器(甕), 土師質土器(杯), 瓦質土器(鍋), 瓦(平瓦), 石製品(有溝砥石), 木製品(鉢) | 図版 50 | 種実遺体 |
| 図版 39 | 弥生土器(壺・甕・鉢), 須恵器(杯・椀), 土師質土器(椀), 土製品(土錘) | | |

付図目次

- 付図1 徳王子広本遺跡第1調査地区(上面)遺構平面図(S=1/200)
付図2 徳王子広本遺跡第1調査地区(下面)遺構平面図(S=1/200)
付図3 徳王子広本遺跡第2調査地区(上面)遺構平面図(S=1/200)
付図4 徳王子広本遺跡第2調査地区(下面)遺構平面図(S=1/200)

第 I 章 序章

1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から業務委託を受け、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター(現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター)が平成17・18年度に実施した高知南国道路外1件埋蔵文化財発掘調査のうち南国安芸道路埋蔵文化財試掘調査及び高知県教育委員会が平成22年度に実施した確認調査の結果を受け、平成19・23年度に実施した高知南国道路外1件埋蔵文化財発掘調査のうち徳王子広本遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。

この調査は、国土交通省(四国地方整備局土佐国道事務所)が計画し、実施している一般国道南国安芸道路建設工事に伴い、工事によって影響を受ける遺跡(埋蔵文化財)について事前の発掘調査を行ったうえで出土遺物等の整理作業を行い、遺跡の記録保存を図ることを目的としている。

徳王子広本遺跡は平成17年度に実施した事前の試掘調査によって新たに発見された遺跡で、本書で報告するのは平成19・23年度に行った徳王子広本遺跡の発掘調査の報告である。

本遺跡は香宗川左岸に広がる低湿地に向けて北側から延びる丘陵上に立地する弥生時代から中世までの複合遺跡で、中世の集落跡などが確認されている。

2. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

南国安芸道路は、高知市と安芸市間36kmを結ぶ一般国道55号の自動車専用道路である高知東部自動車道の一環として安芸地方生活圏と高知中央生活圏の連携強化を図るほか、四国横断自動車道と接続し広域交通ネットワークの形成を目的とする道路で、昭和62年には国の高規格幹線道路網計画に組み込まれている。高知東部自動車道は延長36kmと長く、高知県内で最も周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)が集中する高知平野を横断する路線であることから大規模で長期的な発掘調査が予想された。埋蔵文化財について具体的な調整を開始したのは平成15年度からであり、まず埋蔵文化財の

取り扱いについて国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会が調整を行った。その結果、当面の工事予定区域については周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)があるものこれまで発掘調査が実施されておらず、遺構の遺存状態が全く不明であるため土地の買収が完了した箇所の試掘調査及び確認調査を平成19年度までは財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター(現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文



図1-1 徳王子広本遺跡位置図

2. 調査の契機と経過 (2) 試掘調査及び確認調査

化財センター),平成20年度からは高知県教育委員会が順次実施した。

平成17年度の南国安芸道路関係では徳王子地区が対象となり試掘調査が実施された結果,調査対象地に設定したトレンチから遺構が検出され,当該箇所において本発掘調査の必要があると判断された。また,平成18年度にも確認調査が実施され,調査対象地で2ヵ所のトレンチから遺構が検出された。本遺跡は平成17年度に実施された試掘調査の結果初めて確認された遺跡であり,地名をとって「徳王子広本遺跡」と命名された。この結果を受け,平成19年度に本発掘調査を実施することとなり,財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター(現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター)が国土交通省四国地方整備局と業務委託を締結した高知県教育委員会からの委託を受け本発掘調査を実施した。土地の買収が遅れた箇所については,平成22年度には高知県教育委員会が確認調査を行い,この結果を受けて平成19年度と同様,平成23年度に本発掘調査を実施した。

平成15年度以降に実施された試掘調査によって南国安芸道路の路線内で新たに確認された周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)は,本遺跡のほか口槇ヶ谷遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ)や花宴遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ),徳王子前島遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ),坪井遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ),徳王子大崎遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅴ)であり,順次発掘調査報告書が公刊されている。

(2) 試掘調査及び確認調査

① 対象区域の状況

平成17年度の試掘調査は丘陵及び低地に18ヵ所のトレンチ(5×5m)を任意に設定し,平成18年1月24日から2月23日の間に行った。また,平成18年度では6ヵ所のトレンチ(5×5m)を任意に設定し,平成18年9月19日から21日の間に確認調査が実施され,平成22年度では8箇所のトレンチ(3×3m)を任意に設定し,平成23年3月24日から3月25日まで行われた。掘削作業は機械力(ユンボ)と人力,遺構検出作業は人力で行った。なお,遺構については検出に留めた。

この試掘調査及び確認調査において計32ヵ所のトレンチのうち20ヵ所において遺物包含層を確認した。この遺物包含層からは弥生時代や古代,中世の遺物が出土しており,当該期と考えられる遺構が検出されている。平成17年度の試掘調査により新たな遺跡として徳王子広本遺跡が登録され,丘陵部を中心に古代と中世の遺構が遺存していることが判明した。

② 遺跡の概要

徳王子広本遺跡は平成17年度に実施された事前の試掘調査で新たに確認された遺跡で,弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が確認される複合遺跡となり,大字から遺跡名が付けられた。

本遺跡は香宗川左岸の低湿地に向けて北側から派生した丘陵上に立地しており,周辺の丘陵部にも同様の遺跡(徳王子大崎遺跡)が存在している。弥生時代では調査対象区域東側の丘陵上において土坑などが検出されている。なお,後世の地形改変により調査対象区域北西側では当該期の遺構は削平されたとみられる。

古代では調査対象区域東側の丘陵上で掘立柱建物跡が1棟確認されており,当該期の瓦なども出土していることから当時の役所に関連する施設があった可能性が考えられる。また,中世では古代と同様,調査対象区域東側の丘陵上で掘立柱建物跡が11棟検出されており,当該期の集落が丘陵上を中心に展開していたものとみられる。これらの掘立柱建物跡は3時期が想定され,最も盛行した時期には計8棟の掘立柱建物跡が立ち並び,当該期の屋敷構成が明らかとなった。

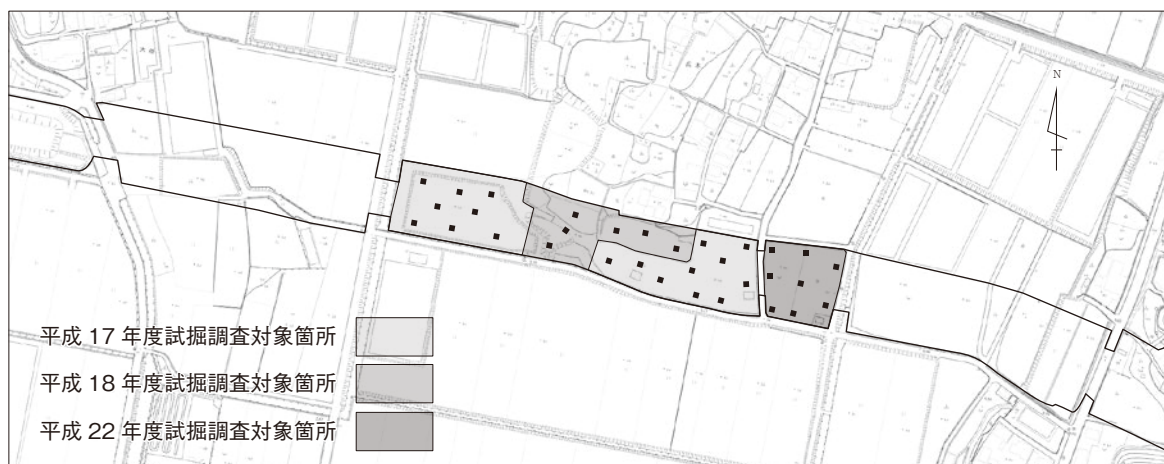


図1-2 試掘及び確認調査トレンチ配置図(S=1/2,000)

(3) 調査の方法

試掘調査の結果を受けて、平成19年度に世界測地系の3級基準点及び4級基準点を設置し、発掘調査に備えた。

測量は世界測地系第4座標系(IV系)の基準点を使用し、 $X=61,100\text{m}$ 、 $Y=22,400\text{m}$ (北緯 $33^{\circ} 33' 02''$ 、東経 $133^{\circ} 44' 28''$ 、真北方向角 $-0^{\circ} 07' 59''$)を原点とし、A～F(100mグリッド:大グリッド)を組み、調査対象区域内を西から順にアルファベットを配した。100mグリッドの中にはそれぞれのアルファベットを冠する20m(中グリッド:1～25)グリッドを設定し、調査で使用する4mグリッド(小グリッド:1～25)にはA1-1と枝番を付した。なお、遺構図にはグリッド名ではなく座標値を標記している。

調査は試掘確認調査の結果を受けて、平成19年度に調査区I・II区、平成23年度にIII区を設定し、平成19年度はII区から調査を開始した。

堆積層の掘削は原則として遺物包含層直上までは機械力を導入し、遺物包含層以下は人力掘削を実施した。なお、遺物包含層でも遺物量が少ない場合などは作業効率を考慮し、機械力で遺構検出を行った。また、遺跡の成り立ち等を明らかにするために地質学や土壌学等関連分野の協力を得て、古環境の復元にも重点を置いた。

3. 遺跡の地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

徳王子広本遺跡の所在する高知県香南市は平成18年3月1日に、香南5町村(赤岡町、香我美町、野市町、夜須町、吉川村)が合併して誕生した新しい市で、東西約20km、南北約15km、面積 126.49km^2 、人口34,416人(平成25年4月末現在)である。本市は東は安芸市・安芸郡芸西村、西は南国市、北は香美市に接しており、高知県の中央部を南西方向に向けて流れて土佐湾に注ぐ全長約71km、総流域面積 468km^2 の一级河川である物部川の左岸に位置している。本遺跡が所在する香南市香我美町を地形的にみると、北側には標高489.5mを測る秋葉山を主峰とする山系、東側には標高723mを測る長者ヶ森をはじめとした山系が存在し、これらの主要山系の延びる方向は基盤地質の構造方向と一致している。河川は香宗川と山北川が南西方向に向かって流れ、下流域の徳王子付近には氾濫原性低湿地が広がっている。

3. 遺跡の地理的・歴史的環境 (2) 歴史的環境

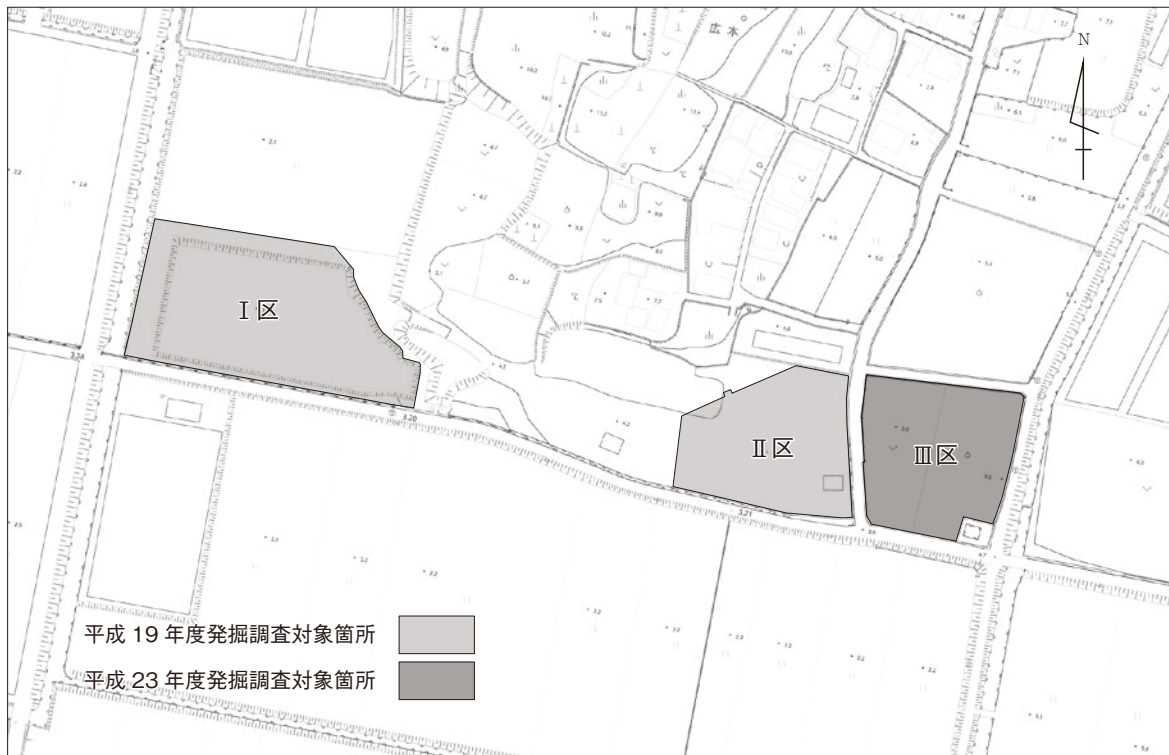


図1-3 調査区配置図(S=1/2,000)

本地域の地形は山間部、丘陵部、平野部と大きく三つに分かれており、本遺跡は香宗川左岸に広がる氾濫原性低湿地に向けて北側から派生した丘陵上に立地しており、香南市香我美町徳王子で確認されている遺跡の多くはこれら丘陵上に存在している。

(2) 歴史的環境

香南市香我美町内で確認されている遺跡は56カ所であるが、最も古い時期の遺物が出土している遺跡は拝原遺跡である。この遺跡からは縄文時代後期前半の宿毛式土器と松ノ木式土器、縄文時代後期中葉の片粕式土器が出土している。次の縄文時代晩期では十万遺跡から当該期の貯蔵穴が確認されており、刻目突帯の深鉢と鉢が出土している。

その後、人間の営みが確認されるのは弥生時代前期末になってからであり、下分遠崎遺跡や拝原遺跡、十万遺跡で当該期の遺構・遺物が確認されている。また、弥生時代中期には的場遺跡や本村遺跡など丘陵部に遺跡が立地するようになり、弥生時代後期に至っては拝原遺跡や十万遺跡、裨地遺跡などで竪穴建物跡が検出されている。

古墳時代にはいと香我美町内にも古墳が築かれており、計7基が確認されているが、多くの古墳は後世の地形改変により消滅している。また、拝原遺跡では古墳時代後期の竪穴建物跡が確認されており、当該期の須恵器窯跡も香我美町内に存在している。

古代においては、十万遺跡で8世紀後半とみられる隅丸方形の掘方を持つ掘立柱建物跡が13棟検出されている。承和年中(937)に編纂された「倭名類聚抄」によると香我美町の町域は大忍郷の大部分と曾我郷の一部を含むと考えられており、十万遺跡で検出された掘立柱建物跡群はこの大忍郷に関連する建物群の可能性が指摘される。

中世になると香我美町の大部分は鎌倉時代初期に成立したとみられる大忍庄に含まれており、鎌

倉極楽寺領となっている。この大忍庄には東川末延名や西川行宗名といった多くの名が存在しており、名主の活発な活動が文献等で確認でき、これらの名から清遠名や末清名などの脇名が数多く派生していることが、現在当地域に残る字名などで推察される。本遺跡で検出された当該期の掘立柱建物跡や溝跡は、当時大忍庄に存在していた名主の活動を裏付けるものと考えられる。その後、中世後期には前述した各名主は香宗川と山北川の流域に20ヵ所あまりの城をそれぞれ構え小地域を支配する土豪としての地位を確立していったが、序々に長宗我部氏の支配下に組み入れられたとみられる。

その後、近世を経て明治11年(1878)に町村制が施行され、岸本村・王子村・徳善村・山南村・山北村・西川村・東川村が誕生し、昭和17年(1942)には徳王子村・山南村・富家村・香宗村が合併して大忍村が誕生している。その後、大忍村は昭和22年(1947)に廃村となり旧村に復帰しているが、昭和30年



図1-4 周辺の遺跡分布図(S=1/25,000)

表1-1 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	徳王子広本遺跡	弥生～中世	8	大東遺跡	古墳・古代	15	徳王子前島遺跡	弥生～中世
2	東野土居遺跡	弥生～近世	9	江見遺跡	古墳	16	徳善城跡	中世
3	香宗城跡	中世	10	花宴遺跡	弥生	17	クノ丸遺跡	古墳・中世
4	香宗遺跡	〃	11	徳王子大崎遺跡	弥生・中世	18	姫倉城跡	中世
5	宝鏡寺跡	〃	12	徳善天皇古墳	古墳	19	西峯城跡	〃
6	ハザマ遺跡	弥生～中世	13	螢野古墳	〃	20	坪井遺跡	弥生～近世
7	御所の前遺跡	〃	14	徳善古窯跡群	古代			

3. 遺跡の地理的・歴史的環境 (2) 歴史的環境

(1955)に岸本町・徳王子村・山南村・山北村・東川村・西川村が合併し、香我美町が誕生している。また、平成18年(2006)に香南市となり現在に至っている。

参考文献

香我美町史編纂委員会 1985『香我美町史』上・下巻

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査の経過

(1) 調査の経過

徳王子広本遺跡は平成17年度に実施された高知東部自動車道南国安芸道路建設工事に伴う事前の試掘調査によって新たに確認された遺跡である。平成17年度の試掘結果を受け、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会の間で本発掘調査について協議を行い、平成19年度に本発掘調査を実施することとなった。調査は国土交通省四国地方整備局から高知県教育委員会が業務委託を受け、平成19年4月1日付けで高知県教育委員会と財団法人高知県文化財団(現公益財団法人高知県文化財団)との間で業務委託契約を締結したうえで、本発掘調査を実施した。また、平成19年度において未買収箇所については、平成22年度に高知県教育委員会が確認調査を行い遺物包含層が確認されたことから、平成19年度と同様国土交通省四国地方整備局から高知県教育委員会が業務委託を受け、平成23年4月1日付けで高知県教育委員会と財団法人高知県文化財団(現公益財団法人高知県文化財団)との間で業務委託契約を締結したうえで、本発掘調査を実施した。

(2) 調査日誌抄

平成19年度.....

- | | | | |
|------|------------------------|------|----------------------------------|
| 4.26 | 調査区の設定を行う。 | 6.5 | Ⅱ区上面検出遺構の遺構調査を行う。 |
| 4.27 | 調査区の設定を行う。 | 6.6 | Ⅱ区上面検出遺構の遺構調査を行う。 |
| 5.7 | Ⅱ区で重機による表土掘削を行う。 | 6.7 | Ⅱ区上面検出遺構の遺構完掘写真の撮影を行う。 |
| 5.8 | Ⅱ区で重機による表土掘削を行う。 | 6.8 | Ⅱ区上面検出遺構の航空写真測量を行う。 |
| 5.9 | Ⅱ区で重機による表土掘削を行う。 | 6.11 | Ⅱ区上面の遺構精査を行う。 |
| 5.10 | Ⅱ区で重機による表土掘削を行う。 | 6.12 | Ⅱ区上面の遺構精査を行う。 |
| 5.11 | Ⅱ区で重機による表土掘削を行う。 | 6.13 | Ⅱ区上面の遺構精査を行う。 |
| 5.14 | Ⅱ区で重機による表土掘削を行う。 | 6.14 | Ⅱ区上面の遺構精査を行う。 |
| 5.15 | Ⅱ区で重機による表土掘削を行う。 | 6.15 | 雨天のため現場作業を中止する。 |
| 5.16 | Ⅱ区の遺構検出作業を行う。 | 6.18 | 雨天のため現場作業を中止する。 |
| 5.17 | Ⅱ区の遺構検出作業を行う。 | 6.19 | 雨天のため現場作業を中止する。 |
| 5.18 | Ⅱ区の遺構検出作業を行う。 | 6.20 | Ⅱ区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削を行う。 |
| 5.21 | Ⅱ区上面検出遺構の遺構検出写真の撮影を行う。 | | |
| 5.22 | Ⅱ区上面検出遺構の配置図を作成する。 | | |
| 5.23 | Ⅱ区上面検出遺構の遺構調査を開始する。 | | |
| 5.24 | Ⅱ区上面検出遺構の遺構調査を行う。 | | |
| 5.25 | 雨天のため現場作業を中止する。 | | |
| 5.28 | Ⅱ区上面検出遺構の遺構精査を行う。 | | |
| 5.29 | Ⅱ区上面検出遺構の遺構調査を行う。 | | |
| 5.30 | Ⅱ区上面検出遺構の遺構調査を行う。 | | |
| 5.31 | Ⅱ区上面検出遺構の遺構調査を行う。 | | |
| 6.1 | Ⅱ区上面検出遺構の遺構調査を行う。 | | |
| 6.2 | Ⅱ区上面検出遺構の遺構平面図を作成する。 | | |
| 6.4 | Ⅱ区上面検出遺構の遺構調査を行う。 | | |



写真2-1 発掘調査風景

1. 調査の経過 (2) 調査日誌抄

- 6.21 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 6.22 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 6.25 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 6.26 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 6.27 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 6.28 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 6.29 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 7.2 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.3 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.4 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.5 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 7.6 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.9 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.10 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.11 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.12 II区上面遺構検出作業及び下面検出遺構調査を行う。
- 7.13 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.17 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 7.18 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 7.19 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 7.20 研修のため現場作業を中止する。
- 7.23 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 7.24 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 7.25 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 7.26 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 7.27 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して



写真2-2 発掘調査風景

- 遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 7.30 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 7.31 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 8.1 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 8.2 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 8.3 雨天のため現場作業を中止する。
- 8.6 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して遺物包含層の掘削及び下面の遺構検出を行う。
- 8.7 II区下面遺構検出作業を行う。
- 8.8 II区下面遺構検出作業を行う。
- 8.9 II区下面遺構検出作業を行う。
- 8.10 II区下面遺構検出作業を行う。
- 8.20 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して下面の遺構検出を行う。
- 8.21 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して下面の遺構検出を行う。
- 8.22 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して下面の遺構検出を行う。
- 8.23 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して下面の遺構検出を行う。
- 8.24 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して下面の遺構検出を行う。
- 8.27 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して下面の遺構検出を行う。
- 8.28 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して下面の遺構検出を行う。
- 8.29 II区上面の遺構精査及び遺構調査と並行して

	下面の遺構検出を行う。	10.15	I-E区で重機による表土掘削を行う。
8.30	Ⅱ区下面の遺構検出作業を行う。	10.16	I-E区で重機による表土掘削を行う。
8.31	Ⅱ区下面の遺構検出写真撮影のため清掃作業を行う。	10.17	I-E区で重機による表土掘削を行う。
9.3	Ⅱ区下面の遺構検出作業を行う。	10.18	I-E区で重機による表土掘削を行う。
9.4	Ⅱ区下面の遺構検出作業を行う。	10.19	雨天のため現場作業を中止する。
9.5	Ⅱ区下面の遺構検出写真撮影のため清掃作業を行う。	10.22	I-E区で重機による表土掘削を行う。
9.6	Ⅱ区下面の遺構検出写真の撮影を行う。	10.23	I-E区で重機による表土掘削を行う。
9.7	Ⅱ区下面検出遺構の遺構調査を行う。	10.24	I-E区上面遺構検出写真の撮影を行う。
9.10	Ⅱ区下面検出遺構の遺構調査を行う。	10.25	遺物包含層の掘削作業を行う。
9.11	Ⅱ区下面検出遺構の遺構調査を行う。	10.26	雨天のため現場作業を中止する。
9.12	Ⅱ区下面検出遺構の遺構調査を行う。	10.29	遺物包含層の掘削作業と並行してI-E区上面検出遺構の調査を行う。
9.13	Ⅱ区下面検出遺構の遺構平面図を作成する。	10.30	I-E区上面検出遺構の調査を行う。
9.14	Ⅱ区下面検出遺構の遺構平面図を作成する。	10.31	I-E区上面の遺構平面図を作成する。
9.18	Ⅱ区下面検出遺構の遺構調査を行う。	11.1	I-E区上面の遺構検出と遺構調査を行う。
9.19	Ⅱ区下面検出遺構の遺構調査を行う。	11.2	I-E区上面検出遺構の調査を行う。
9.20	Ⅱ区下面検出遺構の遺構調査を行う。	11.5	I-E区上面検出遺構の調査を行う。
9.21	Ⅱ区下面検出遺構の遺構調査を行う。	11.6	雨天のため現場作業を中止する。
9.22	Ⅱ区下面検出遺構の遺構平面図を作成する。	11.7	I-E区上面検出遺構の調査を行う。
9.24	Ⅱ区下面検出遺構の遺構平面図作成と並行して遺構完掘写真撮影のため清掃作業を行う。	11.8	I-E区上面検出遺構の調査を行う。
9.25	Ⅱ区下面検出遺構の遺構平面図作成と並行して遺構完掘写真撮影のため清掃作業を行う。	11.9	I-E区上面検出遺構の調査と並行して遺構完掘写真撮影のため清掃作業を行う。
9.26	Ⅱ区下面検出遺構の遺構平面図作成と並行して遺構完掘写真撮影のため清掃作業を行う。	11.12	I-E区上面の遺構完掘写真撮影のため清掃作業を行う。
9.27	Ⅱ区下面検出遺構の完掘写真撮影のため清掃作業を行う。	11.13	I-E区上面の遺構平面図を作成する。
9.28	Ⅱ区下面遺構完掘写真を撮影する。	11.14	I-E区上面の遺構完掘写真を撮影する。
10.1	Ⅱ区下面の遺構精査と並行してSK-1及びSE-1の調査を行う。	11.15	I-W区で重機による表土掘削を行う。
10.2	下層確認調査と並行してSE-1の調査を行う。	11.16	I-W区で重機による表土掘削を行う。
10.3	下層確認調査と並行してSE-1の調査を行う。	11.19	I-W区で重機による表土掘削を行う。
10.4	Ⅱ区の埋め戻し作業を行う。	11.20	I-W区で重機による表土掘削を行う。
10.5	Ⅱ区の埋め戻し作業と並行してI区の調査区設定を行う。	11.21	I-W区で重機による表土掘削を行う。
10.6	Ⅱ区の埋め戻し作業を行う。	11.22	I-W区で重機による表土掘削を行う。
10.9	Ⅱ区の埋め戻し作業と並行してI区の調査区設定を行う。	11.26	中央バンクの土層断面図を作成する。
10.10	I-E区で重機による表土掘削を行う。	11.27	I-W区にグリッド杭を打設する。
10.11	雨天のため現場作業を中止する。	11.28	I-W区で重機による表土掘削を行う。
10.12	I-E区で重機による表土掘削を行う。	11.29	I-W区で重機による表土掘削を行う。
		11.30	I-W区で重機による表土掘削を行う。
		12.3	雨天のため現場作業を中止する。
		12.4	I-W区で重機による表土掘削を行う。
		12.5	I-W区での重機掘削と並行して遺構検出写真の撮影に向けて清掃作業を行う。
		12.6	I-W区での遺構検出作業と並行して遺構検

1. 調査の経過 (2) 調査日誌抄

- 出写真の撮影に向けて清掃作業を行う。
- 12.7 I-W区上面の遺構検出写真を撮影する。
- 12.8 中央バンクの土層観察を行う。
- 12.10 I-W区の遺構調査を行う。
- 12.11 I-W区の遺構調査を行う。
- 12.12 I-W区の遺構調査を行う。
- 12.13 I-W区の遺構調査を行う。
- 12.14 I-W区の遺構調査を行う。
- 12.17 I-W区の遺構調査を行う。
- 12.18 I-W区の遺構調査を行う。
- 12.19 I-W区の遺構調査を行う。
- 12.20 I-W区の遺構調査を行う。
- 12.21 I-W区の遺構調査と並行して下層の掘削作業を行う。
- 12.25 I-E区下層の掘削作業を行う。
- 12.26 I-E区下面の遺構検出を行う。
- 12.27 I-E区下面の遺構検出を行う。
- 1.7 雨天のため現場作業を中止する。
- 1.8 I-W区上面の遺構完掘写真撮影のため清掃作業を行う。
- 1.9 I-W区上面の遺構完掘写真を撮影する。
- 1.10 I-W区上面の遺構完掘写真を撮影する。
- 1.11 雨天のため現場作業を中止する。
- 1.15 I区下面の遺構検出作業を行う。
- 1.16 I区下面の遺構検出作業を行う。
- 1.17 I区下面の遺構検出作業を行う。
- 1.18 I区下面の遺構検出作業を行う。
- 1.21 雨天のため現場作業を中止する。
- 1.22 雨天のため現場作業を中止する。
- 1.23 雨天のため現場作業を中止する。
- 1.24 I区下面の遺構検出作業を行う。
- 1.25 I区下面の遺構検出作業を行う。
- 1.30 I区下面の遺構検出写真撮影を行う。
- 1.31 I区下面の遺構調査を行う。
- 2.1 I区下面の遺構調査を行う。
- 2.4 I区下面の遺構調査を行う。
- 2.5 I区下面の遺構調査を行う。
- 2.6 I区下面の遺構調査を行う。
- 2.7 I区下面の遺構調査を行う。
- 2.8 I区下面の遺構完掘写真撮影に向けて清掃作業を行う。
- 2.12 I区下面の遺構完掘写真撮影に向けて清掃作業を行う。
- 2.13 I区下面の遺構完掘写真撮影に向けて清掃作業を行う。
- 2.14 I区下面の遺構完掘写真撮影を行う。
- 2.18 I区の埋め戻し作業を行う。
- 2.19 I区の埋め戻し作業を行う。
- 2.20 I区下面の遺構平面図を作成する。
- 2.21 I区の埋め戻し作業を行う。
- 2.22 I区の埋め戻し作業を行う。
- 2.23 I区の埋め戻し作業を行う。
- 2.25 I区の埋め戻し作業を行う。
- 2.26 I区の埋め戻し作業を行う。
- 2.27 I区の埋め戻し作業を行う。
- 2.28 I区の埋め戻し作業と並行して仮設水路の復旧を行う。
- 2.29 I区の埋め戻し作業と並行して仮設水路の復旧を行う。
- 3.3 I区の埋め戻し作業を行う。
- 3.4 仮設道の復旧作業を行う。
- 3.5 仮設水路の復旧作業を行う。
- 3.6 安全柵の撤去を行い、I・II区の現場作業が全て終了する。

平成23年度.....

- 6.14 安全柵の設置及びⅢ-N区で重機による表土掘削を行う。
- 6.15 Ⅲ-N区で重機による表土掘削を行う。
- 6.16 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.17 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.20 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.21 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.22 Ⅲ-N区で重機による表土掘削を行う。
- 6.23 Ⅲ-N区で重機による表土掘削を行う。
- 6.24 Ⅲ-N区で重機による表土掘削と並行して遺物包含層の人力掘削を行う。
- 6.27 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.28 Ⅲ-N区で重機による表土掘削と並行して遺物包含層の人力掘削を行う。
- 6.29 Ⅲ-N区で重機による表土掘削を行う。
- 6.30 Ⅲ-N区で重機による表土掘削を行う。

- 7.1 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.4 Ⅲ-N区で遺物包含層の人力掘削を行う。
- 7.5 Ⅲ-N区で遺物包含層の人力掘削を行う。
- 7.6 Ⅲ-N区で遺物包含層の人力掘削を行う。
- 7.7 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.8 Ⅲ-N区で遺物包含層の人力掘削を行う。
- 7.11 Ⅲ-N区完掘写真撮影に向けて清掃作業を行う。
- 7.12 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.13 職員専門研修のため現場作業を中止する。
- 7.14 職員専門研修のため現場作業を中止する。
- 7.15 Ⅲ-N区清掃作業及び完掘写真を撮影する。
- 7.19 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.20 Ⅲ-S区で重機による表土掘削と並行して遺物包含層の人力掘削を行う。
- 7.21 Ⅲ-S区で重機による表土掘削と並行して遺物包含層の人力掘削を行う。
- 7.26 Ⅲ-S区で遺物包含層の人力掘削を行う。
- 7.27 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.28 Ⅲ-S区で遺物包含層の人力掘削と並行して



写真2-3 発掘調査風景

- 遺構精査を行う。
- 7.29 Ⅲ-S区の完掘写真撮影及び下層確認を行う。
- 8.1 埋め戻し作業を行う。
- 8.2 埋め戻し作業を行う。
- 8.3 埋め戻し作業を行う。
- 8.4 埋め戻し作業を行う。
- 8.8 埋め戻し作業及び安全柵の撤去等を行い、全ての現場作業が終了する。

2. 調査区の概要

本遺跡は香宗川左岸の低湿地に向けて北側から派生した丘陵上に立地する遺跡で、確認された遺構は弥生時代、古代、中世である。後世の地形改変により、調査区内における丘陵頂部では弥生時代と古代の遺構はほとんどが削平されたと考えられ、丘陵縁辺部を中心に遺構が検出されている。

弥生時代の遺構は土坑、柱穴が確認されており、丘陵上には当該期の集落が展開していた可能性が考えられる。

古代の遺構も丘陵縁辺部において検出されている。Ⅱ区では掘立柱建物跡が1棟確認されており、当該期の施設が存在していたことが想定される。

中世においては丘陵全体で遺構が検出されており、当該期の屋敷が展開していたと考えられる。Ⅱ区では掘立柱建物跡が計11棟確認されており、そのうち8棟は一連の建物群と考えられる。

なお、下層確認調査も含めた調査総面積は10,770㎡であり、出土遺物の総点数は約39,100点を数える。

(1) I区

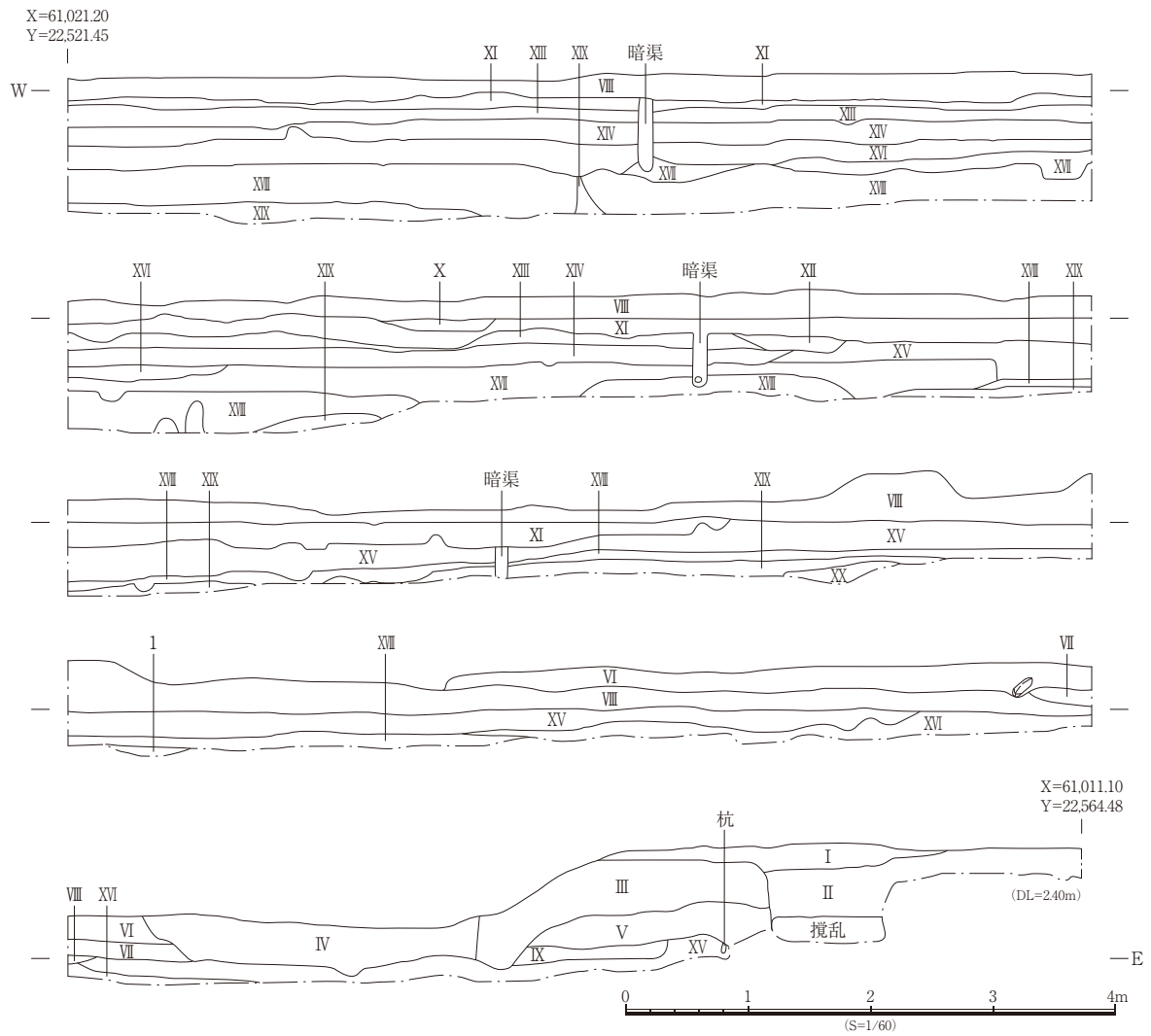
調査対象区域の西部に位置する東西約89m、南北約54mの調査区で面積は6,140㎡である。遺構検出面は2面確認されており、丘陵裾部の緩斜面上を中心に遺構が確認されている。

① 層序

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 におい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトのブロックが少し混じる褐色(7.5YR4/4)砂質シルト層
- 第Ⅱ層 中・大礫混じりのにおい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト層
- 第Ⅲ層 中礫が少し混じる褐色(7.5YR4/4)砂質シルト層

2. 調査区の概要 (1) I 区



層位

- 第I層 におい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトのブロックが少し混じる褐色(7.5YR4/4)砂質シルト層
- 第II層 中・大礫混じりのにおい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト層
- 第III層 中礫が少し混じる褐色(7.5YR4/4)砂質シルト層
- 第IV層 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト層
- 第V層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトのブロックが少し混じるにおい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト層
- 第VI層 中礫が少し混じる褐色(7.5YR4/4)砂質シルト層
- 第VII層 におい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトのブロックが少し混じる褐色(7.5YR4/4)砂質シルト層
- 第VIII層 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト層
- 第IX層 黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土のブロックが多く混じる灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土層
- 第X層 におい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト層
- 第XI層 暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土質シルトのブロックが少し混じる灰色(5Y4/1)粘土層
- 第XII層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトのブロックが少し混じるにおい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト層
- 第XIII層 炭化物を含み、小礫が少し混じる暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト層
- 第XIV層 褐色(10YR4/4)砂質シルト層
- 第XV層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト層
- 第XVI層 小礫が少し混じる灰褐色(7.5YR4/2)粘土質シルト層
- 第XVII層 小〜中礫が少し混じる褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト層
- 第XVIII層 小礫が少し混じるオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト層
- 第XIX層 暗灰色(N3/)粘土層
- 第XX層 におい黄褐色(10YR5/4)シルト

遺構埋土

- 1. 緑黒色(10GY2/1)シルト質粘土(SD-24)

図2-1 I区中央バンク南壁セクション図

- 第IV層 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト層
- 第V層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトのブロックが少し混じるにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト層
- 第VI層 中礫が少し混じる褐色(7.5YR4/4)砂質シルト層
- 第VII層 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトのブロックが少し混じる褐色(7.5YR4/4)砂質シルト層
- 第VIII層 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト層
- 第IX層 黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土のブロックが多く混じる灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土層
- 第X層 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト層
- 第XI層 暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土質シルトのブロックが少し混じる灰色(5Y4/1)粘土層
- 第XII層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトのブロックが少し混じるにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト層
- 第XIII層 炭化物を含み、小礫が少し混じる暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト層
- 第XIV層 褐色(10YR4/4)砂質シルト層
- 第XV層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト層
- 第XVI層 小礫が少し混じる灰褐色(7.5YR4/2)粘土質シルト層
- 第XVII層 小～中礫が少し混じる褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト層
- 第XVIII層 小礫が少し混じるオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト層
- 第XIX層 暗灰色(N3/)粘土層
- 第XX層 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト

② 堆積層出土遺物

第I層出土遺物

須恵器(図2-2 1)

1は甕と考えられる口辺部から胴部にかけての破片である。口辺部内外面に回転ナデ、胴部内外面にヨコナデを施し、胎土には中粒砂を含む。

土師質土器(図2-2 2・3)

2・3は杯の底部破片で、摩耗のため調整は不明瞭であるが、底部切り離しは回転糸切りと考えられる。2の胎土には中粒砂を含み、3の胎土は精良である。

土製品(図2-2 4)

4は近現代の土錘と考えられるもので、ほぼ完存する。片側が潰れておりほぼ孔が塞がる。胎土には細粒砂を含む。

第II層出土遺物

土製品(図2-3 5~14)

5~14は近現代の土錘と考えられるものである。5は一部を欠損し、胎土は精良である。

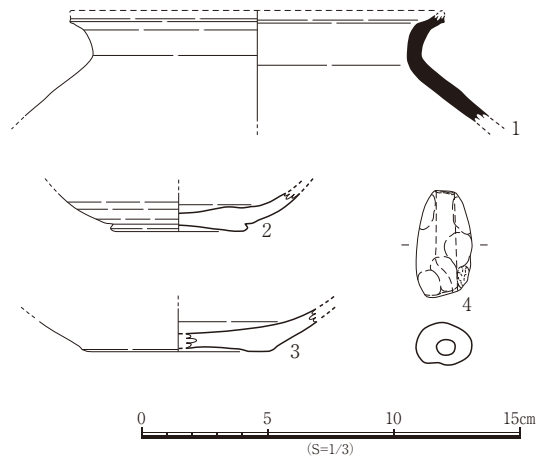


図2-2 第I層出土遺物実測図

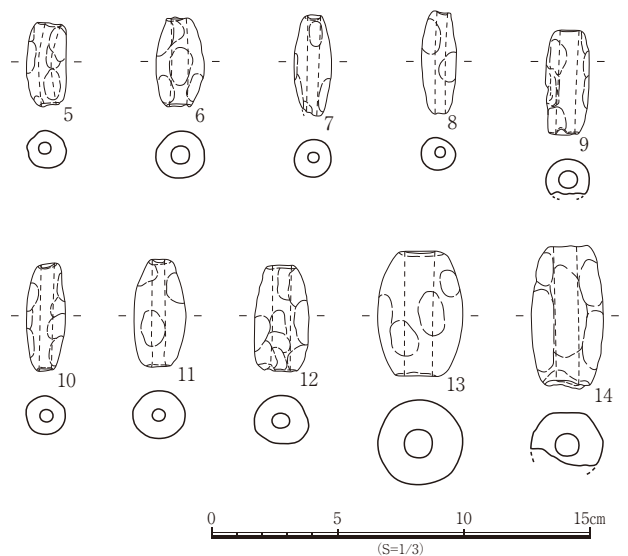


図2-3 第II層出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (1) I区

6はほぼ完存し、胎土には細粒砂を含む。7は片側を欠損し、胎土は精良である。8・9は一部を欠損し、胎土は精良である。10は完存し、胎土には中粒～粗粒砂を含む。11は完存し、胎土には細粒砂を含む。12は一部を欠損し、胎土は精良である。13はほぼ完存し、胎土には中粒砂を含む。14は一部を欠損し、表面の剥離が著しい。胎土には中粒～粗粒砂を含む。

第XV層出土遺物

木製品(図2-4 15)

15は椀と考えられる底部破片で、板目取りで作られる。高台は欠損し、内面の朱漆は大部分が剥落するが、金で描いた文様の一部が残存する。樹種はブナ属である。

第XVI層出土遺物

石製品(図2-4 16)

16は叩石で、完存する。片面と側面の2/3に敲打痕が認められ、石材は砂岩である。

木製品(図2-4 17)

17は付札と考えられるもので、板目取りで作られる。側面は面状に仕上げ、全体的に丁寧な加工を施す。樹種はスギである。

第XVII層出土遺物

弥生土器(図2-5 18)

18は甕と考えられる底部破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒～粗粒砂を含む。

土師器(図2-5 19)

19は甕の口辺部破片である。内面にハケ、口辺部外面にヨコナデ、胴部外面にハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。

須恵器(図2-5 20)

20は高杯と考えられる口辺部破片である。内外面とも回転ナデ調整が認められ、外面にはハケ状原体による刺突文を施す。胎土は精良である。

土師質土器(図2-5 21～26)

21～23は杯の底部破片である。21は摩耗のため調整は不明であるが、底部外面には回転糸切り痕が残り、胎土には中粒砂を少し含む。22は器面に回転ナデを施し、底部切り離しは回転糸切りで、胎土は精良である。23は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面に回転ナデ調整が残り、胎土は精良である。

24・25は小皿である。24は口縁部を欠損し、器面には回転ナデを施す。底部切り離しは回転糸切りで、胎土には中粒砂を含む。25はほぼ完存し、手づくね成形である。内面にハケ調整が認められ、胎土には中粒～粗粒砂を少し含む。

26は羽釜の口辺部から胴部にかけての破片である。口辺部内外面にヨコナデ、胴部内面にハケを施し、胎土には細粒砂を含む。

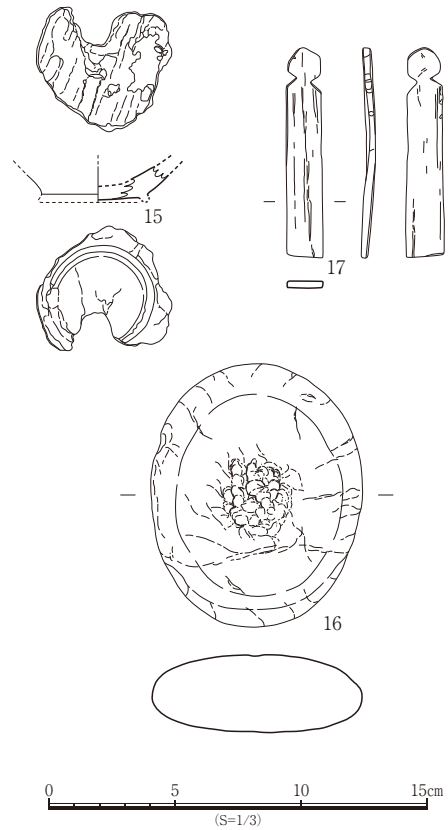


図2-4 第XV・XVI層出土遺物実測図

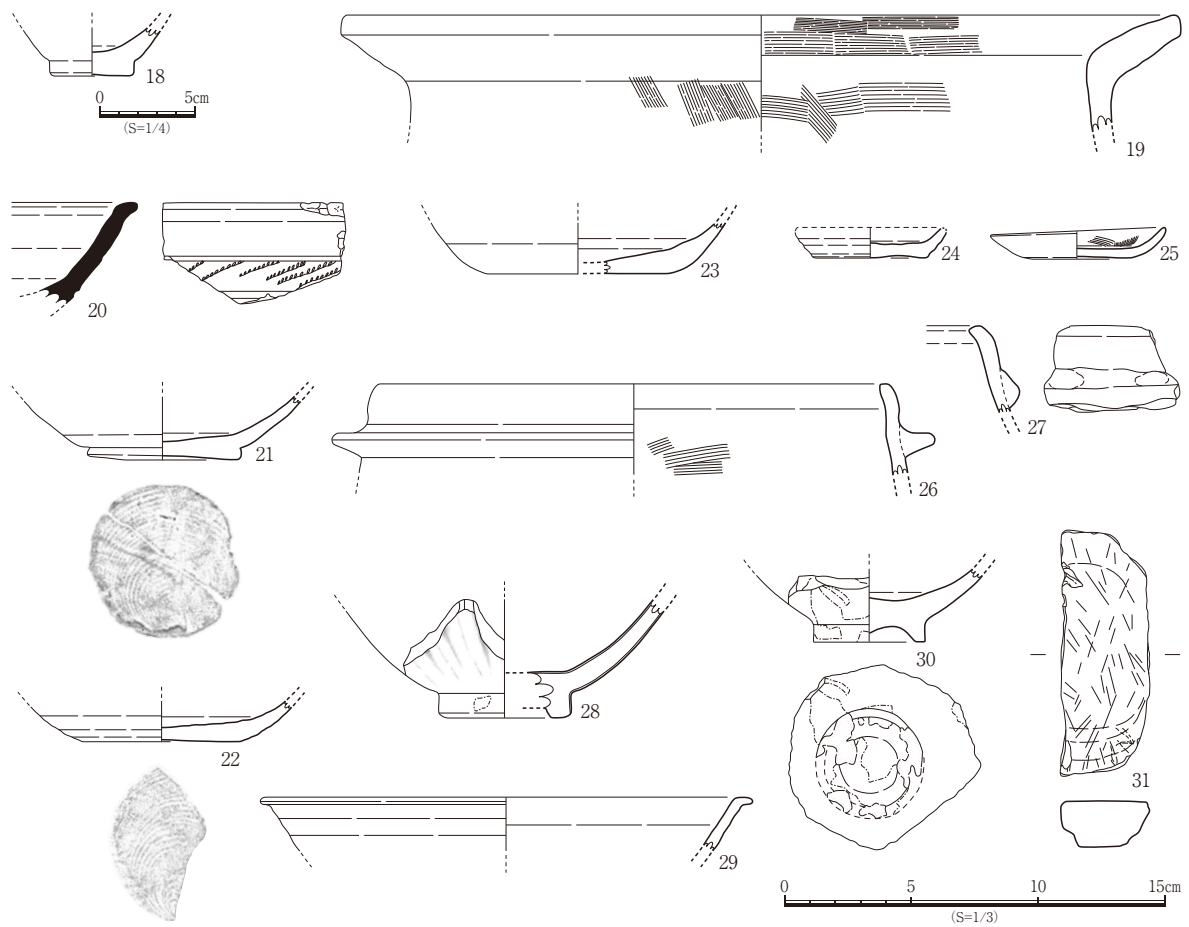


図2-5 第Ⅷ層出土遺物実測図1

瓦質土器(図2-5 27)

27は鍋の口辺部破片で全体的に摩耗が著しいが、外面の一部にヨコナデ調整が残り、胎土には粗粒砂を含む。

青磁(図2-5 28)

28は碗の底部破片である。鎬蓮弁文と考えられ、胎土には黒色極細粒砂を含む。

白磁(図2-5 29)

29は碗の口辺部破片で、胎土は精良である。

近世磁器(図2-5 30)

30は碗の底部破片である。削り出し高台で、畳付と高台内側に砂目が残る。施釉は乱雑で、胎土には黒色細粒砂を含む。

石製品(図2-5 31)

31は砥石である。片面のみ使用痕が認められ、石材は粒径の小さな砂岩である。

木製品(図2-6 32~36)

32は杯と考えられる口辺部破片である。器面全体には朱漆が認められ、下地は黒漆の可能性が考えられる。樹種はトネリコ属である。

33は把手で、板目取りで作られる。雲形を模しており、片側を欠損する。表面は木瘦せし、木目が目立つ。樹種はトネリコ属である。

2. 調査区の概要 (1) I区

34・35は曲物の底板と考えられるものである。34は板目取りで作られ、約1/2を欠損する。表面には細かな加工痕が認められ、樹種はヒノキである。35は板目取りで作られ、大部分を欠損する。表面は木瘦せし、木目が目立つ。樹種はスギである。

36は形代と考えられるもので、柁目取りで作られるが、大部分が欠損する。側面を斜めに削り、断面は三角形を呈する。表面は木瘦せし、木目が目立つ。樹種はコウヤマキである。

第Ⅷ層出土遺物

弥生土器(図2-7~10 37~87)

37~45は壺と考えられるものである。37は口辺部から上胴部にかけて残存し、全体的に摩耗が著しいが、口縁部外面にヨコナデ調整、胴部内外面にハケ調整が

残り、胎土には中粒砂~小礫を含む。38は口辺部破片で、摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂~中礫を多く含む。39は口辺部破片で、内面と口縁部外面にヨコナデ、口縁部外面下半にハケを施す。胎土には中粒砂~小礫を含む。40は口縁部破片で、内外面にハケ調整を施し、胎土には中粒~粗粒砂

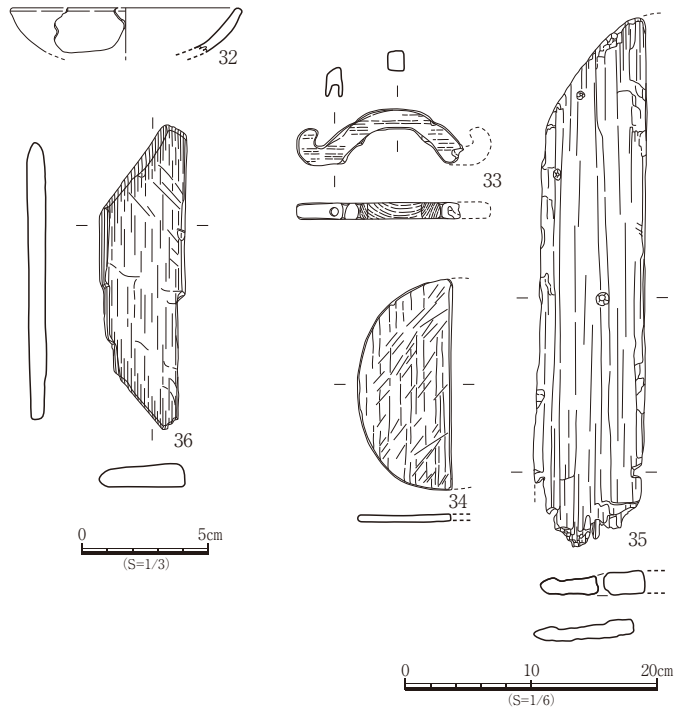


図2-6 第Ⅷ層出土遺物実測図2

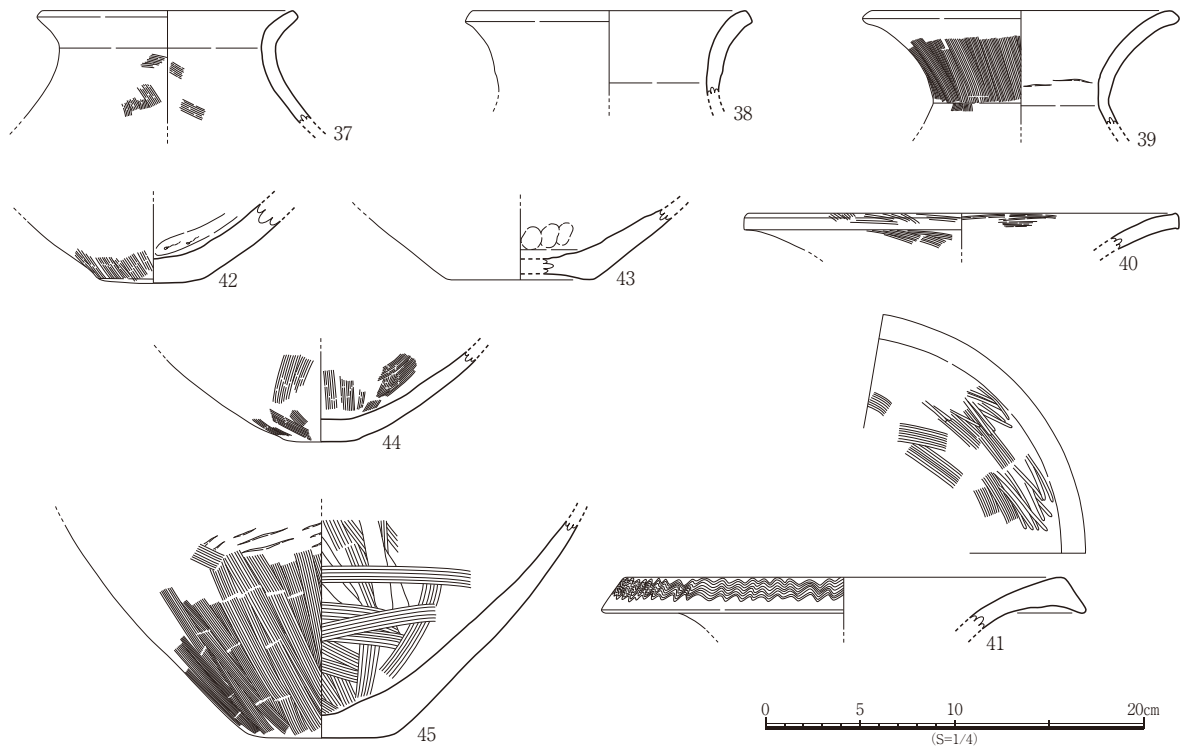


図2-7 第Ⅷ層出土遺物実測図1

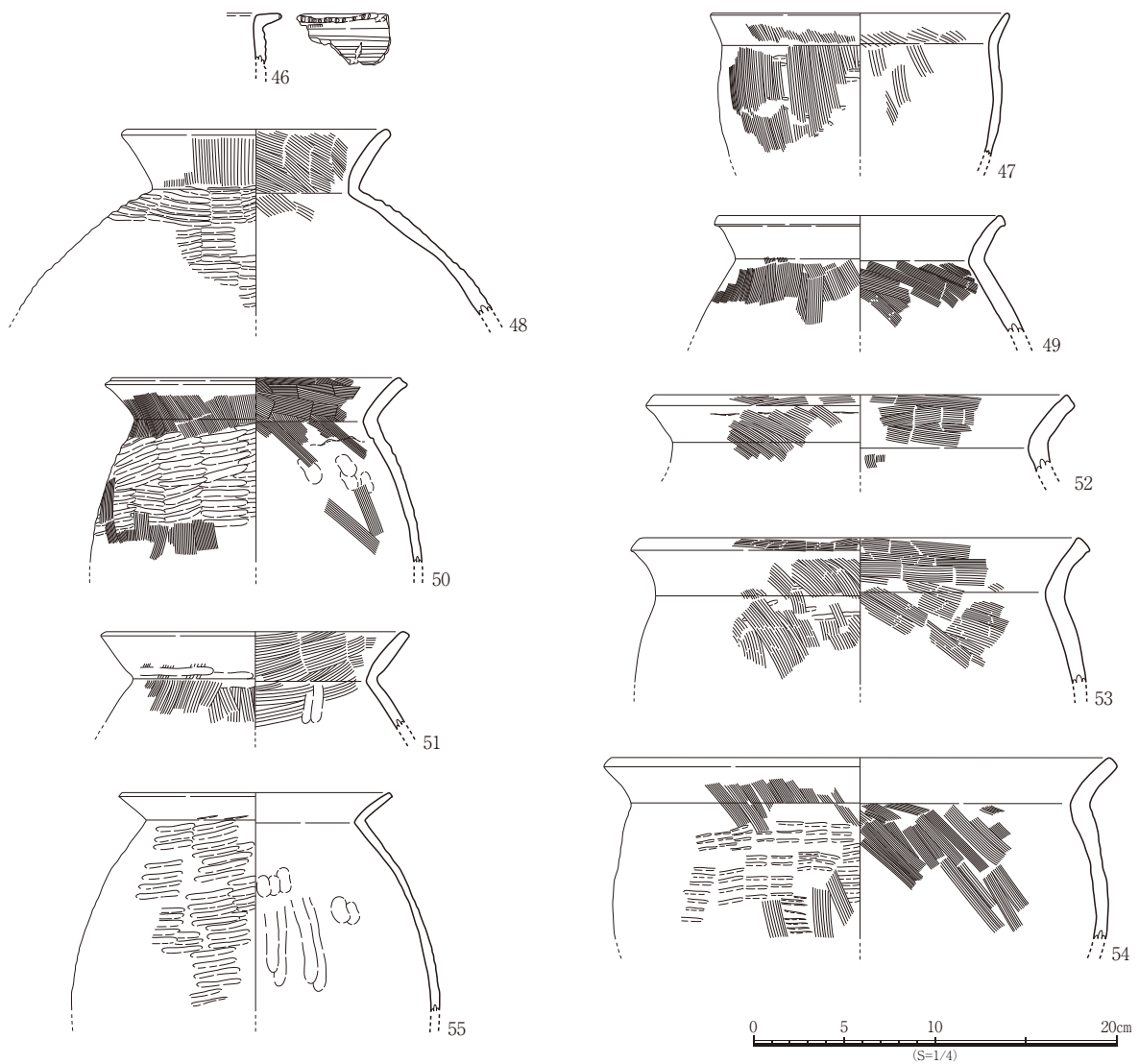


図2-8 第Ⅷ層出土遺物実測図2

を含む。41も口縁部破片で、内面にハケ調整のあとヘラミガキ調整、外面にヨコナデ調整とハケ調整が認められ、口縁端部に波状文を施す。胎土には中粒砂～小礫を含む。42～44は底部破片である。42は内面にナデ、外面にハケを施し、胎土には中粒～小礫を含む。43は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面に指頭圧痕とナデ調整が残り、胎土には中粒砂～中礫を多く含む。44は内面にハケとナデ、外面にハケを施し、胎土には細粒～中粒砂を含む。45は胴部下半から底部にかけての破片で、内面にナデのちハケ、外面にタタキとハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。

46～73は甕と考えられるものである。46は口辺部破片で、内外面にヨコナデを施す。口縁端部に刻目、外面に3条の沈線が認められ、胎土には細粒砂～小礫を含む。47～55は口辺部から胴部にかけての破片である。47は口辺部内外面にヨコナデ、胴部内面にハケ、胴部外面にタタキのちハケを施す。胎土には中粒砂～小礫を含む。48は歪みのため胴部が大きくふくれる。口縁端部にヨコナデ、口辺部内外面にハケ、胴部内面にナデ、胴部外面にタタキを施し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。49は口辺部内外面にヨコナデ、胴部内外面にハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。50は内面にハケ、口縁端部と口縁部外面にヨコナデ、口辺部から胴上端部外面にハケ、胴部外面にタ

2. 調査区の概要 (1) I区

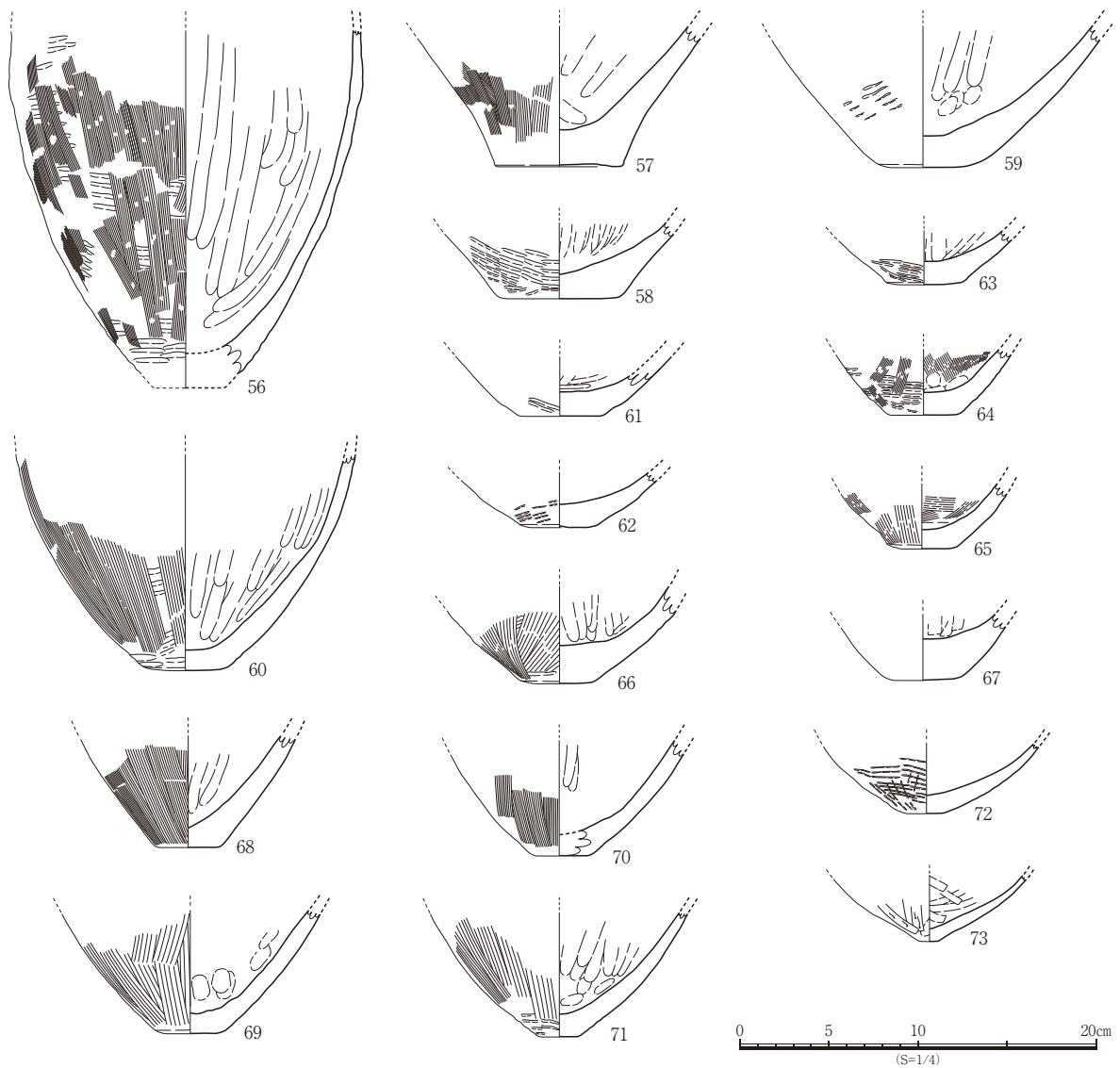


図2-9 第Ⅷ層出土遺物実測図3

キのちハケを施す。外面全体に煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。51は口辺部内面にハケ、口辺部外面にハケのちヨコナデ、胴部内面にハケのちナデ、胴部外面にハケを施す。胴部外面上端の一部に煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。52は内外面ともハケを施し、口縁部外面の一部に煤が付着する。胎土には中粒砂～小礫を含む。53は内面と口辺部外面にハケ、胴部外面にタタキのちハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。54は胴部内面にハケ、口縁端部から口縁部外面にヨコナデ、口辺部外面下端にハケ、胴部外面にタタキのちハケを施す。外面全体に煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。55は口辺部内外面にヨコナデ、胴部内面にナデ、胴部外面にタタキを施す。外面全体に煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。56は胴部破片で内面に強いナデ、外面にタタキのちハケを施す。胴部外面上部から中央部にかけて煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。57～73は底部破片である。57は内面にナデ、外面にハケを施す。外面には破裂痕が認められ、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。58は内面にナデ、外面にタタキを施し、胎土には細粒砂～小礫を含む。59は内面にナデ、外面にタタキを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。60は内面にナ

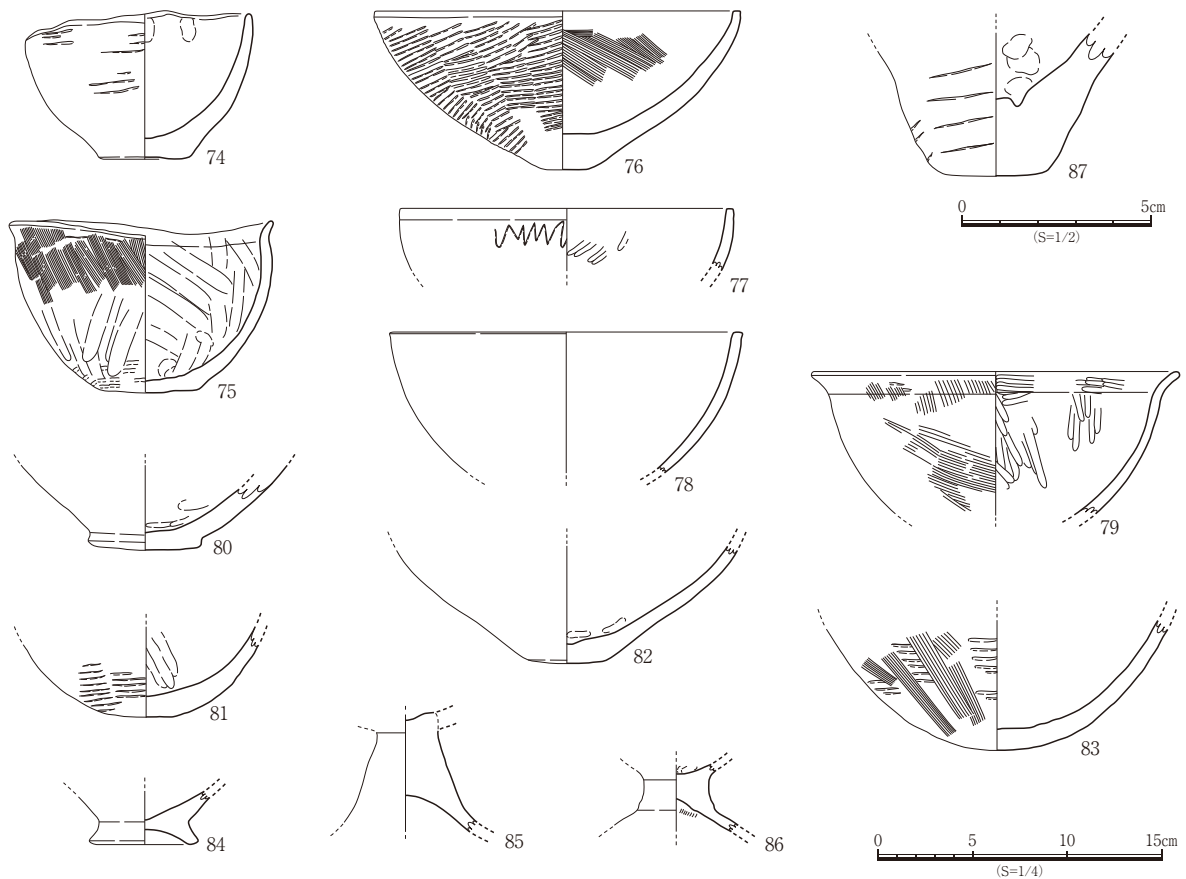


図2-10 第Ⅷ層出土遺物実測図4

デ、外面にタタキのちハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。61は内面にナデ、外面にタタキのちナデを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。62は摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にはタタキ目が認められ、胎土には中粒砂～小礫を含む。63は内面にナデ、外面にタタキを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。64は内面にハケ、外面にタタキのちハケを施し、胎土には細粒砂～小礫を含む。65は内外面ともハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。66は内面にナデ、外面にタタキのちハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。67は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にヘラナデを施し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。68は内面にナデ、外面にタタキのちハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。69は内面に指オサエとナデ、外面にハケを施す。外面の一部には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。70は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にナデ調整、外面にハケ調整が認められ、胎土には中粒砂～小礫を含む。71は内面にナデ、外面にハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。72は内面にナデ、外面にタタキを施し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。73は内面にヘラナデ、外面にはナデとヘラ削りを施し、胎土には細粒～小礫を含む。

74～84は鉢で、74～76は全体の形状が復元できたものである。74は口縁部内面に指オサエ、体部内面にナデ、外面にタタキのちナデを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。75は口縁部内面にヨコナデ、体部内面にナデ、口縁部外面にハケのちナデ、体部上半にハケ、体部下半にナデを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。76は口縁部内外面にヨコナデ、体部内面にハケとナデ、体部外面にタタキを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。77～79は口辺部から体部にかけての破片である。77は口縁部

2. 調査区の概要 (1) I 区

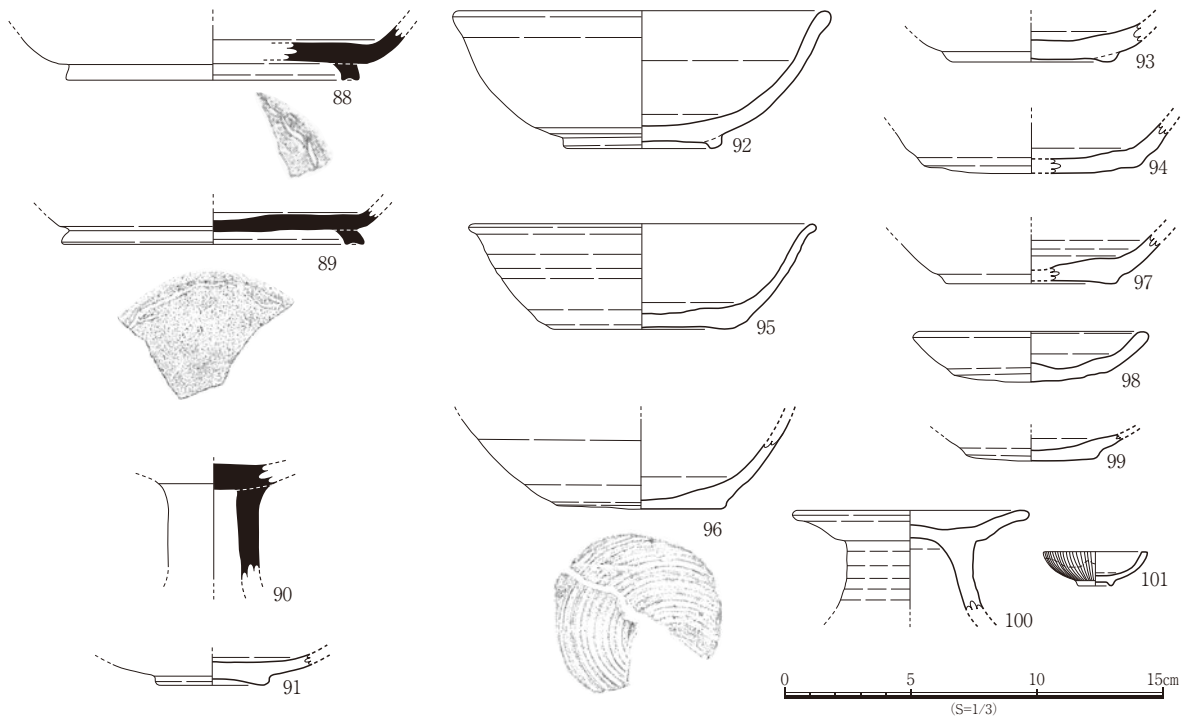


図2-11 第Ⅷ層出土遺物実測図5

内外面にヨコナデ、体部内面にヘラミガキ、体部外面にナデを施す。体部外面上端には乱雑な山形文がみられ、胎土には中粒砂～小礫を含む。78は摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂を含む。79は内面にヘラミガキ、外面にタタキのちハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。80～84は底部破片である。80は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にナデ調整が認められ、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。81は内面にナデ、外面にタタキを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。82は摩耗のため調整は不明瞭であるが、底部内面に指頭圧痕が残り、胎土には中粒砂を含む。83は内面にナデ、外面にタタキのちハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。84は脚付鉢と考えられるもので、摩耗のため調整は不明である。胎土には中粒砂～小礫を含む。

85は高杯で、脚柱部のみ残存する。摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。

86は器台と考えられるもので、脚柱部のみ残存する。摩耗のため調整は不明瞭であるが、器面には指頭圧痕やハケ調整が認められる。胎土には中粒砂～小礫を含む。

87はミニチュア土器と考えられる底部破片である。内面に指オサエとナデ、外面にタタキを施し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。

須恵器(図2-11 88~90)

88・89は杯の底部破片で、体部内外面に回転ナデ、底部内面に回転ナデのあとナデを施し、底部外面には明瞭な爪形状圧痕が認められる。胎土は精良である。

90は高杯の脚柱部破片で、杯部内面に回転ナデ調整とナデ調整、脚柱部内面にナデ、脚柱部外面に回転ナデを施し、胎土には中粒～粗粒砂を含む。

緑釉陶器(図2-11 91)

91は碗の底部破片である。硬質系で部分的に緑釉が残存する。内外面とも回転ナデ調整を施し、胎土は精良である。

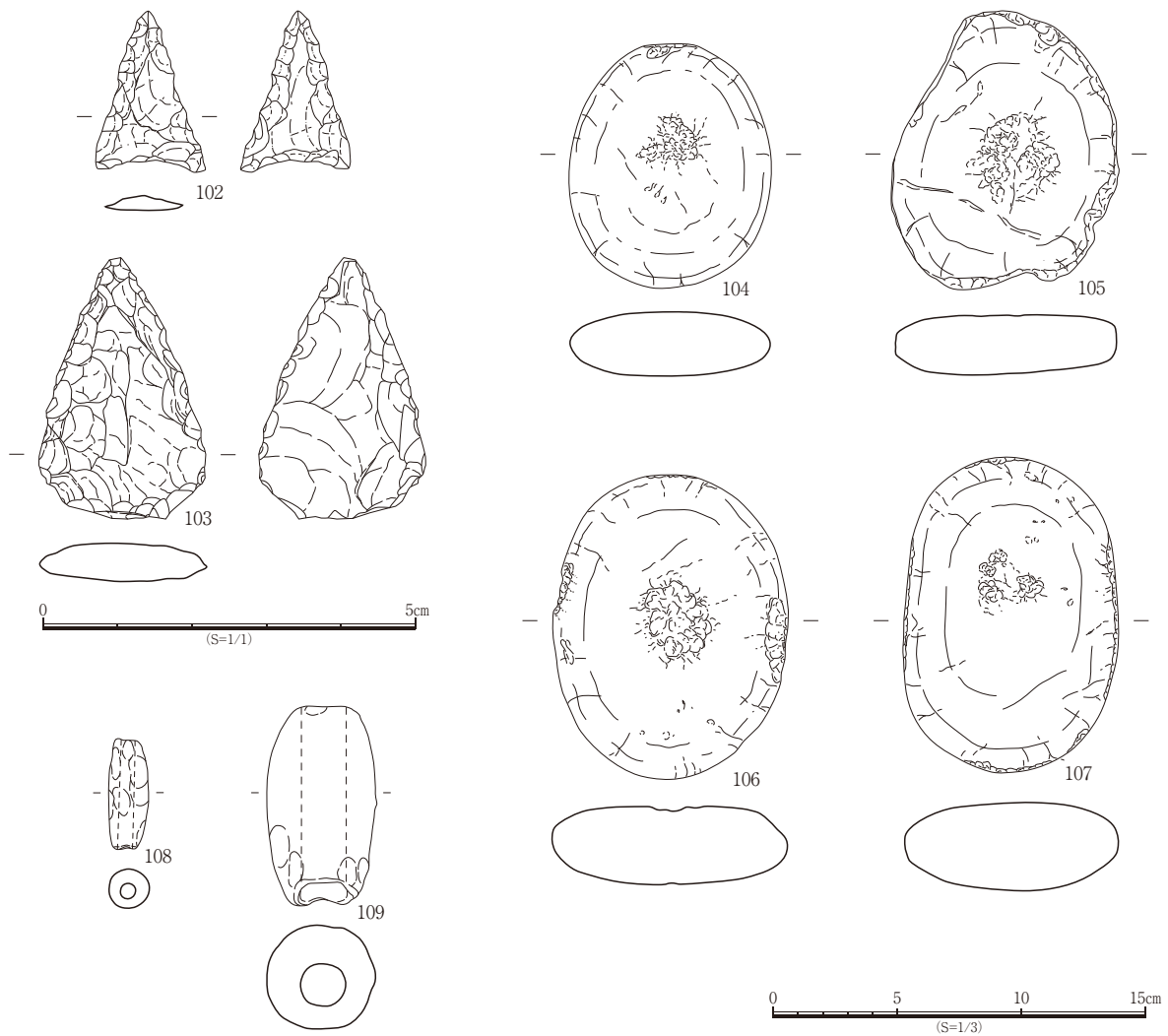


図2-12 第Ⅷ層出土遺物実測図6

土師質土器(図2-11 92~100)

92・93は椀である。92は全体の形状が復元できたもので、摩耗のため調整は不明瞭であるが、口縁部外面に回転ナデ調整、体部下端に回転ヘラ削り調整が認められる。胎土には細粒～中粒砂を含む。93は底部破片で、摩耗のため調整は不明瞭であるが器面の一部に回転ナデ調整が残り、胎土には細粒砂を含む。

94～97は杯で、底部切り離しは94が回転ヘラ切り、95～97が回転糸切りである。94は底部破片で、器面には回転ナデを施し、胎土は精良である。95は全体の形状が復元できたもので、器面には回転ナデを施し、胎土には粗粒砂を少し含む。96は体部から底部にかけての破片で、体部内外面に回転ナデ、底部内面に回転ナデのあとナデを施し、胎土には中粒砂を含む。97は底部破片で、摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面に回転ナデ調整が認められる。外面には煤が付着し、胎土は精良である。

98～100は小皿である。98は全体の形状が復元できたもので、摩耗のため調整は不明瞭であるが、底部外面には回転ヘラ切り痕が認められる。胎土は精良である。99は底部破片で、摩耗のため調整は不明瞭であるが、器面には回転ナデ調整が認められる。底部切り離しは回転糸切りで、胎土は精良である。100は高台付きのもので、脚部の大部分を欠損する。器面には回転ナデを施し、胎土は精良である。

2. 調査区の概要 (1) I 区

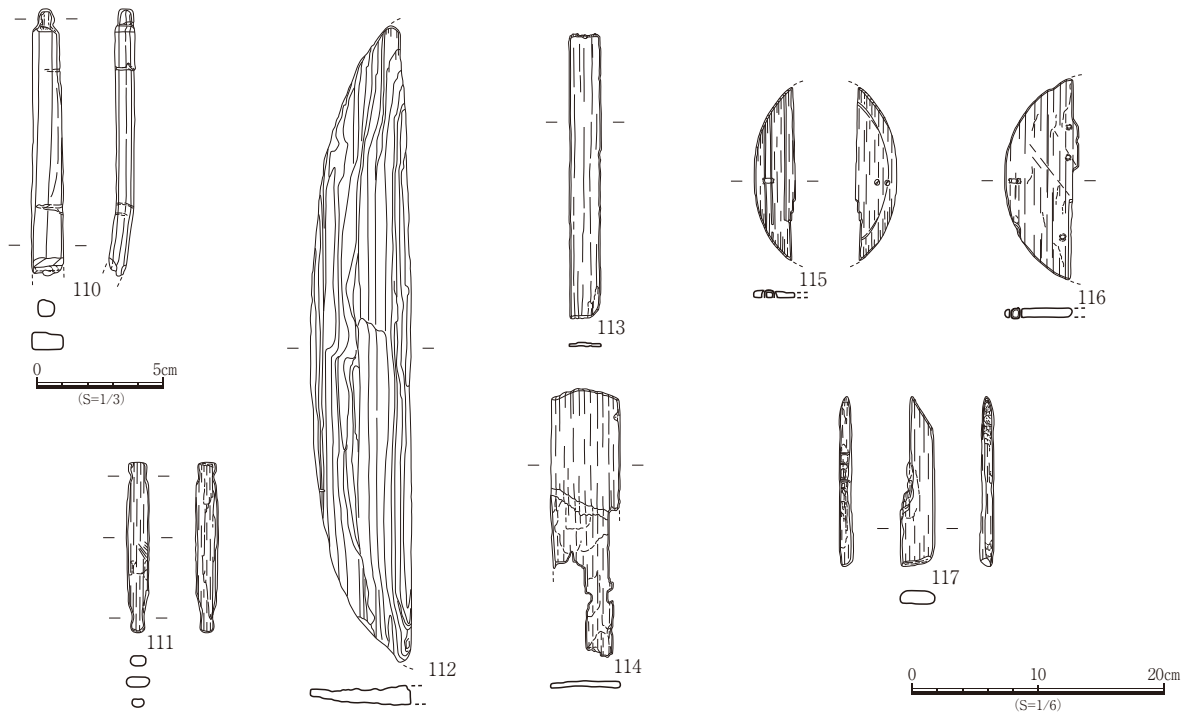


図2-13 第Ⅲ層出土遺物実測図7

近世磁器(図2-11 101)

101は紅皿である。高台畳付に砂目が認められ、胎土は精良である。

石製品(図2-12 102~107)

102・103は石鏃で、102が凹基式、103が凸基式である。ともに完存し、石材はサヌカイトとみられる。

104~107は叩石で、石材は砂岩である。104は片面と側面1カ所に敲打痕が認められる。105は片面と側面の約1/2に敲打痕が認められる。106は両面と側面3カ所に敲打痕が認められる。107は両面に弱い敲打痕、側面4カ所に強い敲打痕が認められる。

土製品(図2-12 108・109)

108・109は土錘で、完存するものである。ともに摩耗が著しく調整は不明で、胎土は108には中粒砂、109には細粒砂~小礫を多く含む。

木製品(図2-13~16 110~139)

110は糸巻きの部材と考えられるもので、板目取りで作られる。端部の両側に抉りを施し、反対側の端部は欠損する。全体に丁寧な加工を施し、樹種はスギである。

111は曲物の把手と考えられるもので、板目取りで作られる。両端の側面に抉りを施し、表面は木瘦せし、木目が目立つ。樹種はヒノキである。

112は曲物の蓋と考えられるもので、板目取りで作られる。表面は木瘦せし、木目が目立つ。樹種はスギである。

113・114は曲物の側板と考えられるもので、板目取りで作られる。ともに片側を欠損しており、表面は木瘦せし、木目が目立つ。113の樹種はヒノキ、114の樹種はコウヤマキである。

115・116は曲物の底板と考えられるものである。ともに板目取りで作られ、大部分を欠損する。115は片面には弧を描く沈線状の傷が認められ、端部には2カ所穿孔し、樹皮が残る。全体的に丁寧

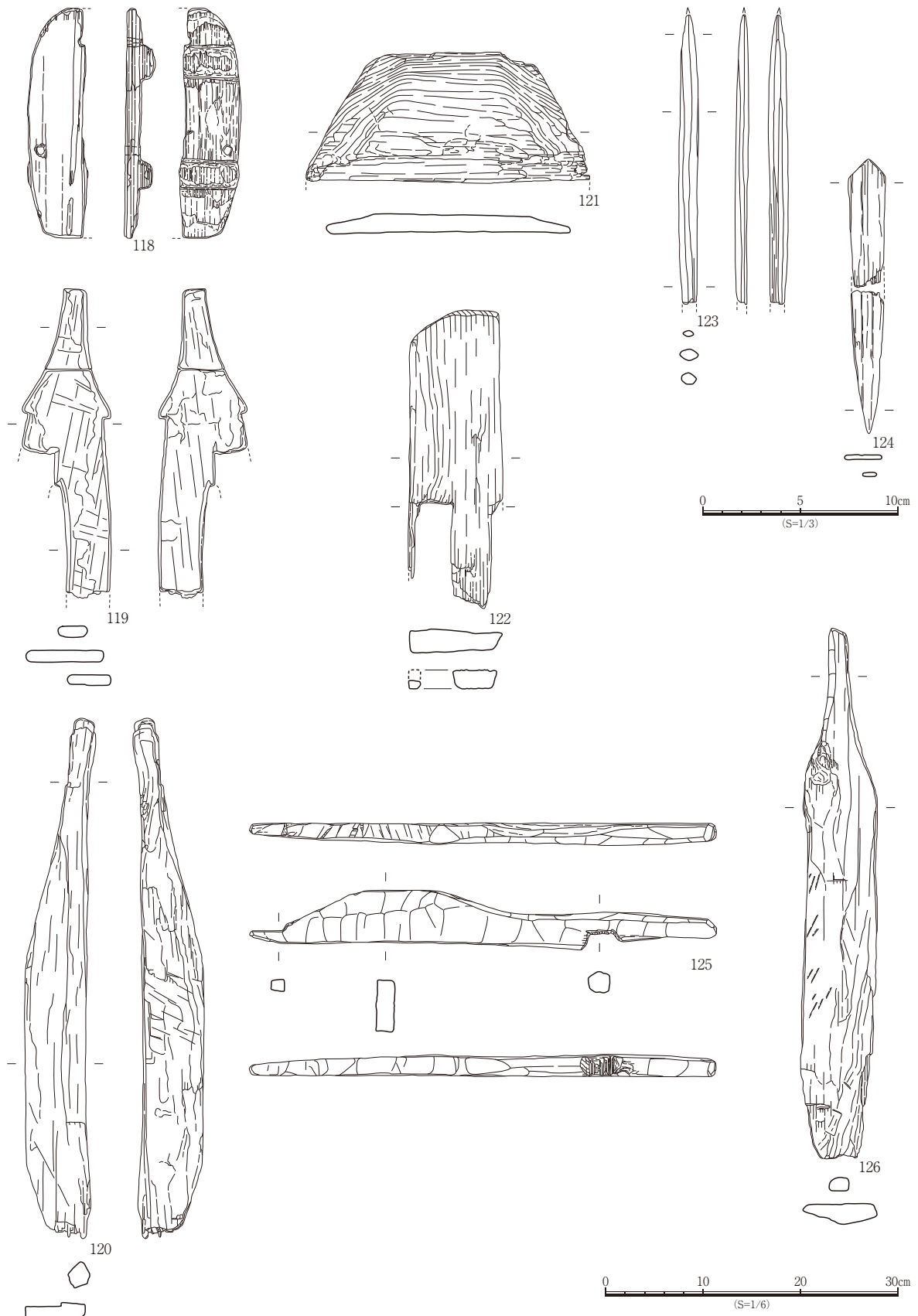


図2-14 第Ⅷ層出土遺物実測図8

2. 調査区の概要 (1) I 区

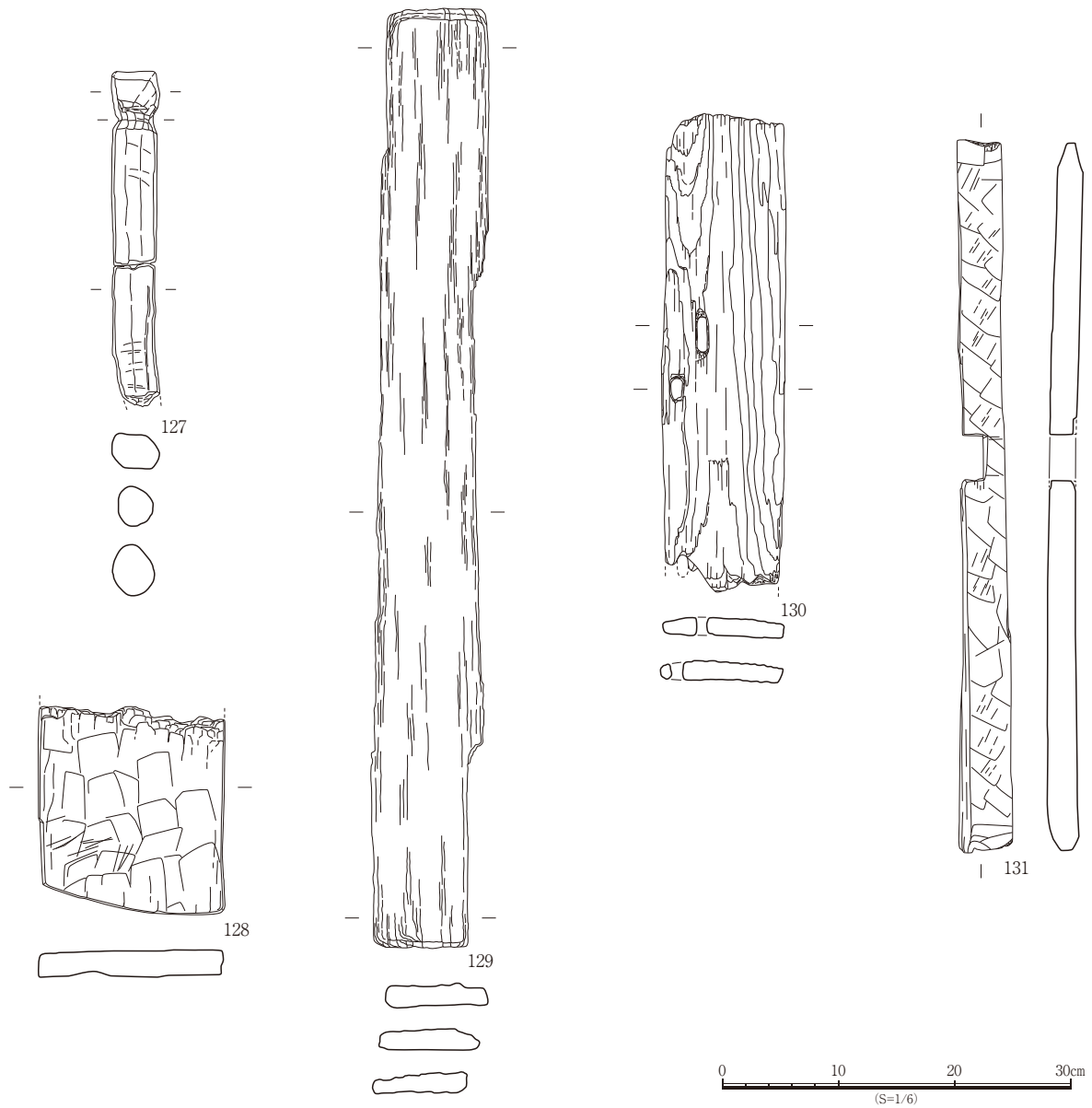


図2-15 第Ⅷ層出土遺物実測図9

な加工を施し、樹種はヒノキである。116は計5カ所穿孔しており、そのうち2カ所には樹皮が残る。樹種はスギである。

117は箱の板材と考えられるもので、柁目取りで作られる。表面は木瘦せし、木目が目立つ。樹種はコウヤマキである。

118は下駄で、板目取りで作られる。連齒下駄で、約1/2を欠損しており、眼が1孔認められる。表面は木瘦せし、木目が目立つ。樹種はスギである。

119は又鋏と考えられるもので、板目取りで作られる。刃部の大部分と柄軸部の一部を欠損しており、表面は木瘦せし、木目が目立つ。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

120は鋤と考えられるもので、板目取りで作られる。1/2以上を欠損するとみられ、片面には加工痕が明瞭に残る。樹種はモミ属である。

121・122は田下駄と考えられるもので、板目取りで作られる。121は端部のみ残存しており、表面

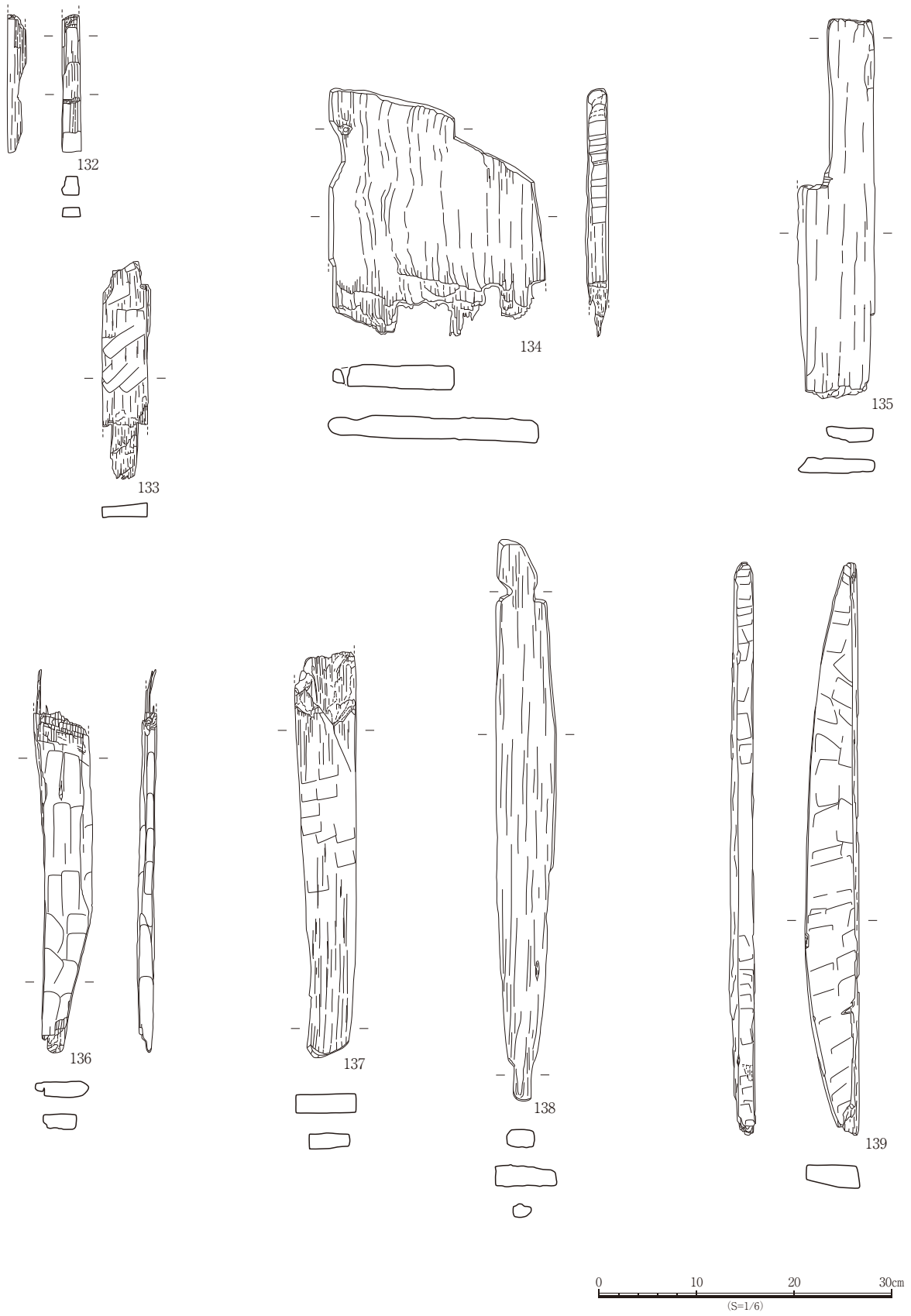


図2-16 第Ⅷ層出土遺物実測図10

2. 調査区の概要 (1) I 区

は木瘦せし、木目が目立つ。樹種はスギである。122は大部分を欠損しており、表面は木瘦せし、木目が目立つ。樹種はスギである。

123は木鏝と考えられるもので、先端部と基部を欠損する。断面形は菱形を呈しており、樹種はスギである。

124は斎串と考えられるもので、板目取りで作られる。側面は面取りを行い、上端部を山形に削り、下端部を尖らす。樹種はヒノキである。

125は鳥形と考えられるもので、板目取りで作られる。羽部を欠損しており、表面には粗い加工痕が認められる。樹種はスギである。

126は形代の未成品と考えられるもので、板目取りで作られる。木瘦せし、木目が目立つが、部分的に加工痕が認められる。樹種はスギである。

127は垂木と考えられるもので、心持材で作られる。片側の端部には抉りが認められるが、もう片側の端部は欠損する。表面は木瘦せし、木目が目立ち、樹種はヒサカキである。

128・129は壁板と考えられるもので、板目取りで作られる。128は大部分を欠損しており、表面には粗い加工痕と加工具による傷が認められる。樹種はスギである。129は表面は木瘦せし、木目が目立つが、一部が炭化する。樹種はスギである。

130・131は建築部材と考えられるもので、板目取りで作られる。130は片側の端部を欠損しており、矩形を呈する孔が2つ認められる。樹種はコウヤマキである。131は両端を杭状に仕上げ、側面1ヵ所に抉りを施す。表面は木瘦せし、木目が目立つが一部に加工痕が認められ、一部が炭化する。樹種はヒノキである。

132～139は用途不明のものである。132は柱目取りで作られ、片側の端部を斜めに削り、もう片側の端部は欠損する。中央部には抉りを施し、表面は木瘦せし、木目が目立つ。樹種はヒノキである。133は柱目取りで作られる。片側の端部は両側面を削り、細く仕上げるが、端部は欠損する。もう片側の端部も欠損し、表面には加工痕が認められる。樹種はヒノキである。134は板目取りで作られ、大部分を欠損する。側面には抉りを施し、円形を呈する孔を1ヵ所穿つ。表面は木瘦せし、木目が目立つが、側面には粗い加工痕が認められる。樹種はスギである。135は板目取りで作られ、両端を欠損する。側面には抉りを施し、表面は木瘦せし、木目が目立つ。樹種はスギである。136は板目取りで作られ、片側の端部は杭状に仕上げるが先端部は欠損する。もう片側の端部は意図的に切断したと考えられ、切断痕が残る。表面には粗い加工痕が認められ、樹種はヒノキである。137は板目取りで作られ、片側を欠損する。表面は木瘦せし、木目が目立つが、一部に粗い加工痕が認められる。樹種はヒノキである。138は片側端部の側面に抉りを施し、もう片側の端部は断面を楕円状に細く仕上げる。表面は木瘦せし、木目が目立ち、樹種はスギである。139は板目取りで作られ、大部分を欠損する。片面と側面に加工痕が認められ、一部が炭化する。樹種はヒノキである。

第Ⅷ層出土遺物

弥生土器(図2-17～19 140～174)

140～147は壺である。140は口辺部破片で、口縁端部に連続する山形文を施す。摩耗のため調整は不明瞭であるが、口縁部外面にヨコナデ調整、口辺部外面にハケ調整が認められ、胎土には中粒砂～小礫を含む。141・142は口辺部から胴部にかけての破片である。141は口縁部内外面にヨコナデ、口辺部内外面にハケ、胴部内外面にナデを施す。外面には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含

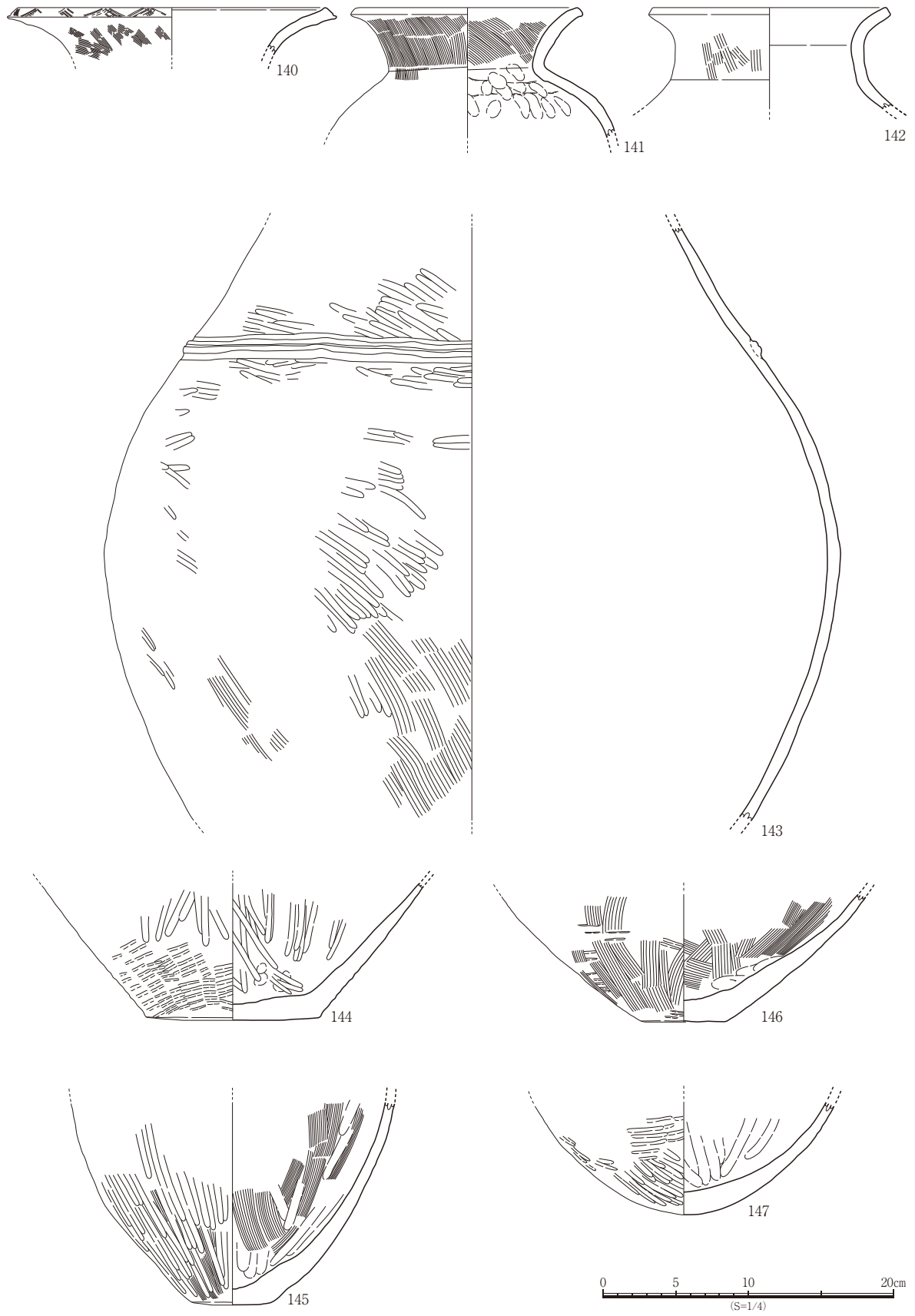


図2-17 第Ⅷ層出土遺物実測図1

2. 調査区の概要 (1) I区

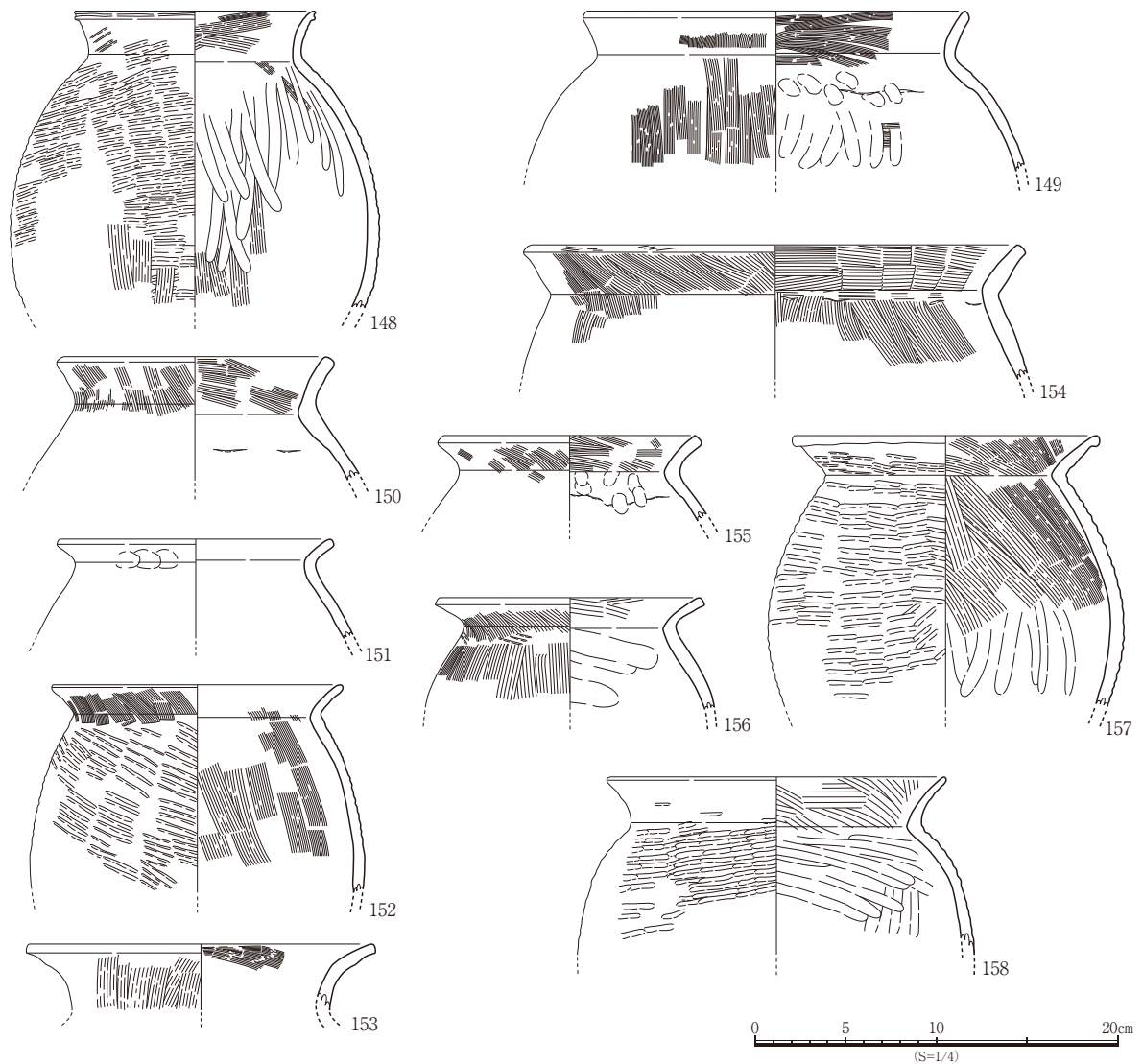


図2-18 第Ⅷ層出土遺物実測図2

む。142は摩耗のため調整は不明瞭であるが、口縁部内外面にヨコナデ調整、頸部外面にハケ調整が認められ、胎土には中粒砂～小礫を含む。143は胴部破片で、胴上部に沈線を施す1条の突帯を配する。突帯の上下には張り付け時のナデが認められ、内面にナデ、胴上部から中央部にかけてヘラミガキ、胴下部にハケのちナデを施す。胎土には中粒砂～小礫を多く含む。144～147は胴部から底部にかけての破片である。144は内面と胴部外面に粗いヘラミガキ、胴部外面下端にタタキを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。145は内面にハケのちナデ、外面にハケのちヘラミガキを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。146は胴部内面にハケ、底部内面にハケのちナデ、外面にタタキのちハケを施す。底部外面には板状圧痕が認められ、胎土には中粒砂～小礫を含む。147は内面にナデ、胴上部にタタキ、胴下部に丁寧なヘラミガキを施す。胴上部には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。

148～168は甕で、148～158は口辺部から胴部にかけての破片である。148は口縁端部は成形時に潰れ、沈線状を呈する。口辺部内面にハケ、胴部内面にハケのちナデ、外面全体にタタキを施し、胴部外面下端にはハケ調整も認められる。胎土には中粒砂～小礫を含む。149は口縁端部にヨコナ

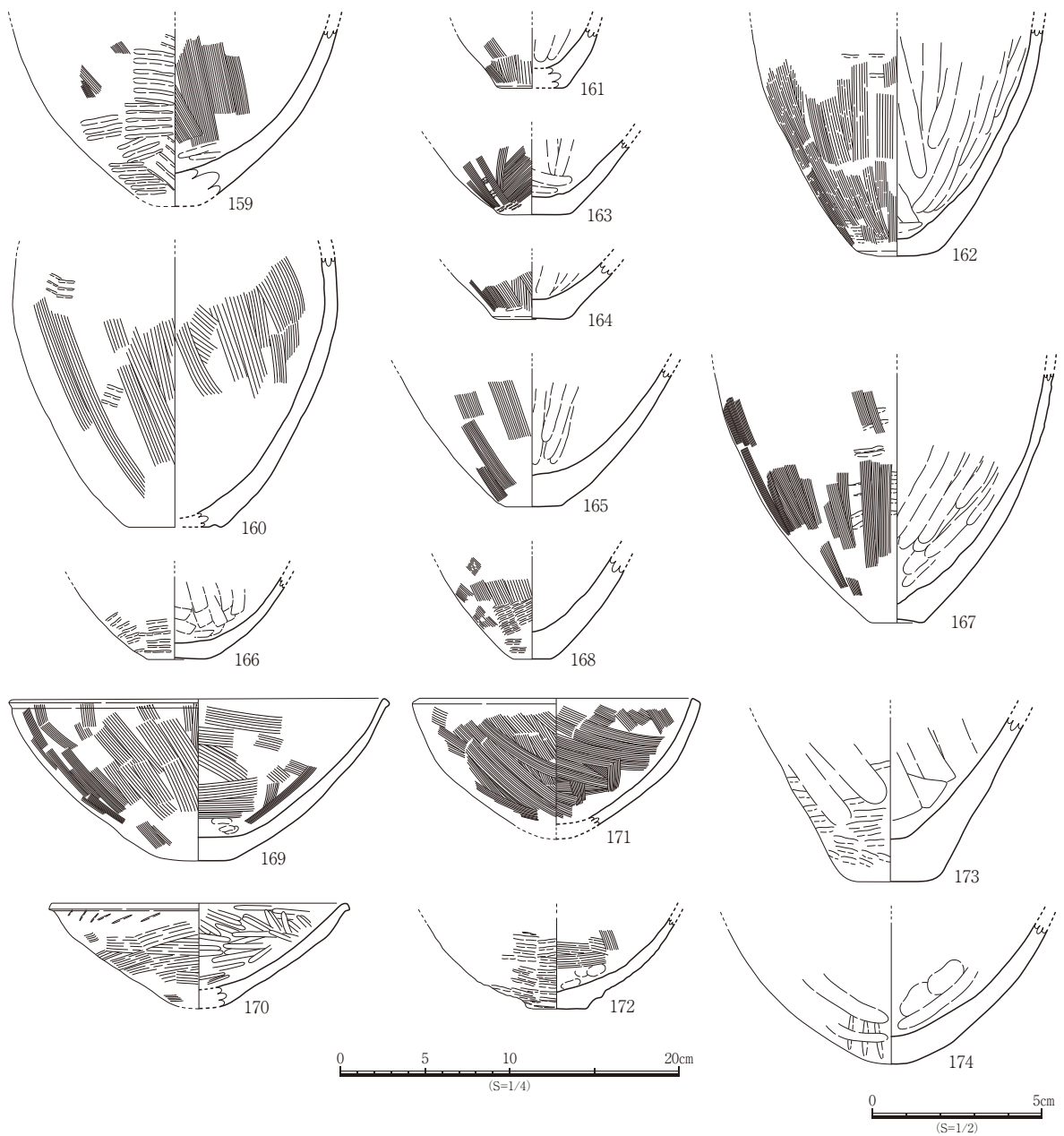


図2-19 第Ⅷ層出土遺物実測図3

デ、口辺部内面にハケ、胴部内面にハケのちナデ、口辺部外面にハケのちヨコナデ、胴部外面にハケを施す。外面全体に煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。150は摩耗のため調整は不明瞭であるが、口辺部内外面にハケ調整が残り、胎土には中粒砂～小礫を含む。151は摩耗のため調整は不明で、胎土には細粒砂～小礫を含む。152は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面と口辺部外面にハケ調整、胴部外面にタタキ目が認められ、胎土には中粒砂～小礫を含む。153は口縁部内面と口辺部外面にハケ、口縁端部から口縁部外面にヨコナデを施し、胎土には細粒砂～小礫を含む。154は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面と口辺部外面にハケ調整が認められる。口辺部外面には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。155は口辺部内面と外面全体にハケ、胴部内面にナデを施す。口辺部外面に煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。156は口縁端部にヨコ

2. 調査区の概要 (1) I 区

ナデ, 口辺部内外面にハケ, 胴部内面にナデ, 胴部外面にタタキのちハケを施す。胴部外面には煤が付着し, 胎土には中粒砂~小礫を含む。157は口縁端部にヨコナデ, 口辺部から胴中央部内面に粗いハケ, 胴下部内面にナデ, 口辺部外面にタタキのちヨコナデ, 胴部外面にタタキを施す。外面全体には煤が付着し, 胎土には中粒砂~小礫を含む。158は口辺部内面にハケ, 胴部内面にナデ, 口辺部外面にタタキのちヨコナデ, 胴部外面にタタキを施す。外面全体には煤が付着し, 胎土には中粒砂~小礫を多く含む。159~161は胴部破片である。159は内面にハケ, 外面にタタキのちハケを施し, 内面下端にはナデが認められる。外面下端には煤が付着し, 胎土には中粒砂~小礫を含む。160は内面中央部にハケ, 内面下部にナデ, 外面全体にタタキのちハケを施す。内面下部には炭化物が付着し, 胎土には中粒砂~小礫を含む。161は内面にナデ, 外面にハケを施し, 胎土には中粒砂~小礫を含む。162~168は胴部から底部にかけての破片である。162は内面に強いナデ, 外面にタタキのちハケを施し, 胎土には中粒砂を含む。163は胴部内面にナデ, 胴部外面にタタキのちハケを施し, 底部外面にはナデ調整が認められる。外面の一部には煤が付着し, 胎土には中粒砂~小礫を含む。164は内面にナデ, 外面にタタキのちハケを施し, 胎土には中粒砂~小礫を含む。165は内面にナデ, 外面にタタキのちハケを施す。外面の一部には煤が付着し, 胎土には中粒砂~小礫を含む。166は内面にヘラナデ, 外面にタタキを施し, 胎土には中粒砂~小

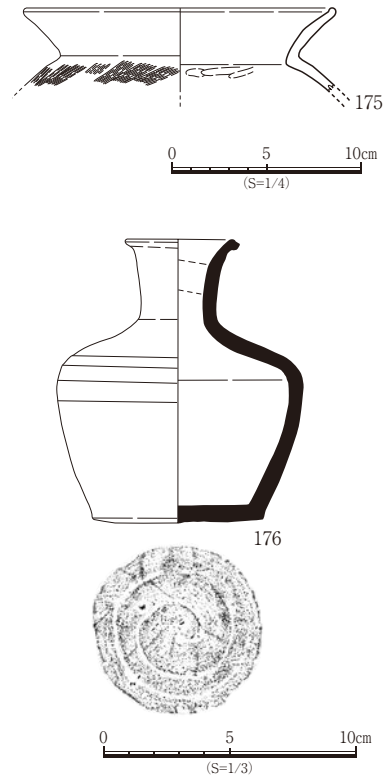


図2-20 第Ⅷ層出土遺物実測図4

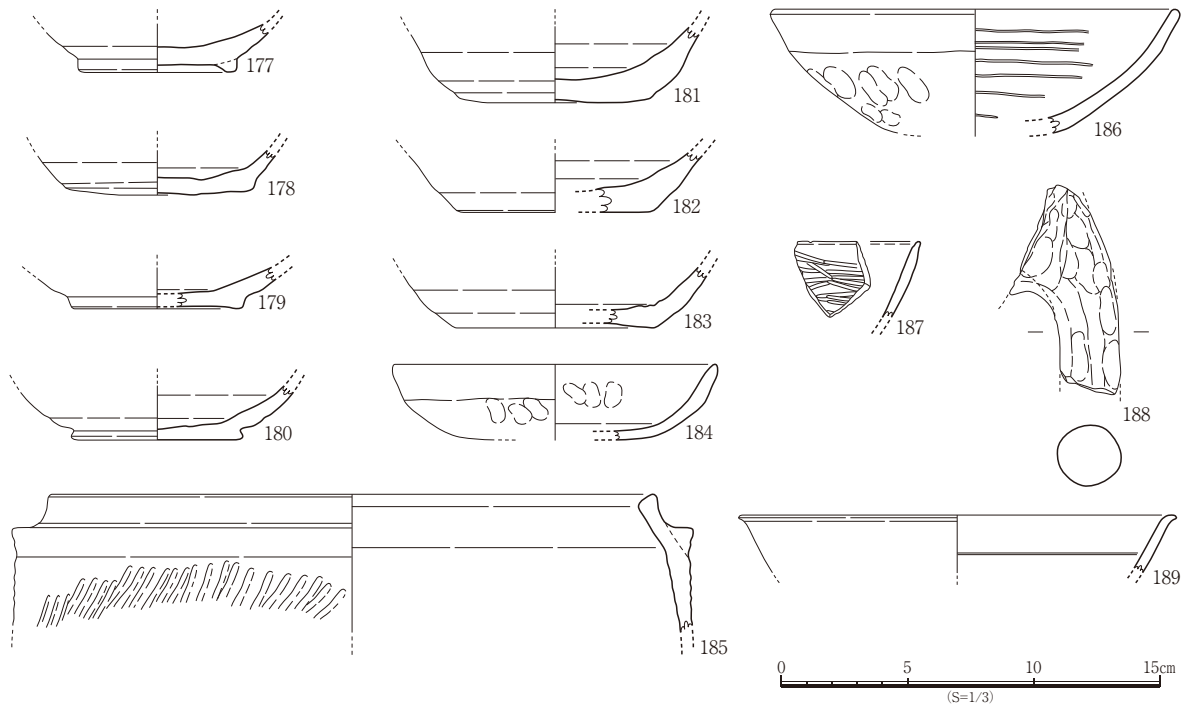


図2-21 第Ⅷ層出土遺物実測図5

礫を含む。167は内面にナデ、外面にタタキのちハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。168は摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にはタタキ目とハケ調整が認められる。外面の一部には煤が付着し、胎土には細粒砂～小礫を含む。

169～172は鉢である。169は全体の形状が復元できたもので、摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面と体部外面にハケ調整、口縁部外面にヨコナデ調整が認められ、胎土には中粒砂～小礫を含む。170・171は底部を欠損するものである。170は口縁端部にヨコナデ、内面にヘラミガキ、外面にタタキのちハケを施し、口縁部内外面にはヨコナデ調整が認められる。胎土には細粒砂～小礫を含む。171は口縁部内外面にヨコナデ、体部内外面にハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。172は底部破片で、内面にハケ、外面にタタキを施し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。173・174はミニチュア土器の底部破片である。173は内面にヘラナデ、外面にタタキのちナデを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。174は内面にナデ、外面にタタキのちナデを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。

庄内式土器(図2-20 175)

175は甕の口辺部から胴上部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部内面にナデ調整、口辺部外面にヨコナデ調整、胴部外面にタタキ目が認められる。外面全体に煤が付着し、胎土には細粒～中粒砂を多く含む。

須恵器(図2-20 176)

176はほぼ完存するもので、器面には回転ナデを施し、胴中央部に回転ヘラ削り調整が認められる。胎土には極細粒～極粗粒砂を含む。

土師質土器(図2-21 177～185)

177は椀と考えられる底部破片で、断面台形状の高台が付く。摩耗のため調整は不明で、胎土には細粒砂を含む。

178～184は杯である。178～183は底部破片で、底部切り離しは178が回

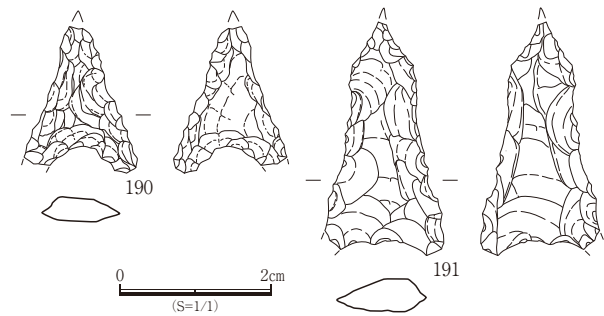


図2-22 第Ⅷ層出土遺物実測図6

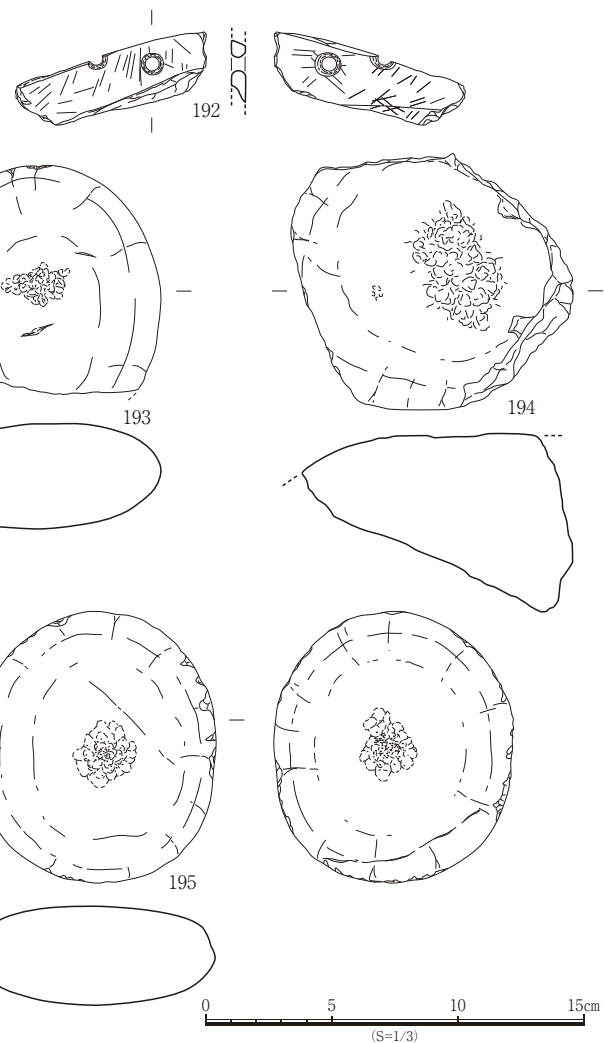


図2-23 第Ⅷ層出土遺物実測図7

2. 調査区の概要 (1) I区

転ヘラ切り, 179~183が回転糸切りと考えられる。178は器面に回転ナデを施し, 胎土は精良である。179・180は摩耗のため調整は不明で, 胎土には細粒~中粒砂を含む。181・182は摩耗のため調整は不明で, 胎土は精良である。183は摩耗のため調整は不明で, 胎土には細粒~小礫を含む。184は手づくね成形のものである。摩耗のため調整は不明瞭であるが, 内外面に指頭圧痕が認められ, 胎土には細粒砂を含む。

185は鍋の口辺部から胴部にかけての破片である。内面と口辺部外面には回転ナデ, 胴部外面にはタタキを施す。胴部外面には煤が付着し, 胎土には細粒砂~小礫を含む。

瓦器(図2-21 186・187)

186・187は椀と考えられるものである。186は口辺部から体部にかけての破片で, 器面にヨコナデを施し, 体中央部から下部にかけて指頭圧痕が認められる。内面には平行する圏線状のヘラミガキを施し, 胎土は精良である。187は口辺部破片で, 口縁部内外面にヨコナデ, 口辺部内面にヘラミガキを施し, 胎土には中粒砂を含む。

瓦質土器(図2-21 188)

188は三足鍋の脚部で, 大部分を欠損する。表面には指オサエとナデを施し, 胎土には細粒~中粒砂を含む。

白磁(図2-21 189)

189は口辺部破片で, 口縁端部が大きく外反し, 水平をなす。体部内面には1条の沈線が認められ,



図2-24 第Ⅷ層出土遺物実測図8

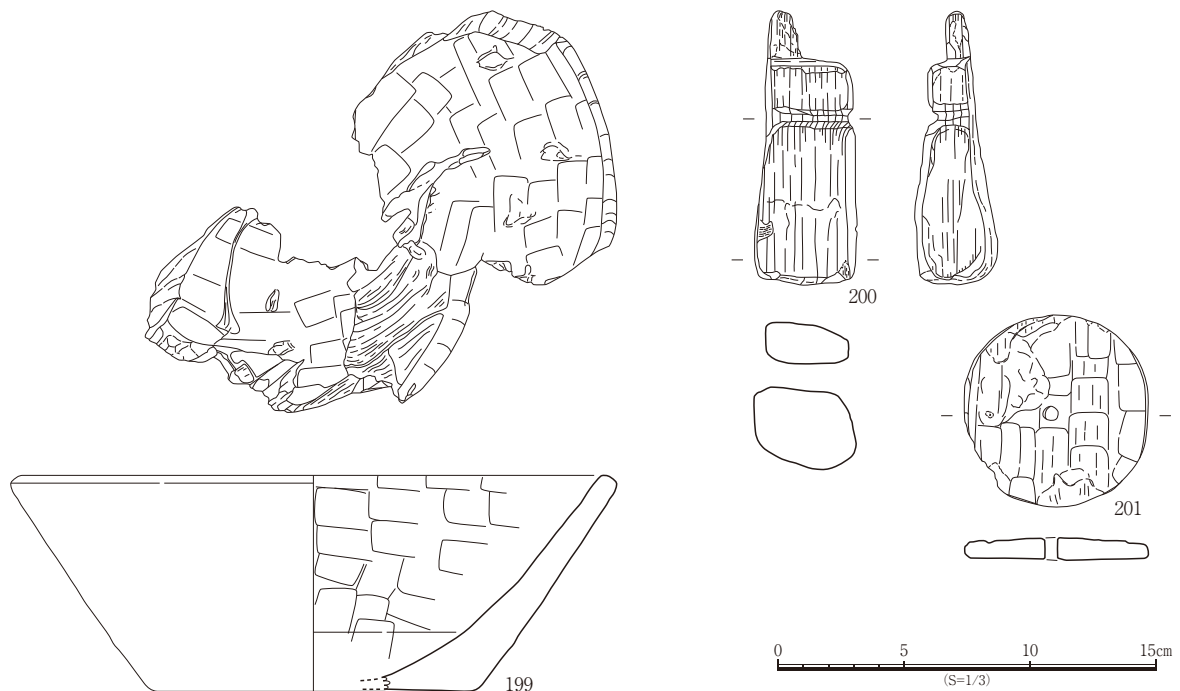


図2-25 第Ⅷ層出土遺物実測図9

胎土は精良である。

石製品(図2-22~24 190~198)

190・191は石鏃で、ともに凹基式で、先端部と基部を欠損し、石材はサヌカイトと考えられる。

192は石庖丁で、大部分を欠損する。表面には調整痕が認められ、石材は砂岩である。

193~195は叩石で、石材は砂岩である。193は全体の約3/4が残存し、片面と側面1ヵ所に弱い敲打痕が認められる。194は一部が残存し、片面のみ敲打痕が認められる。195は完存し、両面と側面の約2/3に敲打痕が認められる。

196~198は砥石で、石材は砂岩である。196は片面の一部と側面1ヵ所に使用痕が認められる。197は両面の一部と側面の1ヵ所に使用痕が認められる。198は両面に使用痕が認められる。

木製品(図2-25・26 199~211)

199は板目取りで作られ、鉢と考えられるものである。内面には粗い加工痕が残り、外面は木瘦せし、木目が目立つ。樹種はクスノキである。

200は箱の脚部と考えられるもので、柁目取りで作られる。表面は木瘦せし、木目が目立ち、樹種はコウヤマキである。

201は紡錘車で、柁目取りで作られる。一部が欠損し、表面には細かな加工痕が認められ、一部が炭化する。樹種はヒノキである。

202は田下駄の足台と考えられるもので、板目取りで作られる。大部分を欠損し、端部側面に抉りを施す。表面は木瘦せし、木目が目立ち、樹種はヒノキである。

203は三又鋏と考えられるもので、板目取りで作られる。刃部は欠損しており、表面は木瘦せし、木目が目立つ。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

204・205は鋤と考えられるものである。204は柁目取りで作られ、刃部は欠損する。表面は木瘦せし、木目が目立ち、樹種はクリである。205は板目取りで作られ、柄軸部は欠損する。鉄刃を装着する

2. 調査区の概要 (1) I 区

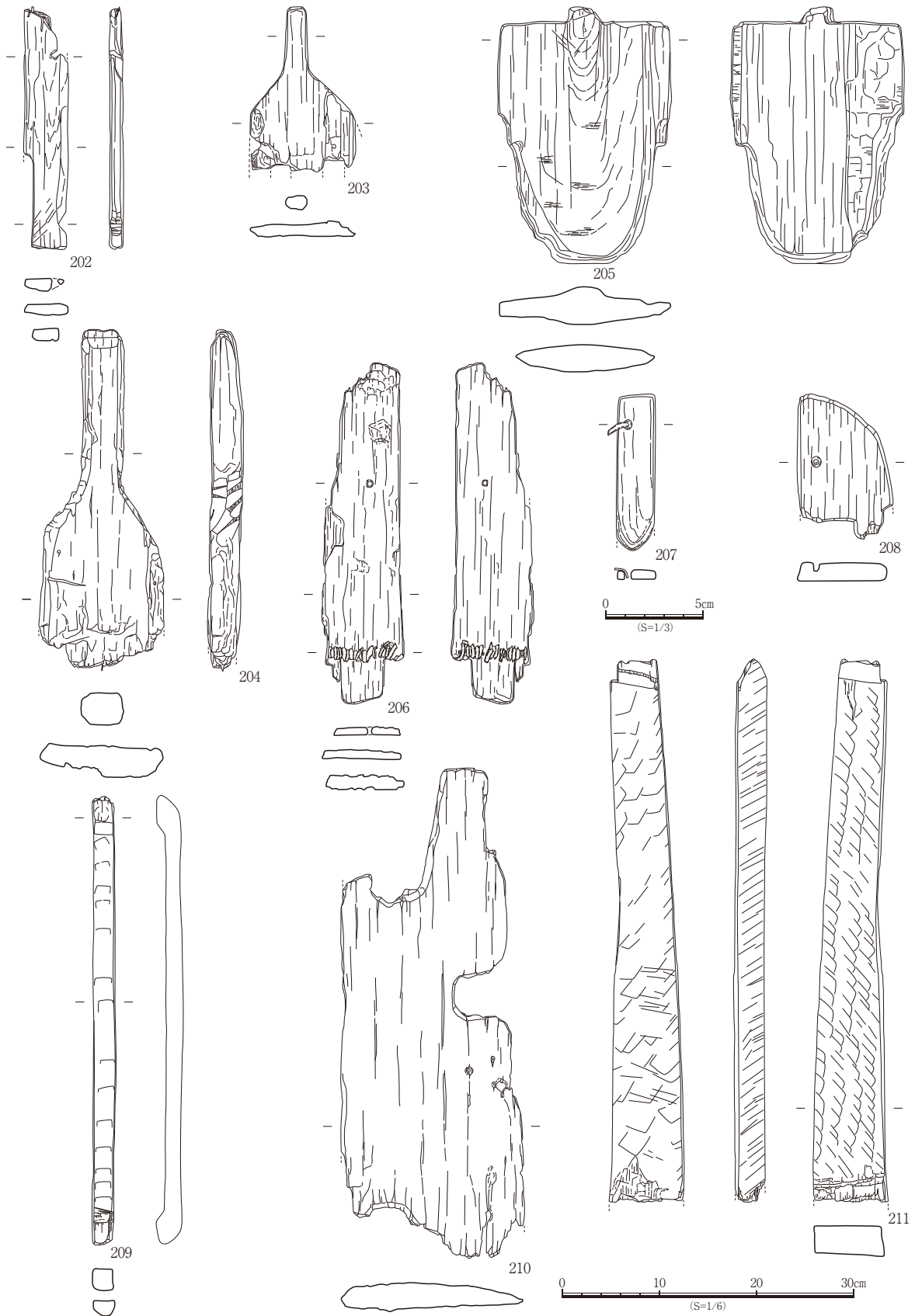


図2-26 第Ⅷ層出土遺物実測図10

ものとみられ、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

206は楯と考えられるもので、一部が残存する。板目取りで作られ、部材を繋ぐ横木と固定用の樹皮が残る。樹種はスギである。

207～211は用途不明のものである。207は板目取りで作られ、片側の端部は焼け、炭化する。全体的に丁寧な加工を施し、円形を呈する孔を1つ穿ち、樹皮が残る。樹種はヒノキである。208は柵目取りで作られ、大部分を欠損する。表面は木瘦せし、木目が目立ち、樹種はスギである。209は板目取りで作られる。上部の大部分を大きく削り、加工痕が明瞭に残る。樹種はスギである。210は柵目取りで作られ、大部分を欠損し、一部が炭化する。表面は木瘦せし、木目が目立ち、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。211は柵目取りで作られ、片側の端部は杭状に仕上げ、もう片側は欠損する。表面には明瞭な加工痕が残り、樹種はスギである。

(2) II区

調査対象区域の中央部に位置する東西約58m、南北約47mの調査区で、面積は3,600㎡を計り、本調査区で確認された遺構は弥生時代と古代、中世である。弥生時代と古代の遺構は丘陵裾部を中心に確認されており、後世の地形改変により削平を受けたとみられる。

① 層序

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 小・中礫混じりの褐色(10YR4/4)砂質シルト層
- 第Ⅱ層 小・中礫混じりの橙色(7.5YR8/6)砂質シルト層
- 第Ⅲ層 灰白色(10YR8/1)シルト質砂のブロックを含み、小礫混じりの灰黄色(10YR5/2)シルト質砂層
- 第Ⅳ層 小・中礫混じりの浅黄橙色(7.5YR8/6)砂質シルト層
- 第Ⅴ層 小・中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質砂層
- 第Ⅵ層 小礫が少し混じる橙色(7.5YR6/6)シルト質砂層
- 第Ⅶ層 小礫が少し混じる明赤橙色(5YR5/6)砂質シルト層
- 第Ⅷ層 小礫混じりの灰色(5Y5/1)シルト質砂層
- 第Ⅸ層 小・中礫混じりの黒褐色(7.5YR2/2)粘土質シルト層

② 堆積層出土遺物

第Ⅰ層出土遺物

須恵器(図2-28 212)

212は壺と考えられる底部破片で、内外面にナデを施す。底部外面にヘラ状原体による「×」印をいれ、胎土には小礫を少し含む。

土師質土器(図2-28 213)

213は小皿で、摩耗のため調整は不明瞭であるが、底部外面には回転糸切り痕が残る。胎土には細粒～中粒砂を含む。

青磁(図2-28 214)

214は碗の口辺部破片で、内面に草花文を施し、胎土は精良である。

石製品(図2-28 215・216)

215は叩石で、完存する。両面と側面4ヵ所に敲打痕がみとめられ、石材は砂岩である。

216は有溝砥石で、1条の溝が認められる。溝周辺には弱い敲打痕が存在し、石材は砂岩である。

2. 調査区の概要 (2) II区

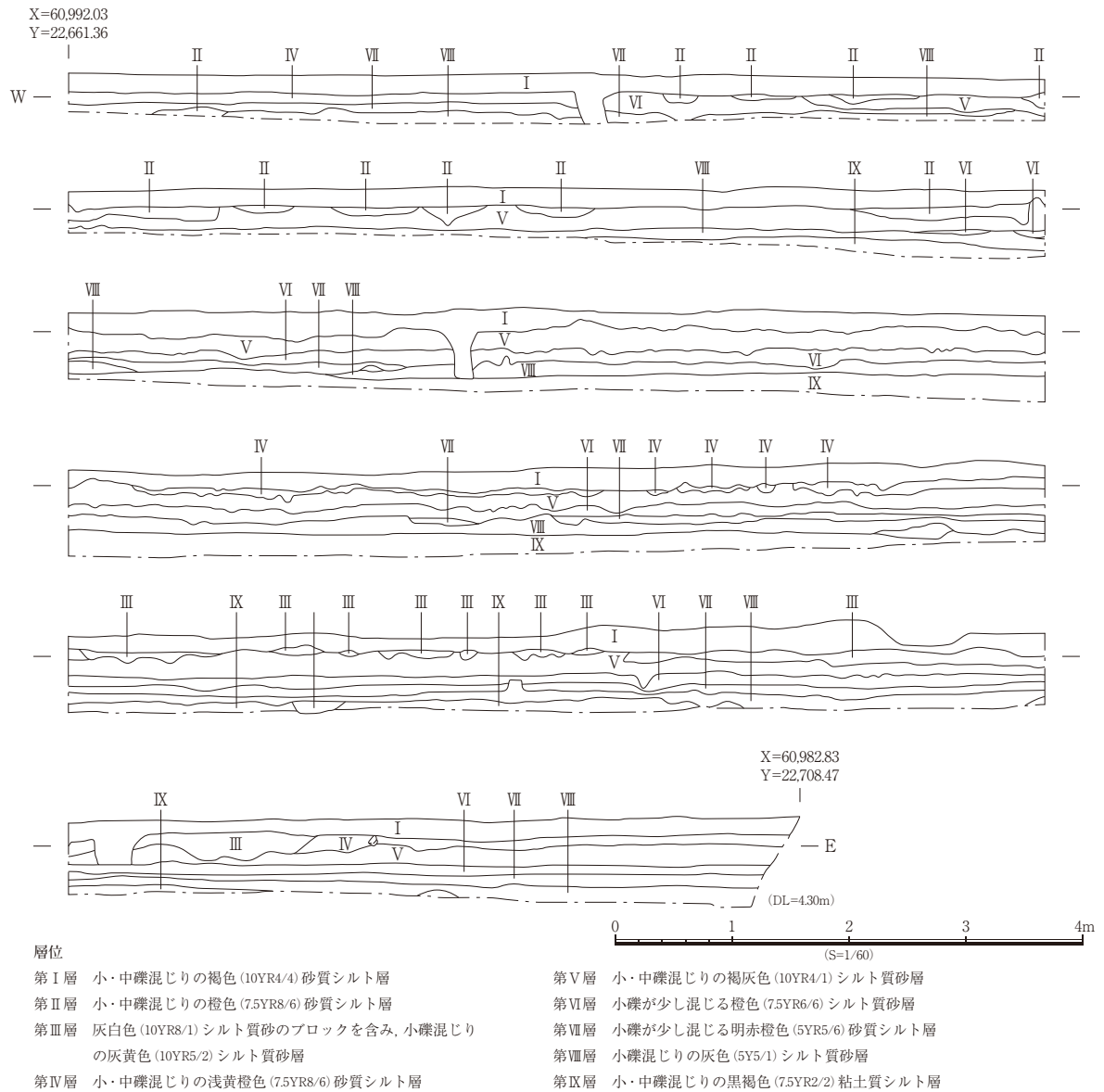


図2-27 II区中央バンク南壁セクション図

土製品(図2-28 217・218)

217・218は近現代の土錘と考えられるものである。ともに完存し、胎土には細粒砂を含む。

第V層出土遺物

青磁(図2-28 219)

219は青磁の口辺部破片で、口縁部内面には雷文を配する。胎土は精良である。

土製品(図2-28 220)

220は土錘で、一部を欠損し、胎土には中粒砂を含む。

第VII層出土遺物

須恵器(図2-29 221)

221は壺の口辺部から頸部にかけての破片で、口辺部下端には把手の一部とみられるものが存在する。この把手状のものにはヘラ削りを施し、器面には回転ナデ調整が認められる。胎土は精良である。

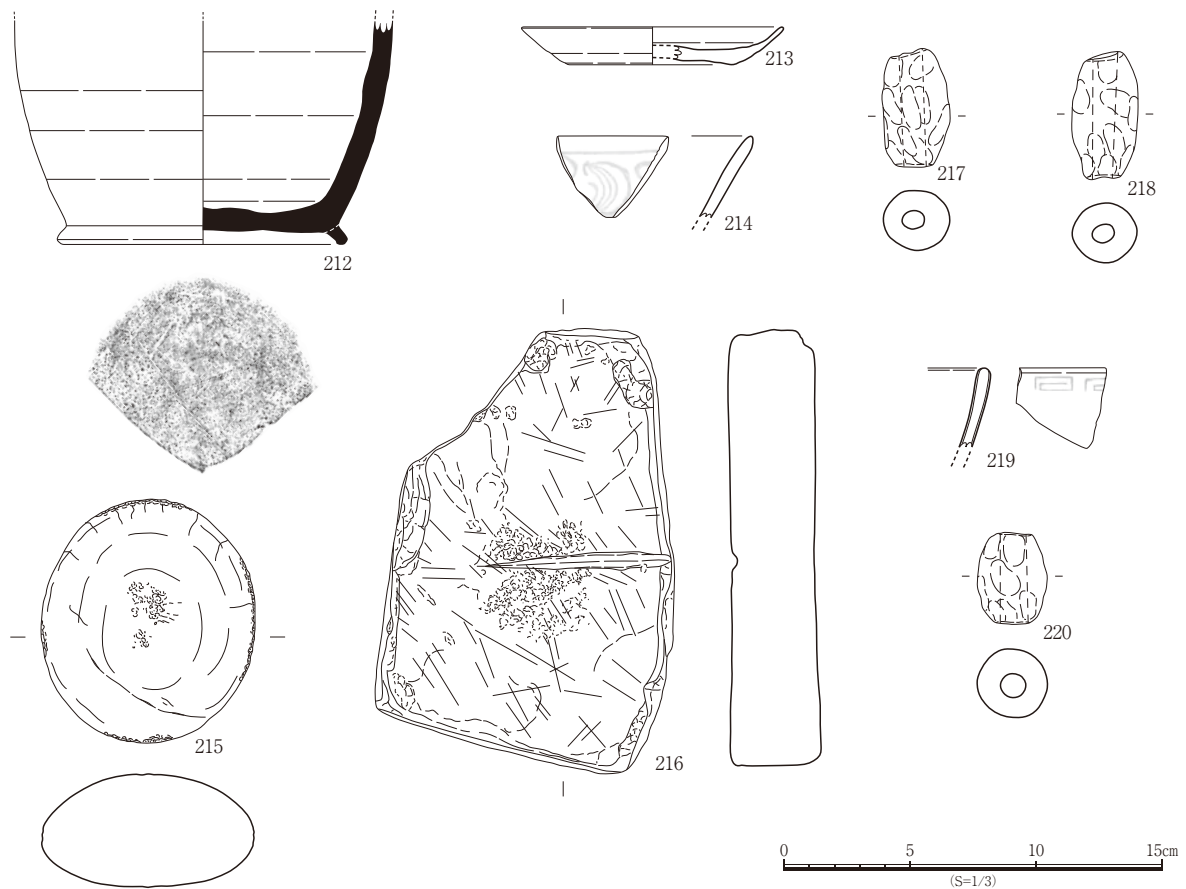


図2-28 第Ⅰ・Ⅴ層出土遺物実測図

土師質土器(図2-29 222)

222は碗の底部破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には細粒砂を含む。

瓦質土器(図2-29 223・224)

223・224は鍋である。223は口辺部破片で、摩耗のため調整は不明である。胎土には細粒～中粒砂を含む。224は口辺部から胴部にかけての破片で、全体的に歪む。口縁部内外面にヨコナデ、胴部内面と胴下部外面にナデを施し、胴上部外面には指頭圧痕が認められる。胎土には細粒砂を含む。

青磁(図2-29 225)

225は碗の口辺部破片で、外面に蓮弁文を施し、胎土は精良である。

石製品(図2-29 226)

226は石鏃である。完存し、石材はサヌカイトと考えられる。

土製品(図2-29 227～234)

227～234は土錘である。227は一部を欠損し、胎土には中粒砂を含む。228は片側を欠損し、摩耗が著しい。胎土には細粒～中粒砂を含む。229はほぼ完存し、胎土には中粒砂を含む。230は片側を欠損し、中粒砂を多く含む。231は片側の一部を欠損し、全体的に摩耗が著しい。胎土には細粒砂を含む。232は片側約1/2を欠損する。焼成が非常に良く、瓦質状を呈する。胎土には細粒～中粒砂を含む。233は片側を欠損し、表面1ヵ所に「×」印が認められる。胎土には細粒砂を含む。234は完存し、表面に「×」印が認められる。胎土には中粒砂を含む。

2. 調査区の概要 (2) II区

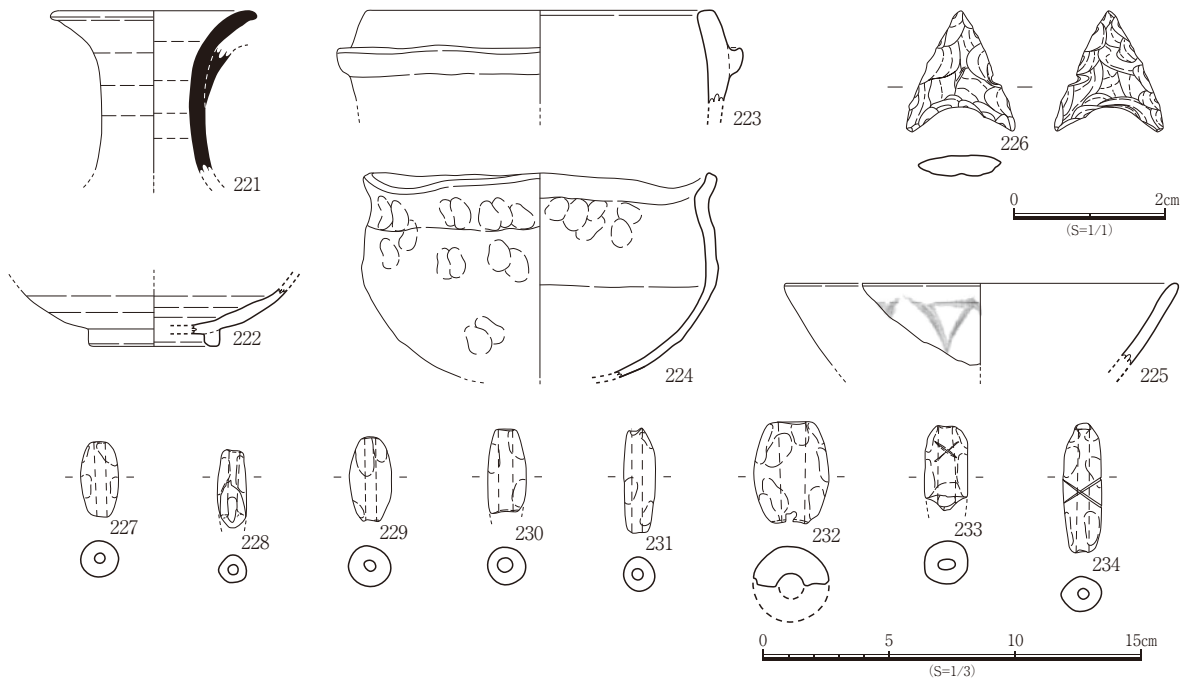


図2-29 第七層出土遺物実測図

第八層出土遺物

須恵器(図2-30 235~243)

235は杯蓋の天井部破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、天井部内面にナデ、口辺部内面に回転ナデ、口辺部外面に回転ヘラ削りを施す。天井部外面には高台とみられる粘土塊が付着しており、胎土には細粒砂を含む。

236・237は杯である。236は全体の形状が復元できたもので、内外面に回転ナデを施し、胎土には細粒砂～小礫を少し含む。237は底部破片で、器面には回転ナデを施す。底部内面にはヘラ描きの沈線が認められ、胎土には細粒砂を含む。

238は皿である。器面には回転ナデを施し、底部切り離し痕はナデ消す。内面には火襻痕が認められ、胎土は精良である。

239～242は壺と考えられるものである。239は頸部から肩部にかけての破片で、器面には回転ナデを施し、胎土には細粒砂を含む。240～242は底部破片である。240は器面には回転ナデを施し、底部切り離しは回転ヘラ切りと考えられる。内面には無数の破裂痕が認められ、胎土には細粒砂を含む。241は摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部外面に回転ヘラ削り、底部内外面に回転ナデを施し、胎土には中粒砂を多く含む。242は胴部内面に回転ナデ、底部内面にナデ、胴部外面に回転ヘラ削り、底部外面に回転ナデを施し、胎土には細粒砂を含む。

243は口辺部破片で、器面には回転ナデを施す。外面にはヘラ描き波状文が認められ、胎土には細粒砂を含む。

灰釉陶器(図2-30 244)

244は水注と考えられる胴部破片で、注口は欠損する。器面には回転ナデを施し、肩部から胴上部には釉がかかる。胎土は精良である。

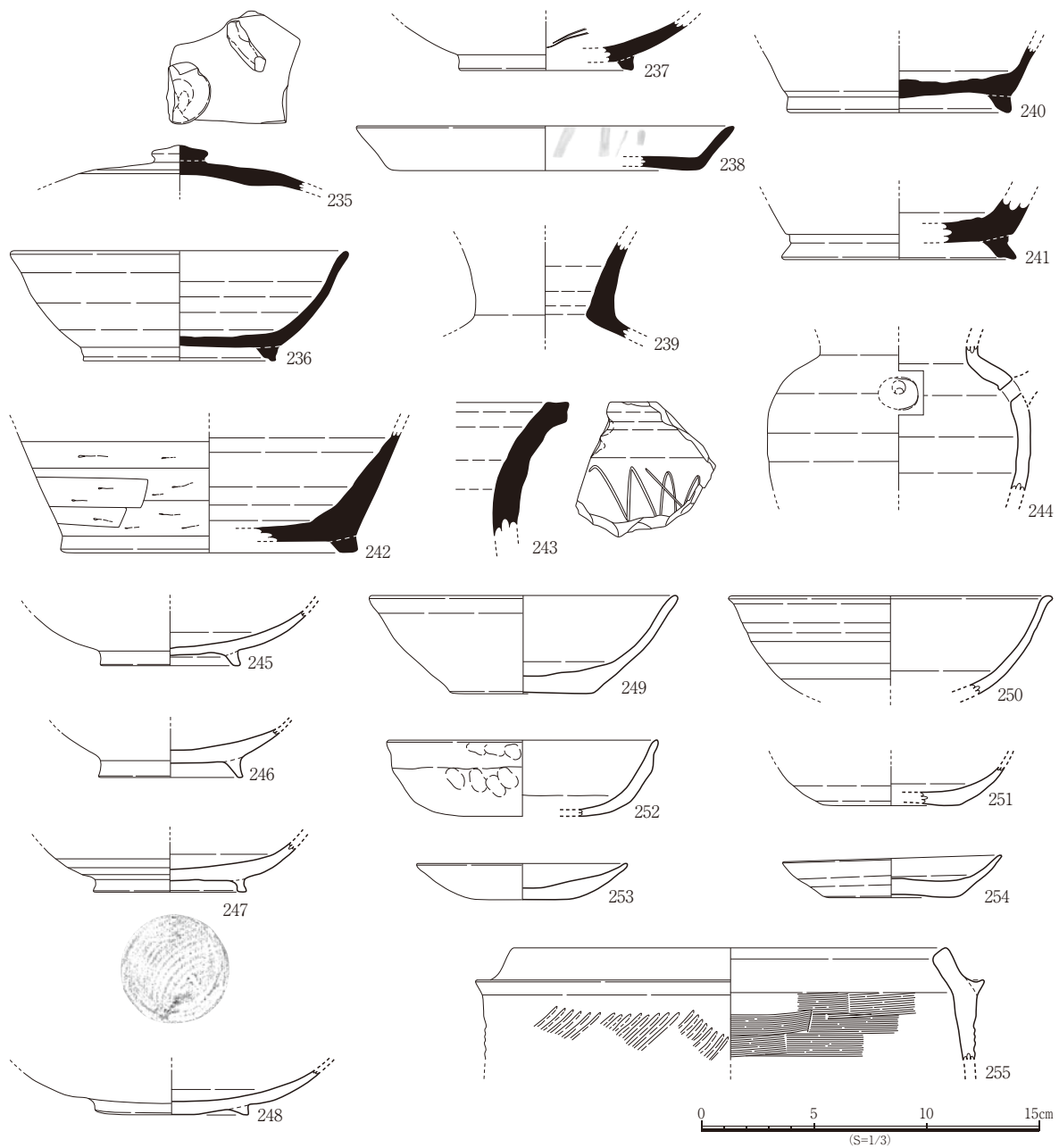


図2-30 第Ⅷ層出土遺物実測図1

土師質土器(図2-30 245~255)

245~248は椀と考えられる底部破片である。245は摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂~小礫を少し含む。246も摩耗のため調整は不明で、胎土には細粒砂を含む。247は摩耗のため調整は不明瞭であるが、体部外面下端に回転ヘラ削り調整が認められる。底部切り離しは回転糸切りとみられ、胎土には中粒砂を少し含む。248は摩耗のため調整は不明で、胎土には細粒~中粒砂を少し含む。

249~252は杯である。249は全体の形状が復元できたもので、摩耗のため調整は不明で、胎土は精良である。250は口辺部から体部にかけての破片で、内面と口辺部外面には回転ナデ、体下部には回転ヘラ削りを施し、胎土は精良である。251は底部破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には

2. 調査区の概要 (2) II区

細粒砂を含む。252は手づくね成形のもので、摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面には指頭圧痕が認められ、胎土には細粒砂を含む。

253・254は小皿である。ともに全体の形状が復元でき、摩耗のため調整は不明である。253は胎土に細粒砂を含み、254は精良である。

255は鍋の口辺部から胴部の破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にハケ調整、外面にタタキ目が認められ、胎土には細粒～中粒砂を多く含む。

瓦(図2-31 256・257)

256・257は平瓦で、一部のみ残存する。ともに凹面に布目圧痕、凸面に縄目状のタタキ目が認められ、257には側面にヘラ削り調整がみられる。胎土には中粒砂～小礫を含む。

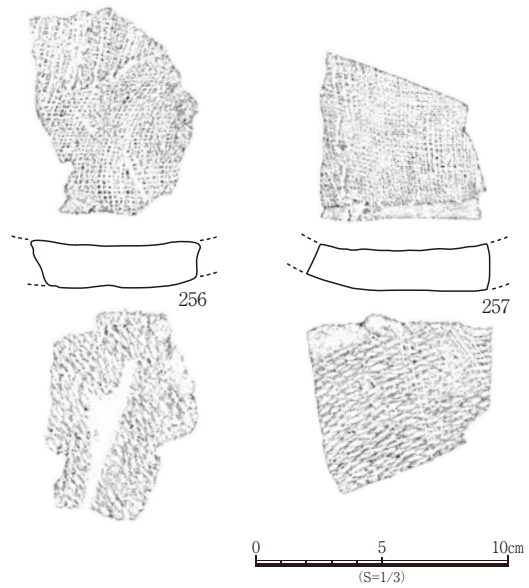


図2-31 第Ⅷ層出土遺物実測図2

石製品(図2-32・33 258～260)

258・259は石鏃である。ともに凹基式で、石材はサヌカイトである。

260は叩石で、側面の2カ所に敲打痕が認められる。石材は砂岩である。

土製品(図2-33 261～265)

261～265は土錘である。261は完存し、胎土には中粒砂を含む。262は片側の一部を欠損し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。263は一部を欠損し、胎土には細粒砂を含む。264は表面に破裂痕が認められ、胎土には細粒～中粒砂を含む。265は両端を欠損し、胎土には細粒砂から小礫を含む。

第Ⅸ層出土遺物

弥生土器(図2-34 266～270)

266～269は壺と考えられる口辺部から頸部にかけての破片である。266は口縁部内外面にはヨコナデ、頸部内外面にはナデを施し、口縁端部には刻目、頸部外面には沈線と3条の刻目突帯を配する。胎土には細粒砂～小礫を含む。267は摩耗のため調整は不明瞭であるが、口縁部外面にヨコナデ調整、頸部外面にハケ調整がみられ、頸部下端には1条の沈線が認められる。胎土には中粒砂～小礫を多く含む。268も摩耗のため調整は不明瞭であるが、口縁部外面にヨコナデ調整、頸部外面にハケ調整を施し、頸部下端には3条の沈線が認められる。胎土には中粒砂～小礫を多く含む。269も摩耗のため調整は不明瞭であるが、頸上部にヨコナデ調整、頸下部にヘラミガキ調整が認められ、頸中央部に1条の突帯を配する。胎土には中粒砂～小礫を多く含む。

270は甕の底部破片で、摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部下端にハケ調整が認められ、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。

土師器(図2-35 271～274)

271は甕の口辺部から胴部にかけての破片で、口辺部内外面にはヨコナデ、胴部内外面にはハケを施す。外面の一部には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。

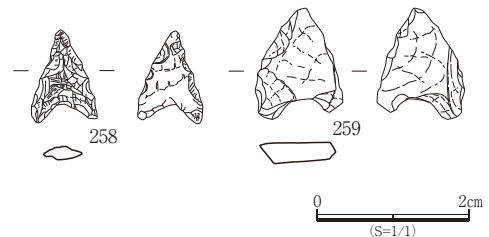


図2-32 第Ⅷ層出土遺物実測図3

272～274は羽釜の口辺部破片である。272は摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。273は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にヨコナデ調整が認められる。胎土には細粒砂～小礫を多く含む。274は摩耗のため調整は不明である。胴部外面の一部に煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。

須恵器(図2-36 275～281)

275～277は椀と考えられるもので、275・276は全体の形状が復元できた。275は摩耗のため調整は不明瞭であるが、口縁部外面に回転ナデ調整、体部外面下端に回転ヘラ削り調整が認められ、胎土は精良である。276は内面と口辺部外面に回転ナデ、体中央部から下部にかけて回転ヘラ削りを施す。内外面に火襻痕が認められ、胎土は精良である。277は底部破片で、内面にナデ、外面に回転ヘラ削りを施す。内外面に火襻痕が認められ、胎土は精良である。

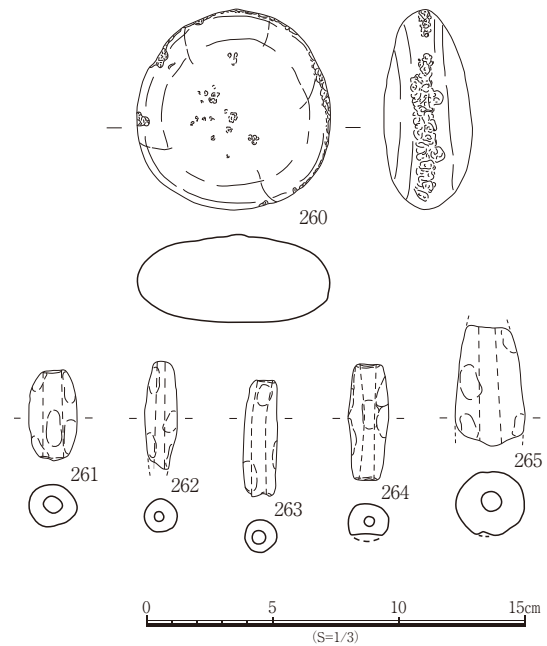


図2-33 第Ⅷ層出土遺物実測図4

278～280は杯と考えられるものである。278は体部から底部にかけての破片で、摩耗のため調整は不明瞭であるが、体部外面に回転ナデ調整が認められる。内面には自然釉がみられ、胎土には細粒砂を含む。279は全体の形状が復元できたもので、器面には回転ナデを施し、底部切り離しは回転糸切りである。内外面に火襻痕が認められ、胎土には細粒砂を少し含む。280は体部から底部にかけての破片で、器面には回転ナデを施し、底部切り離しは回転糸切りである。胎土には細粒砂を含む。

281は壺と考えられる底部破片で、内外面に回転ナデを施し、胎土には細粒砂～小礫を含む。

緑釉陶器(図2-36 282)

282は椀と考えられる底部破片で、器面には回転ナデを施す。底部外面は露胎で、胎土には極細粒

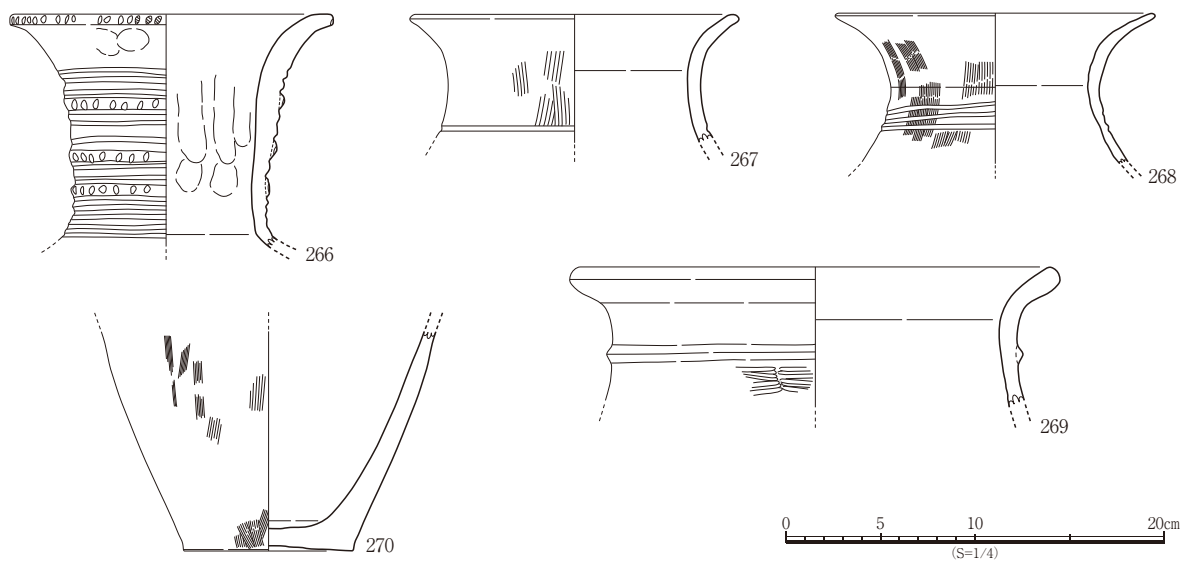


図2-34 第Ⅸ層出土遺物実測図1

2. 調査区の概要 (2) II区

～細粒砂を含む。

土師質土器

(図2-37 283~295)

283～289は椀で、283・284は全体の形状が復元できた。283は摩耗のため調整は不明で、胎土には極細粒～粗粒砂を含む。284は摩耗のため調整は不明瞭であるが、体部外面下端に回転ナデ調整が認められる。胎土は精良である。285～289は体部から底部にかけての破片で、摩耗のため調整は不明である。285は細粒～中粒砂、286は中粒～粗粒砂、287・288は少量の中粒砂～小礫を含む。289は体部内外面と底部外面に回転ナデ調整、底部内面にナデ調整、体部外面下端に回転ヘラ削り調整が認められ、丁寧な成形と調整を施し、胎土には小礫を少し含む。

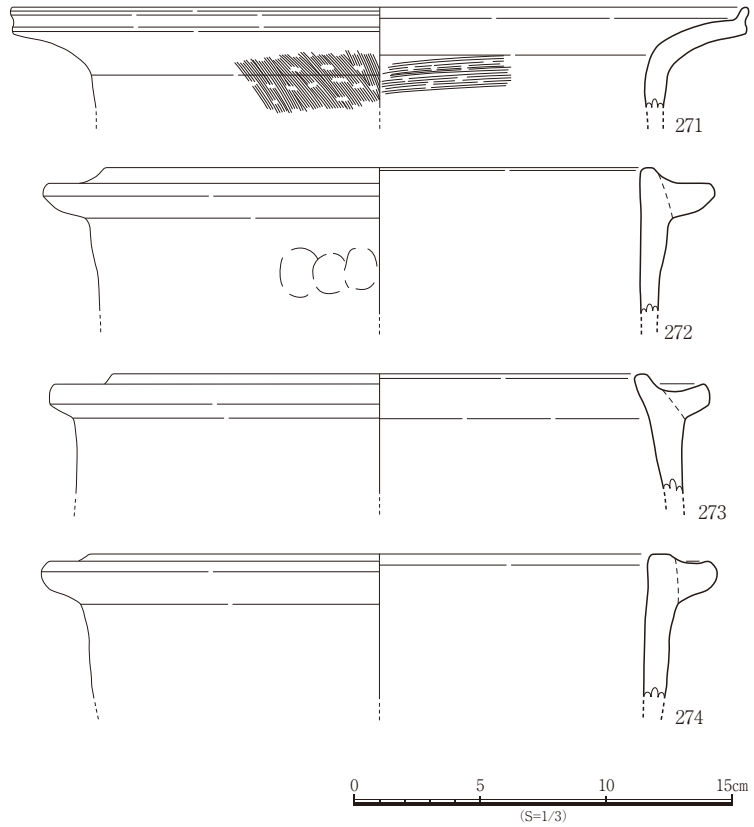


図2-35 第IX層出土遺物実測図2

290～292は杯である。290は全体の形状が復元できたもので、摩耗のため調整は不明である。胎土には細粒～中粒砂を含む。291・292は底部破片である。291は底部に穿孔するもので、摩耗のため調整は不明である。胎土には中粒砂～小礫を含む。292も摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂～

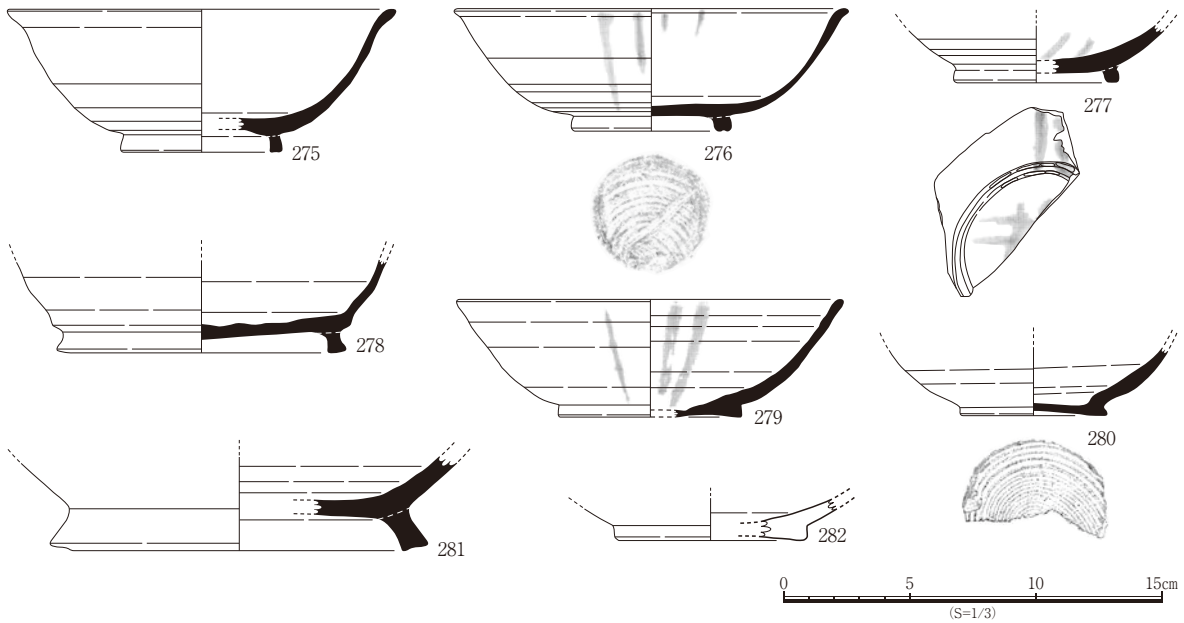


図2-36 第IX層出土遺物実測図3

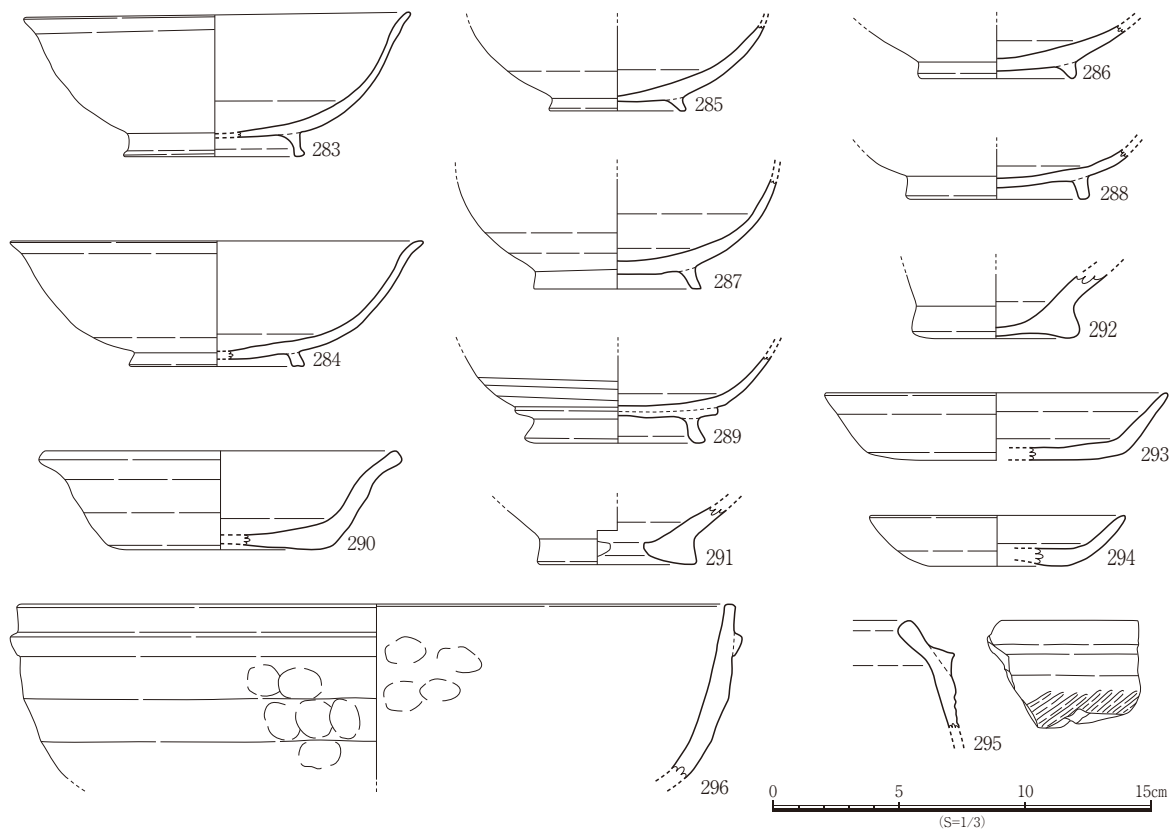


図2-37 第Ⅸ層出土遺物実測図4

小礫を少し含む。

293は皿で、全体の形状が復元できたものである。摩耗のため調整は不明瞭であるが、口縁部外面に回転ナデ調整が認められ、体部切り離しは回転ヘラ切りとみられる。胎土には中粒～粗粒砂を含む。

294は小皿の口辺部から底部にかけての破片で、摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒～粗粒砂を含む。

295は鍋の口辺部から胴部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部外面にはタタキ目が認められる。胎土には細粒～粗粒砂を多く含む。

瓦質土器(図2-37 296)

296は鍋の口辺部から胴部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂～小礫を含む。

瓦(図2-38 297・298)

297・298は平瓦である。297は大部分を欠損し、凹面の一部に布目圧痕が残る。胎土には細粒砂～小礫を含む。298も大部分を欠損し、凹面に布目圧痕、凸面に縄目状のタタキ目が認められ、胎土には細粒～粗粒砂を含む。

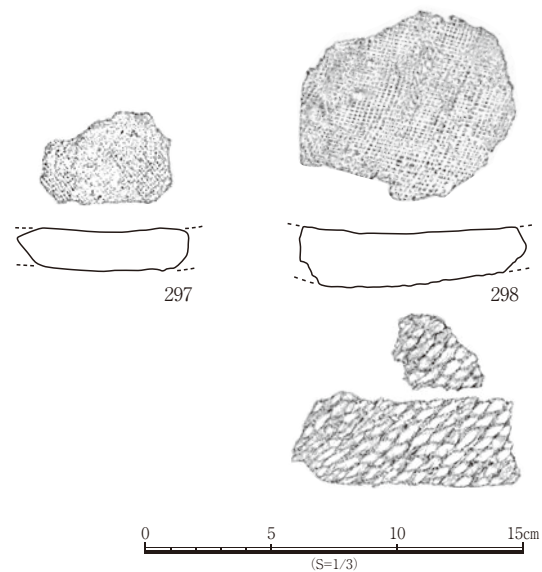


図2-38 第Ⅸ層出土遺物実測図5

2. 調査区の概要 (2) II区



図2-39 第Ⅸ層出土遺物実測図6

石製品(図2-39 299~309)

299は柱状片刃石斧と考えられるものである。大部分が剥離しており、一部のみ残存する。石材は結晶片岩とみられる。

300~304は石鏃である。300~302は平基式で、300・302は先端部を欠損する。石材はサヌカイトと考えられる。303・304は凹基式で、304は先端部と片側の基部を欠損する。石材はサヌカイトと考えられる。

305~308は叩石で、石材は砂岩である。305は側面端部の一部に敲打痕が認められる。306は側面

の両端部に敲打痕がみられ、片側には磨石としての使用痕も認められる。307は両面と側面全体に敲打痕がみられ、側面の一部には磨石としての使用痕も認められる。308は両面に敲打痕が認められる。

309はサヌカイトの剥片である。

土製品(図2-39 310・311)

310・311は土錘である。310はほぼ完存するもので、表面は摩耗のため調整は不明である。胎土には細粒～粗粒砂を含む。311は大部分を欠損し、胎土には細粒～中粒砂を含む。

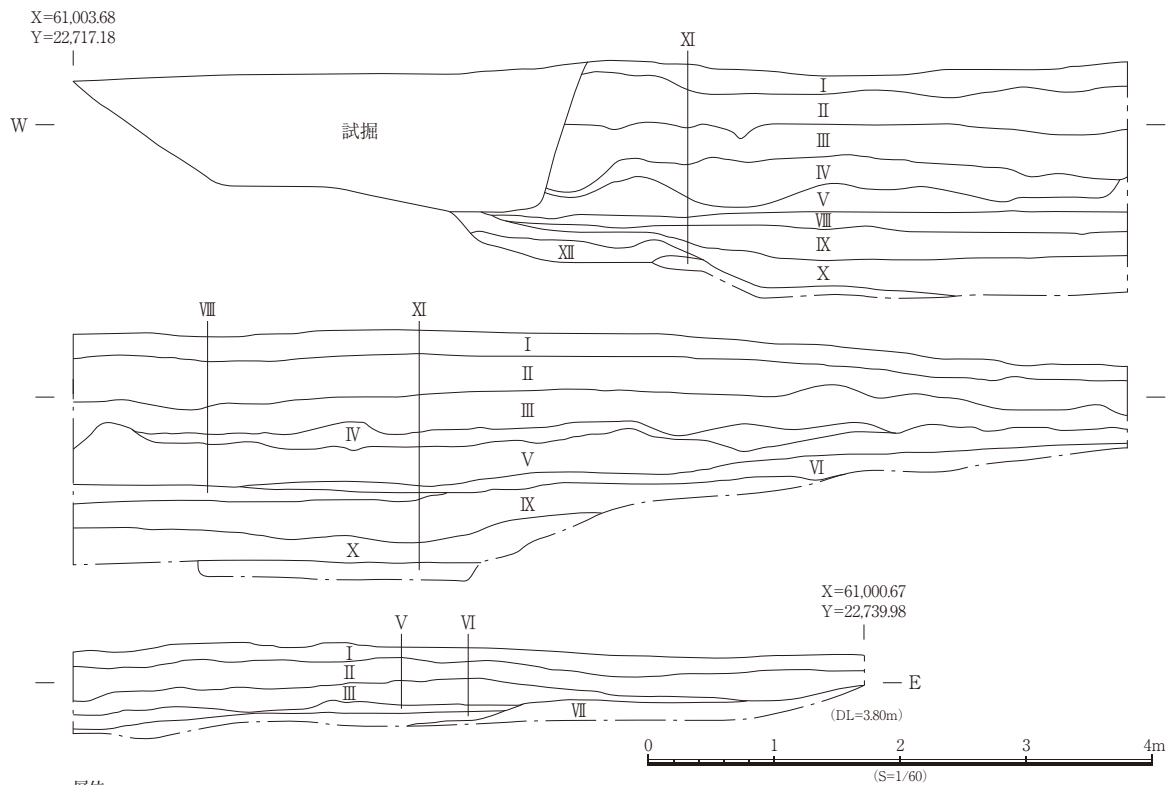
(3) III区

調査対象区域の東側に位置する東西約48m、南北約46mの調査区で面積は約1,030㎡で、斜面堆積層からは流れ込みと考えられる遺物が出土している。

① 層序

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

第I層 小礫混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト層(耕作土)



- 層位
- 第I層 小礫混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト層(耕作土)
 - 第II層 小～中礫混じりの黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルトをブロック状に含む小～大礫混じりの褐色(10YR4/1)中粒～粗粒砂質シルト層
 - 第III層 小～大礫混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルト層
 - 第IV層 小礫混じりの褐灰色(10YR5/1)細粒～粗粒砂質層
 - 第V層 小礫混じりの黒色(10YR2/1)シルト質粘土層
 - 第VI層 粗粒砂をブロック状に含む小礫混じりの黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土層
 - 第VII層 小礫混じりの暗灰色(N3/)シルト質粘土層
 - 第VIII層 中粒～粗粒砂をブロック状に含む黒色(N2/)シルト質粘土層
 - 第IX層 有機物を含む暗灰色(N3/)シルト質粘土層
 - 第X層 褐灰色(10YR5/1)シルト質粘土層
 - 第XI層 黒褐色(10YR3/1)細粒～粗粒砂層
 - 第XII層 有機物が多く混じる黒褐色(10YR3/1)シルト層

図2-40 III区北壁セクション図

2. 調査区の概要 (3) III区

- 第II層 小～中礫混じりの黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルトをブロック状に含む小～大礫混じりの褐色(10YR4/1)中粒～粗粒砂質シルト層
- 第III層 小～大礫混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルト層
- 第IV層 小礫混じりの褐灰色(10YR5/1)細粒～粗粒砂質層
- 第V層 小礫混じりの黒色(10YR2/1)シルト質粘土層
- 第VI層 粗粒砂をブロック状に含む小礫混じりの黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土層
- 第VII層 小礫混じりの暗灰色(N3/)シルト質粘土層
- 第VIII層 中粒～粗粒砂をブロック状に含む黒色(N2/)シルト質粘土層
- 第IX層 有機物を含む暗灰色(N3/)シルト質粘土層
- 第X層 褐灰色(10YR5/1)シルト質粘土層
- 第XI層 黒褐色(10YR3/1)細粒～粗粒砂層
- 第XII層 有機物が多く混じる黒褐色(10YR3/1)シルト層

② 堆積層出土遺物

第III層出土遺物

弥生土器(図2-42 312～316)

312・313は甕である。312は口辺部から胴上半部にかけて残存し、口辺部内外面にヨコナデ、胴部内面にハケ、胴部外面にタタキを施す。胴部外面には煤が付着し、胎土には粗粒砂～小礫を含む。313は底部破片で、全体的に摩耗が著しく、胎土には細粒砂～小礫を含む。

314は鉢である。全体の約2/3が残存する。全体的に摩耗が著しく、胎土には粗粒砂～小礫を含む。

315は高杯で、杯部の約1/4が残存する。口辺部内外面と杯部内面上半にはヨコナデ、杯部下半にはナデ、杯部外面にはハケを施し、胎土には粗粒砂～小礫を含む。

316は支脚である。脚部を欠損し、指部も片側のみ残存する。全面に指頭圧痕が残存し、胎土には中粒砂～小礫を含む。

須恵器

(図2-42 317～319)

317は杯で、高台端部は凹線状を呈する。口辺部と体部内外面に回転ナデ、底部内面にナデを施し、底部切り離しは回転ヘラ切りで、切り離し後のナデ調整がみられる。内

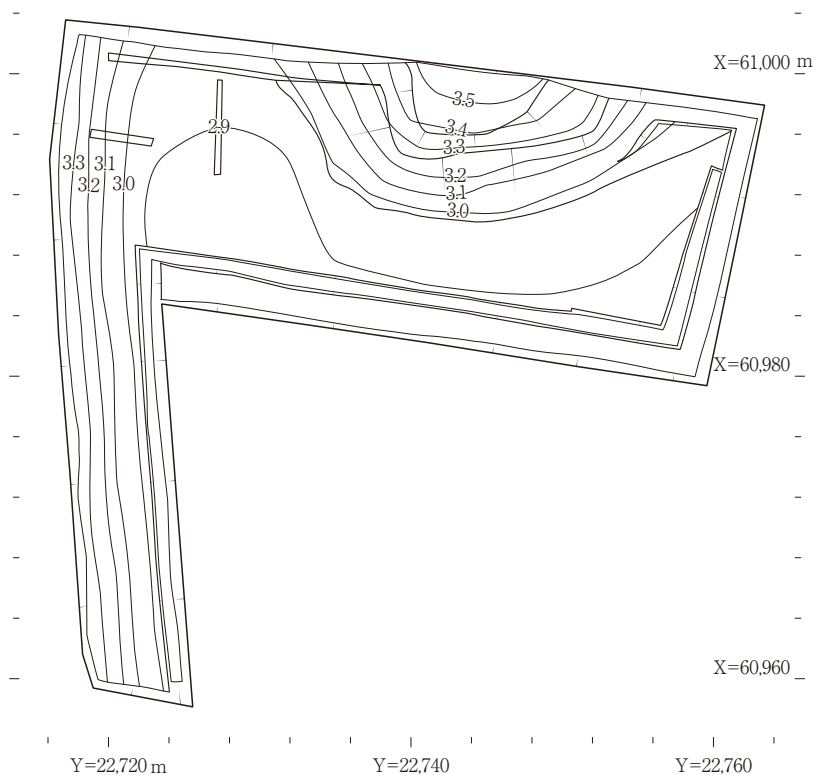


図2-41 III区全体図(S=1/500)

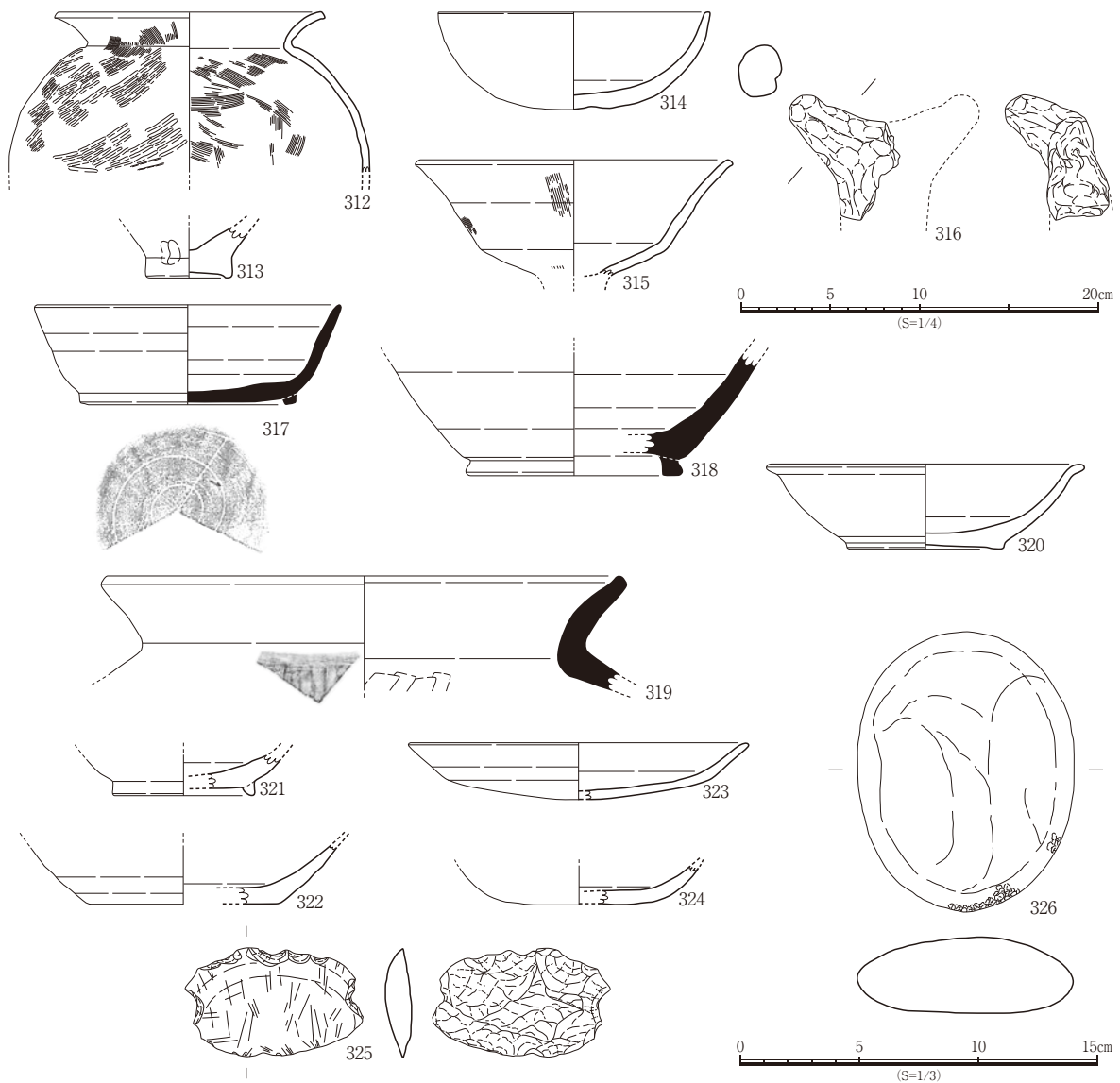


図2-42 第Ⅲ層出土遺物実測図

外面に若干火襻痕が残り、胎土は精良である。

318は壺と考えられる底部破片で、胴部内面に回転ナデ、底部内面にナデを施す。胴部外面には格子状のタタキ目とナデ調整が認められ、胎土には細粒砂を含む。

319は甕の口辺部破片で、口辺部内外面に回転ナデ、胴部内面にナデとヘラ削りを施す。胴部外面には格子状のタタキ目が認められ、胎土には細粒砂を含む。

緑釉陶器(図2-42 320)

320は椀である。軟質系で部分的に緑釉が残存し、摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、口辺部内外面に回転ナデ調整が残り、胎土には中粒～粗粒砂を含む。

土師質土器(図2-41 321～324)

321は椀の底部破片である。摩耗が著しく調整は不明で、胎土は精良である。

322は杯の底部破片である。摩耗が著しく調整は不明で、胎土には細粒砂を含む。

323は皿で、摩耗が著しく調整は不明である。底部切り離しは回転ヘラ切りと考えられ、胎土には

2. 調査区の概要 (3) III区

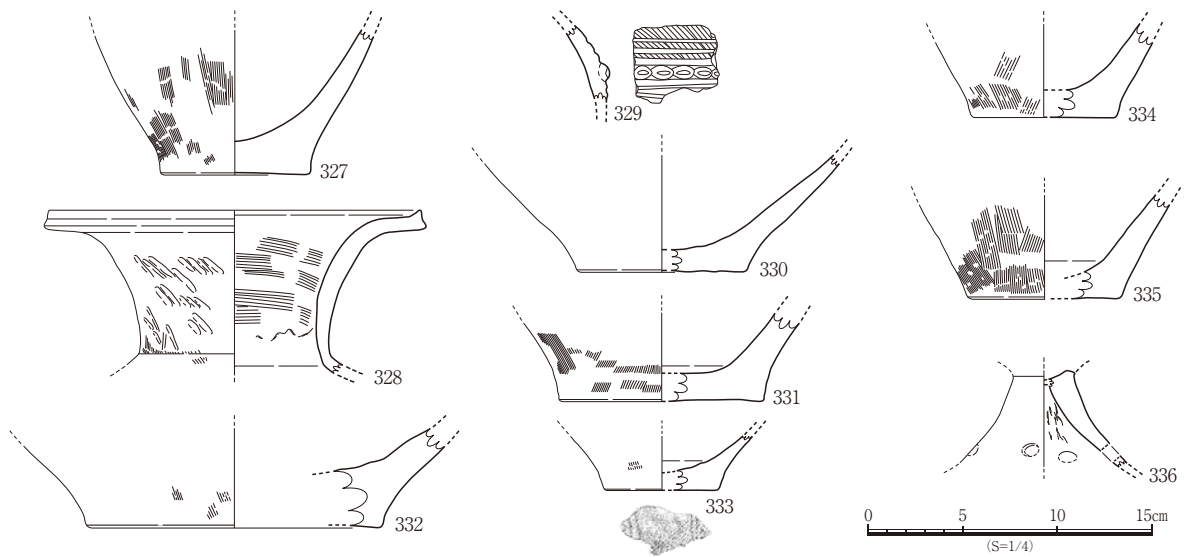


図2-43 第IV・V層出土遺物実測図

粗粒砂を含む。

324は小皿と考えられる底部破片である。体部内面に回転ナデ調整、底部内面にナデ調整が残り、内面には煤が付着する。胎土には細粒～中粒砂を含む。

石製品(図2-41 325・326)

325は石庖丁と考えられるもので、ほぼ完存する。両端部に抉りを入れており、石材は砂岩である。

326は叩石で、片側の端部のみ敲打痕が認められる。石材は砂岩である。

第IV層出土遺物

弥生土器(図2-43 327)

327は甕の底部破片と考えられるものがある。全体的に摩耗が著しいが、外面にハケ調整が認められ、胎土には細粒砂～小礫を含む。

第V層出土遺物

弥生土器(図2-43 328～336)

328～332は壺と考えられるものである。328は口辺部から頸部にかけて残存し、口辺部内外面にヨコナデ、頸部内面にハケ、頸部外面にタタキのちヨコナデを施す。頸部下半には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。329は胴部破片で、外面にはハケ調整が認められる。外面には沈線と刺突した円形浮文を施し、胎土には細粒砂～小礫を含む。330～332は底部破片である。330は摩耗が著しく調整は不明で、胎土には細粒砂～小礫を含む。331は内面にナデ、外面にハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。332は摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面下端にハケ調整が残る。胎土には細粒砂～小礫を含む。

333～335は甕と考えられる底部破片である。333は摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にハケ調整とヨコナデ調整が認められ、胎土には中粒砂～小礫を含む。334・335は摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にハケ調整が残り、胎土には中粒砂～小礫を含む。

336は高杯で、脚部破片である。裾部を欠損し、径0.8cmの円孔を穿つ。外面にヨコナデ調整とナデ調整が認められ、胎土には粗粒砂～小礫を含む。

第三章 遺構と遺物

1. I 区

確認された遺構の時期は弥生時代・中世と考えられ、土坑、溝跡、柱穴が丘陵裾部を中心に検出されている。

(1) 上面検出遺構

土坑・溝跡・柱穴が丘陵裾部を中心に検出されているが、遺構密度は低い。

① 土坑

SK-1

調査区北東部で検出した楕円形を呈する土坑で、長径0.92m、短径0.75m、深さ8～9cmを測り、長軸方向はN-68°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は黄褐色(2.5Y5/3)シルトのブロックが少し混じる暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-2

調査区南東部で検出した隅丸長方形を呈する土坑で、長辺1.22m、短辺0.34m、深さ7cmを測り、長軸方向はN-35°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は灰色(10Y4/1)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-3

調査区南東部で検出した不整形円形を呈する土坑で、長径0.92m、短径0.84m、深さ7～23cmを測り、長軸方向はN-32°-Eを示す。断面は不整形の舟底状を呈し、埋土は1層が暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルト質粘土、2層が暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土質シルト、3層が灰色(10Y4/1)粘土、4層が暗緑灰色(5G3/1)シルト質粘土であった。出土遺物には土師質土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-4

調査区南東部で検出した隅丸方形を呈する土坑である。残存する一辺は0.82m、深さ6～17cmを測り、長軸方向は不明である。断面は箱状を呈し、埋土は1層が中礫が少し混じるオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質砂、2層が灰色(5Y4/1)粘土質シルトと暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルト質砂のブロックが少し混じる暗緑灰色(5G3/1)シルト質粘土、3層が炭化物を少し含む黒色(N2/)粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが、図示できるものではなかった。

SK-5(図3-1)

調査区北部で検出した不整形隅丸方形を呈する土坑で、長辺1.34m、短辺1.10m、深さ6～14cmを測り、長軸方向はN-74°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は灰オリーブ色(5Y4/2)砂であった。出土遺物には須恵器1点、土師質土器13点、瓦器2点がみられ、土師質土器1点(337)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-2 337)

337は小皿で、大部分を欠損する。摩耗のため調整は不明で、胎土は精良である。

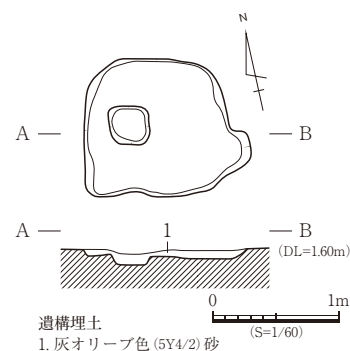


図3-1 SK-5

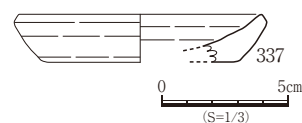


図3-2 SK-5出土遺物実測図

1. I区 (1) 上面検出遺構

SK-6

調査区西部で検出した不整長方形を呈する土坑で、長辺2.54m、短辺1.02m、深さ6～13cmを測り、長軸方向はN-17°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は灰色(7.5Y4/1)砂のブロックが少し混じる灰色(10Y4/1)粘土であった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが、図示できるものではなかった。

② 溝跡

SD-1

調査区北東部で検出した逆「L」字状を呈する溝跡で、北側は調査区外へ続く。幅0.18～0.37m、深さ3～13cmを測り、基底面は北(2.173m)から南(2.165m)に傾斜し、8.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は褐色(7.5YR4/3)シルトのブロックが少し混じる暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトで、出土遺物には弥生土器1点、土師質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-2

調査区東部で検出した南北溝跡で、幅0.27～2.41m、深さ3～11cmを測り、基底面は南(2.195m)から北(2.045m)に傾斜し、31.60mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は灰色(5Y4/1)粘土質シルトで、出土遺物には須恵器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-3

調査区東部で検出した東西溝跡で、幅0.12～0.41m、深さ2～10cmを測り、基底面は東(2.215m)から西(2.176m)に傾斜し、3.90mを検出した。断面は不整舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)シルトのブロックが少し混じる灰色(7.5Y4/1)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-4

調査区東部で検出した東西溝跡で、幅0.17～0.33m、深さ4～9cmを測り、基底面は東(2.165m)から西(2.160m)に傾斜し、4.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰色(7.5Y4/1)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-5

調査区東部で検出した南北溝跡である。幅0.14～0.49m、深さ2～10cmを測り、基底面は南(2.099m)から北(2.093m)に傾斜し、4.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰色(7.5Y4/1)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-6

調査区東部で検出した溝跡である。幅0.22～0.41m、深さ5～14cmを測り、基底面は南東(2.027m)から北西(2.000m)に傾斜し、3.70mを検出した。断面は不整舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトのブロックが少し混じるオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-7

調査区東部で検出した溝跡である。幅0.15～0.42m、深さ3～4cmを測り、基底面は南東(2.054m)から北西(2.037m)に傾斜し、1.10mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトのブロックが少し混じるオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-8

調査区東部で検出した逆「L」字状を呈する溝跡で、幅0.19～0.42m、深さ4～8cmを測り、基底面は北(2.197m)から南(2.120m)に傾斜し、11.00mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は暗緑灰色

(5G4/1)シルトのブロックが少し混じる灰色(10Y4/1)粘土質シルトで、出土遺物には土師器1点がみられたが、図示できるものではなかった。

SD-9

調査区東部で検出した東西溝跡である。幅0.19～0.24m、深さ1～6cmを測り、基底面は西(2.191m)から東(2.173m)に傾斜し、1.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰色(7.5Y4/1)粘土質シルトで、出土遺物には青磁1点がみられたが、図示できるものではなかった。

SD-10

調査区東部で検出した東西溝跡で、幅0.13～0.33m、深さ2～8cmを測り、基底面は西(2.153m)から東(2.146m)に傾斜し、9.70mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰色(10Y4/1)粘土質シルトで、出土遺物には土師質土器1点がみられたが、図示できるものではなかった。

SD-11

調査区東部で検出した東西溝跡である。幅0.17～0.19m、深さ4～5cmを測り、基底面は西(2.152m)から東(2.141m)に傾斜し、2.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰色(10Y4/1)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-12

調査区東部で検出した溝跡で、幅0.23～0.61m、深さ4～19cmを測り、基底面は北西(2.008m)から南東(1.992m)に傾斜し、16.20mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトのブロックが少し混じるオリブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-13

調査区東部で検出した南北溝跡で、幅0.28～0.43m、深さ6～9cmを測り、基底面は北(2.070m)から南(1.952m)に傾斜し、2.90mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は緑灰色(7.5GY5/1)粘土質シルトのブロックが少し混じる暗オリブ灰色(5GY4/1)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-14

調査区東部で検出した東西溝跡で、幅0.32～0.69m、深さ3～11cmを測り、基底面は東(2.140m)から西(1.982m)に傾斜し、15.70mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は緑灰色(7.5GY5/1)粘土質シルトのブロックが少し混じる暗オリブ灰色(5GY4/1)粘土質シルトで、出土遺物には土師質土器1点がみられたが、図示できるものではなかった。

SD-15

調査区東部で検出した溝跡である。幅0.27～0.34m、深さ4～7cmを測り、基底面は北東(2.084m)から南西(1.935m)に傾斜し、3.70mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土はオリブ黒色(10Y3/1)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-16

調査区南東部で検出した溝跡で、幅0.29～0.46m、深さ3～6cmを測り、基底面は北西(1.804m)から南東(1.801m)に傾斜し、2.50mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰色(7.5Y4/1)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-17(図3-3)

調査区南東部で検出した南北溝跡で、幅0.15～0.29m、深さ4～10cmを測り、基底面は北(1.706m)から南(1.550m)に傾斜し、2.00mを検出した。断面は逆台形

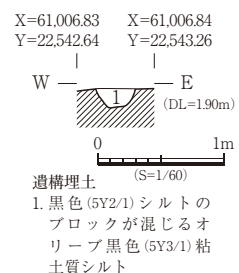


図3-3 SD-17

1. I区 (1) 上面検出遺構

状を呈し、埋土は黒色(5Y2/1)シルトのブロックが混じるオリブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器3点、土師質土器1点がみられ、弥生土器1点(338)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-4 338)

338は壺の口辺部から頸部にかけての破片である。口辺部内外面にヨコナデ、頸部内面にナデ、頸部外面にハケを施し、頸部外面には3条の突帯を配し、上下の突帯には刻目が認められる。また、突帯下部には3条の沈線を施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。

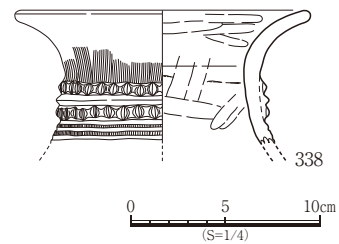
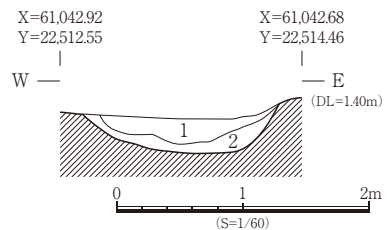


図3-4 SD-17出土遺物実測図

SD-18

調査区南東部で検出した逆「L」字状を呈する溝跡で、幅0.23～0.56m、深さ3～20cmを測り、基底面は北(1.776m)から西(1.503m)に傾斜し、23.60mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が灰色(10Y4/1)粘土質シルト、2層が灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト、3層がオリブ黒色(10Y3/1)粘土質シルトで、出土遺物には土師質土器1点がみられたが、図示できるものではなかった。



遺構埋土
1. 木片と炭化物を含む暗緑灰色(7.5GY4/1)シルトのブロックが混じる暗オリブ灰色(5GY3/1)粘土質シルト
2. 貝片と炭化物を含む暗オリブ灰色(6GY3/1)粘土質シルトのブロックが混じるオリブ黒色(10Y3/1)シルト質砂

図3-5 SD-20

SD-19

調査区南東部で検出した南北溝跡で、幅0.30～0.38m、深さ2～7cmを測り、基底面は北(1.641m)から南(1.577m)に傾斜し、1.30mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土はオリブ黒色(10Y3/1)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-20(図3-5)

調査区北西部で検出した南北溝跡で、北側は調査区外へ続く。幅0.75～2.10m、深さ22～48cmを測り、基底面は南(0.957m)から北(0.782m)に傾斜し、10.70mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が木片と炭化物を含む暗緑灰色(7.5GY4/1)シルトのブロックが混じる暗オリブ灰色(5GY3/1)粘土質シルト、2層が貝片と炭化物を含む暗オリブ灰色(5GY3/1)粘土質シルトのブロックが混じるオリブ黒色(10Y3/1)シルト質砂で、出土遺物には土師器10点、須恵器3点、土師質土器6点がみられ、土師質土器2点(339・340)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-6 339・340)

339・340は手づくね成形とみられる杯の口辺部から体部にかけての破片である。339は口辺部内外面にヨコナデを施し、体部内外面には指頭圧痕が認められる。胎土には細粒砂を含む。340は口辺部内外面にヨコナデ、体部内外面にナデを施し、胎土には細粒砂を含む。

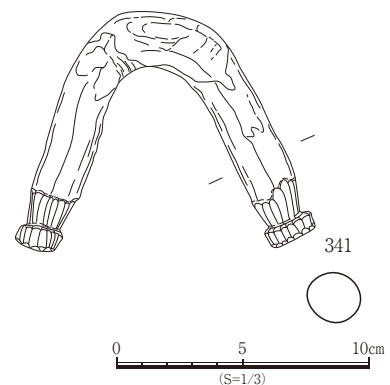
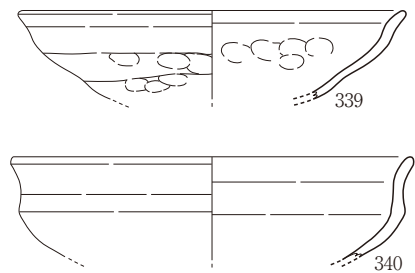


図3-6 SD-20・21出土遺物実測図

SD-21(図3-7)

調査区西部で検出した南北溝跡で、南側は調査区外へ続く。

幅0.29～0.81m, 深さ4～10cmを測り, 基底面は北(1.243m)から南(1.200m)に傾斜し, 33.10mを検出した。断面は舟底状を呈し, 埋土は灰色(10Y4/1)砂のブロックが混じる暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルト質砂で, 出土遺物には土師質土器26点, 瓦質土器3点, 青磁1点, 木製品1点がみられ, 木製品1点(341)が図示できた。

出土遺物

木製品(図3-6 341)

341は用途不明のものである。表面の大部分には樹皮が残るが, 両端には抉りをいれる。樹種はシャシャンボである。

SD-22

調査区南西部で検出した南北溝跡で, 幅0.36～0.92m, 深さ4～14cmを測り, 基底面は北(1.162m)から南(1.031m)に傾斜し, 6.80mを検出した。断面は舟底状を呈し, 埋土は1層がオリーブ黒色(10Y3/1)シルト質粘土と灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルトのブロックが混じる灰色(5Y4/1)シルト, 2層がオリーブ黒色(10Y3/1)シルト質粘土, 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト, 暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土質シルトのブロックが混じる暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土, 3層が暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土で, 出土遺物には弥生土器1点, 土師質土器4点, 瓦質土器1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

③ 性格不明遺構

SX-1

調査区南東部で検出した不整形を呈する性格不明遺構で, 南側は調査区外へ続く。幅1.86～2.18m, 深さ5～17cmを測り, 断面は不整形の舟底状を呈する。埋土はオリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルトで, 出土遺物には弥生土器62点, 土師器27点, 須恵器11点, 土師質土器143点, 瓦器7点, 瓦質土器4点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SX-2(図3-8)

調査区南西部で検出した不整形を呈する性格不明遺構で, 南側は調査区外へ続く。規模は不明で, 断面は舟底状を呈する。埋土は中礫と黒色(N2/)粘土のブロックが混じるオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトで, 出土遺物には弥生土器2点, 土師器3点, 須恵器2点, 土師質土器57点, 瓦器4点, 瓦質土器3点, 青磁2点, 木製品2点がみられ, 瓦器1点(342)が図示できた。

出土遺物

瓦器(図3-9 342)

342は瓦器碗の体部から底部にかけての破片である。内面にナデを施し, 外面には指頭圧痕が認められる。内面にはヘラミガキがみられ, 胎土には細粒砂を含む。

(2) 下面検出遺構

土坑・溝跡・柱穴が丘陵裾部を中心に検出されているが, 上面検出遺構と同様に遺構密度は低い。

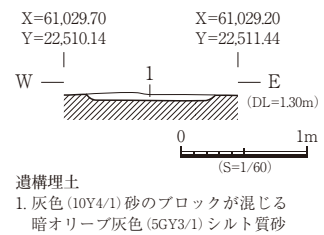


図3-7 SD-21

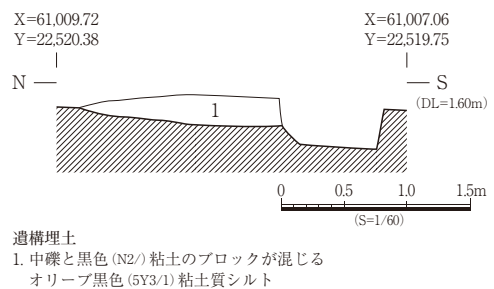


図3-8 SX-2

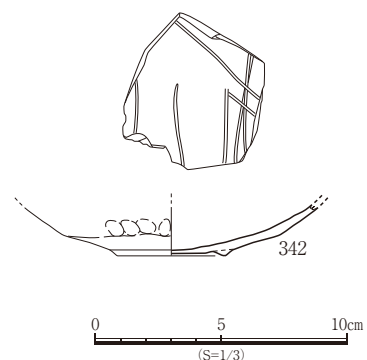


図3-9 SX-2出土遺物実測図

1. I区 (2) 下面検出遺構

① 土坑

SK-7

調査区東部で検出した楕円形を呈する土坑で、長径1.62m、短径0.46m、深さ10～14cmを測り、長軸方向はN-11°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルトのブロックが混じる暗緑灰色(10G3/1)シルト質粘土で、出土遺物には弥生土器4点、須恵器1点、土師質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-8

調査区東部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、長辺1.21m、短辺0.77m、深さ13～15cmを測り、長軸方向はN-19°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は暗緑灰色(5G3/1)粘土で、出土遺物には弥生土器1点がみられたが、図示できるものではなかった。

SK-9

調査区東部で検出した楕円形を呈する土坑で、長径0.88m、短径0.74m、深さ2～4cmを測り、長軸方向はN-12°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は暗青灰色(10BG3/1)シルトのブロックが混じる暗緑灰色(5GY3/1)砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-10

調査区東部で検出した不整長方形を呈する土坑で、長辺は不明である。短辺は0.97m、深さ6～10cmを測り、長軸方向はN-29°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は緑黒色(10G2/1)シルト質粘土とオリーブ黒色(10Y3/1)シルト質粘土のブロックが混じる暗緑灰色(5G3/1)砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-11

調査区東部で検出した楕円形を呈する土坑で、長径1.16m、短径0.67m、深さ7～12cmを測り、長軸方向はN-18°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は暗緑灰色(5G3/1)シルト質粘土のブロックが混じる暗青灰色(5BG3/1)シルト質粘土で、出土遺物には弥生土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-12

調査区東部で検出した不整長方形を呈する土坑で、長辺は不明である。短辺は0.81m、深さ5～12cmを測り、長軸方向はN-18°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルトのブロックが混じる暗緑灰色(10G3/1)シルト質粘土で、出土遺物には弥生土器19点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-13(図3-10)

調査区東部で検出した不整長楕円形を呈する土坑で、長径3.18m、短径0.65～1.13m、深さ2～8cmを測り、長軸方向はN-30°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土はオリーブ黒色(5GY2/1)シルトで、出土遺物には弥生土器4点がみられ、弥生土器1点(343)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-11 343)

343は甕の口辺部から胴部にかけての破片である。摩耗のため調

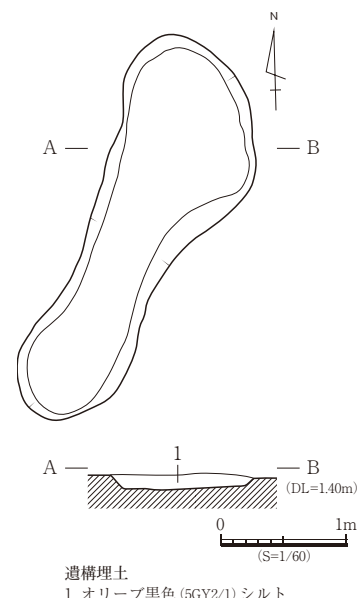


図3-10 SK-13

整は不明瞭であるが、口辺部外面にヨコナデ調整、胴部外面にハケ調整が認められる。口縁端部には刻目を配し、外面には煤が付着する。胎土には中粒砂～小礫を含む。

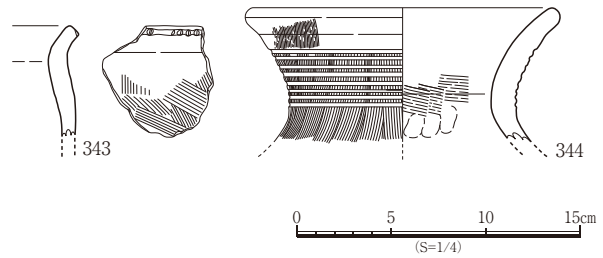


図3-11 SK-13・15出土遺物実測図

SK-14

調査区東部で検出した不整長方形を呈する土坑で、長辺2.34m、短辺0.68m、深さ5～8cmを測り、長軸方向はN-46°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は暗緑灰色(10G3/1)シルト質粘土で、出土遺物は皆無であった。

SK-15

調査区東部で検出した隅丸長方形を呈する土坑で、長辺2.36m、短辺は不明で、深さ6～10cmを測り、長軸方向はN-32°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルトのブロックが混じる暗緑灰色(10G3/1)シルト質粘土で、出土遺物には弥生土器44点がみられ、うち1点(344)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-11 344)

344は壺の口辺部から頸部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、口辺部内面にヨコナデ調整、頸部内面にハケ調整のあとヨコナデ調整、口辺部外面にハケ調整のあとヨコナデ調整、頸部外面にハケ調整が認められる。頸部外面には8条の沈線を配し、胎土には中粒砂～小礫を含む。

SK-16

調査区南東部で検出した隅丸長方形を呈する土坑で、長辺3.62m、短辺1.08m、深さ2～6cmを測り、長軸方向はN-31°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土はオリーブ黒色(5GY2/1)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-17

調査区南東部で検出した楕円形を呈する土坑で、長径は不明である。短径は0.98m、深さ12～19cmを測り、長軸方向はN-33°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫が混じる暗灰色(N3/)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-18

調査区南東部で検出した長楕円形を呈する土坑で、長径1.84m、短径0.49m、深さ2～4cmを測り、長軸方向はN-78°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は黒色(7.5Y2/1)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-19

調査区南東部で検出した不整楕円形を呈する土坑で、長径1.53m、短径1.23m、深さ2～10cmを測り、長軸方向はN-53°-Eを示す。断面は不整舟底状を呈し、埋土は1層が暗緑灰色(5G3/1)シルト質粘土、2層がオリーブ黒色(5GY2/1)シルト質砂で、出土遺物は皆無であった。

SK-20

調査区南東部で検出した不整形を呈する土坑で、長辺は不明である。短辺0.66m、深さ4～17cmを

1. I区 (2) 下面検出遺構

測り、長軸方向はN - 74° - Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土はオリーブ黒色(5GY2/1)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK - 21

調査区南東部で検出した不整形を呈する土坑で、長辺は不明である。短辺0.32m、深さ5～8cmを測り、長軸方向はN - 72° - Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土はオリーブ黒色(5GY2/1)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK - 22

調査区南東部で検出した長楕円形を呈する土坑で、長径1.70m、短径0.68m、深さ3～6cmを測り、長軸方向はN - 59° - Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルト質砂で、出土遺物は皆無であった。

SK - 23

調査区南東部で検出した土坑で、形状と規模は不明である。深さは17cmを測り、長軸方向はN - 22° - Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土はオリーブ黒色(5GY2/1)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK - 24

調査区南東部で検出した土坑で、形状と規模は不明である。深さは12～16cmを測り、長軸方向はN - 16° - Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土はオリーブ黒色(5GY2/1)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK - 25

調査区南東部で検出した土坑で、形状と規模は不明である。深さは29cmを測り、長軸方向はN - 42° - Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土はオリーブ黒色(5GY2/1)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器7点がみられ、うち1点(345)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-12 345)

345は甕と考えられる底部破片である。内面にナデ、外面にハケを施し、胎土には細粒砂～小礫を多く含む。

SK - 26

調査区南部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、長辺1.92m、短辺1.53m、深さ27cmを測り、長軸方向はN - 79° - Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は黒色(7.5Y2/1)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器44点がみられ、うち3点(348～350)が図示できた。

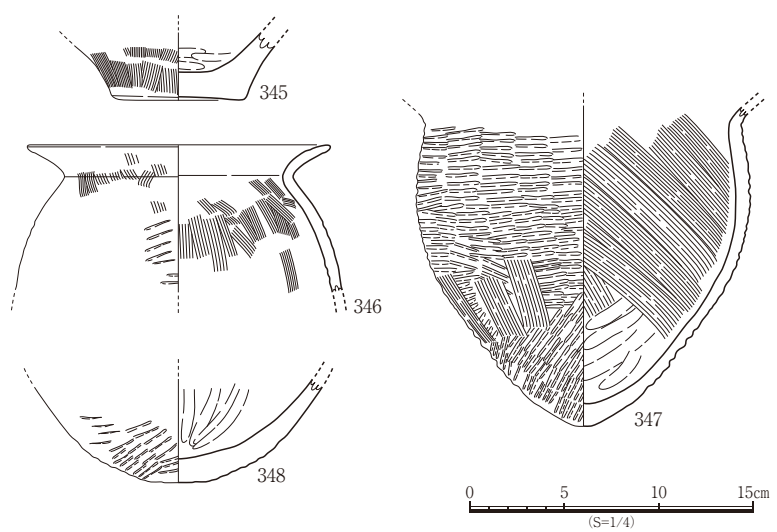


図3-12 SK-25・26出土遺物実測図

出土遺物

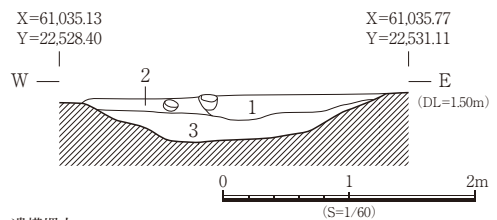
弥生土器(図3-12 346~348)

346~348は甕と考えられるものである。346は口辺部から胴部にかけての破片で、口辺部内外面にヨコナデ、胴部内面にハケ、胴部外面にタタキのちハケを施す。胴部外面の一部には煤が付着し、胎土には細粒砂~小礫を含む。347は口辺部を欠損するものである。胴部内面にハケ、胴下部から底部内面にナデ、胴部外面にタタキを施し、胴中央部外面には部分的にハケ調整が認められる。外面全体には煤が付着し、胎土には中粒砂~小礫を含む。348は底部破片で、内面にナデ、外面にタタキを施し、胎土には中粒砂~小礫を多く含む。

② 溝跡

SD-23(図3-13)

調査区北東部で検出した南北溝跡で、北側は調査区外へ続く。幅1.25~2.66m、深さ5~60cmを測り、基底面は北(1.242m)から南(1.154m)に傾斜し、11.60mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が暗青灰色(5BG3/1)シルト質粘土、2層が暗緑灰色(5G3/1)粘土質シルト、3層が小礫が混じる緑黒色(10GY2/1)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器135点、木製品2点がみられ、弥生土器3点(349~351)、木製品2点(352・353)が図示できた。



- 遺構埋土
 1. 暗青灰色(5BG3/1)シルト質粘土
 2. 暗緑灰色(5G3/1)粘土質シルト
 3. 小礫混じりの緑黒色(10GY2/1)粘土質シルト

図3-13 SD-23

出土遺物

弥生土器(図3-14 349~351)

349・350は壺と考えられるものである。349は口辺部から胴部にかけての破片で、摩耗のため調整

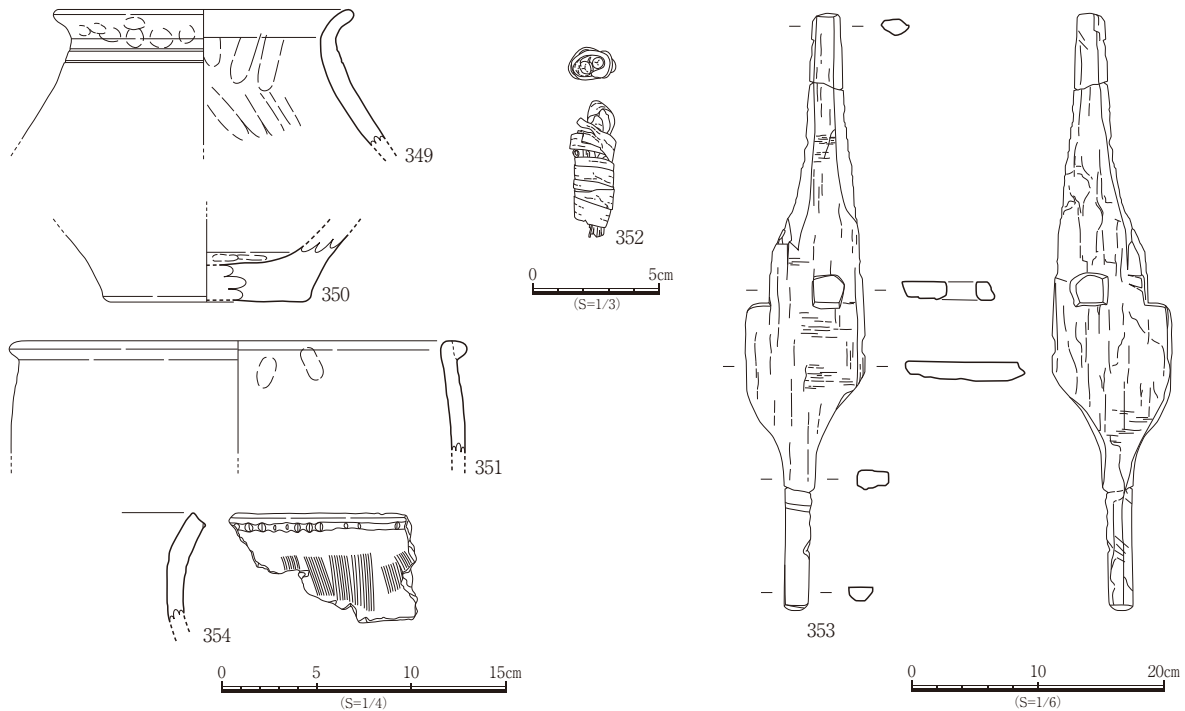


図3-14 SD-23・24出土遺物実測図

1. I区 (2) 下面検出遺構

は不明瞭であるが、胴部内面にナデ調整、口辺部外面に指オサエのちヨコナデ調整が認められる。胎土には細粒砂～小礫を含む。350は底部破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には細粒砂～小礫を含む。

351は甕の口辺部から胴部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、口辺部外面にヨコナデ調整が認められる。口縁部外面の一部には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。

木製品(図3-14 352・353)

352・353は用途不明のものである。352は枝状の木に樹皮を巻き付けたもので、片側を欠損する。樹種は広葉樹とみられるが詳細は不明である。353は板目取りで作られ、先端部を欠損する。方形を呈する孔を1つ穿ち、片側の側面には段を設ける。上部は両側面を削り、断面が菱形を呈す。表面は木瘦せし、木目が目立ち、樹種はクスノキである。

SD-24

調査区東部で検出した南北溝跡で、幅0.34～1.17m、深さ5～16cmを測り、基底面は北(1.208m)から南(1.147m)に傾斜し、30.20mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が緑黒色(10GY2/1)シルト質粘土、2層が中礫が混じるオリブ黒色(5GY2/1)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器38点がみられ、うち1点(354)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-14 354)

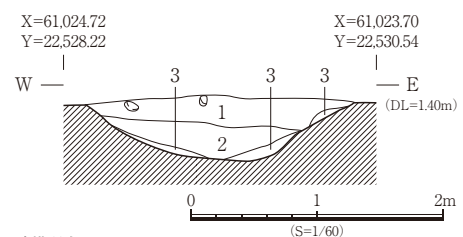
354は甕の口辺部破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、口縁部内外面にヨコナデ調整が認められ、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。

SD-25

調査区東部で検出した東西溝跡で、幅0.12～0.55m、深さ3～7cmを測り、基底面は東(1.335m)から西(1.318m)に傾斜し、1.50mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫が少し混じる暗オリブ灰色(5GY3/1)砂で、出土遺物は皆無であった。

SD-26(図3-15)

調査区南部で検出した南北溝跡で、南側は調査区外へ続く。幅0.96～2.04m、深さ7～49cmを測り、基底面は北(1.068m)から南(0.982m)に傾斜し、21.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が木片混じりの暗青灰色(5BG3/1)シルト質粘土、2層が木片混じりのオリブ黒色(5GY2/1)粘土質シルト、3層が暗緑灰色(5G3/1)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器58点、木製品1点がみられ、木製品(355)が図示できた。



遺構埋土
1. 木片混じりの暗青灰色(5BG3/1)シルト質粘土
2. 木片混じりのオリブ黒色(5GY2/1)粘土質シルト
3. 暗緑灰色(5G3/1)粘土質シルト

図3-15 SD-26

出土遺物

木製品(図3-16 355)

355は舟形と考えられるものである。板目材を削り貫いて作られる。船首を欠損しており、船底には斜行する傷が認められる。樹種はスギである。

SD-27

調査区南部で検出した南北溝跡で、幅は不明である。深さは31～40cmを測り、基底面は北(0.811m)

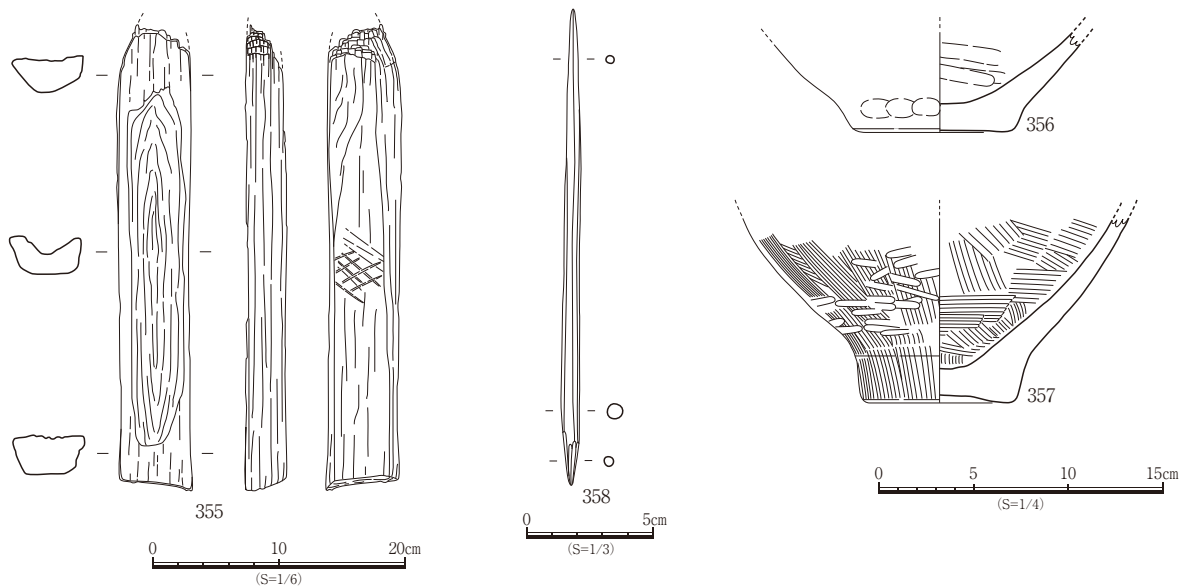


図3-16 SD-26・27出土遺物実測図

から南(0.783m)に傾斜し、5.70mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土はオリブ黒色(5GY2/1)シルト質粘土で、出土遺物には弥生土器14点、木製品1点がみられ、弥生土器2点(356・357)、木製品1点(358)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-16 356・357)

356・357は壺と考えられる底部破片である。356は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にナデ調整が認められ、胎土には中粒砂～小礫を含む。357は内面にハケ、外面にハケのちヘラミガキを施し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。

木製品(図3-16 358)

358は木鏃と考えられるもので、完存する。表面には丁寧な加工を施し、樹種はヒノキである。

2. II区

確認された遺構の時期は弥生時代・古代・中世で、掘立柱建物跡、柵列、土坑、溝跡、井戸跡、柱穴などが検出されている。弥生時代では土坑や柱穴が検出されており、当該期の集落が本調査区周辺に存在している可能性が考えられる。また、古代では掘立柱建物跡が1棟検出されており、当該期に存在したなんらかの施設が存在していた可能性が考えられる。中世では掘立柱建物跡が計11棟確認されており、本調査区内には当該期の屋敷が展開していたと考えられる。

(1) 上面検出遺構

掘立柱建物跡・土坑・溝跡などが検出されており、中世の屋敷跡が確認された。

① 掘立柱建物跡

SB-1(図3-17)

調査区北部で検出した桁行1間以上、梁行2間(6.55m)の南北棟建物跡と考えられるもので、北側は調査区外へ続く。棟方向はN-19°-Eを示し、確認された柱間寸法は桁行(南北)が2.20m、梁行(東西)が2.90・3.65mであ

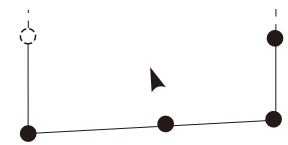


図3-17 SB-1

2. II区 (1) 上面検出遺構

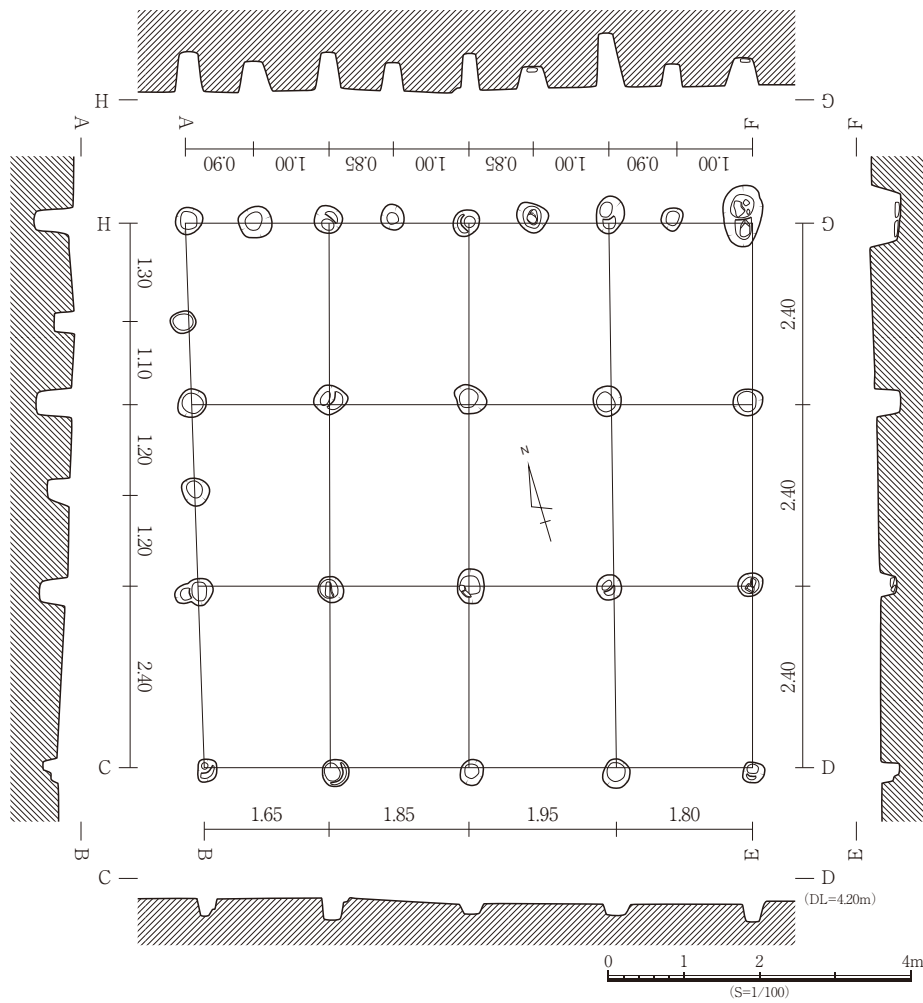


図3-18 SB-2

る。柱穴は概ね円形を呈し、径24～31cmを測る。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトないし灰褐色(7.5YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器5点、須恵器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-2(図3-18)

調査区中央部で検出した桁行4間(7.25～7.50m)、梁行3間(7.20m)の東西棟総柱建物跡である。ほぼ正方形の建物で、北側柱と西側柱北から1・2間目の柱間には東柱とみられ柱穴が確認されている。棟方向はN-75°-Wを示し、柱間寸法は桁行(東西)が1.65～1.95m、梁行(南北)が2.40mである。柱穴は概ね円形を呈し、径26～42cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトないし灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器24点、土師器18点、須恵器9点、土師質土器113点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-3(図3-19)

調査区中央部で検出した桁行2間(4.15～4.40m)、梁行1間(2.80～2.90m)の東西棟建物跡である。棟方向はN-81°-Wを示し、柱間寸法は桁行(東西)が1.80～2.50m、梁行(南北)が2.80・2.90mである。柱穴は概ね円形を呈し、径26～54cm

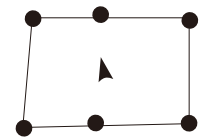


図3-19 SB-3

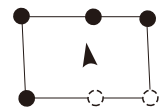


図3-20 SB-4

を測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器19点、土師質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-4(図3-20)

調査区中央部で検出した桁行2間(3.30m)、梁行1間(2.15m)の東西建物跡で、南東隅柱はSD-9に切られる。棟方向はN-83°-Wを示し、柱間寸法は桁行(東西)が1.45・1.85m、梁行(南北)が2.15mである。柱穴は概ね円形を呈し、径27~37cmを測る。

埋土はにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器8点、土師器2点、須恵器2点、土師質土器2点、瓦質土器3点がみられ、瓦質土器1点(359)が図示できた。

出土遺物

瓦質土器

(図3-21 359)

359は鍋の胴部破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂~小礫を含む。

SB-5(図3-22)

調査区西部で検出した桁行6間(10.60~10.90m)、梁行2間(4.45m)の身舎西側に下屋が取り付く南北棟建物跡である。棟方向はN-16°-Eを示し、柱間寸法は桁行(南北)が1.50~1.90m、梁行(東西)が1.35~3.10mである。柱穴は概ね円形を呈し、径23~

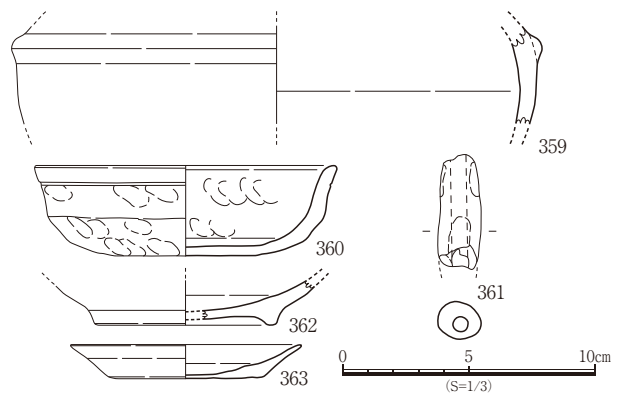


図3-21 SB-4~6出土遺物実測図

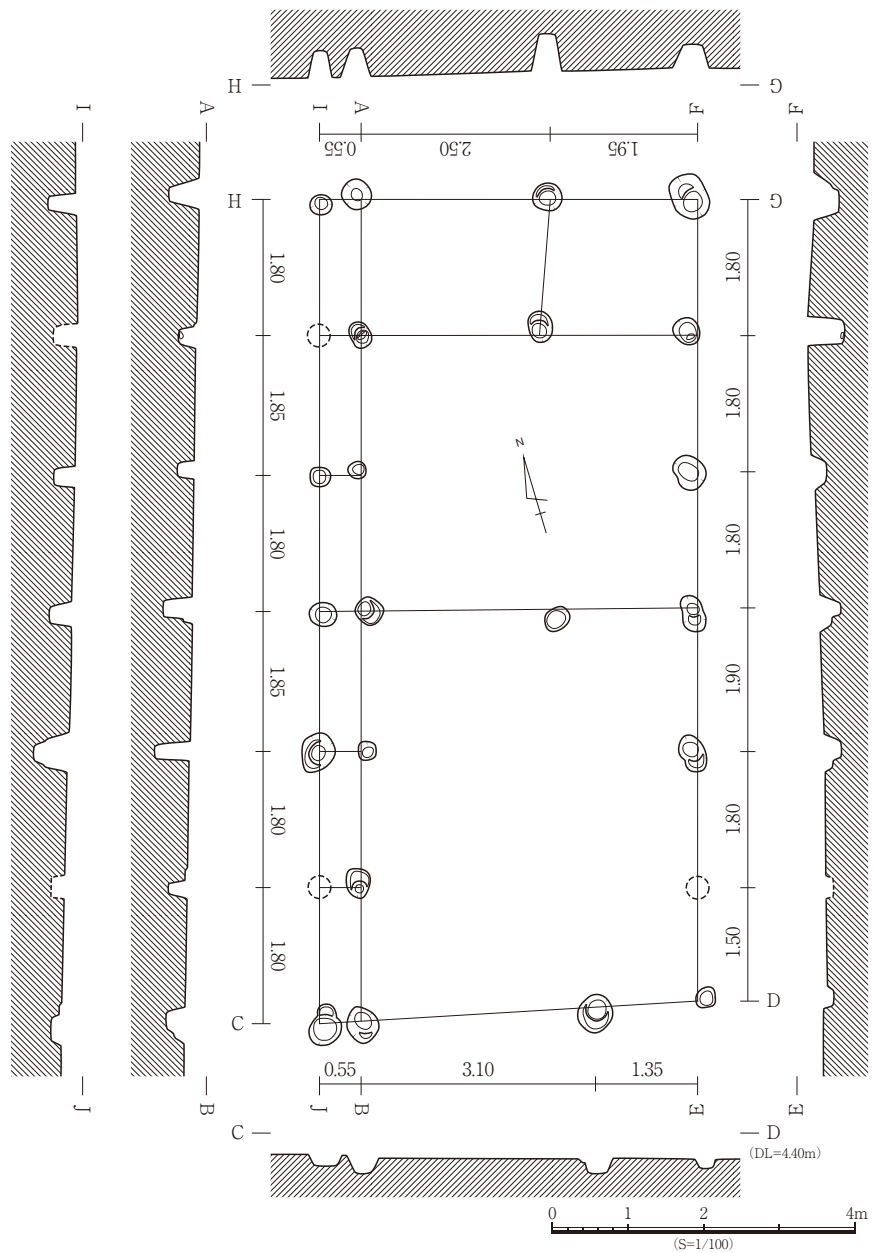


図3-22 SB-5

2. II区 (1) 上面検出遺構

48 cmを測る。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトないしにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器29点、土師器5点、須恵器3点、土師質土器158点、瓦質土器6点、土製品1点がみられ、土師質土器1点(360)、土製品1点(361)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-21 360)

360は杯である。手づくね成形とみられ、摩耗のため調整は不明瞭であるが、器面には指頭圧痕が認められる。胎土は精良である。

土製品(図3-21 361)

361は土錘である。片側を欠損し、胎土には細粒砂を含む。

SB-6(図3-23)

調査区西部で検出した桁行3間(6.60~6.70m)、梁行2間(4.10m)の東西棟建物跡である。棟方向はN-74°-Wを示し、柱間寸法は桁行(東西)が2.00~2.70m、梁行(南北)が2.00~2.10mである。柱穴は概ね円形を呈し、径21~52 cmを測る。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器1点、土師器11点、土師質土器82点がみられ、土師質土器2点(362・363)が図示できた。

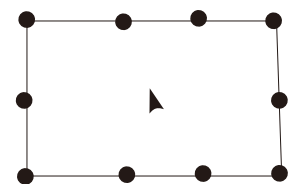


図3-23 SB-6

出土遺物

土師質土器(図3-21 362・363)

362は碗の底部破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂を少し含む。

363は小皿で、全体の形状が復元できた。摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂~小礫を含む。

SB-7(図3-24)

調査区西部で検出した桁行3間(5.60~5.65m)、梁行2間(4.95~5.55m)の東西棟建物跡で、大きく歪んでいる。棟方向はN-79°-Wを示し、柱間寸法は桁行(東西)が1.75~2.00m、梁行(南北)が2.45~3.10mである。柱穴は円形ないし楕円形を呈し、径23~39 cmを測る。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器4点、須恵器3点、土師質土器41点がみられたが、図示できるものはなかった。

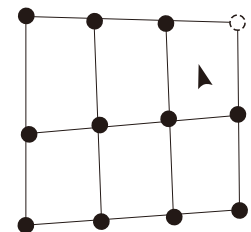


図3-24 SB-7

SB-8(図3-25)

調査区西部で検出した桁行3間(3.40~3.70m)、梁行1間(1.70~1.90m)の東西棟建物跡で、大きく歪んでいる。棟方向はN-80°-Wを示し、柱間寸法は桁行(東西)が0.90~1.60m、梁行(南北)が1.70~1.90mである。柱穴は概ね円形を呈し、径31~63 cmを測る。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトで、出土遺物には土師器1点、土師質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

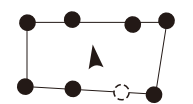


図3-25 SB-8

SB-9(図3-26)

調査区南東部で検出した桁行4間、梁行2間の身舎に1面廂付きの桁行4間(6.65~6.85m)、梁行3間(8.80m)の南北棟建物跡である。南側柱東から1間目には東柱とみられる柱穴が確認されている。棟方向はN-83°-Wを示し、柱間寸法は桁行(南北)が1.50~1.80m、梁行(東西)が2.40~3.45mである。柱穴は概ね円形を呈し、径21~39 cmを測る。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトで、出土遺物には

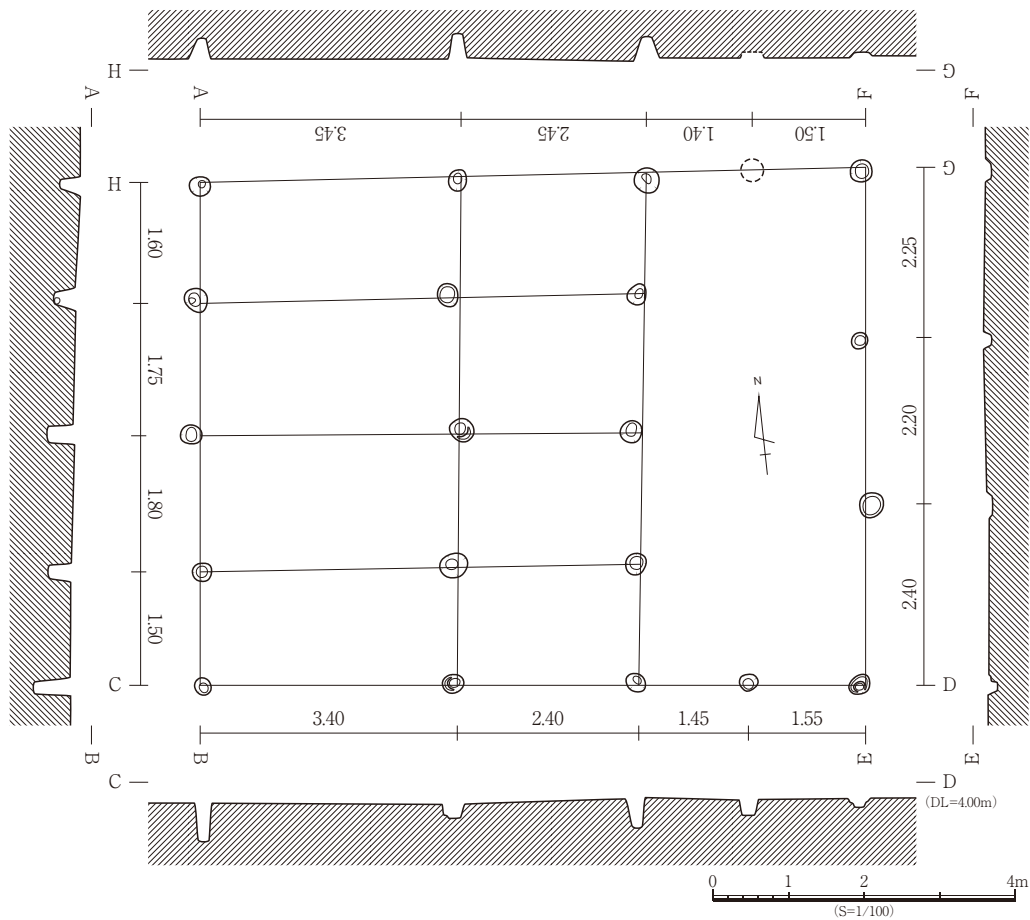


図3-26 SB-9

弥生土器15点, 土師器3点, 須恵器3点, 土師質土器35点がみられたが, 図示できるものはなかった。

② 柵列跡

SA-1(図3-27)

調査区中央部, SB-2・3の間で検出した南北柵列(N-16°-E)である。2間(6.66m)を検出し, 柱間寸法は3.14・3.52mで, 柱穴は径25~36cmのほぼ円形である。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトで, 出土遺物には弥生土器2点, 土師質土器8点がみられ, 土師質土器1点(364)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-28 364)

364は杯で, 全体の形状が復元できた。器面には回転ナデを施し, 胎土には粗粒砂を少し含む。

SA-2(図3-29)

調査区西部, SB-6の南側で検出した東西柵列(N-76°-W)である。3間(7.46m)を検出し, 柱間寸法は2.42~2.56mで, 柱穴は22~41cmのほぼ円形である。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトで, 出土遺物には弥生土器1点, 土師器1点, 土師質土器

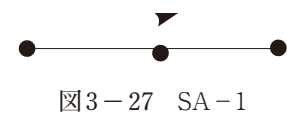


図3-27 SA-1

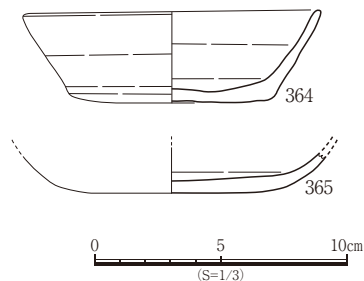


図3-28 SA-1・2出土遺物実測図

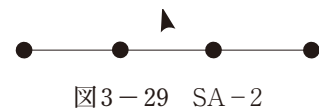


図3-29 SA-2

2. II区 (1) 上面検出遺構

23点がみられ、土師質土器1点(365)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-28 365)

365は杯の底部破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には細粒砂～小礫を含む。

SA-3(図3-30)

調査区南東部、SB-9の南東側で検出した逆「L」字状を呈する堀跡(N-83°-W)である。3間(11.48m)を検出し、柱間寸法は3.32～4.74mで、柱穴は28～57cmの楕円形である。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

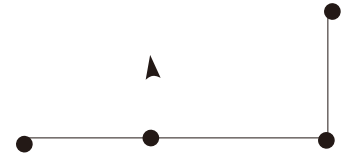
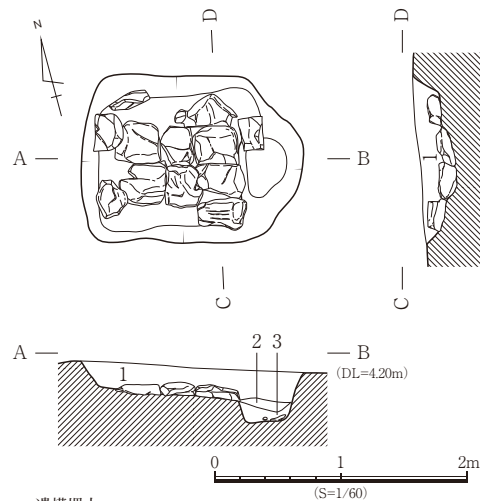


図3-30 SA-3

③ 土坑

SK-1(図3-31)

調査区西部で検出した不整形を呈する土坑で、長辺1.76m、短辺1.34m、深さ15～27cmを測り、長軸方向はN-76°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は1層がオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト、2層が暗灰色(N3/)粘土、3層が炭化物を含む青黒色(5GB2/1)シルト質粘土で、出土遺物には土師器1点、須恵器8点、土師質土器113点、土製品1点がみられ、土師質土器2点(366・367)、土製品1点(368)が図示できた。



遺構埋土
 1. オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト
 2. 暗灰色(N3/)粘土
 3. 炭化物を多く含む青黒色(5GB2/1)シルト質粘土

図3-31 SK-1

出土遺物

土師質土器(図3-32 366・367)

366・367は手づくね成形と考えられる杯である。366は全体的に歪み、摩耗のため調整は不明である。胎土には細粒～中粒砂を含む。367は底部を欠損し、摩耗のため調整は不明である。胎土には粗粒砂～小礫を含む。

土製品(図3-32 368)

368は土錘である。大部分を欠損し、胎土には中粒砂～小礫を含む。

SK-2

調査区北部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、長辺1.32m、短辺1.25m、深さ17～24cmを測り、長軸方向はN-81°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は中礫とにぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルトのブロックが混じる暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器2点、須恵器4点、土師質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-3

調査区中央部で検出した不整形を呈する土坑で、

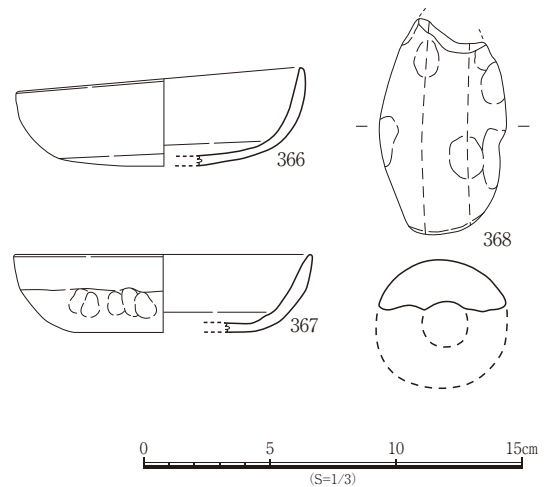
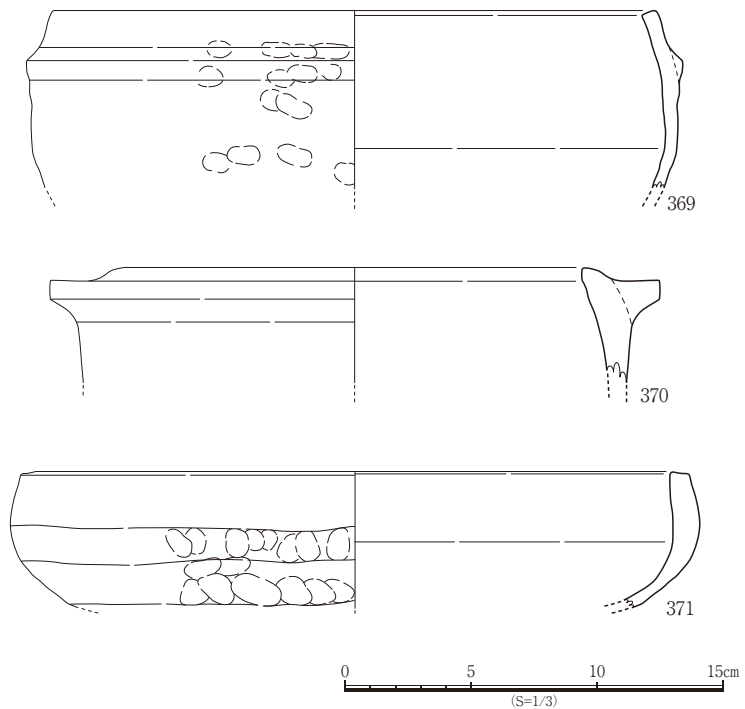


図3-32 SK-1出土遺物実測図

長辺は不明である。短辺0.69～1.57m, 深さ2～6cmを測り, 長軸方向はN-11°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し, 埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトで, 出土遺物には弥生土器7点, 須恵器3点, 土師質土器68点, 瓦器13点, 瓦質土器1点がみられ, 瓦質土器1点(369)が図示できた。



出土遺物

瓦質土器(図3-33 369)

369は鍋の口辺部から胴部にかけての破片で, 摩耗のため調整は不明瞭であるが, 口縁部内面にヨコナデ調整が認められる。胎土には細粒～小礫を含む。

SK-4

図3-33 SK-3-4-7出土遺物実測図

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈する土坑で, 長辺1.64m, 短辺1.56m, 深さ10～127cmを測り, 長軸方向はN-83°-Eを示す。断面は方形を呈し, 埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトで, 出土遺物には土師器1点, 土師質土器3点がみられ, 土師器1点(370)が図示できた。

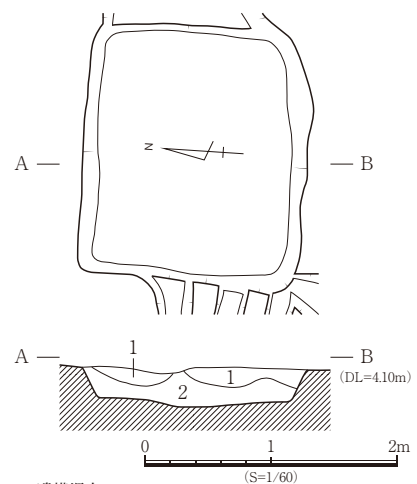
出土遺物

土師器(図3-33 370)

370は羽釜の口辺部破片で, 器面にはヨコナデを施す。外面には煤が付着し, 胎土には中粒砂～小礫を含む。

SK-5(図3-34)

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈する土坑で, 長辺2.10m, 短辺1.78m, 深さ21～28cmを測り, 長軸方向はN-88°-Eを示す。断面は舟底状を呈し, 埋土は1層が黒褐色(7.5YR3/2)シルトとにぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルトのブロックが混じる暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト, 2層がにぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルトで, 出土遺物には弥生土器60点, 須恵器26点, 土師質土器174点, 瓦質土器14点がみられたが, 図示できるものはなかった。



SK-6

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈する土坑で, 長辺2.14m, 短辺1.31m, 深さ12～20cmを測り, 長軸方向はN-75°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し, 埋土は黒褐色(7.5YR3/1)粘土質シルトで, 出土遺物には弥生土器10点, 須恵器4点, 土師質土器

遺構埋土

1. 黒褐色(7.5YR3/2)シルトとにぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルトのブロックが混じる暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト
2. にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト

図3-34 SK-5

2. II区 (1) 上面検出遺構

13点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7

調査区中央部で検出した不整隅丸方形を呈する土坑で、西側は現代の攪乱に切られる。長辺は不明で、短辺1.61m、深さ4～21cmを測り、長軸方向はN-87°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は1層が灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト、2層が黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器6点、須恵器7点、土師質土器61点、瓦質土器5点がみられ、瓦質土器1点(371)が図示できた。

出土遺物

瓦質土器(図3-33 371)

371は鍋の口辺部から胴部にかけての破片である。内面と口辺部外面にヨコナデ、胴部外面に指オサエを施し、胎土には細粒～中粒砂を含む。

SK-8(図3-35)

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、長辺1.42m、短辺1.33m、深さ17～28cmを測り、長軸方向はN-8°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は1層が黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト、2層がにぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト、3層が灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト、4層が黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器6点、土師質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

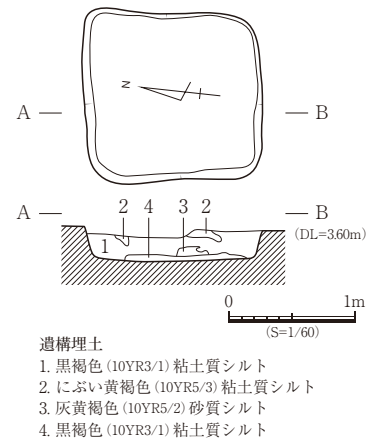


図3-35 SK-8

SK-9

調査区南西部で検出した不整楕円形を呈する土坑で、長径3.84m、短径0.57～0.91m、深さ2～11cmを測り、長軸方向はN-75°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器4点、土師器7点、須恵器2点、土師質土器19点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-10

調査区西部で検出した土坑で、形状は不明である。西側は調査区外へ続き、東側はSD-3・6に接する。長辺は不明で、短辺0.91m、深さ11～18cmを測り、長軸方向はN-48°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫とにぶい黄褐色(10YR5/4)シルトのブロックが混じる暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトで、出土遺物には瓦質土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

④ 溝跡

SD-1(図3-36)

調査区北部で検出した東西溝跡で、東側は調査区外へ続く。幅0.19～0.53m、深さ3～10cmを測り、基底面は西(4.252m)から東(4.115m)に傾斜し、13.40mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器1点、土師器6点、須恵器2点、土師質土器20点、瓦器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

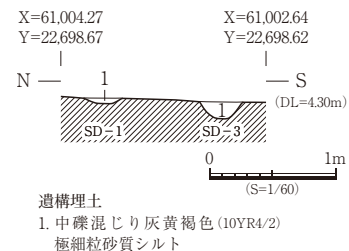


図3-36 SD-1・3

SD-2

調査区北部で検出した東西溝跡で、幅0.19～0.32m、深さ2～10cmを測り、基底面は西(4.250m)から東(4.021m)に傾斜し、10.90mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-3(図3-36)

調査区北部で検出した東西溝跡で、東側は調査区外へ続く。幅0.13～0.41m、深さ2～10cmを測り、基底面は西(4.181m)から東(4.036m)に傾斜し、46.60mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器5点、土師器12点、須恵器22点、土師質土器68点、瓦質土器17点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-4

調査区北部で検出した東西溝跡で、幅0.16～0.39m、深さ2～14cmを測り、基底面は西(4.166m)から東(4.094m)に傾斜し、18.70mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫が混じる灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-5

調査区西部で検出した東西溝跡で、幅0.23～0.38m、深さ1～7cmを測り、基底面は西(4.231m)から東(4.199m)に傾斜し、10.50mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫とにぶい黄褐色(10YR5/4)シルトのブロックが混じる暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトで、出土遺物には須恵器1点がみられたが、図示できるものではなかった。

SD-6

調査区西部で検出した東西溝跡で、幅0.21～0.26m、深さ2～8cmを測り、基底面は西(4.226m)から東(4.191m)に傾斜し、15.90mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は中礫とにぶい黄褐色(10YR5/4)シルトのブロックが混じる暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器1点、須恵器1点、土師質土器2点、瓦質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-7

調査区北部で検出した東西溝跡で、幅0.26～0.32m、深さ2～5cmを測り、基底面は東(4.084m)から西(4.048m)に傾斜し、3.10mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫が混じる灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器2点、土師器1点、須恵器2点、土師質土器10点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-8

調査区北東部で検出した東西溝跡で、東側は調査区外へ続く。幅0.24～0.37m、深さ2～10cmを測り、基底面は西(4.059m)から東(3.973m)に傾斜し、9.10mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫が混じる灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器5点、土師器4点、須恵器4点、土師質土器21点、瓦質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-9

調査区東部から南部で検出した溝跡で、東側は調査区外へ続く。幅0.27～0.64m、深さ3～19cmを測り、基底面は東(3.947m)から南(3.667m)に傾斜し、49.20mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫が混じる暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器45点、土師器23点、須恵器33点、緑釉陶器1点、土師質土器256点、瓦器2点、瓦質土器9点、土製品1点がみられ、土師質土器1

2. II区 (1) 上面検出遺構

点(372)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-37 372)

372は鍋の口辺部から胴部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部外面にはタタキ目が認められる。

胴部外面には煤が付着し、胎土には細粒～中粒砂を含む。

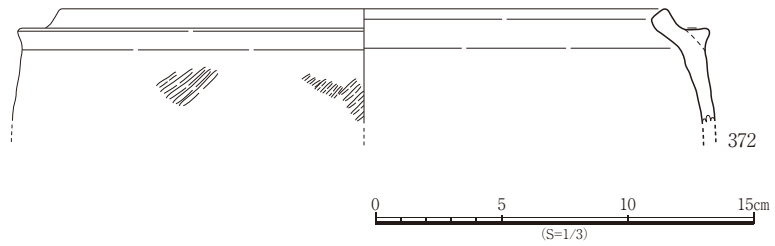


図3-37 SD-9出土遺物実測図

SD-10

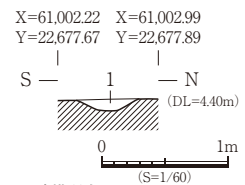
調査区東部から南部で検出した溝跡で、東側は調査区外へ続く。幅0.19～0.41m、深さ3～8cmを測り、基底面は東(3.929m)から南(3.698m)に傾斜し、28.50mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫が混じる暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルトで、出土遺物には須恵器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-11

調査区北部から中央部で検出した溝跡で、幅0.29～0.44m、深さ3～15cmを測り、基底面は北(3.961m)から南(3.807m)に傾斜し、20.60mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器106点、土師器6点、須恵器14点、土師質土器189点、瓦質土器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-12(図3-38)

調査区北部で検出した東西溝跡である。SB-1～8とSA-1・2に伴う区画溝と考えられるもので、東西とも調査区外へ続く。溝跡の東側には約4.50m途切れた部分があり、屋敷への入口と推測される。幅0.36～0.94m、深さ2～8cmを測り、基底面は西(4.138m)から東(3.934m)に傾斜し、28.90mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫とにぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルトのブロックが混じる暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器37点、土師器48点、須恵器30点、土師質土器323点、瓦質土器26点、青磁1点がみられ、弥生土器1点(373)が図示できた。



遺構埋土
1. 中礫とにぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルトのブロックが混じる暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト

図3-38 SD-12

出土遺物

弥生土器(図3-39 373)

373は壺と考えられる底部破片である。内面にナデ、外面にハケを施し、外面の一部にヘラミガキ調整が認められる。胎土には粗粒砂を多く含む。

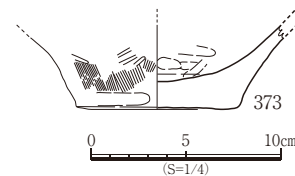


図3-39 SD-12出土遺物実測図

SD-13

調査区北東部で検出した東西溝跡で、幅0.17～0.33m、深さ2～3cmを測り、基底面は東(3.983m)から西(3.957m)に傾斜し、3.10mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器8点、土師器2点、土師質土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-14

調査区東部から中央部で検出した溝跡で、幅0.15～0.40m、深さ3～9cmを測り、基底面は東(3.977m)

から東(3.902m)に傾斜し、20.60mを検出した。断面は舟底状を呈し、灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器50点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-15

調査区東部で検出した東西溝跡で、幅0.23～0.46m、深さ2～10cmを測り、基底面は西(3.928m)から東(3.918m)に傾斜し、7.70mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰褐色(7.5YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器6点、土師器1点、土師質土器10点、瓦質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-16

調査区東部で検出した東西溝跡で、幅0.18～0.29m、深さ2～5cmを測り、基底面は西(3.918m)から東(3.912m)に傾斜し、4.10mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器2点、土師質土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-17

調査区中央部で検出した東西溝跡で、幅0.31～0.86m、深さ2～9cmを測り、基底面は西(3.928m)から東(3.888m)に傾斜し、12.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器9点、土師質土器13点、瓦質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-18

調査区中央部で検出した東西溝跡で、幅0.15～0.32m、深さ2～3cmを測り、基底面は東(3.904m)から西(3.870m)に傾斜し、4.10mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器10点、土師器3点、須恵器4点、土師質土器36点、瓦質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-19

調査区東部で検出した東西溝跡で、東側は調査区外へ続く。幅0.20～0.48m、深さ2～5cmを測り、基底面は西(3.880m)から東(3.873m)に傾斜し、3.60mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-20

調査区東部で検出された東西溝跡で、東側は調査区外へ続く。幅0.14～0.30m、深さ2～5cmを測り、基底面は東(3.905m)から西(3.876m)に傾斜し、13.40mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土はにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトで、出土遺物には土師器3点、須恵器1点、土師質土器12点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-21

調査区東部で検出した東西溝跡で、幅0.37～0.52m、深さ2～8cmを測り、基底面は東(3.860m)から西(3.857m)に傾斜し、8.20mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は灰褐色(7.5YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器8点、土師器1点、須恵器2点、土師質土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-22

調査区東部で検出した南北溝跡で、幅0.12～0.28m、深さ2～3cmを測り、基底面はほぼ水平で、2.70mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

2. II区 (1) 上面検出遺構

SD-23

調査区東部で検出した東西溝跡で、幅0.25～0.52m、深さ2～10cmを測り、基底面は東(3.888m)から西(3.850m)に傾斜し、4.40mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-24

調査区東部で検出した東西溝跡で、幅0.20～0.61m、深さ2～10cmを測り、基底面は西(3.791m)から東(3.763m)に傾斜し、23.40mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器1点、須恵器5点、土師質土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-25

調査区東部で検出した南北溝跡で、幅0.28～0.59m、深さ4～12cmを測り、基底面は北(3.761m)から南(3.703m)に傾斜し、8.60mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫が混じるにぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器11点、土師器5点、須恵器3点、土師質土器11点、瓦質土器1点(374)が図示できた。

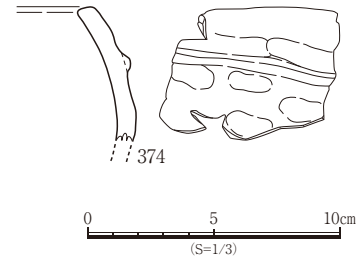


図3-40 SD-25出土遺物実測図

出土遺物

瓦質土器(図3-40 374)

374は鍋の口辺部破片で、全体的に歪む。摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にヨコナデ調整が認められ、胎土には細粒～中粒砂を多く含む。

SD-26(図3-41)

調査区東部で検出した逆「L」字状を呈する溝跡で、幅0.18～0.62m、深さ2～8cmを測り、基底面は北(3.865m)から西(3.797m)に傾斜し、19.00mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰褐色(7.5YR4/2)極細粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器1点、土師器3点、須恵器1点、土師質土器41点、瓦質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

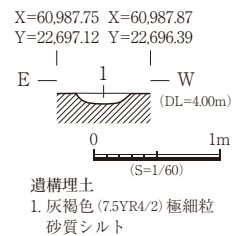


図3-41 SD-26

SD-27

調査区北西部で検出した南北溝跡で、幅0.28～0.59m、深さ2～9cmを測り、基底面は北(4.190m)から南(3.941m)に傾斜し、7.50mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫が混じる黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土で、出土遺物には土師器5点、須恵器2点、土師質土器41点、瓦質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-28

調査区西部で検出した南北溝跡で、北側は調査区外へ続く。幅0.19～0.71m、深さ2～14cmを測り、基底面は南(4.124m)から北(4.114m)に傾斜し、9.20mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器2点、土師器7点、須恵器3点、土師質土器8点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-29

調査区西部で検出した南北溝跡で、幅0.19～0.38m、深さ2～8cmを測り、基底面は北(4.196m)から南(4.103m)に傾斜し、6.10mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト

で、出土遺物には弥生土器3点、土師器2点、須恵器1点、土師質土器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-30(図3-42)

調査区西部で検出した南北溝跡で、幅0.16～0.37m、深さ5～16cmを測り、基底面は北(4.115m)から南(4.066m)に傾斜し、7.60mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトで、出土遺物には須恵器2点、土師質土器122点がみられたが、図示できるものはなかった。

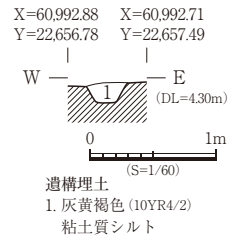


図3-42 SD-30

SD-31

調査区西部で検出した弧を描く溝跡で、幅0.19～0.29m、深さ3～7cmを測り、基底面は西(3.964m)から東(3.938m)に傾斜し、12.90mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトで、出土遺物には須恵器1点、土師質土器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-32

調査区西部で検出した溝跡で、幅0.32～1.21m、深さ2～8cmを測り、基底面は北(3.996m)から南(3.806m)に傾斜し、21.50mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には土師器7点、須恵器26点、土師質土器94点、瓦器1点、瓦質土器19点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-33

調査区西部で検出した東西溝跡で、幅0.29～0.42m、深さ2～7cmを測り、基底面は西(4.064m)から東(4.025m)に傾斜し、10.40mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫が混じるにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトで、出土遺物には須恵器2点、土師質土器6点、瓦質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

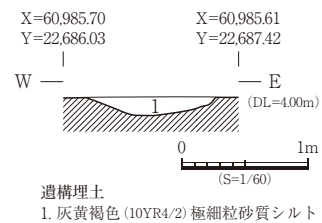


図3-43 SD-34

SD-34(図3-43)

調査区南西部で検出した区画溝と考えられるもので、「コ」字状を呈する。幅0.34～1.19m、深さ3～20cmを測り、基底面は西(3.964m)から南東(3.520m)に傾斜し、50.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器96点、土師器50点、須恵器79点、土師質土器680点、瓦器4点、瓦質土器24点、青磁1点、白磁2点、土製品2点がみられ、瓦質土器1点(375)、青磁1点(376)、土製品2点(377・378)が図示できた。

出土遺物

瓦質土器(図3-44 375)

375は播鉢の口辺部から底部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明であるが、内面に

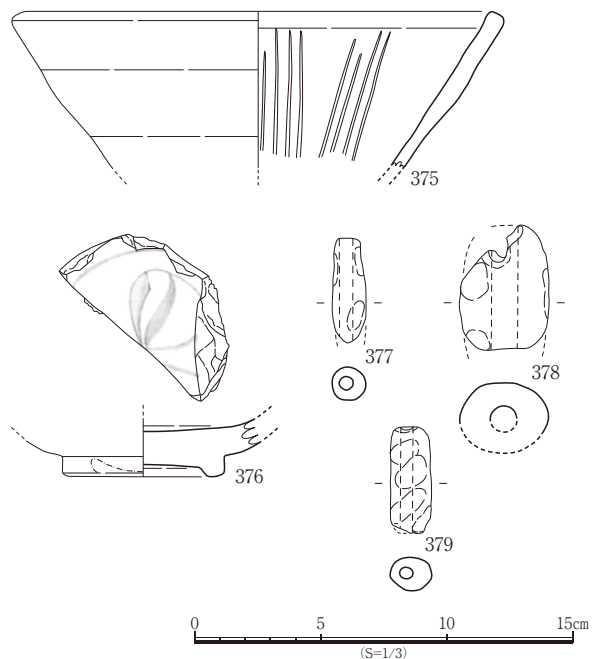


図3-44 SD-34・42出土遺物実測図

2. II区 (1) 上面検出遺構

4条単位の条痕が認められる。胎土には中粒～粗粒砂を含む。

青磁(図3-44 376)

376は碗の底部破片で、見込みには劃花文を施す。底部内面は露胎で、胎土は精良である。

土製品(図3-44 377・378)

377・378は土錘である。377は片側を欠損し、胎土には細粒～中粒砂を含む。378は大部分を欠損し、胎土は精良である。

SD-35

調査区西部で検出した溝跡で、幅0.28～0.75m、深さ3～12cmを測り、基底面は北西(3.947m)から南(3.788m)に傾斜し、10.60mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は1層が灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト、2層が黄褐色(2.5Y5/3)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器6点、土師器10点、須恵器12点、土師質土器109点、瓦器1点、瓦質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-36

調査区西部で検出した東西溝跡で、幅0.25～0.52m、深さ4～9cmを測り、基底面は西(3.912m)から東(3.842m)に傾斜し、10.50mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器14点、土師器5点、須恵器4点、土師質土器11点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-37(図3-45)

調査区南部で検出した東西溝跡である。SB-9とSA-3に伴う区画溝と考えられるもので、東側は調査区外へ続く。幅0.28～0.67m、深さ3～19cmを測り、基底面は西(3.991m)から東(3.681m)に傾斜し、52.60mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は小礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)極細粒～細粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器48点、土師器109点、須恵器84点、土師質土器378点、瓦質土器46点、備前焼1点がみられたが、図示できるものはなかった。

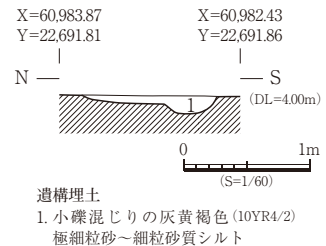


図3-45 SD-37

SD-38

調査区南西部で検出した東西溝跡で、幅0.24～0.41m、深さ2～4cmを測り、基底面はほぼ水平で、2.00mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルトで、出土遺物には須恵器1点、土師質土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-39

調査区南西部で検出した東西溝跡で、幅0.45～0.78m、深さ2～14cmを測り、基底面はほぼ水平で、9.10mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器5点、土師器6点、須恵器8点、土師質土器16点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-40

調査区南西部で検出した東西溝跡で、幅は不明である。深さ6～8cmを測り、基底面はほぼ水平で、1.50mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器3点、土師器36点、須恵器17点、土師質土器88点、瓦器1点、瓦質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-41

調査区南西部で検出した東西溝跡で、幅0.17～0.38m、深さ2～10cmを測り、基底面は東(3.878m)から西(3.847m)に傾斜し、4.70mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器1点、土師器1点、土師質土器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-42

調査区南西部で検出した南北溝跡で、幅0.19～0.46m、深さ2～16cmを測り、基底面は北(3.872m)から南(3.706m)に傾斜し、7.50mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には土師器22点、須恵器7点、土師質土器95点、瓦質土器3点、土製品1点がみられ、土製品1点(379)が図示できた。

出土遺物

土製品(図3-44 379)

379は土錘である。一部を欠損し、胎土には細粒砂を含む。

SD-43

調査区南西部で検出した南北溝跡で、幅0.31～0.74m、深さ2～14cmを測り、基底面は北(3.934m)から南(3.808m)に傾斜し、7.70mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器80点、土師器7点、須恵器7点、土師質土器118点、瓦質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-44

調査区南西部で検出した南北溝跡で、幅0.34～0.76m、深さ5～10cmを測り、基底面は北(3.828m)から南(3.815m)に傾斜し、8.40mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器6点、土師器4点、須恵器8点、土師質土器62点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-45

調査区南西部で検出した南北溝跡で、幅0.24～0.38m、深さ3～10cmを測り、基底面はほぼ水平で、9.70mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器11点、土師器6点、須恵器2点、土師質土器31点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-46

調査区南西部で検出した南北溝跡で、幅0.24～0.64m、深さ5～17cmを測り、基底面は北(3.711m)から南(3.693m)に傾斜し、12.50mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器12点、土師器12点、須恵器9点、土師質土器100点、瓦質土器7点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-47

調査区南西部で検出した南北溝跡で、幅0.29～0.49m、深さ3～8cmを測り、基底面は北(3.825m)から南(3.767m)に傾斜し、6.40mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器4点、土師器2点、須恵器3点、土師質土器51点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-48

調査区中央部で検出した東西溝跡で、幅0.20～0.74m、深さ3～8cmを測り、基底面はほぼ水平で、

2. II区 (1) 上面検出遺構

14.90mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器4点、土師器5点、須恵器35点、土師質土器85点、瓦質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-49

調査区南部で検出した南北溝跡で、南側は調査区外へ続く。幅0.31～0.75m、深さ1～6cmを測り、基底面は北(3.881m)から南(3.653m)に傾斜し、25.50mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器37点、土師器3点、須恵器3点、土師質土器36点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-50

調査区中央部で検出した南北溝跡で、幅0.17～0.34m、深さ1～10cmを測り、基底面は北(3.838m)から南(3.763m)に傾斜し、10.90mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器2点、須恵器2点、土師質土器64点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-51

調査区南部で検出した南北溝跡で、南側は調査区外へ続く。幅0.27～0.38m、深さ2～9cmを測り、基底面は北(3.866m)から南(3.608m)に傾斜し、24.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫が混じる灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器4点、須恵器2点、土師質土器13点、瓦質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-52

調査区南部で検出した東西溝跡で、幅0.26～0.30m、深さ2～4cmを測り、基底面はほぼ水平で、6.10mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土はにぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器1点、土師質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-53

調査区南部で検出した南北溝跡で、幅0.13～0.46m、深さ2～5cmを測り、基底面は北(3.789m)から南(3.765m)に傾斜し、7.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫が混じる灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器4点、土師器2点、須恵器8点、土師質土器29点がみられたが、図示できるものはなかった。

⑤ 井戸跡

SE-1(図3-46)

調査区中央部で検出した上下3部構成の井戸跡で、上部と下部は石組、中央部が木製の円形桶側1段積みとなっていた。掘方は検出面で、東西1.69m、南北1.65mで、深さは2.56mを測る。掘削は上端から0.71mまで斜めに掘り込み、その後はほぼ垂直に掘り込んでいた。基底部には角礫を積み重ね、その上に円形桶側を設置し、円礫を裏込として入っていた。桶側の上には簡易な石組を行っており、埋土は

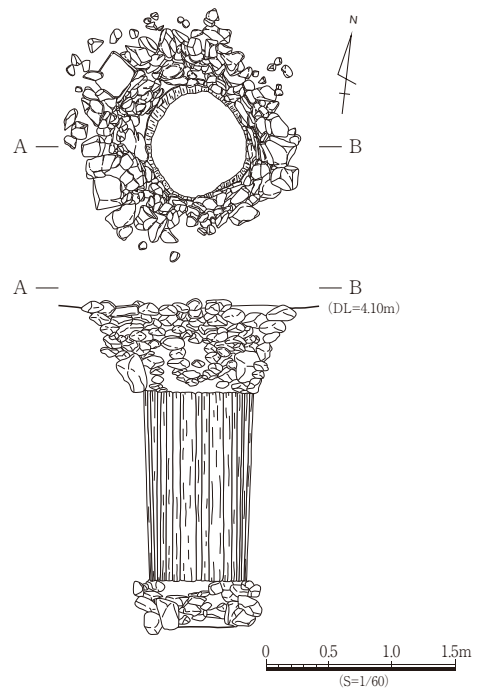


図3-46 SE-1

上層が中礫が混じる灰褐色(7.5YR4/2)シルト質粘土, 下層が褐灰色(7.5YR5/1)粘土であった。出土遺物には弥生土器 27 点, 土師器 2 点, 須恵器 16 点, 土師質土器 39 点, 瓦質土器 17 点, 青磁 1 点, 石製品 3 点, 木製品 4 点がみられ, 土師器 1 点(380), 瓦質土器 1 点(381), 石製品(382~384), 木製品(385~388)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-47 380)

380 は壺の口辺部から胴部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが, 口辺部内面にヨコナデ調整が認められる。胎土には細粒砂~小礫を含む。

瓦質土器(図3-47 381)

381 は播鉢の口辺部から体部にかけての破片で, 内面にナデ, 口辺部外面にヨコナデ, 体部外面に

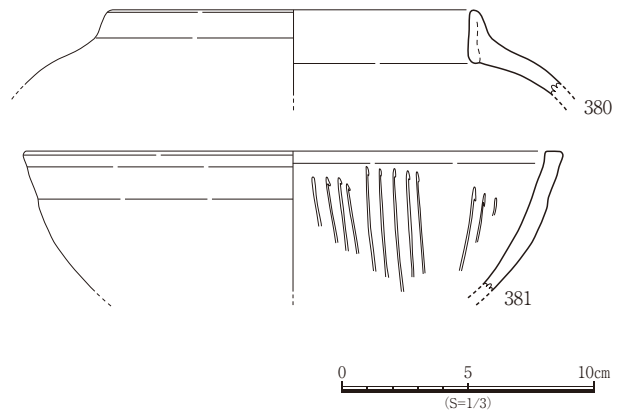


図3-47 SE-1出土遺物実測図1

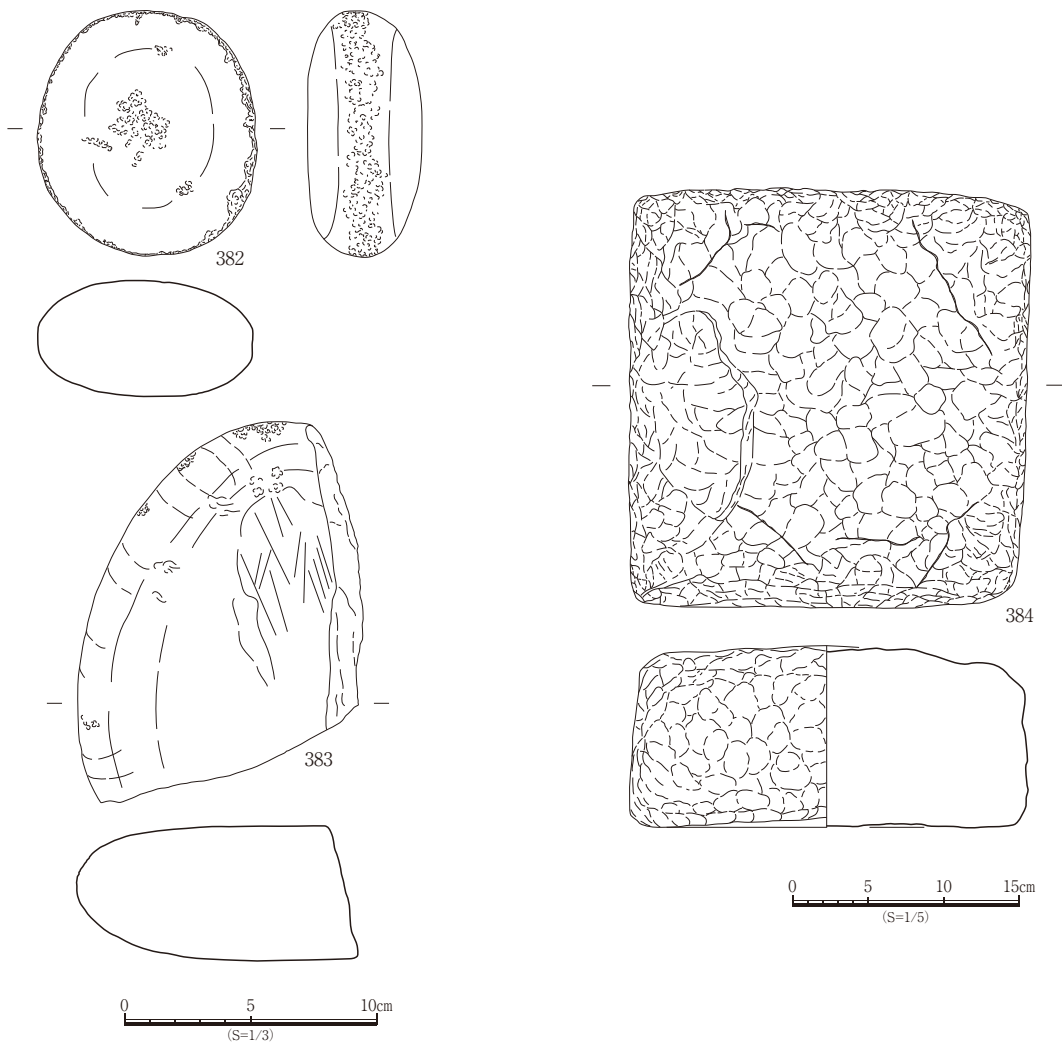


図3-48 SE-1出土遺物実測図2

2. II区 (1) 上面検出遺構

ナデを施す。内面に5条単位の条痕が認められ、胎土には細粒砂を含む。

石製品(図3-48 382~384)

382・383は叩石である。382は片面と側面全体に敲打痕が認められ、石材は砂岩である。383は側面1カ所に敲打痕が認められ、石材は砂岩である。

384は地輪と考えられるものである。風化のため調整は不明で、石材は砂岩である。

木製品(図3-49 385~388)

385・386は曲物の底板と考えられるもので、ともに柁目取りで作られる。大部分を欠損しており、表面には加工痕が認められる。樹種はヒノキである。

387・388は円形桶側の側板である。ともに板目取りで作られ、下端部は欠損する。内側と下部は木瘦せし、木目が目立ち、部分的に加工痕が認められる。箍の跡が外側に3カ所みられ、樹種はスギである。

⑥ 柱穴

P-1

調査区北部で検出した柱穴である。長径34cm、短径30cmの円形で、深さ19cmを測る。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトで、出土遺物には須恵器2点、土師質土器12点、石製品1点がみられ、石製品1点(389)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-50 389)

389は砥石である。片面のみに使用痕が認められ、石材は砂岩である。

P-2

調査区中央部で検出した柱穴である。長径37cm、短径32cmの楕円形で、深さ11cmを測る。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器1点、須恵器1点、石製品1点がみられ、石製品1点(390)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-50 390)

390は叩石である。側面の大部分と片面に敲打痕が認められ、石材は砂岩である。

P-3

調査区西部で検出した柱穴である。長径25cm、短径24cmの円形で、深さ16cmを測る。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトで、出

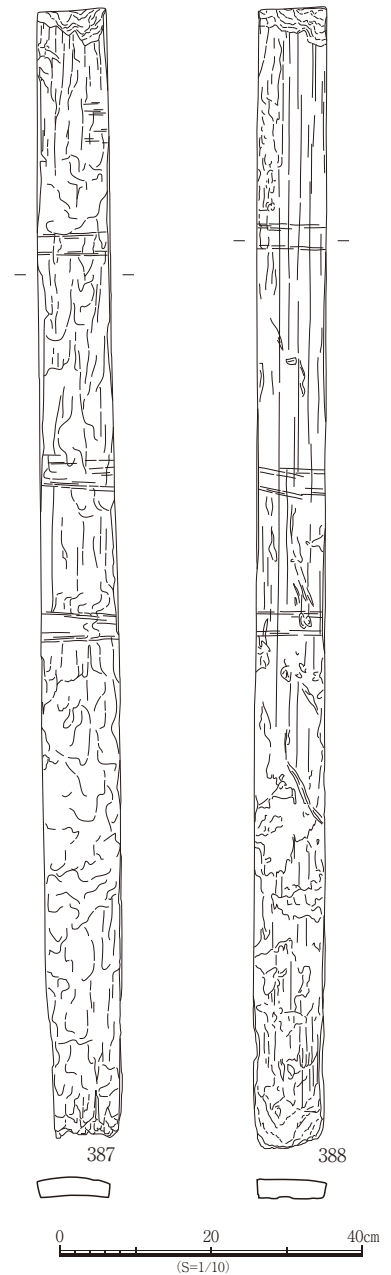
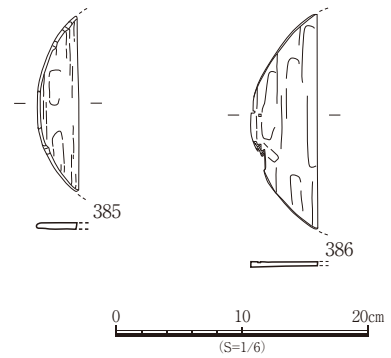


図3-49 SE-1出土遺物実測図3

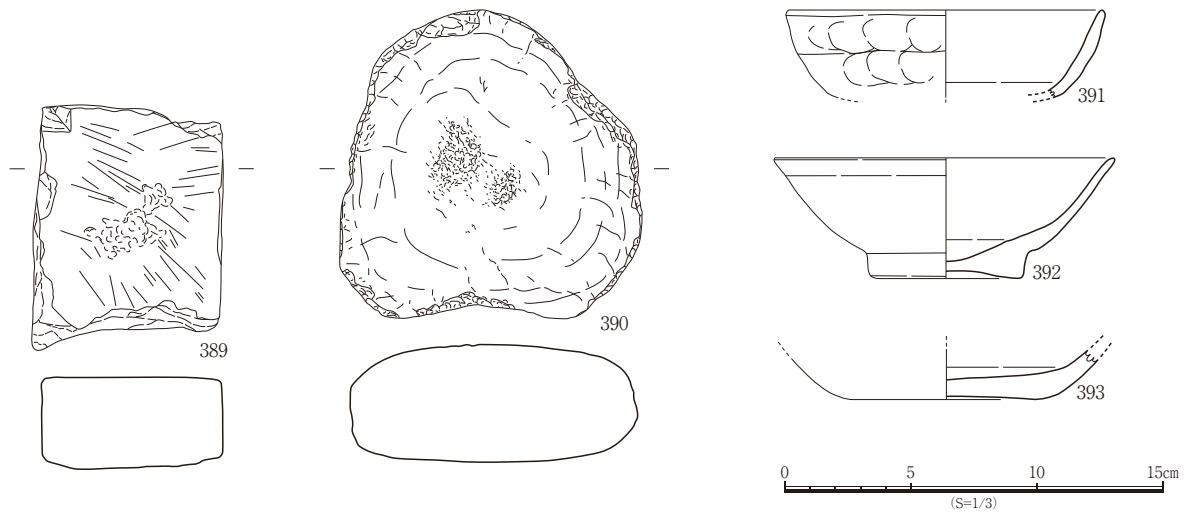


図3-50 P-1~4出土遺物実測図

土遺物には土師質土器3点がみられ、土師質土器1点(391)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-50 391)

391は杯の口辺部から体部にかけての破片である。手づくね成形とみられ、摩耗のため調整は不明であり、胎土は精良である。

P-4

調査区南西部で検出した柱穴である。長径28cm、短径26cmの円形で、深さ9cmを測る。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトで、出土遺物には土師質土器3点がみられ、うち1点(392)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-50 392・393)

392・393は杯である。392は全体の形状が復元できたもので、摩耗のため調整は不明である。胎土には細粒~粗粒砂を含む。393は底部破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には細粒~小礫を含む。

(2) 下面検出遺構

土坑・溝跡・柱穴が検出されており、古代と中世の掘立柱建物跡が検出された。

① 掘立柱建物跡

SB-10(図3-51)

調査区南東部で検出した桁行3間(6.00~6.10m)、梁行2間(4.10m)の南北棟建物跡で、大きく歪んでいる。棟方向はN-14°-Eを示し、柱間寸法は桁行(南北)が1.70~2.40m、梁行(東西)が1.70・2.40mである。柱穴は概ね円形を呈し、径38~49cmを測る。埋土は灰褐色(7.5YR4/2)砂質シルトないし灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器3点、土師器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

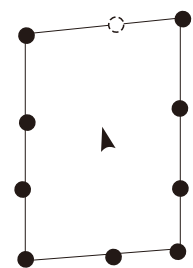


図3-51 SB-10

SB-11(図3-52)

調査区南東部で検出した桁行3間(7.20m)、梁行1間(2.30m)以上の南北棟と考えられる建物跡で、東側は調査区外へ続く。棟方向はN-12°-Eを示し、柱間寸法は桁行(南北)が2.05~2.40m、梁行(東

2. II区 (2) 下面検出遺構

西)が2.30mである。柱穴は概ね円形を呈し、径38～53cmを測る。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器1点、土師器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-12(図3-53)

調査区南東部で検出した桁行3間(4.70m)、梁行2間(3.20m)の南北棟建物跡である。棟方向はN-11°-Eを示し、柱間寸法は桁行(南北)が1.50～1.70m、梁行(東西)が1.40・1.80mである。柱穴はやや崩れているものの方角を指向しているとみられ、一辺68～91cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器4点、須恵器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

② 土坑

SK-11

調査区北部で検出した楕円形を呈する土坑で、長径1.49m、短径0.82m、深さ4～6cmを測り、長軸方向はN-12°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色(10YR3/1)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器254点がみられ、うち3点(394～396)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-54 394～396)

394は壺の口辺部から胴部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には細粒砂～小礫を多く含む。

395・396は甕の底部破片である。395は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にはナデ調整が認められる。胴部内面には炭化物が付着し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。396は摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。

SK-12(図3-55)

調査区中央部で検出した不整形を呈する土坑で、SD-54に切られる。長辺2.13m、短辺1.52m、深さ10～14cmを測り、長軸方向はN-68°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は1層が炭化物を含む黒褐色(7.5YR3/1)シルト、2層が黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト、3層がにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトのブロッ

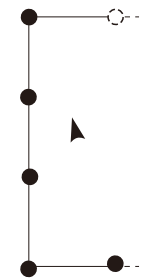


図3-52 SB-11

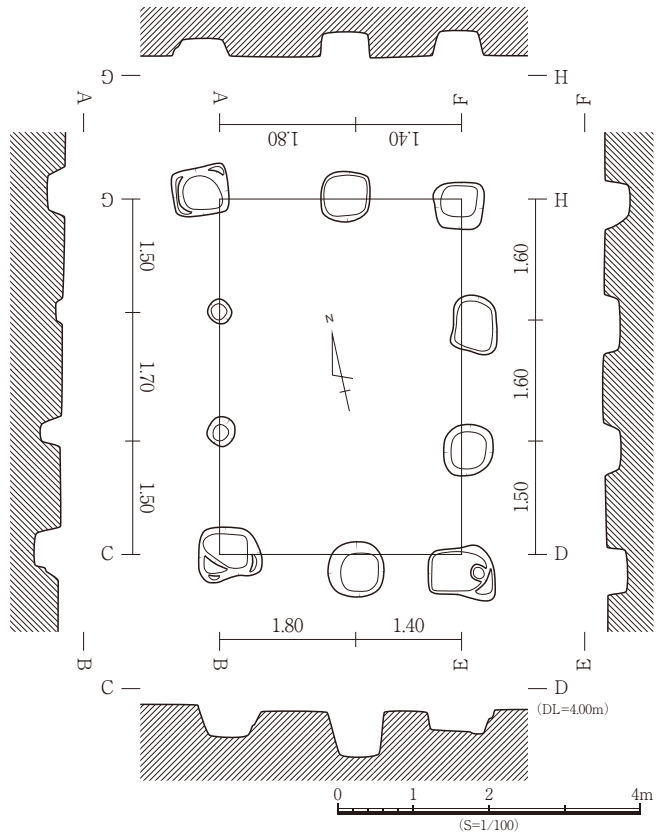


図3-53 SB-12

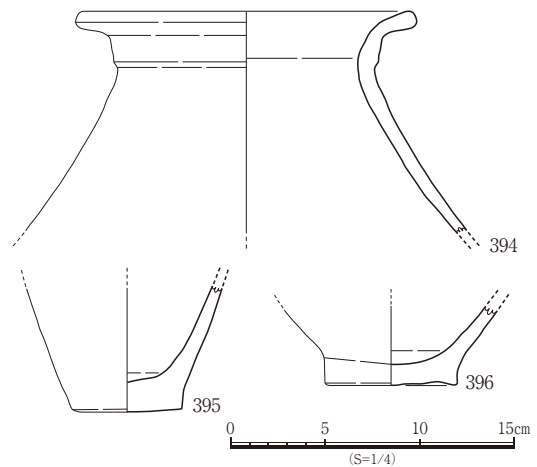


図3-54 SK-11出土遺物実測図

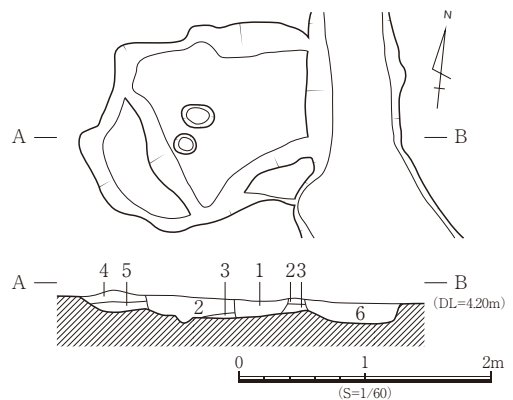
クが少し混じる暗褐色(10YR3/3)シルト, 4層が褐灰色(7.5Y4/1)シルト, 5層がにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトのブロックが少し混じる黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト, 出土遺物には弥生土器739点, 石製品2点がみられ, 弥生土器3点(397~399), 石製品2点(400・401)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-56 397~399)

397・398は壺と考えられるものである。397は口辺部破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが, 外面の一部にハケ調整が認められる。内面には煤が付着し, 胎土には中粒砂~小礫を多く含む。398は胴部から底部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが, 胴下部外面にヘラミガキ調整, 胴部下端にハケ調整とナデ調整が認められる。胎土には中粒砂~小礫を多く含む。

399は甕と考えられる口辺部から胴部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが, 口辺部外面にヨコナデ調整, 胴部外面にハケ調整が認められる。口縁端部に刻目, 胴部外面に沈線を配し, 胎土には中粒砂~小礫を含む。



遺構埋土

1. 炭化物を含む黒褐色(7.5YR3/1)シルト(SK-12)
2. 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト(SK-12)
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトのブロックが少し混じる暗褐色(10YR3/3)シルト(SK-12)
4. 褐灰色(7.5Y4/1)シルト(SK-12)
5. にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトのブロックが少し混じる黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト(SK-12)
6. 炭化物を少し含む黒褐色(10YR3/2)シルト質砂(SD-54)

図3-55 SK-12・SD-54

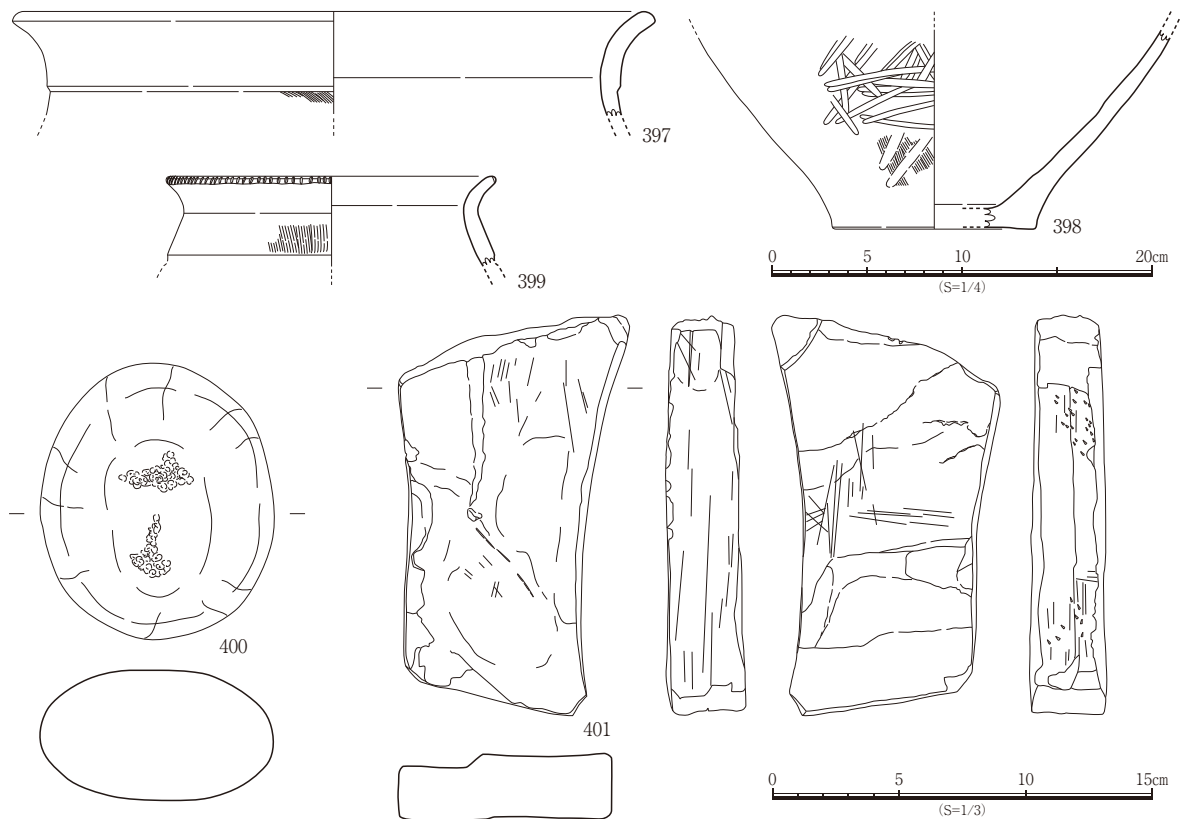


図3-56 SK-12出土遺物実測図

2. II区 (2) 下面検出遺構

石製品(図3-56 400・401)

400は叩石である。片面に敲打痕が認められ、石材は砂岩である。

401は砥石である。両面と2ヵ所の側面に使用痕が認められ、側面1ヵ所には平面形が三角形を呈する敲打痕が残る。石材は砂岩である。

SK-13

調査区中央部で検出した不整形を呈する土坑で、長辺0.98m、短辺0.76m、深さ6～9cmを測り、長軸方向はN-61°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土で、出土遺物には弥生土器13点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-14

調査区中央部で検出した不整形を呈する土坑で、長辺1.28m、短辺0.84m、深さ9～27cmを測り、長軸方向はN-54°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土はにぶい黄褐色(10YR5/3)シルトのブロックが少し混じる黒褐色(10YR3/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器76点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-15

調査区中央部で検出した長方形を呈する土坑で、長辺1.61m、短辺0.69m、深さ9～11cmを測り、長軸方向はN-62°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は橙色(7.5YR6/6)シルトのブロックが少し混じる黒褐色(10YR3/1)シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-16

調査区東部で検出した楕円形を呈する土坑で、長径1.69m、短径0.98m、深さ10～51cmを測り、長軸方向はN-44°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は1層が中礫混じりの黒色(N2/)粘土、2層が黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土で、出土遺物には弥生土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-17

調査区南部で検出した不整形を呈する土坑で、長辺0.88m、短辺0.66m、深さ3～10cmを測り、長軸方向はN-57°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は明黄褐色(10YR6/6)シルトのブロックが少し混じる黒褐色(10YR3/2)粘土で、出土遺物は皆無であった。

SK-18(図3-57)

調査区南部で検出した楕円形を呈する土坑で、長径1.49m、短径1.27m、深さ30～32cmを測り、長軸方向はN-4°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は1層が中礫混じりの黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト、2層が中礫混じりのオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-19

調査区南部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、長辺1.43m、短辺1.21m、深さ23～26cmを測り、長軸方向はN-44°-Wを示す。

断面は逆台形状を呈し、埋土は1層が小礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質砂、2層がオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器1点がみられたが、図示できるものではなかった。

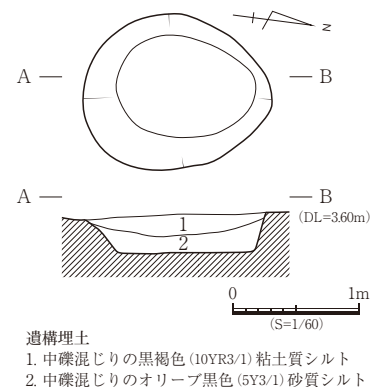


図3-57 SK-18

SK-20

調査区南部で検出した不整形円形を呈する土坑で、長径1.62m、短径1.49m、深さ14～45cmを測り、長軸方向はN-16°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は1層が暗灰色(N3/)粘土、2層が中・大礫混じりの暗緑灰色(5G3/1)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器74点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-21

調査区南部で検出した長方形を呈する土坑で、長辺1.91m、短辺1.24m、深さ14～19cmを測り、長軸方向はN-29°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は1層がにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトのブロックが少し混じる褐色(7.5YR4/1)砂質シルト、2層が中礫混じりの黒褐色(7.5YR2/2)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器26点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-22(図3-58)

調査区南部で検出した不整形方形を呈する土坑で、長辺1.68m、短辺0.83～1.05m、深さ19～21cmを測り、長軸方向はN-32°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は1層が黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト、2層が中・大礫混じりの黒褐色(7.5YR3/2)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

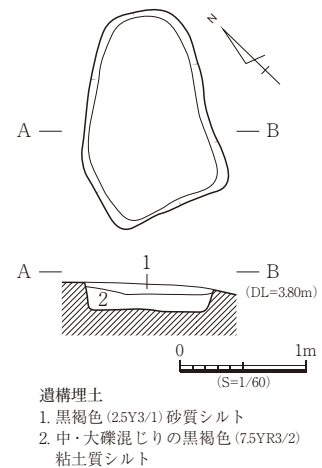


図3-58 SK-22

SK-23

調査区南東部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、長辺0.99m、短辺0.96m、深さ8～12cmを測り、長軸方向はN-46°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は黒色(7.5Y2/1)粘土で、出土遺物には弥生土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-24

調査区南東部で検出した不整形楕円形を呈する土坑で、長径1.32m、短径1.03m、深さ3～11cmを測り、長軸方向はN-77°-Eを示す。断面は不整形舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、出土遺物には土師質土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-25

調査区南東部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、長辺0.82m、短辺0.77m、深さ10～12cmを測り、長軸方向はN-43°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は中礫混じりの黒色(7.5Y2/1)粘土で、出土遺物には土師質土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-26

調査区南東部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、長辺0.87m、短辺0.83m、深さ7～12cmを測り、長軸方向はN-34°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂のブロックが少し混じる黒褐色(10YR3/1)砂質シルトで、出土遺物には土師質土器1点がみられたが、図示できるものではなかった。

③ 溝跡

SD-54(図3-55)

調査区中央部で検出した溝跡で、幅0.51～1.26m、深さ10～16cmを測り、基底面は北(4.023m)か

2. II区 (2) 下面検出遺構

ら南東(3.791m)に傾斜し、8.70mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物を少し含む黒褐色(10YR3/2)シルト質砂で、出土遺物には弥生土器848点、石製品1点がみられ、弥生土器4点(402~405)、石製品1点(406)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-59 402~405)

402は壺と考えられる底部破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には細粒砂~小礫を多く含む。

403~405は甕と考えられるものである。403は口辺部破片で、摩耗のため調整は不明である。口縁端部に刻目を施し、胎土には中粒砂~小礫を多く含む。404・405は底部破片である。404は摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂~小礫を含む。405は摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にハケ調整が認められ、胎土には中粒砂~小礫を含む。

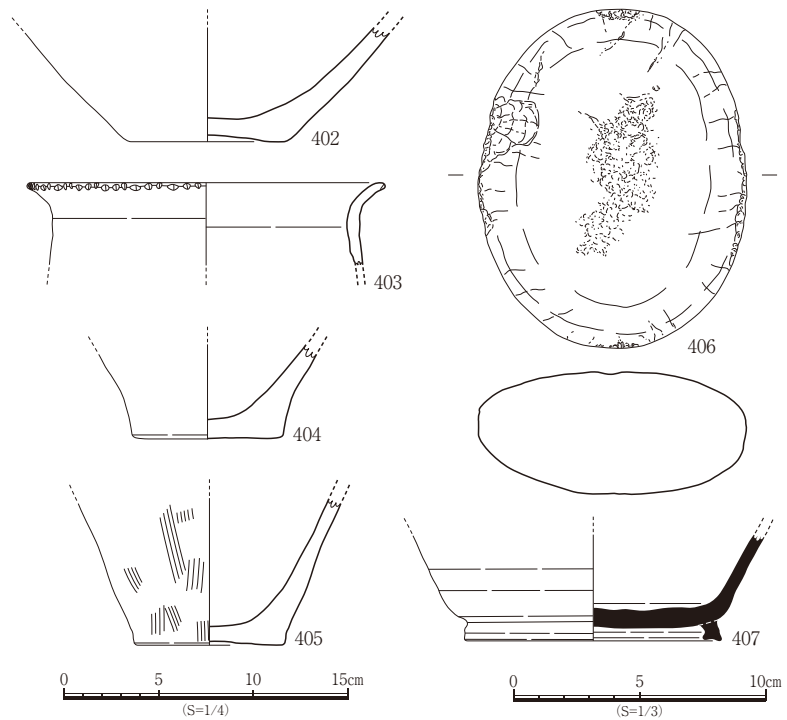


図3-59 SD-54・57出土遺物実測図

石製品(図3-59 406)

406は叩石である。両面と側面4カ所に敲打痕が認められ、石材は砂岩である。

SD-55

調査区東部で検出した溝跡で、幅0.29~0.53m、深さ3~10cmを測り、基底面は北東(3.898m)から南西(3.845m)に傾斜し、5.60mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土で、出土遺物には弥生土器13点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-56

調査区東部で検出した溝跡で、幅0.18~0.83m、深さ3~14cmを測り、基底面は北東(3.881m)から南西(3.559m)に傾斜し、13.00mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルト質砂で、出土遺物には弥生土器12点、土師器5点、須恵器3点、土師質土器34点、瓦質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-57(図3-60)

調査区南東部で検出した溝跡で、幅0.56~1.09m、深さ22~61cmを測り、基底面は北東(3.161m)から南西(3.147m)に傾斜し、31.60mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト、2層が黒褐色(10YR3/1)シルト、3層が明黄褐色(10YR6/6)シルトのブロックが少し混じる黒色(2.5Y2/1)シルト質粘土、4層が黄褐色(10YR5/6)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)砂質シルトで、出土遺物には弥生土器117点、土師器12点、須恵器4点、土師質土器29点がみられ、須恵器1点(407)

が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-59 407)

407は杯で、口辺部を欠損する。体部内外面と底部外面には回転ナデ、底部内面にはナデを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。

④ 柱穴

P-5

調査区北部で検出した柱穴である。長径44cm、短径35cmの楕円形で、深さ21cmを測る。埋土は灰褐色(7.5YR4/2)シルトで、出土遺物には弥生土器17点がみられ、うち2点(408・409)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-61 408・409)

408・409は甕と考えられるものである。408は口辺部から胴部にかけての破片で、摩耗のため調整は不明である。口縁端部に刻目、胴部外面に6条の沈線を配し、胎土には細粒砂～小礫を含む。409は胴部から底部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部外面にハケ調整が認められる。胎土には中粒砂～小礫を含む。

P-6

調査区北部で検出した柱穴である。長径38cm、短径32cmの楕円形で、深さ4cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトで、出土遺物には土師質土器1点(410)がみられ、図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-62 410)

410は皿と考えられる底部破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には細粒砂を含む。

P-7

調査区北部で検出した柱穴である。径46cmの円形とみられ、深さ5cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトで、出土遺物には土師質土器5点がみられ、土師質土器1点(411)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-62 411)

411は杯の底部破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂を含む。

P-8

調査区西部で検出した柱穴である。長辺28cm、短辺17cmの長方形で、深さ12cmを測る。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)シルトで、出土遺物には瓦質土器1点(412)がみられ、図示できた。

出土遺物

瓦質土器(図3-62 412)

412は鍋の口辺部から胴部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には細粒～中粒

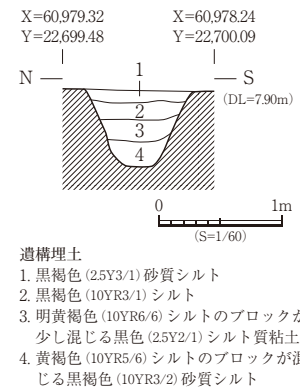


図3-60 SD-57

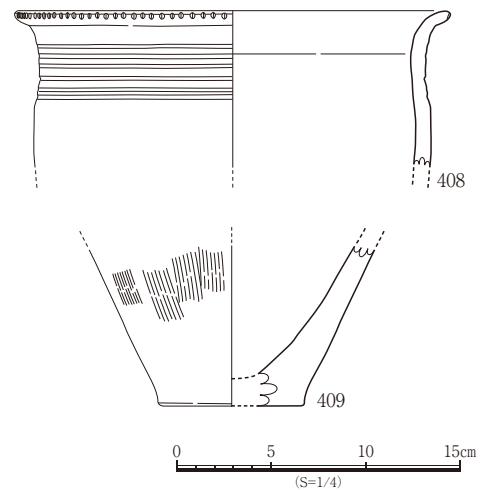


図3-61 P-5出土遺物実測図

2. II区 (2) 下面検出遺構

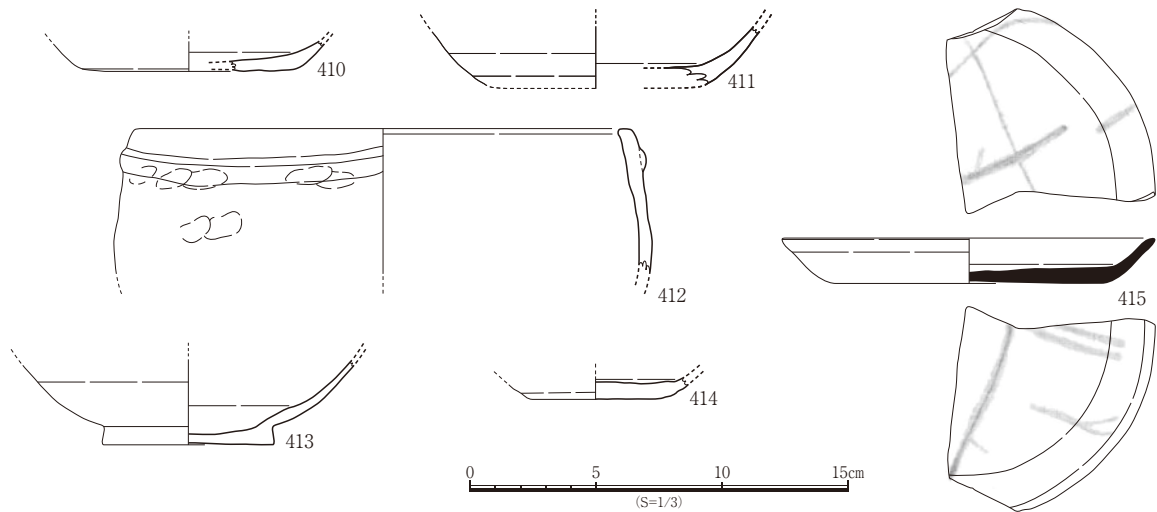


図3-62 P-6~11出土遺物実測図

砂を含む。

P-9

調査区西部で検出した柱穴である。長径74cm、短径48cmの楕円形で、深さ14cmを測る。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)シルトで、出土遺物には弥生土器1点、土師質土器11点がみられ、土師質土器1点(413)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-62 413)

413は杯の体部から底部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には細粒～中粒砂を含む。

P-10

調査区南西部で検出した柱穴である。径28cmの円形で、深さ17cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器1点、須恵器1点、土師質土器5点がみられ、土師質土器1点(414)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-62 414)

414は小皿と考えられる底部破片である。摩耗のため調整は不明であるが、体部外面には回転糸切り痕が認められる。胎土には中粒～粗粒砂を含む。

P-11

調査区東部で検出した柱穴である。東側が調査区外へ続き規模は不明であるが、平面形は隅丸方形とみられる。深さは7～18cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトで、出土遺物には須恵器1点(415)がみられ、図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-62 415)

415は皿で、器面には回転ナデを施す。底部切り離しは回転ヘラ切りで、切り離しのあとのナデ調整が認められる。内外面に火襷が認められ、胎土には細粒砂を含む。

第Ⅳ章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

辻 康男・辻本裕也・田中義文・伊藤良永・松元 美由紀

1. はじめに

本報告では、Ⅰ区の開析谷内に累重する堆積層およびⅡ区の段丘面上で検出された井戸埋土の自然科学分析から、古環境復元とその変遷の検討を行う。実施した分析項目は、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、微細物分析、放射性炭素年代測定である。

2. 試料

分析試料は、開析谷内のⅠ区の1地点(試料番号1~10)と2地点(試料番号11~14)、段丘面上のⅡ区の3地点(試料番号15)の鎌倉時代の井戸SE-1底部付近の埋土である。図4-1にⅠ区の分析層準、後のページに掲載している図4-7に、Ⅰ・Ⅱ区の分析地点の位置を示す。放射性炭素年代試料は、1地点においてC14-1~C14-4の4点を採取した。珪藻分析は、1地点の1~10の10点である。花粉分析は、1地点の試料番号5を除く試料9点と3地点の15の合計10点である。植物珪酸体分析は、1地点の1~10と2地点の11~14の14点である。微細物分析用試料は、1地点の試料番号2、3地点の試料番号15の2点である。貝同定試料は、3地点の試料番号15に相当する貝化石が集中して含まれる埋土から抽出された貝である。

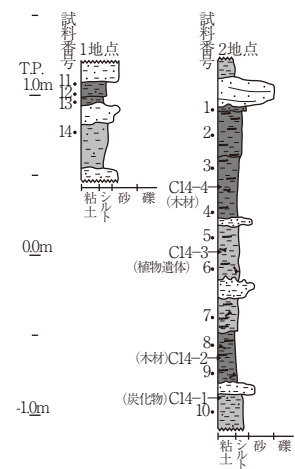


図4-1 分析試料採取位置図

3. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料にHClを加え炭酸塩等酸可溶成分を除去、次にNaOHを加え腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、再度HClを加えアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去をそれぞれ行う(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(Ⅱ)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点と

3. 分析方法 (4) 植物珪酸体分析

した年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

(2) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer & Lange-Bertalot(1986,1988,1991a,1991b)、渡辺(2005)、小林ほか(2006)、などを参照し、分類体系はRound, Crawford & Mann(1990)に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢(2000)に従う。

同定結果は、中心類(Centric diatoms:広義のコアミケイソウ綱Coscinodiscophyceae)と羽状類(Pennate diatoms)に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類(Araphid pennate diatoms:広義のオビケイソウ綱Fragilariophyceae)と有縦溝羽状珪藻類(Raphid pennate diatoms:広義のクサリケイソウ綱Bacillariophyceae)に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性は、Vos & de Wolf(1993)を参考とするほか、塩分濃度に対する区分はLowe(1974)に従い、真塩性種(海水生種)、中塩性種(汽水生種)、貧塩性種(淡水生種)に類別する。また、貧塩性種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、産出率3.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、海水生種(真塩性種)～汽水生種(中塩性種)は小杉(1988)、貧塩性種は安藤(1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性はAsai & Watanabe(1995)、渡辺(2005)の環境指標種を参考とする。

(3) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(4) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で

全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類にもとづいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物 1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。なお、結果は、100の位で丸めて表示する。

(5) 微細物分析

試料100ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料と単体試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実や炭化材(主に径4mm以上)、昆虫、貝類などを抽出する。抽出された種実を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等の図鑑との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。分析後は、種実等を種類別に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液で液浸し返却する。

(6) 貝類同定

ルーペや双眼実体顕微鏡等を用いて、形態的特徴から種類を同定する。

4. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表4-1に示す。表4-2に示した暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。C14-1は6150±40 yrs BP(2σ:cal BC 5126-4998,7166-6938 cal BP), C14-2は5960±40 yrs BP(2σ:cal BC 4938-4728,6888-6678 cal BP), C14-3は4710±40 yrs BP(2σ:cal BC 3633-3373,5583-5323 cal BP), C14-4は4360±40 yrs BP(2σ:cal BC 3090-2902,5040-4852 cal BP)である。試料の質は、C14-1が炭化物、C14-2が木材、C14-3が植物遺体、C14-4が木材である。

(2) 珪藻分析

結果を表4-4~7、図4-2に示す。また、珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を表4-3に示す。何れの試料も珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は、下部の試料番号10が約40%であった他は70%前後である。産出分類群数は、合計で56属155分類群である。以下に珪藻化石群集

表4-1 放射性炭素年代測定結果

試料名	試料の質	補正年代 BP	δ 13 C (‰)	測定年代 BP	Code.No.
C14-1	炭化物	6150 ± 40	-28.39 ± 0.58	6200 ± 40	IAAA-72924
C14-2	木材	5960 ± 40	-29.59 ± 0.67	6030 ± 40	IAAA-72925
C14-3	植物遺体	4710 ± 40	-25.56 ± 0.70	4720 ± 40	IAAA-72926
C14-4	木材	4360 ± 40	-25.88 ± 0.67	4380 ± 40	IAAA-72927

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4. 結果 (2) 珪藻分析

表4-2 暦年較正結果

試料番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)								相対比	Code No.					
		σ	cal	BC		-	cal	BC				cal	BP		-	
C14-1	6148 ± 41	σ	cal	BC	5,207	-	cal	BC	5,145	cal	BP	7,157	-	7,095	0.438	IAAA-72924
			cal	BC	5,138	-	cal	BC	5,127	cal	BP	7,088	-	7,077	0.063	
			cal	BC	5,121	-	cal	BC	5,093	cal	BP	7,071	-	7,043	0.181	
			cal	BC	5,081	-	cal	BC	5,037	cal	BP	7,031	-	6,987	0.318	
		2σ	cal	BC	5,216	-	cal	BC	4,988	cal	BP	7,166	-	6,938	1.000	
C14-2	5957 ± 40	σ	cal	BC	4,901	-	cal	BC	4,864	cal	BP	6,851	-	6,814	0.308	IAAA-72925
			cal	BC	4,855	-	cal	BC	4,787	cal	BP	6,805	-	6,737	0.692	
			cal	BC	4,938	-	cal	BC	4,762	cal	BP	6,888	-	6,712	0.928	
			cal	BC	4,760	-	cal	BC	4,728	cal	BP	6,710	-	6,678	0.072	
		2σ	cal	BC	4,938	-	cal	BC	4,762	cal	BP	6,888	-	6,712	0.928	
		2σ	cal	BC	4,760	-	cal	BC	4,728	cal	BP	6,710	-	6,678	0.072	
C14-3	4713 ± 38	σ	cal	BC	3,627	-	cal	BC	3,590	cal	BP	5,577	-	5,540	0.286	IAAA-72926
			cal	BC	3,527	-	cal	BC	3,499	cal	BP	5,477	-	5,449	0.234	
			cal	BC	3,434	-	cal	BC	3,378	cal	BP	5,384	-	5,328	0.481	
		2σ	cal	BC	3,633	-	cal	BC	3,557	cal	BP	5,583	-	5,507	0.309	
			cal	BC	3,538	-	cal	BC	3,491	cal	BP	5,488	-	5,441	0.218	
			cal	BC	3,469	-	cal	BC	3,373	cal	BP	5,419	-	5,323	0.473	
C14-4	4363 ± 36	σ	cal	BC	3,012	-	cal	BC	2,919	cal	BP	4,962	-	4,869	1.000	IAAA-72927
			cal	BC	3,090	-	cal	BC	3,048	cal	BP	5,040	-	4,998	0.115	
			cal	BC	3,032	-	cal	BC	2,902	cal	BP	4,982	-	4,852	0.885	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

の特徴を下位より述べる。

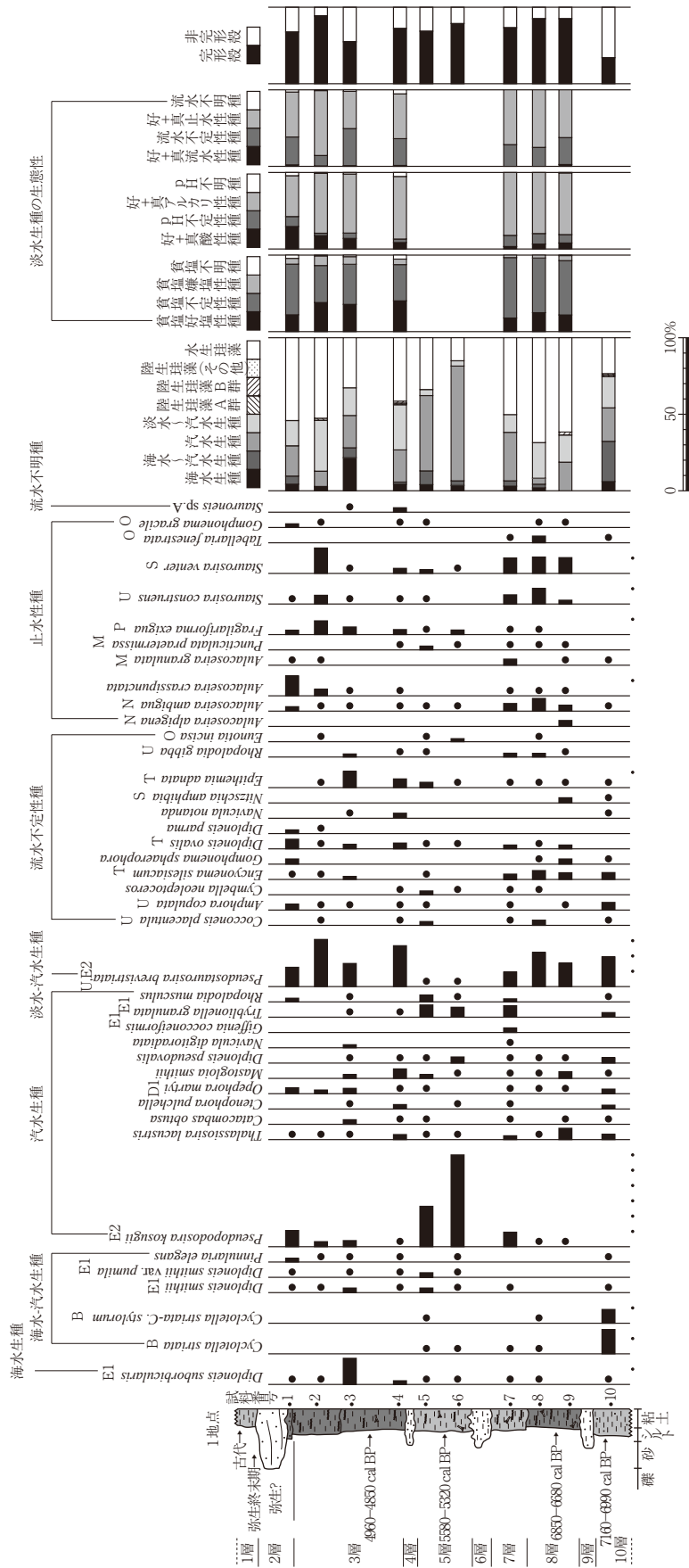
試料番号 10 は、海～汽水生種、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種がほぼ同じ割合で産出する。種類構成は、内湾指標種の *Cyclotella striata* と淡水～汽水生種の *Pseudostaurosira brevistriata* が約 20% 産出し、汽水浮遊性の *Thalassiosira lacustris*、汽水付着性の *Ctenophora pulchella*、*Diploneis pseudovalis*、海水砂質干潟指標種の *Opephora martyi*、海水泥質干潟指標種の *Tryblionella granulata*、淡水生で流水不定性の *Amphora copulata*、*Encyonema silesiacum* 等を伴う。

試料番号 9～7 は、淡水生種が 50～70% と優占し、汽水生種、淡水～汽水生種を伴う。種類構成は、淡水～汽水生種の *Pseudostaurosira brevistriata* が 20% 前後産出し、汽水浮遊性の *Thalassiosira lacustris*、淡水生で好止水性種の *Staurosira venter*、*Staurosira construens*、湖沼沼沢湿地指標種の *Aulacoseira ambigua*、それに、流水不定性の *Encyonema silesiacum* 等を伴う。なお、*Staurosira venter* は、有機汚濁の進んだ腐水域から多産する好汚濁性種である。

試料番号 6, 5 は、汽水生種が優占することで特徴付けられる。種類構成は、汽水付着性で汽水泥質干潟指標種の *Pseudopodosira kosugii* が 30～60% 産出し、汽水付着性で海水泥質干潟指標種の *Tryblionella granulata*、*Diploneis smithii*、*Diploneis smithii* var. *pumila* 等を伴う。

試料番号 4～2 は、淡水生種が 50～30% と多産し、淡水～汽水生種、汽水生種を伴う。なお、試料番号 3 では、海水生種も産出する。種類構成は、淡水～汽水生種の *Pseudostaurosira brevistriata* が約 25% 産出し、海水砂質干潟指標種の *Opephora martyi*、汽水付着性の *Mastogloia smithii*、流水不定性の *Epithemia adnata*、好止水性種の *Staurosira venter*、*Fragilariforma exigua* 等を伴う。なお、試料番号 3 は海水付着性で海水泥質干潟指標種の *Diploneis suborbicularis* が約 20% 産出する。

試料番号 1 は、淡水生種が約 55% 産出し、汽水生種、淡水～汽水生種を伴う。種類構成は、汽水泥質干潟指標種の *Pseudopodosira kosugii*、淡水～汽水生種の *Pseudostaurosira brevistriata*、それに止水付着性の *Aulacoseira crassipunctata* がそれぞれ約 15% 産出し、流水不定性の *Diploneis ovalis*、



海水-汽水-淡水生種産出率・完形破産出率は全体産出率、汽水生種の生態性の比率は汽水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。(B)内湾指標種D1:海水砂質干潟指標種E1:海水泥質干潟指標種E2:汽水泥質干潟指標種N:湖沼浮遊性種、O:湖沼沼澤地指標種、P:高層湿原指標種、S:好汚濁性種、T:好清水性種)

図4-2 I 区開析谷内I地点の主要珪藻化石群集の層位分布

4. 結果 (3) 花粉分析

表4-3 珪藻化石の生態性区分と環境指標種群

塩分濃度に対する区分 Lowe (1974)による		
海水生種	強塩性種 真塩性種(海水生種)	塩分濃度40.0%以上の高濃度海水域に生育する種 塩分濃度40.0～30.0%に生育する種
汽水生種	中塩性種(汽水生種)	塩分濃度30.0～0.5%に生育する種
淡水生種	貧塩性種(淡水生種)	塩分濃度0.5%以下に生育する種
	淡水生種の生態性区分	
塩分	貧塩好塩性種	少量の塩分がある方が良く生育する種
	貧塩不定性種	少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種
	貧塩嫌塩性種	少量の塩分にも耐えることができない種
	広域塩性種	淡水～汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
pH Hustedt (1937-38)による	真酸性種	pH7.0以下に生育し、特にpH5.5以下の酸性水域で最も良く生育する種
	好酸性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以下の水域で最も良く生育する種
	pH不定性種	pH7.0付近の中性水域で最も良く生育する種
	好アルカリ性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以上の水域で最も良く生育する種
	真アルカリ性種	pH7.0以上に生育し、特にpH8.5以上のアルカリ性水域で最も良く生育する種
流水 Hustedt (1937-38)による	真止水性種	止水域にのみ生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種
	流水不定性種	止水域にも流水域にも普通に生育する種
	好流水性種	流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種
	真流水性種	流水域にのみ生育する種
主に海水域での指標種群(小杉,1988による)		
外洋指標種群(A)	塩分濃度が約35%の外洋水中で浮遊生活するもの	
内湾指標種群(B)	塩分濃度35～26%の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群	
海水藻場指標種群(C1)	塩分濃度35～12%の海域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
汽水藻場指標種群(C2)	塩分濃度12～4%の汽水域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
海水砂質干潟指標種群(D1)	塩分濃度35～26%の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
汽水砂質干潟指標種群(D2)	塩分濃度26～5%の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
海水泥質干潟指標種群(E1)	30～12%の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
汽水泥質干潟指標種群(E2)	塩分濃度12～2%の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
淡水底生種群(F)	2%以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
淡水浮遊性種群(G)	塩分濃度2%以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群	
河口浮遊性種群(H)	塩分濃度20～2%の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群	
主に淡水域での指標種群(安藤,1990による)		
上流性河川指標種群(J)	河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群	
中～下流性河川指標種群(K)	河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
最下流性河川指標種群(L)	最下流部の三角州の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
湖沼浮遊性種群(M)	水深が約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群	
湖沼沼沢湿地指標種群(N)	湖沼における浮遊性種としても沼沢湿地の付着性種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
沼沢湿地付着性種群(O)	沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群	
高層湿原指標種群(P)	ミズゴケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
陸域指標種群(Q)	水中でなく、多少の湿り気のある土壌表面、岩の表面、コケなど常に大気に曝された好気的環境(陸域)に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群	
陸域での指標種群(伊藤・堀内,1991による)		
陸生珪藻A群(RA)	陸生珪藻の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群	
陸生珪藻B群(RB)	陸生珪藻A群に伴伴し、陸域にも水中にも生育する種群	
未区分陸生珪藻(RI)	陸生珪藻に相当すると考えられるが、乾湿に対する適応性の不明なもの	

Amphora copulata, Gomphonema sphaerophorum, 止水性で湖沼沼沢湿地指標種のAulacoseira ambigua, 沼沢湿地付着性種のGomphonema gracile等を伴う。

(3) 花粉分析

結果を表4-8・9, 図4-3に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲

表4-4 硅藻分析結果1

種類	生態性			環境	地点・試料番号															
	塩分	pH	流水		指標種	1地点														
						1	2	3	4	5	6	7	8	9	10					
Bacillariophyta (硅藻植物門)																				
Centric Diatoms (中心型硅藻類)																				
Chaetoceros spp.	Euh					2	1	3	1	4	3	2	-	-	-	-	-	-	-	4
Aulacoseira alpigena (Grun.) Krammer	Ogh-hob	ac-il	l-bi	N,U		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	-
Aulacoseira ambigua (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N,U		6	4	1	2	2	1	10	17	8	4					
Aulacoseira crassipunctata Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph			27	9	2	1	-	-	1	2	2	-					
Aulacoseira crenulata (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph			-	-	-	1	-	-	-	-	-	-					
Aulacoseira distans (Ehr.) Simonsen	Ogh-hob	ac-il	l-bi	N,U		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
Aulacoseira granulata (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U		1	1	-	-	-	-	8	-	4	2					
Aulacoseira italica (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	ind	l-ph	U		-	-	1	-	-	-	-	-	-						
Aulacoseira valida (Grunow) Krammer	Ogh-ind	al-il	l-ph	U		1	2	-	-	-	-	3	-	-						
Coscinodiscus rudolfii Bachmann	Meh					-	-	-	-	2	-	-	1	2	-					
Pseudopodosira kosugii Tanimura et Sato	Meh			E2		22	7	8	1	53	120	19	1	3	-					
Paralia sulcata (Ehr.) Cleve	Euh			B		-	-	-	-	-	-	2	-	-						
Cyclotella striata (Kuetz.) Grunow	Euh-Meh			B		-	-	-	-	2	1	3	3	-	32					
Cyclotella striata-C. stylorum	Euh-Meh			B		-	-	-	-	1	-	-	2	-	18					
Cyclotella meneghiniana Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	l-ph	LS		1	-	-	1	-	-	1	-	3	-					
Puncticulata praetermissa (Lund) Hakansson	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U		-	-	-	4	5	3	2	2	4	-					
Puncticulata spp.						1	1	3	1	4	-	2	-	1	-					
Thalassiosira lacustris (Grun.) Hasle	Meh					4	4	3	7	1	1	5	1	15	7					
Araphid Pennate Diatoms (無縱溝羽狀硅藻類)																				
Araphidineae (無縱溝類)																				
Catombas obtusa (Pantocsek) Snoeijts	Meh					-	-	6	3	1	-	2	-	1	3					
Ctenophora pulchella (Ralfs ex Kuetz.) Williams & Round	Meh					-	-	3	6	-	1	1	-	-	5					
Fragilaria capucina var. gracilis (Oestr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T		-	-	-	-	-	1	1	1	-	-					
Fragilaria rumpens var. fragilarioides (Grun.) Cleve-Euler	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T		-	-	-	-	-	1	-	-	3	-					
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-					
Fragilariforma exigua (Grun.) D.M.Williams & Round	Ogh-hob	ac-il	l-ph	P		6	19	10	7	1	6	2	2	-	-					
Fragilariforma virescens (Ralfs) Williams & Round	Ogh-ind	ac-il	l-ph	P,U		-	-	-	-	-	1	-	1	-	-					
Opephora martyi Heribaud	Meh			D1		8	5	7	4	1	-	1	1	1	6					
Pseudostaurosira brevistriata (Grun.) Williams & Round	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U		26	65	30	56	3	3	19	46	31	39					
Punctastriata linearis D.M.Williams et Round	Ogh-ind	al-il	l-ph	U		-	-	-	-	1	-	-	3	-	-					
Staurosira construens Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U		1	12	2	3	1	-	12	21	5	-					
Staurosira venter (Ehren.) H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph	S		-	35	2	7	5	2	20	22	21	-					
Staurosira venter var. binodis H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph	U		-	4	-	-	-	-	-	4	-	-					
Staurosirella pinnata (Ehr.) Williams & Round	Ogh-ind	al-il	l-ph	U		-	2	-	-	1	-	1	1	2	-					
Tabularia fasciculata (Ag.) Williams & Round	Meh					-	-	-	-	1	-	-	-	-	-					
Ulnaria acus (Kuetzing) M.Aboal	Ogh-ind	al-il	l-ph	U		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-					
Ulnaria ulna (Nitzsch) Compere	Ogh-ind	al-il	ind	U		-	-	-	-	-	1	-	1	1	-					
Delphineis surirella (Ehr.) G.Andrews	Euh-Meh					-	-	-	-	-	1	-	-	-	-					
Tabellaria fenestrata (Lyngbye) Kuetzing	Ogh-ind	ind	l-ph	O,U		-	-	-	-	-	-	3	9	-	1					
Tabellaria flocculosa (Roth) Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-					
Raphid Pennate Diatoms (有縱溝羽狀硅藻類)																				
Raphidineae (有縱溝類)																				
Monoraphid Pennate Diatoms (單縱溝羽狀硅藻類)																				
Achnanthes brevipes Agardh	Meh			D1		-	-	-	-	1	-	-	-	-	2					
Achnanthes brevipes var. intermedia (Kuetz.) Cleve	Meh			D1		-	-	-	-	2	-	-	-	-	-					
Achnanthes inflata (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	T		1	-	-	-	1	-	-	-	1	-					
Karayevia clevei (Grun.) Round et Bukhtiyarova	Ogh-ind	al-il	ind	T		-	1	-	-	-	-	-	2	-	-					
Planothidium lanceolatum (Breb. ex Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T		1	-	1	-	-	-	-	-	-	-					
Achnanthidium minutissimum (Kuetz.) Czarn.	Ogh-ind	al-il	ind	U		-	-	-	-	-	1	-	-	1	-					
Cocconeis euglypta Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T		-	1	-	1	-	1	-	-	-	1					
Cocconeis neodiminuta Krammer	Ogh-ind	al-bi	l-ph			-	-	-	-	-	1	-	-	-	-					
Cocconeis placentula Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U		-	1	-	1	5	-	2	7	-	4					
Biraphid Pennate Diatoms (双縱溝羽狀硅藻類)																				
Amphora marina W.Smith	Euh					1	1	2	-	-	-	-	-	-	3					
Amphora strigosa Hustedt	Meh					-	-	-	3	1	1	-	-	-	1					
Amphora fontinalis Hustedt	Ogh-Meh	al-il	ind			-	1	2	-	2	-	-	1	-	2					
Amphora veneta Kuetzing	Ogh-Meh	al-bi	l-ph			-	-	-	1	-	-	-	-	-	-					
Amphora copulata (Kuetz.) Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U		8	1	3	4	1	-	2	-	3	10					
Anomooneis sphaerophora (Kuetz.) Pfitzer	Ogh-Meh	al-bi	ind			-	-	1	-	-	-	-	-	-	-					

4. 結果 (3) 花粉分析

表4-5 珪藻分析結果2

種類	生態性			環境 指標種	地点・試料番号										
	塩分	pH	流水		1地点										
					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
Cymbella pusilla Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Cymbella affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Cymbella amphioxys (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella neoleptoceros Krammer	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	1	5	2	1	1	-	-	-
Cymbella tumida (Breb.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	2	2	-	1	2	-	1	1	-	-	1
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Cymbopleura naviculiformis (Auerswald) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O,U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Encyonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-
Encyonema mesianum (Kholnoky) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	1	-	1	1	1	2	-
Encyonema silesiacum (Bleisch) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	1	1	4	-	4	-	7	12	9	9	-
Placoneis elginensis var. neglecta (Kraske) H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	-	-	-	-	-	1	4	1	4	-
Gomphonema augur var. gautieri V.Heurck	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	1	-	1	1	1	-	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	5	1	-	1	2	-	-	1	1	-	-
Gomphonema grovei var. lingulatum (Hust.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema parvulum (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	3	-	-	1	1	-	1	-	-	-	1
Gomphonema sphaerophorum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	7	-	-	-	-	-	-	-	4	7	1
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	1	-	1	3	2	-	1	3	3	-	-
Petronis marina (Ralfs) D.G.Mann in Round et al.	Euh-Meh			E1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Mastogloia smithii Thwaites	Meh				-	-	5	13	5	3	3	1	9	4	-
Diploneis suborbicularis (Greg.) Cleve	Euh			E1	3	1	34	5	3	2	1	3	-	4	-
Diploneis smithii (Breb. ex W.Smith) Cleve	Euh-Meh			E1	1	1	6	1	6	2	3	-	-	2	-
Diploneis smithii var. pumila (Grun.) Hustedt	Euh-Meh			E1	1	-	1	1	6	1	-	-	-	-	-
Diploneis smithii var. rhombica Mereschkowsky	Euh-Meh				1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Diploneis pseudovalis Hustedt	Meh				-	-	3	4	2	8	3	1	1	7	-
Diploneis finnica (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	13	2	6	8	4	2	5	1	5	-	-
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		5	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Diploneis yatukaensis Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Hippodonta capitata (Ehr.) Lange-B., Metzeltin et Witkowski	Ogh-Meh	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Hippodonta hungarica (Grun.) Lange-Bertalot et al.	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-	-
Navicula formenterae Cleve	Euh				2	1	3	3	1	2	-	1	-	1	-
Navicula rhapsoneis Ehrenberg	Euh-Meh				-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Navicula spp.	Euh-Meh				-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Navicula digitoradiata (Greg.) A.Schmidt	Meh				-	-	4	-	-	-	1	-	-	-	-
Navicula peregrina (Ehr.) Kuetzing	Meh				-	2	-	2	2	-	-	2	4	2	-
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-	1	1	-	2	-	2	-	-
Navicula hasta var. gracilis Skvortzow	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Navicula nipponica (Skv.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Navicula notanda Pantocsek	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	2	7	-	-	-	-	-	-	1
Navicula pseudocurcicula H.Kobayasi	Ogh-unk	unk	l-ph		2	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
Navicula rhynchocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
Navicula slesvicensis Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Navicula viridula (Kuetz.) Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1	1	-	4	-	-	-	-	-	-
Gyrosigma nodiferum (Grun.) G.West	Ogh-Meh	al-il	ind		1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Gyrosigma spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
Stauroneis legumen var. nipponica (Skv.) H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis sp.A	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	6	-	-	-	-	-	-	-
Cosmonais pusilla (W.Smith) Mann & Stickle	Ogh-Meh	ind	ind		1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Diadesmis confervacea Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RBS	-	1	1	1	1	1	-	-	-	1	2
Luticola mutica (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RAS	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
Luticola plausibilis (Hustedt ex Simonsen) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Caloneis westii (W.Smith) Hendey	Meh				-	1	-	-	1	1	-	-	-	-	-
Caloneis bacillum (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Caloneis subclevei Krammer	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Caloneis tenuis (Greg.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-

表4-6 珪藻分析結果3

種類	生態性			環境 指標種	地点・試料番号											
	塩分	pH	流水		1地点											
					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
Caloneis truncatula (Grunow)	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia elegans (W.Smith) Krammer	Euh-Meh				5	1	2	1	-	1	-	-	-	-	-	1
Pinnularia anglica Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind	T	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia appendiculata (Ag.) Cleve	Ogh-hob	ind	ind	RB	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia divergentissima (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	-	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia neomajor Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi		2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia schroederii (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RBS	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O,U	3	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Fallacia florinae (Moeller) Witkowsky	Euh-Meh				1	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fallacia oculiformis (Hustedt) D.G.Mann	Euh-Meh				-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Sellaphora americana (Ehr.) Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Sellaphora bacillum (Ehr.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Sellaphora laevissima (Kuetz.) Mann	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Sellaphora pupula (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-
管縦溝類																
Giffenia cocconeiformis (Grun.) Round,F.E. & Basson,P.W.	Meh			E1	-	-	-	-	-	-	-	6	-	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-
Nitzschia scalaris (Ehr.) W.Smith	Euh-Meh				1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia compressa (Bailey) Boyer	Meh			E1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Nitzschia compressa var. elongata (Grun.) Lange-Bertalot	Meh			E1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Nitzschia lorenziana Grunow	Meh			E2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	1	-
Nitzschia angustata (W.Smith) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Nitzschia nana Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RBS	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Tryblionella granulata (Grunow) D.G.Mann	Meh			E1	-	-	1	1	16	13	15	-	-	-	-	6
Tryblionella hungarica (Grunow) D.G.Mann	Meh			E1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-
Tryblionella hyalina (Amosse) Ohtsuka	Meh				-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
Epithemia adnata (Kuetz.) Brebisson	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	2	21	12	7	2	2	4	4	3	-	-
Epithemia turgida (Ehr.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	1	-	-	-	1	-	1	-	-
Rhopalodia musculus (Kuetz.) O.Muller	Meh				5	-	1	-	9	2	4	-	-	-	1	-
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	3	2	2	1	1	1	1	-	-	1	-	-
Rhopalodia gibba (Ehr.) O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	4	4	2	-	5	5	4	-	-	-
翼管縦溝類																
Campylodiscus echeneis Ehrenberg	Meh				1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
短縦溝類																
Actinella brasiliensis Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-bi	O	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Eunotia arcus Ehrenberg	Ogh-hob	ind	ind	U	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia bilunaris (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-bi	ind	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia duplicoraphis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O,U	-	1	-	-	1	4	-	2	-	2	-	-
Eunotia minor (Kuetz.) Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O,T	1	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-
Eunotia monodon var. asiatica Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-
Eunotia praerupta var. bidens (Ehren.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Eunotia rhomboidea Hustedt	Ogh-ind	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Eunotia veneris (Kuetz.) De Toni	Ogh-hob	ac-il	ind	T	-	-	-	-	1	-	-	-	2	-	-	-
海水生種					9	4	43	9	8	7	6	4	0	12		
海水-汽水生種					11	2	13	3	18	6	7	5	0	53		
汽水生種					41	21	42	44	99	150	63	8	38	44		
淡水-汽水生種					32	70	36	62	6	5	22	47	36	41		
淡水生種					114	114	65	92	70	32	101	142	129	51		
珪藻化石総数					207	211	199	210	201	200	199	206	203	201		

4. 結果 (3) 花粉分析

表4-7 珪藻分析結果4

珪藻の適応性

H.R.: 塩分濃度	pH: 水素イオン濃度	C.R.: 流水
Meh: 汽水生種	al-bi: 真アルカリ性種	l-bi: 真止水性種
Ogh-Meh: 淡水-汽水生種	al-il: 好アルカリ性種	l-ph: 好止水性種
Ogh-hil: 貧塩好塩性種	ind: pH不定性種	ind: 流水不定性種
Ogh-ind: 貧塩不定性種	ac-il: 好酸性種	r-ph: 好流水性種
Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種	ac-bi: 真酸性種	r-bi: 真流水性種
Ogh-unk: 貧塩不明種	unk: pH不明種	unk: 流水不明種

環境指標種群

- B: 内湾指標種, D1: 海水砂質干潟指標種, E1: 海水泥質干潟指標種, E2: 汽水泥質干潟指標種 (以上は小杉, 1988)
 K: 中～下流性河川指標種, L: 最下流性河川指標種, M: 湖沼浮遊性種, N: 湖沼沼沢湿地指標種, O: 沼沢湿地付着生種,
 P: 高層湿原指標種 (以上は安藤, 1990)
 S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上は Asai and Watanabe, 1995)
 R: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI:未区分, 伊藤・堀内, 1991)

表4-8 花粉分析結果1

種類	地点・試料番号										
	1地点										3地点
	1	2	3	4	6	7	8	9	10	15	
木 本 花 粉	マキ属	3	1	-	-	2	9	3	10	8	1
	モミ属	26	22	33	15	25	19	14	18	20	3
	ツガ属	54	34	54	22	35	34	9	13	6	13
	トウヒ属	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
	マツ属複雑管束亜属	6	1	7	7	5	5	3	10	23	55
	マツ属(不明)	16	8	11	4	10	9	4	8	44	52
	コウヤマキ属	-	5	-	-	-	1	-	2	1	1
	スギ属	13	8	10	12	8	8	6	3	7	10
	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	4	10	7	17	6	2	4	13	3	6
	ヤマモモ属	5	1	3	5	4	2	-	3	5	4
	サワグルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
	クルミ属	-	-	-	1	-	-	-	1	-	1
	クマシデ属-アサダ属	6	2	8	8	7	10	5	10	4	3
	カバノキ属	3	3	1	2	1	-	-	-	-	2
	ハンノキ属	7	6	8	6	13	6	3	7	10	5
	ブナ属	2	1	12	4	6	5	7	12	5	2
	コナラ属コナラ亜属	30	31	44	42	51	38	17	40	27	13
	コナラ属アカガシ亜属	82	56	65	48	83	26	17	30	16	15
	クリ属	1	5	4	-	1	1	-	-	-	-
	シイノキ属	14	11	8	5	6	6	3	6	-	5
	ニレ属-ケヤキ属	4	3	15	7	9	15	5	16	14	4
	エノキ属-ムクノキ属	3	2	4	2	2	3	2	3	7	3
	ヤドリギ属	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
	ジャケツイバラ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
	カラスザンショウ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
	キハダ属	1	-	1	-	-	1	-	-	-	-
	ウルシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	カエデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ブドウ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
ノブドウ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	
グミ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	
ウコギ科	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	
ミズキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
カキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
イボタノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
トネリコ属	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	
ガマズミ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
スイカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	
草 本 花 粉	ガマ属	3	22	3	2	1	1	1	2	-	-
	オモダカ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	4
	イネ科	82	40	26	16	53	19	29	20	11	340
	カヤツリグサ科	193	50	37	24	36	19	16	19	25	40
イボクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	

表4-9 花粉分析結果2

種類	地点・試料番号											
	1地点										3地点	
	1	2	3	4	6	7	8	9	10	15		
草本花粉	ミズアオイ属	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	2
	クワ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
	サナエタデ節-ウナギツカミ節	7	2	3	2	3	-	1	1	1	2	
	タデ属	2	-	2	-	-	1	-	-	-	2	
	ソバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	
	アカザ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	
	ナデシコ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	
	ハス属	-	-	-	-	-	1	2	3	-	-	
	キンボウゲ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	
	キンボウゲ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
	アブラナ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	
	バラ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
	マメ科	1	-	-	-	1	-	1	-	-	2	
	キカシグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	
	ヒシ属	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	
	アリノトウグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	
	フサモ属	1	4	2	4	-	-	-	1	1	-	
	セリ科	1	-	1	-	1	-	-	-	-	2	
	ナス属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
	ヤエムグラ属-アカネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
	オミナエシ属	-	-	1	-	-	-	-	3	-	1	
	ヨモギ属	3	-	2	1	1	2	1	2	1	7	
	キク亜科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	6	
タンポポ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2		
不明花粉	21	13	9	13	4	9	6	4	4	12		
シダ類胞子	ヒカゲノカズラ属	-	1	-	-	1	-	-	-	-		
	イノモトソウ属	1	2	4	4	8	6	1	1	-		
	ミズワラビ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-		
	サンショウモ	1	-	-	-	-	-	1	-	1		
	アカウキクサ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-		
	他のシダ類胞子	57	31	31	15	30	55	31	21	31	76	
合計	木本花粉	281	213	298	211	276	204	103	205	202	204	
	草本花粉	295	121	77	50	96	43	52	52	40	455	
	不明花粉	21	13	9	13	4	9	6	4	4	12	
	シダ類胞子	59	34	35	20	39	61	33	23	31	77	
	総計(不明を除く)	635	368	410	281	411	308	188	280	273	736	

する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。花粉化石の産出状況・保存状態は概ね良好である。以下、地点ごとに述べる。

1地点の最下位の試料番号10は木本花粉が優占し、マツ属が多産する。その他の木本花粉ではマキ属、モミ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属等を伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科がやや多く産出し、サナエタデ節-ウナギツカミ節、フサモ、キク亜科が認められる。試料番号9~2でも木本花粉の割合が高い傾向が認められる。木本花粉ではコナラ亜属、アカガシ亜属が多く産出し、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、ブナ属、シイノキ属、ニレ属-ケヤキ属等を伴う。なお、試料番号7と試料番号6を境に多産する種類に若干の差が認められる。試料番号7以深ではコナラ亜属が最も多く産出し、マキ属、エノキ属-ムクノキ属等もやや多く検出されるのに対し、試料番号6以浅ではアカガシ亜属が最も多く産出し、マキ属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属等の産出は少なくなる。草本花粉では試料番号10同様、イネ科、カヤツリグサ科が多産し、ガマ属、ミズアオイ属、ハス属、ヒシ属、フサモ属、ミズワラビ属、サンショウモ、アカウキクサ属等の水湿地生植物に由来する花粉・胞子も検出される。なお、試料番号2では、草本花

4. 結果 (4) 植物珪酸体分析

粉の割合が増加する。

最上位の試料番号1では、木本花粉と草本花粉が、ほぼ同率で認められる。木本花粉では試料番号2以深と大きな差はなく、アカガシ亜属が最も多く産出し、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、コナラ亜属、シイノキ属等を伴う。草本花粉ではカヤツリグサ科が多産し、次いでイネ科が多く認められる。その他ではガマ属、オモダカ属、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヒシ属、フサモ属、ヨモギ属、サンショウモ等が産出する。

3地点の試料番号15では草本花粉の割合が高い。木本花粉ではマツ属が優占し、ツガ属、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、コナラ亜属、アカガシ亜属、ハンノキ属、シイノキ属等を伴う。草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科、アブラナ科、アリノトウグサ属、ヨモギ属、キク亜科等が認められる。また、栽培種であるソバ属に由来する花粉も検出される。

(4) 植物珪酸体分析

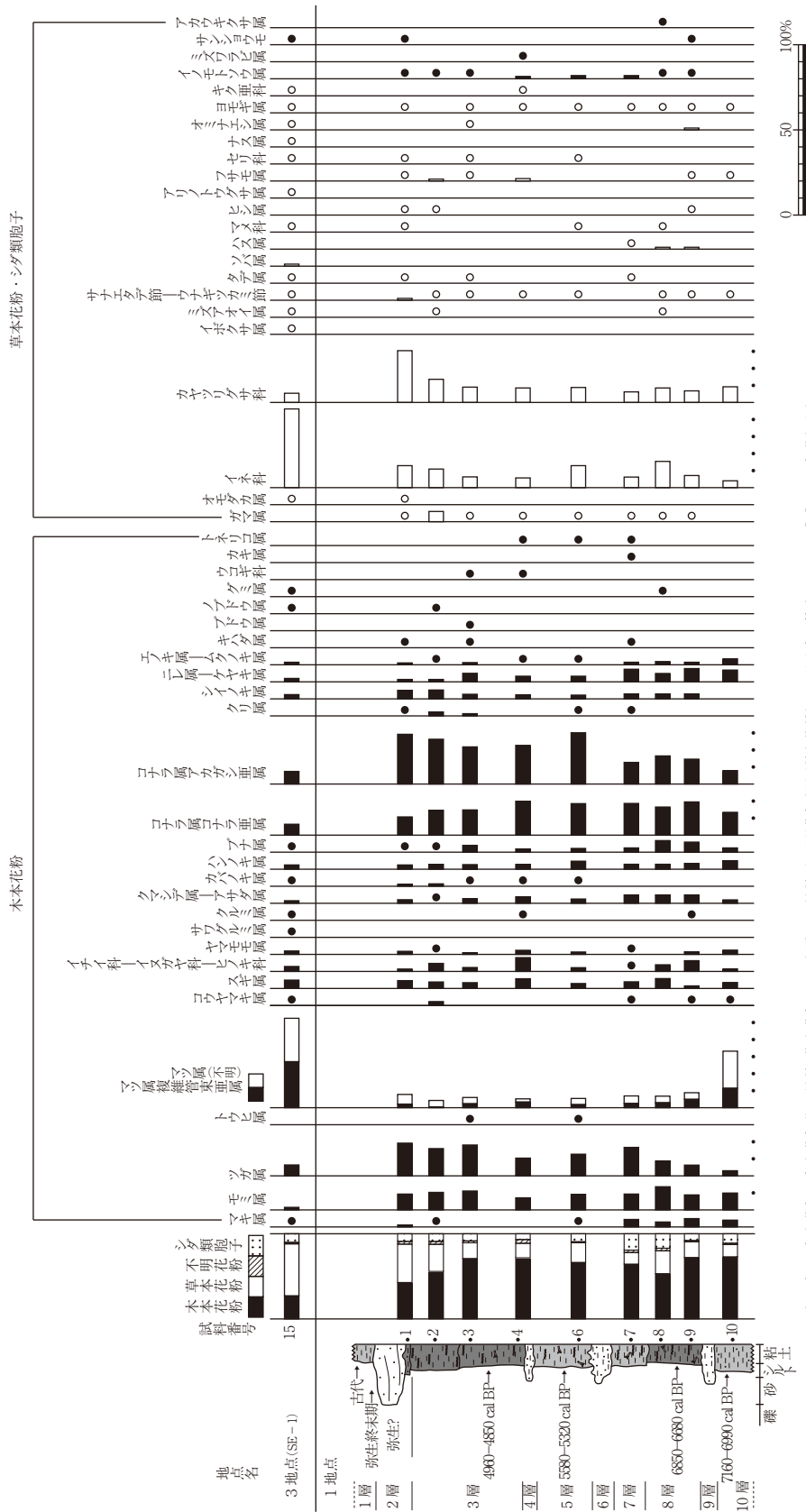
結果を表4-10、図4-4に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、地点毎の産状を述べる。

1地点の植物珪酸体含量は、層位的に変化する。試料番号10では約2.8万個/g、試料番号9で約8.9万個/gに増加し、試料番号6にかけて約5.9万個/gまで減少し、試料番号5で約11.4万個/gに再び増加し、試料番号4と3で6.0万個/g程度に減少し、試料番号2では約7.0万個/gに増加するが、試料番号1で約4.9万個/gに減少する。植物珪酸体の産状は同様であり、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属が認められ、コブナグサ属やススキ属、イチゴツナギ亜科がわずかあるいは稀に見られる。また、試料番号2と1では栽培植物であるイネ属が検出され、葉部の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が認められる。その含量は、試料番号2で多く、短細胞珪酸体が約2,900個/g、機動細胞珪酸体が約1,200個/gである。試料番号1では短細胞珪酸体が約200個/g、機動細胞珪酸体が約500個/gである。

表4-10 植物珪酸体分析結果

種類	地点・試料番号													
	1地点										2地点			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
イネ科葉部短細胞珪酸体														
イネ族イネ属	200	2,900	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科ネザサ節	5,800	8,600	9,800	8,800	23,300	9,800	11,300	13,000	18,900	4,700	1,100	2,000	1,100	900
タケ亜科	15,500	24,500	14,000	18,800	22,900	17,000	22,300	32,000	28,200	7,400	4,200	5,700	4,400	3,100
ヨシ属	4,700	9,900	3,700	4,000	1,700	3,800	3,000	2,200	500	300	500	<100	-	100
ウシクサ族コブナグサ属	100	400	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族ススキ属	200	1,000	400	200	-	-	-	200	300	-	-	-	<100	-
イチゴツナギ亜科	-	100	-	200	-	-	400	200	200	100	<100	<100	-	-
不明キビ型	1,000	3,600	1,900	2,000	1,700	1,800	1,900	3,000	4,000	700	1,100	<100	200	300
不明ヒゲシバ型	1,800	3,900	4,000	3,000	2,900	2,600	1,600	3,200	1,700	700	700	400	100	100
不明ダンチク型	1,400	1,600	3,500	2,000	4,200	2,300	2,000	3,300	2,800	1,200	1,400	600	300	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体														
イネ族イネ属	500	1,200	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科ネザサ節	6,800	3,100	10,000	8,400	42,100	10,600	9,700	7,300	22,700	6,200	2,200	1,500	2,100	1,400
タケ亜科	4,700	3,600	7,100	8,500	10,000	7,400	7,600	7,600	7,400	4,000	1,900	2,400	3,200	1,500
ヨシ属	1,600	1,300	1,100	500	800	1,900	1,900	800	300	300	200	<100	<100	<100
ウシクサ族	1,000	1,600	600	300	400	200	300	200	-	-	-	-	-	<100
不明	3,600	3,100	3,300	3,600	3,800	1,400	3,200	2,200	2,100	2,100	2,100	1,800	2,300	1,100
合計														
イネ科葉部短細胞珪酸体	30,700	56,700	37,400	39,000	56,700	37,400	42,500	57,100	56,600	15,100	9,000	8,800	6,000	4,600
イネ科葉身機動細胞珪酸体	18,100	13,900	22,000	21,300	57,100	21,500	22,700	18,100	32,600	12,600	6,400	5,800	7,600	4,100
総計	48,800	70,600	59,500	60,200	113,800	58,900	65,200	75,200	89,200	27,700	15,400	14,600	13,700	8,700

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)
<100:100個/g未満



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は木本花粉化石総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、○は1%未満を示す。

図4-3 1・3地点の主要花粉化石群集の層位分布

4. 結果 (5) 微細物分析

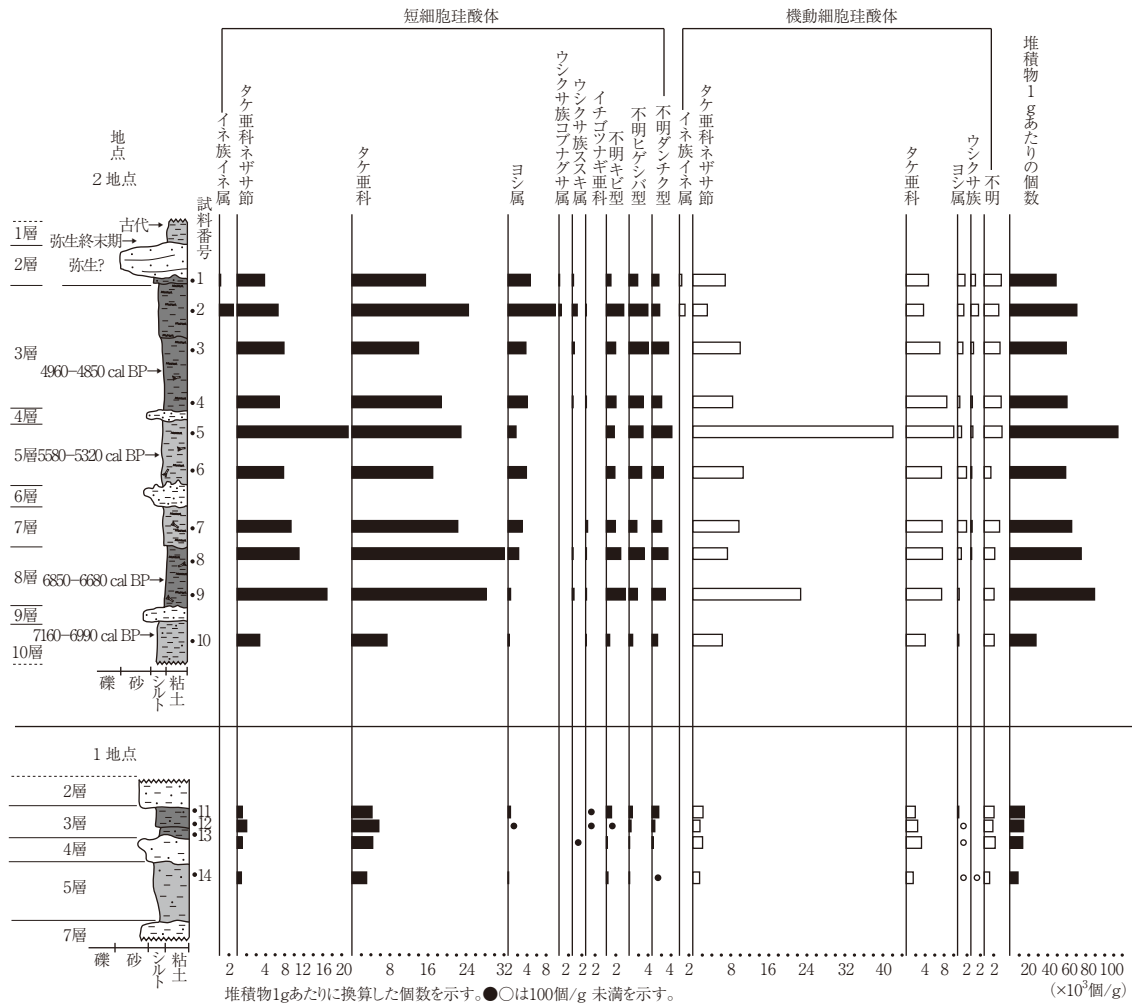


図4-4 1・2地点の植物珪酸体含量

2地点植物珪酸体含量は、1地点と比較して少ない。試料番号14では約8,700個/g、試料番号13-11では1.4万個/g前後である。各試料でネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やイチゴツナギ亜科がわずかあるいは稀に認められる。イネ属など栽培植物に由来した植物珪酸体は、検出されない。

(5) 微細物分析

結果を表4-11に示し、試料別検出状況を以下に記す。

① 1地点(試料番号2)

草本10分類群(カワツルモ, ヒルムシロ属, イバラモ属, イネ科, ウキヤガラ近似種, カヤツリグサ科, キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属, オトギリソウ属, ヒメシロアサザ, イヌコウジュ属)335個の種実が検出されたほか、炭化材、昆虫が確認された。

種実遺体群は全て草本で、湿生または中生のカヤツリグサ科が最も多い(321個)。また、水生植物のカワツルモ, ヒルムシロ属, イバラモ属, ヒメシロアサザなどが確認された。

② 3地点(試料番号15)

木本または草本のハギ属1個、草本13分類群(スブタ, イネ, エノコログサ属, イネ科, ホタルイ属, カヤツリグサ科, イボクサ, ミズアオイ属, タデ属, ナデシコ科, タガラシ, イヌコウジュ属, タカサブロウ)124個、計

125個の種実が検出されたほか、炭化材、昆虫、貝類が確認された。

種実遺体群は、栽培植物のイネの穎が最も多い(破片61個:炭化3個を含む)。その他に、水生植物のスプタ、ホタルイ属、イボクサ、ミズアオイ属や、やや湿った場所を好んで生育する分類群(タガラシ、タカサブロウ)などが確認された。

以下に、本分析で同定された種実の形態的特徴等を記す。

<木本または草本>

・ハギ属(Lespedeza) マメ科

果実と思われる個体が検出された。灰褐色、長さ2.2mm、幅1.3mm程度の扁平な広楕円体で頂部は尖る。縁は稜状。表面は粗面で粗い葉脈状網目模様がある。

<草本>

・カワツルモ(Ruppia maritima L.)

ヒルムシロ科カワツルモ属

果実が検出された。黒褐色、長さ2.3mm、径1.2mm程度の倒狭卵体。頂部は嘴状に尖る。背面頂部付近に広線形の隆起があり、腹面の頂部付近の左右には半円状の浅い凹みがある。果皮は硬く、表面には微細な網目模様がある。

・ヒルムシロ属(Potamogeton)

ヒルムシロ科

果実が検出された。淡灰褐色、長さ2.5-3mm、幅2mm、厚さ1mm程度のやや扁平な非対称倒卵体。頂部に嘴状の太い花柱基部が残る。側面の正中線上に深い縦溝と稜があり、その基部に1個の刺状突起がある。果皮は海綿状。

・イバラモ属(Najas) イバラモ科

種子が検出された。淡褐色、針状長楕円体。長さ1.8mm、径0.5mm程度。両端は細く尖る。種皮は薄く透き通り、表面には縦長の網目模様が縦列する。

・スプタ(Blyxa echinosperma (Clarke) Hooker) トチカガミ科スプタ属

種子が検出された。淡灰褐色、長さ1.3mm、径0.8mm程度の線状長楕円体。両端から伸びる尾状突起を欠損する。種皮表面には数本の低い突起群が縦列する。

・イネ(Oryza sativa L.) イネ科イネ属

穎(果)の破片が検出された。淡-灰褐色、炭化個体は黒色。完形ならば長さ6~7.5mm、幅3~4mm、厚さ2mm程度のやや扁平な長楕円形体。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合

表4-11 種実分析結果

分類群	部位	状態	地点・試料番号	
			1地点	3地点 (SE-1)
			2	15
木本または草本				
ハギ属	果実	完形		1
草本				
カワツルモ	果実	完形	4	
		破片	2	
ヒルムシロ属	果実	破片	1	
イバラモ属	種子	完形	1	
スプタ	種子	破片		2
イネ	穎	破片・基部		21
		破片		37
		破片・基部・炭化		2
		破片・炭化		1
エノコログサ属	果実	完形		2
イネ科	果実	完形	1	1
		破片		1
ウキヤガラ近似種	果実	完形	1	
ホタルイ属	果実	完形		7
		破片		5
カヤツリグサ科	果実	完形	321	8
イボクサ	種子	完形		16
ミズアオイ属	種子	完形		3
タデ属	果実	完形		6
		破片		1
ナデシコ科	種子	完形		1
タガラシ	果実	完形		1
キジムシロ類	核	破片	1	
オトギリソウ属	種子	破片	1	
ヒメシロアサザ	種子	完形	1	
イヌコウジュ属	果実	完形	1	1
		破片		1
タカサブロウ	果実	完形		3
		破片		4
炭化材			38	10
昆虫			7	12
貝類				2
分析量			100cc	100cc
			123.7g	158.5g

*キジムシロ類:キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属

4. 結果 (5) 微細物分析

してやや偏平な長楕円形の稲朶を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

・エノコログサ属(*Setaria*) イネ科

果実が検出された。淡-黄灰褐色、長さ2.5mm、径1.4mm程度の狭卵～半偏球体で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には横方向に目立つ網目模様が配列する。

・イネ科(*Gramineae*)

果実が確認された。イネ、エノコログサ属以外の形態上差異のある複数種を一括した。果実は淡-灰褐色、長さ2.5～3.5mm、径1-2mm程度の狭卵-半偏球体で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面は平滑で微細な縦長の網目模様が縦列する。

・ウキヤガラ近似種(*Bolboschoenus* cf. *fluviatilis* (Torr.) T.Koyama subsp. *yagara* (Ohwi) T.Koyama)

カヤツリグサ科ウキヤガラ属

果実が検出された。黒褐色、長さ2.7mm、径1.8mm程度の三稜状狭倒卵体。頂部の柱頭部分はわずかに伸び、基部は切形。両端の断面は3角形。果皮はやや厚く表面は粗面。

・ホタルイ属(*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、長さ2mm、幅1.8mm、厚さ1.3mm程度の片凸レンズ状広倒卵体。頂部は尖り、基部は切形で刺針状の花被片が伸びる個体がみられる。背面正中線上は鈍稜。果皮表面は光沢があり、不規則な波状横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科(*Cyperaceae*)

果実が検出された。ウキヤガラ近似種、ホタルイ属以外の形態上差異のある複数種を一括した。淡～黒褐色、レンズ状または三稜状倒卵体。径1～3.5mm程度。頂部の柱頭部分はやや伸び、基部は切形で刺針状の花被片が伸びる個体がみられる。果皮表面は平滑または微細な網目模様がある。

・イボクサ(*Aneilema keisak* Hassk.) ツククサ科イボクサ属

種子が検出された。淡-灰褐色、長さ1～1.5mm、径1.5～3mm程度の半横長楕円体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は薄く柔らかく、透き通る個体もみられる。表面には円形の小孔が散在する。

・ミズアオイ属(*Monochoria*) ミズアオイ科

種子が検出された。淡褐色、長さ1mm、径0.6mm程度の楕円体。種皮は薄く透き通り、柔らかい。表面には10本程度の太い縦隆条と、その間に細い横隆条が密に配列する。

日本に分布するミズアオイ属は、ミズアオイ(*M. korsakowii* Regel et Maack)とコナギ(*M. vaginalis* (Burm.f.) Presl var. *plantaginea* (Roxb.) Solms Laub.)の2種があるが、実体顕微鏡下観察による区別は困難である。

・タデ属(*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数種を一括した。ヤナギタデ(*P. hydropiper* L.)に似る個体を含む。黒褐色、長さ3mm、径1.8mm程度の三稜状またはやや偏平で背面正中線上に鈍稜がある広卵体。頂部は尖り、2花柱が残る個体がみられる。基部は切形で、灰褐色の萼が残る個体がみられる。果皮表面には明瞭な網目模様が発達し、褐色の花被片が付着する個体がみられる。

・ナデシコ科(*Caryophyllaceae*)

種子が検出された。灰褐色、径0.8mm程度のやや偏平な腎状円形。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には瘤状突起が臍から同心円状に配列する。

・タガラシ (*Ranunculus sceleratus* L.) キンポウゲ科キンポウゲ属

果実が検出された。径1mm, 厚さ0.5mm程度のやや偏平な広楕円形体。縁は黄白色の海綿状で、中心部は淡黄褐色でやや凹む。表面は粗面。

・キジムシロ属ーヘビイチゴ属ーオランダイチゴ属 (*Potentilla-Duchesnea-Fragaria*) バラ科
核(内果皮)が検出された。淡灰褐色, 径1mm程度の腎状楕円体。内果皮は厚く硬く, 表面は粗面。

・オトギリソウ属 (*Hypericum*) オトギリソウ科

種子が検出された。黒褐色, 長さ1.2mm, 径0.6mm程度の線状長楕円体。両端は短い突起状。種皮表面には横長の凹点による微細な網目模様が配列する。

・ヒメシロアサザ (*Nymphoides coreana* (Lev.) Hara) ミツガシワ科アサザ属

種子が検出された。黄褐色, 長さ1.3mm, 幅1mm, 厚さ0.8mm程度のやや歪なレンズ状広楕円体。基部一端, 斜切状に暗褐色, 線形の臍がある。種皮は平滑で光沢があり, 内奥まで通る微細な粒状網目模様がある。種皮はやや厚く断面は柵状。ガガブタ (*N. indica* (L.) O. Kuntze)の種子は, 径0.8~1mm, 厚さ0.7mm程度とやや小型で, 基部はやや切形, 臍は腹面の長さの約2/3を占める点から区別される。

・イヌコウジュ属 (*Mosla*) シソ科

果実が検出された。淡~灰褐色, 径1.2mm程度の倒広卵体。基部には臍点があり, 舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く, 表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

・タカサブロウ (*Eclipta prostrata* (L.) L.) キク科タカサブロウ属

果実が検出された。淡-灰褐色, 長さ2.5mm, 径1.2mm程度のやや偏平な三角状倒狭卵体。両端は切形, 果皮は海綿状で, 両面には瘤状突起が分布する。両縁に翼があり, 水に浮きやすい。

(6) 貝類同定

多量にある貝類は, タニシ類(マルタニシ? *Cipangopaludina chinensis laeta*?)の幼貝がほとんどで, それに成貝が僅かに含まれる。

5. 考察

(1) 層序と堆積環境

① 遺跡の立地と層序

徳王子広本遺跡は, 香宗川左岸の徳王子・香我美丘陵の岸本川の開析谷および, 丘陵南縁部を取り巻くようにして分布する段丘面上に広がる(図4-5~8)。調査区については, I区が岸本川の開析谷内, II区が段丘面に存在する。なお, 本遺跡の南側約1.4kmには, 現海岸線が存在する。海岸線には, 浜堤が並行して伸び, その後背に岸本低地と呼ばれる潟湖性の海岸低地が広がっている。

段丘面を構成する堆積物については, I区のSE-1断ち割り部において, 風化基盤岩直上に, 塊状をなし最大礫径30cm前後の巨礫を含む礫質支持の垂角~角礫の中礫~大礫が層厚約60cm程度累重することが確認された。この礫層の上位には, 砂質シルト層が70cm前後堆積する。これに対し, 調査区南端部中央付近での深掘では, SE01断ち割り部で認められたような厚い礫層やその上位の細粒層の堆積が観察されない。このことから, SE01断ち割り部で認められた堆積層は, 流路状の堆積空間を埋積している可能性が示唆される。

I区の開析谷内では, 腐植質に富む泥層を主体とした堆積層が累重する(図4-9)。これらの堆積層については, 層相にもとづき1層~10層に層序区分を行った。以下に, 各層の記載を示す。

5. 考察 (1) 層序と堆積環境

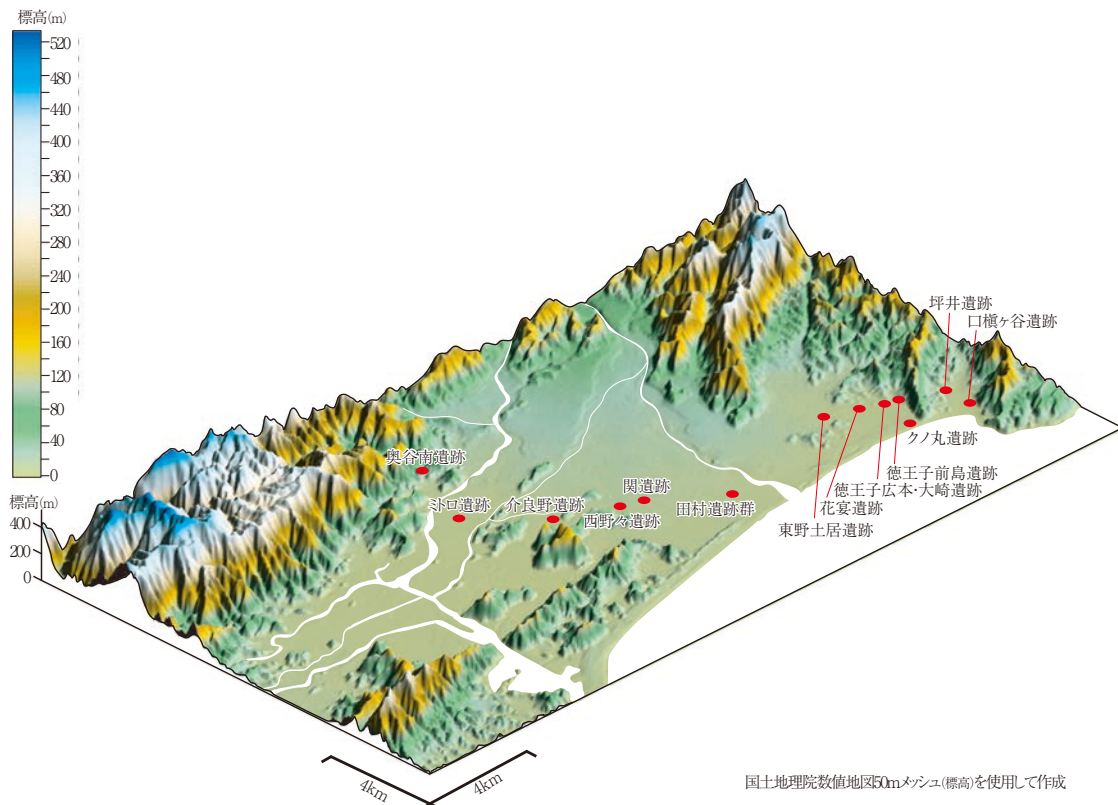


図4-5 調査地点周辺の地形起伏と自然科学分析を実施した主要な周辺遺跡

1層は、開析谷中心部に分布する腐植質シルト質粘土層である。本層は、包含される考古遺物から古代に形成されたと考えられる。2層は層状に累重し、不明瞭な水平葉理をなすシルト質砂～中粒砂～粗粒砂で構成される。本層上面では、弥生時代終末期の遺構・遺物が検出されている。3層～10層では、泥炭質ないし腐植質の粘土質シルト層が厚く累重する。これらの泥層には、4層、6層、9層のシルト質砂からなる粗粒堆積物の薄層が挟在する。堆積物中から採取した試料の放射性炭素年代値は、3層下部で 4360 ± 40 yrs BP (2σ :4960-4850 cal BP), 5層中部で 4710 ± 40 yrs BP (2σ :5580-5320 cal BP), 8層下部で 5960 ± 40 yrs BP (2σ :6850-6680 cal BP), 10層上部で 6150 ± 40 yrs BP (2σ :7160-6990 cal BP) を示す。谷口(2001)の縄文時代の放射性炭素年代値の集成にもとづくと、これらの年代値からは、10層～7層が縄文時代前期、5層～3層下部付近が縄文時代中期に形成されたと考えられる。また、後述するように、植物珪酸体分析では、3層最上部(試料番号2)で栽培種のイネ属が検出されることから、本層準については弥生時代前期以降と判断される。

② I区開析谷内の堆積環境変遷

上記した開析谷内に累重する堆積層の層相と年代値および珪藻分析結果から、本節では、縄文時代前期から弥生時代頃までの堆積環境変遷についての検討する。開析谷を充填する泥質堆積物は、泥炭質ないし極めて腐植質に富んでおり、多くの植物遺体を挟在する。これらの堆積物では、葉理が発達する層準が認められず、含まれる植物遺体に関して現地性が高いと判断される。

10層(試料番号10)では、内湾指標種の *Cyclotella striata* と、淡水～汽水生種の *Pseudostaurosira brevistriata* が多産する。後者の *Pseudostaurosira brevistriata* は、汽水域で産出する場合は、汽水泥質干潟指標種群の主要構成種とされる(小杉,1988)。層相をふまえると、10層は海水の影響を受ける汽

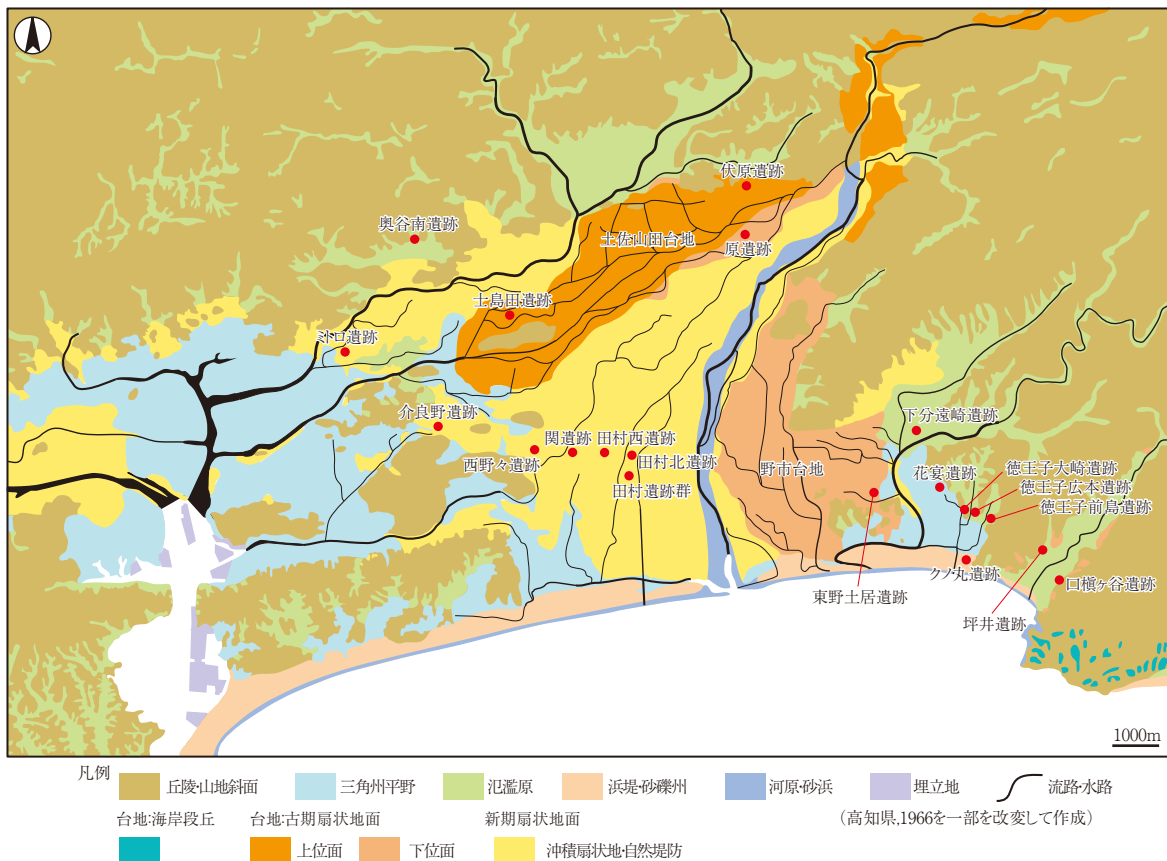


図4-6 遺跡の位置図と自然科学分析を実施した主要な周辺遺跡

水域の湿地の堆積環境下にあったと推定される。

8層, 7層(試料番号7~9)では, 内湾指標種はほとんど産出せず, 真+好止水性種を主体とする。種類構成は, 淡水~汽水生種の *Pseudostaurosira brevistriata* が多産し, 好汚濁性種の *Staurosira venter*, 広域適応性種の *Staurosira construens*, それに湖沼沼沢湿地指標種を伴う。珪藻化石群集および層相から, 8層, 7層は, 下位の10層に比べ潮汐流などの海水の影響が相対的に小さく, 閉鎖的で塩類が集積しやすい富栄養な池沼~沼沢地の堆積環境であったと考えられる。

5層(試料番号5,6)では, 淡水生種が減少し, 汽水泥質干潟指標種群の *Pseudopodosira kosugii* が優占する。*Pseudopodosira kosugii* は, 陸域に近い塩性湿地や, 干潟後背の湿地や湖沼の潮汐に伴って海水塩分の影響を受けて塩分濃度が変化する潮入川の氾濫原の層相を示す堆積層において優占ないし多産する傾向が認められる(辻本ほか,2007)。層相をふまえると, 5層は海水の影響を受ける汽水域の沼沢地ないし湿地であったと推定される。

3層および2層最下部(試料番号1~4)は, 8層, 7層と組成が類似する。珪藻化石群集と層相から, 当時の堆積環境は, 水生植物が繁茂する, 塩類の集積しやすい富栄養な湿地ないし池沼~沼沢地であったと考えられる。

1層および2層については, 層相から, それぞれ洪水堆積物と湿地堆積物と判断される。1層は, 開析谷の中心部のみに分布する。

以上のような珪藻化石群集と層相にもとづく堆積環境の検討から, I区の開析谷内では, 縄文時代前期の10層~7層(7160-6680 cal BP前後)から縄文時代中期初頭の5層(5580-5320 cal BP頃)の時期に,

5. 考察 (1) 層序と堆積環境

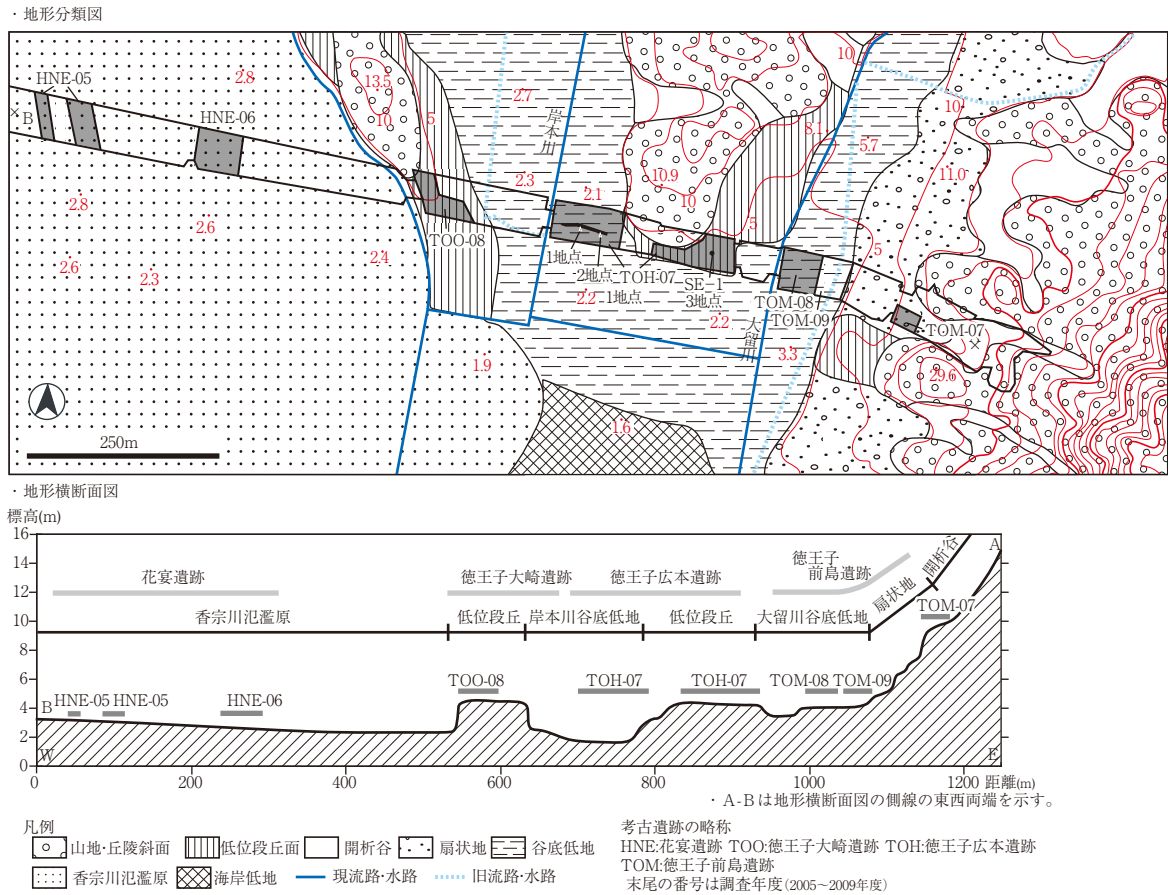


図4-7 遺跡周辺の地形分類図・地形横断面図

湿地や池沼の堆積環境が継続しており、10層および5層において相対的に海水の影響を強く受けていたことが確かめられた。その後、縄文時代中期以降から弥生時代頃の3層～2層では、海水の影響を受けるもののその影響が小さく、基本的に淡水域において栄養塩類の集積が進行するような閉鎖的な古水文環境下の湿地ないし池沼～沼沢地へと堆積環境が変化したと考えられる。

なお、今回の分析では、上記のような堆積環境変化を引き起こした要因について明らかにすることができなかった。また、泥層に挟在する粗粒堆積物の成因についても、堆積学的検討を行うことができなかった。これらの点については、今後の検討課題としたい。

③ 徳王子広本遺跡とその周辺の地形発達

上記のことから、徳王子広本遺跡のI区が立地する開析谷内では、泥炭質ないし腐植質の泥層が連続的に累重するような、縄文時代前期から弥生時代に長期間にわたって、安定した湿地や池沼の堆積環境が継続する場所であったことが確認される。本遺跡の西方約1kmに位置する花宴遺跡(廣田編, 2010)では、縄文時代中期から弥生時代前期頃に、碎屑物主体の泥層から砂泥層の累重が確認される。さらに、弥生時代前期から後期にかけては、砂礫層で充填される河床堆積物と、その側方へ同時異相として広がる泥質砂層の河岸堆積物からなる活発な河川堆積作用が進行する(図4-10)。このように、徳王子広本遺跡と花宴遺跡では、遺跡の基盤をなす沖積層の層相が大きく異なる。地形分類図および空中写真判読によれば、これらの遺跡は、立地する地形面が異なることが指摘される(図4-8)。それぞれの遺跡の立地面については、徳王子広本遺跡のI区が谷底平野への出口付近に位置す

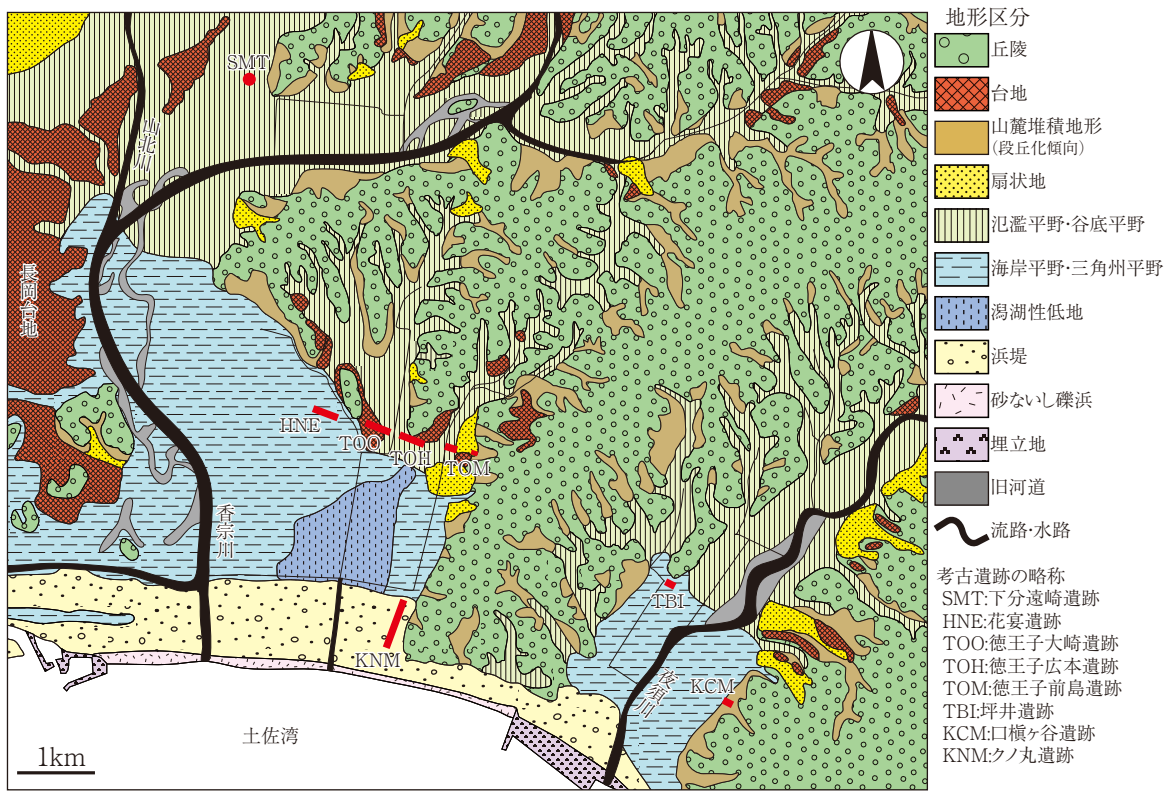


図4-8 徳王子広本遺跡周辺の地形分類図

丘陵内の開析谷底、花宴遺跡が香宗川の氾濫原上となる。花宴遺跡での遺跡基盤層は、相対的に河川の影響を強く受ける層相を示しており、立地する地形面と調和的な累重状況を示す。これに対し、徳王子広本遺跡では、丘陵部に限定された小規模な流域面積の河川に涵養された谷底平野に位置しており、香宗川の氾濫の影響を受けない、静穏な環境維持されるような堆積場であることが、層相および立地的観点からも裏付けられる。

以上のことから、徳王子広本遺跡のI区が存在する開析谷内では、花宴遺跡に比べ、相対的水位がかなり高く、さらに湿潤な堆積・土壌環境が安定的に維持されてきたことが指摘される。徳王子広本遺跡では、汽水生種の*Pseudopodosira kosugii*が縄文時代中期の3層より上位で産出頻度が急減する。これに対し、花宴遺跡では、縄文時代中期から縄文時代晩期～弥生時代前期頃に形成された氾濫原堆積物(Ⅲ層)付近まで優占する(図4-11)。このような*Pseudopodosira kosugii*の産出の差異は、徳王子広本遺跡やその周囲が花宴遺跡に比べ、早くにより海水の影響を受けない堆積域となったことを示す。これについては、両遺跡が立地する氾濫平野・谷底低地(徳王子広本遺跡)と、海岸平野・三角州平野(花宴遺跡)の沖積低地の埋積過程の違いを反映したものと推定される(図4-8)。地質学的課題としては、両地形面における堆積システムの比較検討が課題である。

なお、花宴遺跡では、活発な河川堆積作用が認められる弥生時代前期～後期にかけて、水田耕作に関連するとみなされる流路内での井堰の構築や護岸などが認められる(廣田編, 2010)。検出された遺構の状況と立地的観点から、当該期の水田は、花宴遺跡内ないしその周囲に存在していた可能性が高いと考えられる。徳王子広本遺跡では、弥生期の耕作に関連する遺構が検出されていない。このことから、弥生期の水田耕作に伴う生産活動は、河川堆積作用が卓越する花宴遺跡とその近辺の香宗

5. 考察 (1) 層序と堆積環境

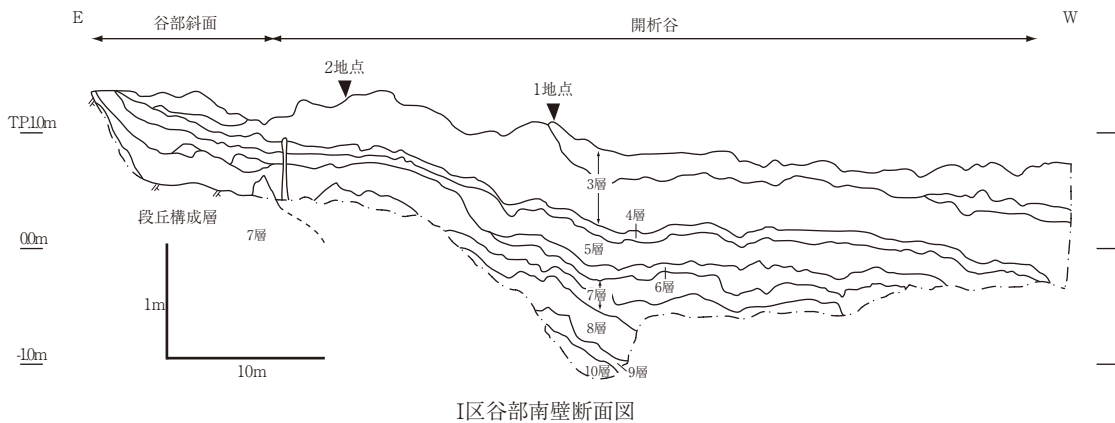
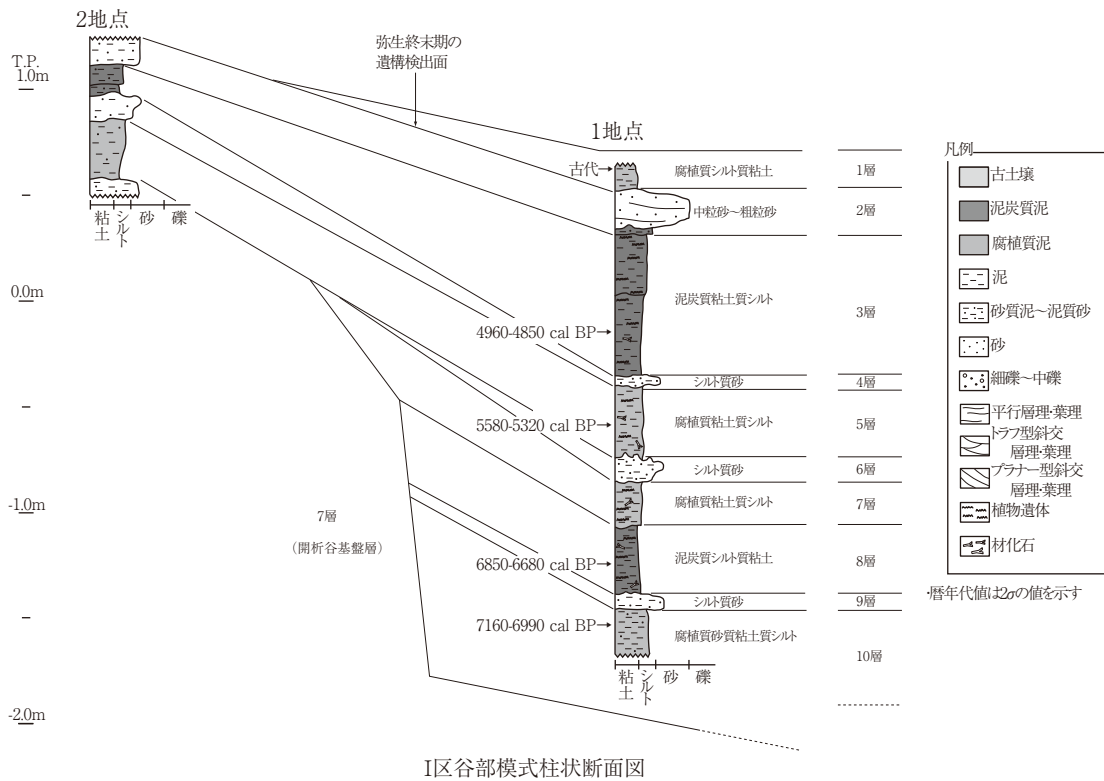


図4-9 I区における堆積層累重の状況

川下流域の氾濫原を中心に行われていた可能性が示唆される。徳王子広本遺跡のI区が存在する谷底平野で弥生期の水田耕作活動が認められない要因については、水位が高く泥炭質泥層が累重するような過湿の環境であり、水田立地に不適であったためと推測される。これまでの発掘調査結果をふまえると、弥生時代に徳王子広本遺跡とその周辺では、II区や徳王子大崎遺跡が立地する高燥な段丘面上を中心として、居住域などに利用されものと考えられる。I区の開析谷内において水田開発が及ぶのは、今回の発掘調査結果をふまえると、古代以降と判断される。当地域の弥生時代以降の開発史については、発掘結果と自然科学分析にもとづく局地的な地形発達史や古水文環境変化をふまえ、さらに詳細な検討を加えていくことが課題と認識される。

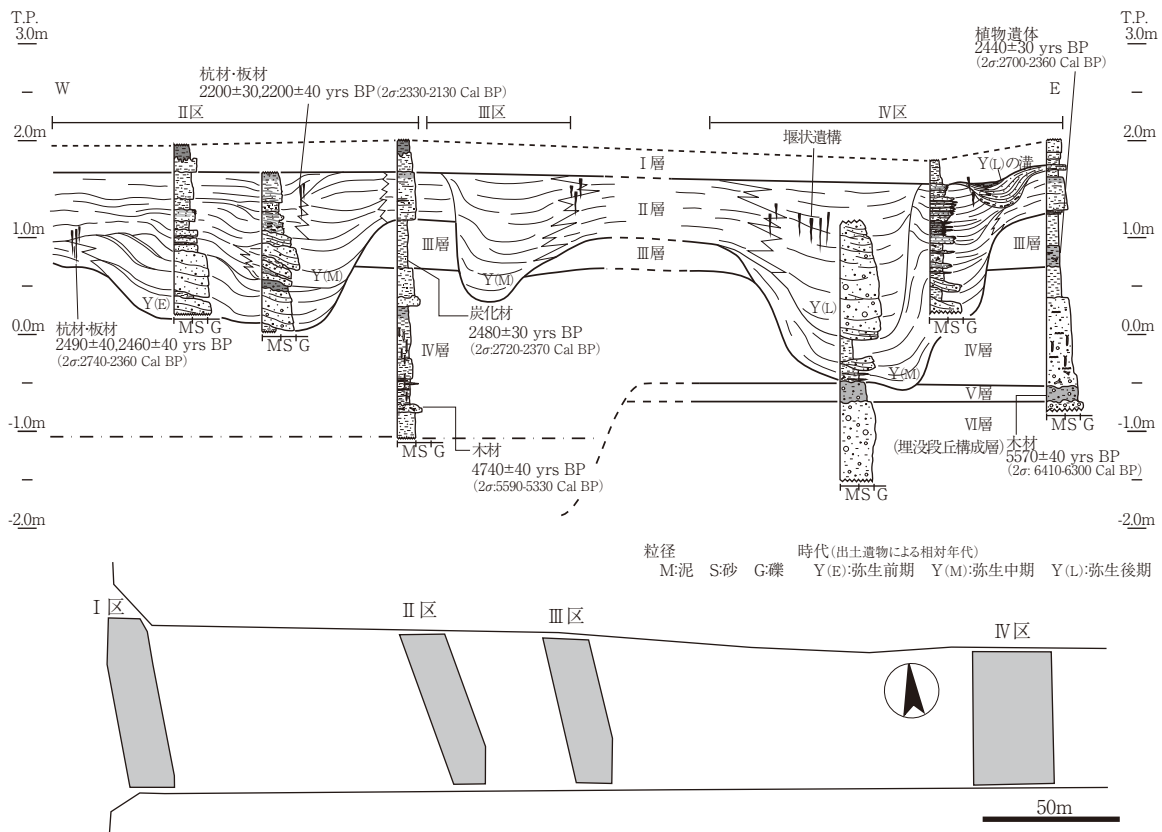


図4-10 花宴遺跡の東西方向の堆積物累重状況(廣田編, 2010より)

(2) 古植生

① 遺跡をとりまく森林植生

I区の開析谷内では、1地点において縄文時代前期～中期(10層～3層下部:試料番号10～4)、縄文時代後晩期頃(3層中部:試料番号3)、縄文時代晩期～弥生時代(3層最上部と2層最下部:試料1・2)と、縄文時代前期から弥生時代にかけてほぼ連続する花粉化石群集変遷が捉えられた。上述した分析層準の層相や堆積環境の検討をふまえると、今回得られた花粉化石群集は、局地性が高いと解釈される。ここでは、I区から得られた花粉化石群集にもとづく遺跡をとりまく古植生変遷について検討を試みる。

まず、花粉化石群集の種類構成についてみると、種類数については、上位層準でやや増加する傾向があるものの、基本的に変化しない。分析層準は、アカガシ亜属・シイノキ属・ヤマモモ属などの常緑広葉樹、マキ属・モミ属・ツガ属・スギ属・マツ属・ヒノキ類などの針葉樹、コナラ亜属・ニレ属-ケヤキ属・エノキ属-ムクノキ属などの落葉広葉樹によって構成される。これらの種類のうち、常緑広葉樹および針葉樹のマキ属は暖温帯性常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の構成要素である。これらの産出傾向をふまえると、針葉樹のスギ属・モミ属・ツガ属については、温帯性針葉樹のスギ・モミ・ツガに由来する可能性が高い。また、落葉広葉樹の種類は、暖温帯から冷温帯下部に分布する種類からなり、その多くが溪畔林ないし河畔林の構成要素を含む種類である。このように縄文時代前期から弥生時代にかけての植物相(フローラ)は、現在の暖温帯から冷温帯下部に分布する樹種からなることがうかがえる。ただし、各種類の産出率については、層位的に変化することから、植生が段階的に変化したことが推定される。

5. 考察 (2) 古植生

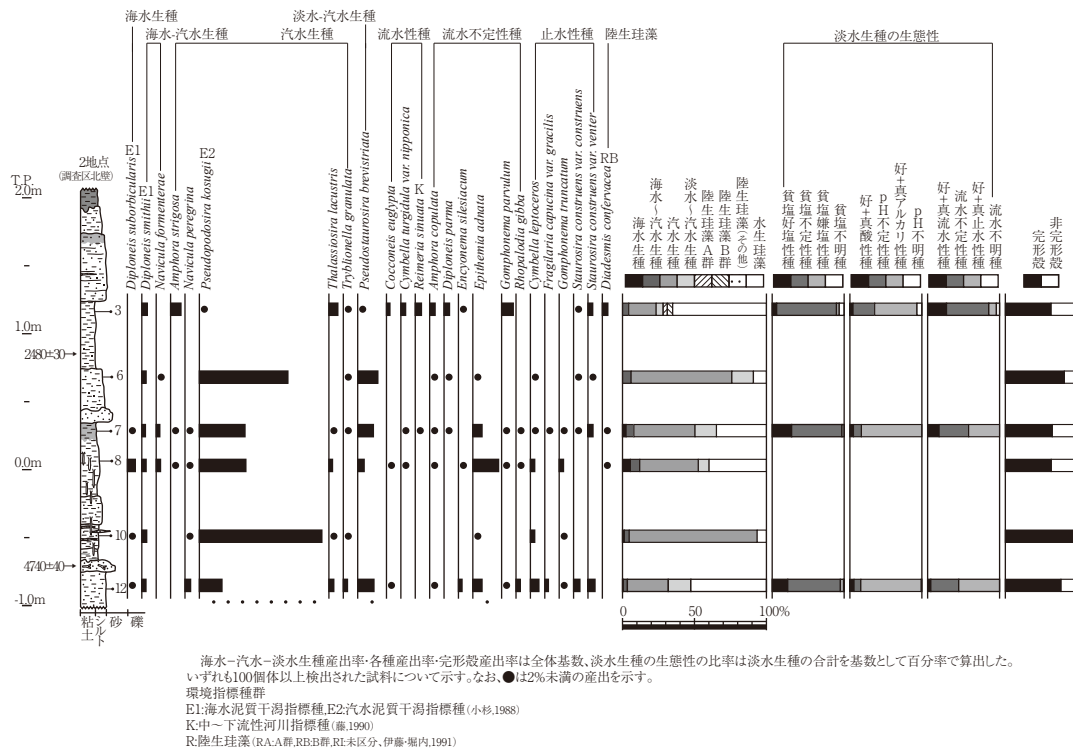


図4-11 花宴遺跡2地点の主要珪藻化石群集の層位分布(廣田編, 2010より)

最初の変化が認められる層準は、縄文時代前期の10層から8層にかけてである。この変化は、常緑広葉樹のアカガシ亜属・シイノキ属や落葉広葉樹の種類が増加と、マツ属(複雑管束亜属を含む)の急激な減少が特徴づけられる。当該層準では、10層形成期に海水の影響を強く受ける領域から、8層形成期に潮汐流などの海水の影響が相対的に小さく、閉鎖的で塩類が集積しやすい富栄養な池沼～沼沢地へと変化する。10層から8層にかけての植生変化については、このような分析地点の堆積環境変化と関連していると解釈される。すなわち、当時の海岸線に相対的に近いと推定される10層でのマツ属の多産は、アカマツ・クロマツなどに由来する複雑管束亜属を含むことから、海岸植生としてのマツ林を反映している可能性が高いと考えられる。8層形成期には、海岸線の後退を伴う地形変化が生じたと推定されることから、海岸植生としてのマツ林が衰退し、アカガシ亜属やシイノキ属などの常緑広葉樹林やコナラ亜属などの落葉広葉樹が、陸化した平野上に分布を上げたといえる。これら分布を上げた要素のうち、シイノキ属は主に丘陵地や低山地に林分を形成し、低地でしばしばタブ林と混生する(山中, 1979)。また、これらと随伴して漸増する落葉広葉樹の多くは、河畔林の構成要素でもある。これらのことから、8層形成期には、分析地点周辺において陸域(木本植生の生育領域)が拡大し、氾濫原域において林分が拡大した可能性が指摘される。

次に変化がみられるのは、縄文時代中期初頭の7層から5層にかけてである。本層での変化は、常緑広葉樹のアカガシ亜属の増加が特徴であり、調査地点周辺でアカガシ亜属が分布を上げたことが推定される。さらに、花粉化石群集の層位的変化からは、この変化に先だって温帯性針葉樹が分布を上げたことが読みとれる。このうち、アカガシ亜属は、土地的に安定した領域が生育適地である。これに対し、温帯性針葉樹は、斜面崩壊地や地滑りなどにより鉍質土壌が露出する攪乱地が生育適地である(中静, 2004)。このような生態性から、7層から5層にかけては、分析地点の周囲でいったん攪

乱地が増大するような地形変化が生じた後に、土地条件が安定化へ転じる傾向があったことが推察される。

縄文時代中期初頭の5層から縄文時代後晩期頃～弥生時代頃の3層では、大きな植生変化が認められない。この時期には、開析谷底の氾濫原や丘陵裾部において、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属、エノキ属－ムクノキ属といった落葉広葉樹、丘陵・段丘面上やさらに周囲の山地斜面でアカガシ亜属、シイノキ属などの常緑広葉樹を中心とする林分が存在したと考えられる。また、モミ属、ツガ属、スギ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科といった温帯性針葉樹は、段丘面や山地斜面の攪乱地や谷沿いなどの土地条件の悪い場所や、沖積錐や小規模な沖積扇状地上にも分布していたと推定される。

以上、今回の分析地点から得られた縄文時代前期から弥生時代の植生変遷について述べてきた。本地域では、本遺跡の西方約1kmに位置する香宗川の三角州平野に立地する花宴遺跡でも同時期の花粉化石群集が得られている。花宴遺跡の花粉化石群集は、縄文時代中期初頭頃の5590-5330 cal BPから弥生時代前中期の層準にかけて、アカガシ亜属が40%前後と高率に産出し、シイノキ属を加えると50～60%前後を常緑広葉樹が高率を占める。今回の徳王子広本遺跡の花粉化石群集もアカガシ亜属・シイノキ属の多産が特徴であるが、その産出率は明らかに花宴遺跡に比べて低率である。このような花粉化石群集の産状の違いは、両遺跡の立地環境に帰属する花粉化石群集の形成過程(タフォノミー)の違いに起因するものと判断される。花宴遺跡は三角州平野に位置し、集水域の面積が開析谷に位置する徳王子広本遺跡より大きく、かつ堆積環境も不安定である(廣田編, 2010)。上記の両遺跡の立地環境の違いから、花宴遺跡の花粉化石群集については、平野の広範囲から供給された花粉化石からなり、広域の平均的な植生を反映していると解釈される。これに対して、徳王子広本遺跡の花粉化石群集は、開析谷の集水域を中心とした、局所的な植生を反映していると捉えられる。

上記で述べたような近接する遺跡でのタフォノミーを考慮して花粉分析結果を解析すると、縄文時代前期には、平野を取り囲む山地・丘陵に常緑広葉樹林が成立していたとみられる。その後、縄文時代中期初頭頃には、海岸線の後退に伴う陸域の拡大に伴い、段階的に常緑広葉樹林が低地に向かって分布を拡げたと考えられる。

既往の高知県南部の花粉分析結果では、本地域と同様に縄文海進最盛期以降、アカガシ亜属やシイノキ属の花粉化石が優勢である(三宅・石川, 2004; 三宅ほか, 2005; 山中ほか, 1992; 中村, 1965)。ただし、今回の成果をふまえると、照葉樹林の分布拡大については、気候変化だけでなく、地形発達過程とも関連性があったことが推定される。山地・丘陵および氾濫原の地形変化は、流域ごとの地質・地形特性を反映して、地域性が存在することが通常である。このため、多くの考古遺跡が立地する土佐湾沿岸域の照葉樹林の成立とその変遷については、流域の地形発達史と関連して、地域差が生じていたことが予想される。この点については、人間の植物利用に関係する植生史とも関係する課題であり、今後流域ごとの照葉樹林の分布拡大に関する検討を行っていくことが課題の1つと考えられる。

なお、暖温帯林を構成する代表的な樹木として、タブノキやクスノキなどクスノキ科の植物がある。クスノキ科の花粉化石は膜が弱く化石としてはほとんど残らないため(Feagri and Iversen, 1989)、花粉化石からクスノキ科が生育していたかどうかを推測することは難しいが、現存植生の状況や、同時期の高知県下の遺跡において、クスノキ科の木材や種実が検出されていることから考えて、シイノキ類に混じってクスノキ科植物も多数生育していた可能性は高い。

5. 考察 (2) 古植生

② 調査区およびその周辺の古植生

開析谷の中心部に位置する1地点の縄文時代前期から弥生時代の10層から3層は、基本的に湿地から池沼の堆積環境が形成されていたことが、層相および珪藻化石群集から確認される。このうち、水域の環境については、10層から5層が汽水域、3層が淡水域であった。このような堆積環境が復元される10層から3層にかけては、開析谷内において、花粉化石からガマ属、ミズアオイ属、ハス属、ヒシ属、フサモ属、サンショウモ、アカウキクサ属、植物珪酸体からヨシ属といった水生植物が生育していたことがうかがえる。種実遺体は弥生時代頃の試料番号2のみであるが、カワツルモ、ヒルムシロ属、イバラモ属、ヒメシロアサザといった水生植物が確認される。層相から、分析地点の1地点に挟在する植物遺体は、現地性が高いことが指摘される。従って、縄文時代前期から弥生時代に開析谷内では、上記の水生植物が分布していたものと判断される。

その他、開析谷の花粉分析結果では、イネ科、カヤツリグサ科が多く産出し、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属など開けた草地を作る種類も検出される。また、植物珪酸体では、同様の土地条件に生育するネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ススキ属なども認められる。分析地点近傍の地形をふまえると、これらは開析谷周囲の段丘面や丘陵裾部に生育していたと推定される。

弥生時代の2層の試料番号1は、木本花粉化石群集に変化はないものの、草本類の割合が増加する。種類構成は大きく変わらなかったとみられるが、調査区周辺では、開けた空間が拡大し、カヤツリグサ科、イネ科等が繁茂する草地が増加した可能性がある。弥生時代には、段丘面において居住域が形成された可能性が発掘調査から示唆されており、このような人間活動に対応した植生変化であるとも考えられる。

なお、3層最上部の試料番号2と2層の試料番号1では、栽培種のイネ属が検出される。このことから、これらの層準は、弥生時代前期以降であると判断される。このうち、洪水堆積物の2層では、含量密度が数百個/g程度と少なく異地性と判断される。3層最上部では、比較的多くのイネ属が検出される。肉眼観察では、3層上部やその付近において耕作を示唆するような土壌の擾乱構造が認められず、耕作地を示唆するような遺構も検出されていない。従って、3層最上部に含まれるイネ属についても、分析地点での稲作を示唆するものではないと認識される。その由来については、現段階において不明である。

段丘面上のⅡ区で検出された鎌倉時代の井戸SE-1(3地点試料番号15)では、花粉化石において、イネ科を中心とする草本類の割合が、弥生時代に比べさらに高くなる。このことから、周辺域での草地の拡大が示唆される。当該期に段丘面上では、樹木が存在しておらず、草地や裸地が広がっていたと考えられる。木本花粉では、マツ属花粉が優占しており、周辺の森林において、人為的な植生破壊に伴う二次林化や裸地化が進行していたことがうかがえる。

また、SE-1井戸埋土の種実分析では、イネの穎が検出される。さらに、井戸埋土からは、タニシ類が多く検出されている。井戸底部付近に集積する検出状況からは、これらが廃棄されたものである可能性が示唆される。しかし、現段階において埋没過程に不明な点が多く、その性格に関して詳細な言及を行うことは難しい。なお、イネ以外の栽培植物としては、ソバ属の花粉化石が検出されることから、分析地点近傍でのソバの栽培・利用も示唆される。その他、井戸埋土からは、スブタ、ホタルイ属、イボクサ、ミズアオイ属、タガラシ、タカサブロウといった水生植物も確認される。これらは水田に雑草としてふつうに見られる種類である。井戸が立地する段丘面上では、高燥な土地条件で

あり、水生植物が広く生育するような場所が存在したとは考えられない。よって、これらは、周囲の水田ないし湿地などの湿潤地からの再堆積と考えられるが、現状において具体的な堆積過程を復原することがまったく出来ていない。これらのことから、SE-1に含まれる動植物遺存体の解釈にあたっては、立地状況や埋没過程を明らかにしていくことが必要と考えられる。

参考文献

- 安藤一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa. Diatom,10, 35-47.
- Feagri K. and Iversen J.,1989,Textbook of Pollen Analysis. The Blackburn Press,328p.
- 原口 和夫・三友 清史・小林 弘,1998,埼玉の藻類 珪藻類.埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.
- 廣田佳久編,2010,花宴遺跡.高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,222p.
- Hustedt, F.,1937-1939,Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java,, Bali und Sumatra.Archiv für Hydrobiologie, Supplement,15:131-177,15:187-295,15:393-506,15:638-790, 16:1-155,16:274-394.
- 伊藤良永・堀内誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌,6,23-45.
- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 国土地理院,2006a,1:25000 土地条件図 高知.国土地理院地理調査部防災地理課.
- 国土地理院,2006b,1:25000 土地条件図 安芸.国土地理院地理調査部防災地理課.
- 近藤錬三,2004,植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46-64.
- 小杉正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用.第四紀研究,27,1-20.
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田啓五,2006,小林弘珪藻図鑑.第1巻,(株)内田老鶴圃,531p.
- 高知県,1966,土地分類基本調査 高知 5万分の1 国土調査,経済企画庁.
- Kra m m e r, K.,1992,PINNULARIA.eine Monographie der europäischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER,353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1986,Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag,876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1988,Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae,Suirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag,536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991a,Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales, Fragilariaceae,Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag,230p.
- Kra m m e r, K. & Lange-Bertalot, H.,1991b,Bacillariophyceae.4.Teil: Achnantheaceae,Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer Verlag,248p.
- Lowe, R.L,1974,Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms.334p. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005.Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.

参考文献

宮脇 昭編著,1982,日本植生誌 四国,539p.,至文堂.

三宅 尚・石川慎吾,2004,高知県中村市具同低湿地周辺における完新世の植生変遷.日本花粉学会誌,50,83-94.

三宅 尚・中村 純・山中三男・三宅三賀・石川慎吾,2005,高知平野伊達野低地周辺における最終氷期以降の植生史.第四紀研究,44,275-288.

中村 純,1965,高知県低地部における晩氷期以降の植生変遷,第四紀研究,4,200-207.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.

第V章 考察

1. 弥生時代

本遺跡では、弥生時代前期の土坑や溝跡が低位段丘上に位置するⅡ区で確認されている。竪穴建物跡など集落の存在を断定する遺構は確認されていないが、本遺跡の立地する丘陵には当該期の集落が存在していた可能性が考えられる。本遺跡の西約300mに所在し、本遺跡と同じ低位段丘上に立地する徳王子大崎遺跡でも当該期の土坑が検出されており、本地域内に複数存在する低位段丘上には弥生時代前期の集落が点在していた可能性が示唆される。

また、低湿地に位置するⅡ区では弥生時代後期の遺物が出土しており、なんらかの人間活動があったことを示している。本遺跡で行った自然科学分析では、Ⅱ区周辺で水田開発が行われたのは古代以降と推測されており、本調査区から出土している遺物は出土状況から祭祀関連に使用されたとみられるが、判然としない。

2. 古代

本遺跡では、方形掘方を指向する掘立柱建物跡(SB-12)がⅡ区で確認されている。この掘立柱建物跡以外に当該期と断定される遺構は確認されておらず、本遺跡におけるこの遺構の性格は判然としない。建物を構成する柱穴の形状からいわゆる官衙に関連する建物跡と考えられるが、出土している遺物は弥生土器片4点、須恵器片1点のみであり、遺物から明確な時期を断定することはできない。

本遺跡の東約2.5km、夜須川左岸に所在する口槇ヶ谷遺跡でも同様の掘立柱建物跡が確認されており、本遺跡で確認された掘立柱建物跡は地域ごとに存在した官衙に関連する建物と推測される。

3. 中世

本遺跡で中心となる時期で、Ⅱ区において当該期の掘立柱建物跡や土坑、溝跡など多くの遺構が確認されており、掘立柱建物跡の棟方向や区画溝の方向から3時期(時期1~3)に分けることができる。

時期1はSB-1~8で構成される建物群にSA1・2が付随するもので、北区画(SB-1)と南区画(SB-2~8, SA1・2)が区画溝(SD-12)によって分けられている。この時期は2区画以上の屋敷が本遺跡に存在していたことを示しており、確認された遺構が最も多い時期である。このうち、総柱建物はSB-2・7で建物規模からみてSB-2が主屋と考えられる。この主屋の西側に他の建物が展開し、なかでもSB-5は焼成土坑で石敷がみられるSK-1が建物内部に存在しており、なんらかの作業用建物とみられる。また、SB-4には井戸(SE-1)が付随している。

時期2はSB-9と区画溝と考えられるSD-37で構成されるもので、時期1に比べて建物数が少ない。SD-37を境に北と南に区画されるが、北には建物が確認されておらず、1区画のみ存在していたと考えられる。

時期3は区画溝と考えられるSD-34のみが確認されるが、区画内には建物は確認されておらず、その性格は判然としない。

これら3時期は出土している遺物からみていずれも中世後期と考えられるが、明確な時期差を断定することはできなかった。しかし、時期1にみられるような建物配置は当該期の屋敷構成を考えるうえで、貴重な資料になるとみられる。

4. まとめ

4. まとめ

本遺跡の発掘調査では弥生時代、古代、中世の遺構・遺物が確認されており、時代ごとに本遺跡の変遷を簡単にまとめてみたい。

本遺跡における初現は弥生時代前期である。当該期の土坑が検出されており、当該期の集落が本遺跡に存在していた可能性が考えられる。その後、弥生時代後期の遺物が出土しており、祭祀関連とみられるが、判然としない。

古代では掘立柱建物跡が確認され、地域ごとに存在していたとみられる官衙関連の施設と考えられる。その後の中世において本遺跡が最も盛行する時期を迎え、掘立柱建物跡や柵列など多くの遺構が確認されている。これは主屋を中心として周囲に建物が展開する中世の屋敷が存在していたことを明確に示している。

参考文献

高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『口楨ヶ谷遺跡』 2008年

高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『徳王子大崎遺跡』 2013年

遺物觀察表

凡例

法量は土器を基準にcmで示しているが、土製品・石製品の場合は口径が全長(cm)、器高が全幅(cm)、胴径が全厚(cm)、底径が重量(g)と読み替えている。それ以外の値については、特徴または本文中に記している。かっこ付きの数値は残存値を示している。

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
1	I区 第I層	須恵器 甕	(14.8)	(4.2)	-	-	灰色 〃	良好	口辺部内外面に回転ナデ、胴部内外面にヨコナデを施す。
2	〃 〃	土師質土器 杯	-	(1.5)	-	5.2	にぶい黄橙色 浅黄色	やや不良	摩耗のため調整は不明瞭であるが、底部切り離しは回転糸切りと考えられる。
3	〃 〃	〃 〃	-	1.7	-	7.2	にぶい黄橙色 〃	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが、底部切り離しは回転糸切りと考えられる。
4	〃 〃	土製品 土錘	4.3	2.2	1.7	9.6	橙色	良好	ほぼ完存し、孔径0.7cm
5	〃 第II層	〃 〃	3.4	1.6	1.5	(8.2)	浅黄橙色	〃	一部を欠損し、孔径0.5cm
6	〃 〃	〃 〃	3.6	1.9	1.9	8.0	橙色	〃	ほぼ完存し、孔径0.7cm
7	〃 〃	〃 〃	4.0	1.5	1.5	(7.0)	〃	〃	片側を欠損し、孔径0.4cm
8	〃 〃	〃 〃	4.1	1.4	1.3	(6.4)	にぶい橙色	〃	一部を欠損し、孔径0.4cm
9	〃 〃	〃 〃	4.2	1.7	(1.4)	(7.9)	橙色	〃	一部を欠損し、孔径0.7cm
10	〃 〃	〃 〃	4.3	1.5	1.5	7.2	にぶい橙色	〃	完存し、孔径0.5cm
11	〃 〃	〃 〃	4.3	2.1	1.9	13.9	橙色	〃	完存し、孔径0.5cm
12	〃 〃	〃 〃	4.3	2.2	1.9	(10.8)	にぶい赤褐色	〃	一部を欠損し、孔径0.7cm
13	〃 〃	〃 〃	4.9	3.4	3.4	51.1	灰色	〃	ほぼ完存し、孔径1.1cm
14	〃 〃	〃 〃	5.7	2.9	(2.1)	(34.4)	にぶい橙色	〃	一部を欠損し、孔径0.9cm
15	〃 第IV層	木製品 椀	-	(1.5)	-	(4.5)	灰赤色 暗赤褐色	-	板目取りで作られる。高台は欠損し、内面の朱漆は大部分が剥落するが、金で描いた文様の一部が残存する。
16	〃 第VII層	石製品 叩石	10.5	8.4	3.1	402.5	-	-	完存し、片面と側面の2/3に敲打痕が認められる。
17	〃 〃	木製品 付札	8.4	1.4	0.3	-	-	-	付札と考えられるもので、板目取りで作られる。側面は面状に仕上げ、全体的に丁寧な加工を施す。
18	〃 第VII層	弥生土器 甕	-	(2.6)	-	3.9	にぶい黄橙色 灰黄色	やや不良	摩耗のため調整は不明である。
19	〃 〃	土師器 〃	32.6	(4.6)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	内面にハケ、口辺部外面にヨコナデ、胴部外面にハケを施す。
20	〃 〃	須恵器 高杯	-	(4.0)	-	-	黄灰色 灰色	良好	内外面とも回転ナデ調整が認められ、外面にはハケ状原体による刺突文を施す。
21	〃 〃	土師質土器 杯	-	(2.5)	-	5.8	にぶい黄橙色 〃	〃	摩耗のため調整は不明であるが、底部外面には回転糸切り痕が残る。
22	〃 〃	〃 〃	-	(1.6)	-	6.2	灰黄褐色 灰黄色	〃	器面に回転ナデを施し、底部切り離しは回転糸切りである。
23	〃 〃	〃 〃	-	(2.1)	-	7.2	にぶい黄橙色 にぶい橙色	やや不良	摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面に回転ナデ調整が残る。
24	〃 〃	〃 小皿	(5.8)	(1.2)	-	4.4	橙色 〃	〃	口縁部を欠損し、器面には回転ナデを施す。底部切り離しは回転糸切りである。
25	〃 〃	〃 〃	6.8	1.3	-	3.9	浅黄色 〃	〃	ほぼ完存し、手づくね成形である。内面にハケ調整が認められる。

遺物観察表2

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面		
26	I区 第Ⅶ層	土師質土器 羽釜	19.9	(3.6)	-	-	灰黄色 〃	やや不良	口辺部内外面にヨコナデ, 胴部内面にハケを施す。
27	〃 〃	瓦質土器 鍋	-	(3.4)	-	-	灰色 〃	〃	全体的に摩耗が著しいが, 外面の一部にヨコナデ調整が残る。
28	〃 〃	青磁 碗	-	(4.7)	-	4.6	灰オリーブ色 〃	良好	鎚蓮弁文と考えられる。
29	〃 〃	白磁 〃	18.8	(2.1)	-	-	灰白色 〃	〃	口辺部破片である。
30	〃 〃	近世磁器 〃	-	(2.9)	-	4.4	灰オリーブ色 〃	〃	削り出し高台で, 畳付と高台内側に砂目が残る。
31	〃 〃	石製品 砥石	9.7	3.5	1.8	98.5	-	-	片面のみ使用痕が認められる。
32	〃 〃	木製品 杯	9.0	(1.7)	-	-	暗赤褐色 〃	-	器面全体には朱漆が認められ, 下地は黒漆の可能性が考えられる。
33	〃 〃	〃 把手	(13.2)	4.5	1.4	-	-	-	板目取りで作られ, 雲形を模しており, 片側を欠損する。
34	〃 〃	〃 曲物	16.8	(7.4)	0.6	-	-	-	板目取りで作られ, 約1/2を欠損する。
35	〃 〃	〃 〃	(42.1)	(8.9)	2.0	-	-	-	板目取りで作られ, 大部分を欠損する。
36	〃 〃	〃 形代	12.1	3.4	0.9	-	-	-	柁目取りで作られるが, 大部分が欠損する。側面を斜めに削り, 断面は三角形を呈する。
37	〃 第Ⅷ層	弥生土器 壺	13.2	(6.0)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄色	やや不良	全体的に摩耗が著しいが, 口縁部外面にヨコナデ調整, 胴部内外面にハケ調整が残る。
38	〃 〃	〃 〃	14.4	(4.5)	-	-	にぶい黄橙色 浅黄橙色	〃	摩耗のため調整は不明である。
39	〃 〃	〃 〃	16.0	(6.0)	-	-	灰黄色 〃	良好	内面と口縁部外面にヨコナデ, 口辺部外面下半にハケを施す。
40	〃 〃	〃 〃	22.6	(1.9)	-	-	褐灰色 〃	〃	内外面にハケ調整を施す。
41	〃 〃	〃 〃	23.1	(2.7)	-	-	暗灰色 灰黄褐色	〃	内面にハケ調整のあとヘラミガキ調整, 外面にヨコナデ調整とハケ調整が認められ, 口縁端部に波状文を施す。
42	〃 〃	〃 〃	-	(4.2)	-	5.6	オリーブ黒色 灰黄色	〃	内面にナデ, 外面にハケを施す。
43	〃 〃	〃 〃	-	(3.7)	-	7.6	黄灰色 にぶい黄橙色	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが, 内面に指頭圧痕とナデ調整が残る。
44	〃 〃	〃 〃	-	(4.8)	-	2.9	灰色 灰黄色	〃	内面にハケとナデ, 外面にハケを施す。
45	〃 〃	〃 〃	-	(11.5)	-	6.7	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	内面にナデのちハケ, 外面にタタキとハケを施す。
46	〃 〃	〃 甕	-	(2.9)	-	-	にぶい黄褐色 黒色	〃	内外面にヨコナデを施す。口縁端部に刻目, 外面に3条の沈線が認められる。
47	〃 〃	〃 〃	16.2	(7.9)	15.6	-	にぶい黄色 〃	〃	口辺部内外面にヨコナデ, 胴部内面にハケ, 胴部外面にタタキのちハケを施す。
48	〃 〃	〃 〃	14.4	(10.3)	-	-	灰黄色 〃	〃	口縁端部にヨコナデ, 口辺部内外面にハケ, 胴部内面にナデ, 胴部外面にタタキを施す。
49	〃 〃	〃 〃	15.6	(6.4)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口辺部内外面にヨコナデ, 胴部内外面にハケを施す。
50	〃 〃	〃 〃	15.8	(10.2)	-	-	黒色 灰黄色	〃	内面にハケ, 外面にヨコナデとハケ, タタキを施す。

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
51	I区 第Ⅷ層	弥生土器 甕	16.4	(5.4)	-	-	灰黄色 〃	良好	口辺部内面にハケ、口辺部外面にハケのちヨコナデ、胴部内面にハケのちナデ、胴部外面にハケを施す。
52	〃 〃	〃 〃	22.7	(4.2)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	内外面ともハケを施し、口縁部外面の一部に煤が付着する。
53	〃 〃	〃 〃	24.0	(8.1)	-	-	灰黄色 暗灰黄色	〃	内面と口辺部外面にハケ、胴部外面にタタキのちハケを施す。
54	〃 〃	〃 〃	27.4	(10.0)	27.3	-	灰黄褐色 にぶい黄橙色	〃	内面にハケ、外面にヨコナデ、ハケ、タタキのちハケを施し、外面全体に煤が付着
55	〃 〃	〃 〃	14.7	(12.1)	20.2	-	暗灰黄色 黒色	〃	口辺部内外面にヨコナデ、胴部内面にナデ、胴部外面にタタキを施す。外面全体に煤が付着
56	〃 〃	〃 〃	-	(19.3)	19.8	-	灰黄色 〃	〃	胴部破片で内面に強いナデ、外面にタタキのちハケを施す。胴部外面上部から中央部にかけて煤が付着
57	〃 〃	〃 〃	-	(7.9)	-	6.8	暗灰黄色 にぶい黄色	やや不良	内面にナデ、外面にハケを施す。外面には破裂痕が認められる。
58	〃 〃	〃 〃	-	(4.3)	-	6.8	暗灰色 灰黄褐色	良好	内面にナデ、外面にタタキを施す。
59	〃 〃	〃 〃	-	(8.0)	-	4.0	灰色 灰黄色	〃	内面にナデ、外面にタタキを施す。
60	〃 〃	〃 〃	-	(12.2)	-	4.8	にぶい黄橙色 〃	〃	内面にナデ、外面にタタキのちハケを施す。
61	〃 〃	〃 〃	-	(3.4)	-	4.7	黄灰色 にぶい黄色	〃	内面にナデ、外面にタタキのちナデを施す。
62	〃 〃	〃 〃	-	(3.1)	-	4.4	にぶい黄橙色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にはタタキ目が認められる。
63	〃 〃	〃 〃	-	(3.0)	-	4.2	灰黄褐色 灰黄色	〃	内面にナデ、外面にタタキを施す。
64	〃 〃	〃 〃	-	(3.7)	-	4.1	灰黄褐色 〃	〃	内面にハケ、外面にタタキのちハケを施す。
65	〃 〃	〃 〃	-	(3.7)	-	3.9	〃 〃	良好	内外面ともハケを施す。
66	〃 〃	〃 〃	-	(5.5)	-	3.8	灰黄色 〃	〃	内面にナデ、外面にタタキのちハケを施す。
67	〃 〃	〃 〃	-	(3.7)	-	3.4	灰色 灰黄色	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にヘラナデを施す。
68	〃 〃	〃 〃	-	(6.3)	-	3.7	灰黄色 〃	〃	内面にナデ、外面にタタキのちハケを施す。
69	〃 〃	〃 〃	-	(6.9)	-	3.5	灰黄褐色 〃	〃	内面に指オサエとナデ、外面にハケを施す。外面の一部には煤が付着
70	〃 〃	〃 〃	-	(6.5)	-	3.1	黒色 灰黄色	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にナデ調整、外面にハケ調整が認められる。
71	〃 〃	〃 〃	-	(7.0)	-	2.3	灰黄褐色 にぶい橙色	やや不良	内面にナデ、外面にハケを施す。
72	〃 〃	〃 〃	-	(4.0)	-	2.0	暗灰黄色 淡黄色	良好	内面にナデ、外面にタタキを施す。
73	〃 〃	〃 〃	-	(3.7)	-	1.0	にぶい黄橙色 灰黄褐色	〃	内面にヘラナデ、外面にはナデとヘラ削りを施す。
74	〃 〃	〃 鉢	11.8	7.9	-	4.8	灰黄色 〃	〃	口縁部内面に指オサエ、体部内面にナデ、外面にタタキのちナデを施す。
75	〃 〃	〃 〃	13.9	9.2	13.6	5.1	灰色 浅黄色	〃	内面にヨコナデとナデ、外面にタタキのちナデとハケを施す。

遺物観察表4

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面		
76	I区 第Ⅷ層	弥生土器 鉢	18.2	(8.4)	-	2.2	灰黄色 〃	良好	口縁部内外面にヨコナデ, 体部内面にハケとナデ, 体部外面にタタキを施す。
77	〃 〃	〃 〃	17.5	(3.3)	-	-	〃 〃	〃	口縁部内外面にヨコナデ, 内面にヘラミガキ, 外面にナデを施す。体部外面上端には乱雑な山形文がみられる。
78	〃 〃	〃 〃	18.4	(7.5)	-	-	にぶい黄色 〃	不良	摩耗のため調整は不明である。
79	〃 〃	〃 〃	19.2	(7.6)	-	-	灰黄色 〃	良好	内面にヘラミガキ, 外面にタタキのちハケを施す。
80	〃 〃	〃 〃	-	(4.5)	-	5.6	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが, 内面にナデ調整が認められる。
81	〃 〃	〃 〃	-	(4.8)	-	2.8	にぶい黄色 灰白色	〃	内面にナデ, 外面にタタキを施す。
82	〃 〃	〃 〃	-	(6.2)	-	3.7	浅黄色 〃	不良	摩耗のため調整は不明瞭であるが, 底部内面に指頭圧痕が残る。
83	〃 〃	〃 〃	-	(6.9)	-	-	褐灰色 〃	良好	内面にナデ, 外面にタタキのちハケを施す。
84	v	〃 〃	-	(2.7)	-	5.1	にぶい黄褐色 〃	やや不良	脚付鉢と考えられるもので, 摩耗のため調整は不明である。
85	〃 〃	〃 高杯	-	(6.3)	-	-	浅黄橙色 にぶい橙色	〃	摩耗のため調整は不明である。
86	〃 〃	〃 器台	-	(3.6)	-	-	灰黄色 〃	良好	摩耗のため調整は不明瞭であるが, 器面には指頭圧痕やハケ調整が認められる。
87	〃 〃	〃 ミニチュア	-	(3.8)	-	2.7	灰白色 灰黄褐色	〃	内面に指オサエとナデ, 外面にタタキを施す。
88	〃 〃	〃 須恵器 杯	-	(2.2)	-	11.6	灰色 〃	〃	体部内外面に回転ナデ, 底部内面に回転ナデのあとナデを施し, 底部外面には明瞭な爪形状圧痕が認められる。
89	〃 〃	〃 〃	-	(1.4)	-	12.0	〃 〃	〃	体部内外面に回転ナデ, 底部内面に回転ナデのあとナデを施し, 底部外面には明瞭な爪形状圧痕が認められる。
90	〃 〃	〃 高杯	-	(4.6)	-	-	灰白色 〃	やや不良	杯部内面に回転ナデ調整とナデ調整, 脚柱部内面にナデ, 脚柱部外面に回転ナデを施す。
91	〃 〃	〃 緑釉陶器 椀	-	(1.7)	-	5.7	灰色 〃	良好	硬質系で部分的に緑釉が残存する。内外面とも回転ナデ調整を施す。
92	〃 〃	〃 土師質土器 〃	14.8	5.4	-	6.2	にぶい黄橙色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明瞭であるが, 口縁部外面に回転ナデ調整, 体部下端に回転ヘラ削り調整が認められる。
93	〃 〃	〃 〃	-	(1.6)	-	6.2	〃 〃	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが器面の一部に回転ナデ調整が残る。
94	〃 〃	〃 杯	-	(2.0)	-	8.6	〃 〃	〃	器面には回転ナデを施し, 底部切り離しは回転ヘラ切りである。
95	〃 〃	〃 〃	13.6	4.2	-	7.2	灰黄色 〃	良好	器面には回転ナデを施し, 底部切り離しは回転糸切りである。
96	〃 〃	〃 〃	-	(3.6)	-	6.4	にぶい黄橙色 〃	やや不良	体部内外面に回転ナデ, 底部内面に回転ナデのあとナデを施し, 底部切り離しは回転糸切りである。
97	〃 〃	〃 〃	-	(2.0)	-	6.6	にぶい黄色 浅黄色	良好	摩耗のため調整は不明瞭であるが, 内面に回転ナデ調整が認められ, 底部切り離しは回転糸切りである。
98	〃 〃	〃 小皿	8.9	2.0	-	6.1	灰黄色 にぶい橙色	やや不良	摩耗のため調整は不明瞭であるが, 底部外面には回転ヘラ切り痕が認められる。
99	〃 〃	〃 〃	-	(1.1)	-	4.8	浅黄色 〃	良好	摩耗のため調整は不明瞭であるが, 器面には回転ナデ調整が認められる。底部切り離しは回転糸切りである。
100	〃 〃	〃 高台付小皿	9.2	(3.9)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	器面には回転ナデを施す。

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調		焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面			
101	I区 第Ⅷ層	近世磁器 紅皿	4.1	1.4	-	1.3	灰白色 〃	良好	高台畳付に砂目が認められる。	
102	〃 〃	石製品 石鏃	2.2	1.5	0.2	0.5	-	-	凹基式で、完存する。	
103	〃 〃	〃 〃	3.6	2.3	0.5	3.2	-	-	凸基式で、完存する。	
104	〃 〃	〃 叩石	9.8	8.2	2.6	314.9	-	-	片面と側面1カ所に敲打痕が認められる。	
105	〃 〃	〃 〃	11.2	9.2	2.4	398.9	-	-	片面と側面の約1/2に敲打痕が認められる。	
106	〃 〃	〃 〃	12.3	9.4	3.2	573.6	-	-	両面と側面3カ所に敲打痕が認められる。	
107	〃 〃	〃 〃	12.7	8.6	3.6	612.7	-	-	両面に弱い敲打痕、側面4カ所に強い敲打痕が認められる。	
108	〃 〃	土製品 土錘	4.5	1.6	1.6	10.0	橙色	良好	完存し、孔径0.6cm	
109	〃 〃	〃 〃	8.0	4.4	4.2	120.0	灰白色	やや不良	完存し、孔径1.8cm	
110	〃 〃	木製品 部材	(10.6)	1.3	0.7	-	-	-	板目取りで作られる。端部の両側に抉りを施し、反対側の端部は欠損する。	
111	〃 〃	〃 曲物	13.6	1.9	0.8	-	-	-	板目取りで作られ、両端の側面に抉りを施す。	
112	〃 〃	〃 〃	(50.7)	(8.0)	1.5	-	-	-	板目取りで作られる。	
113	〃 〃	〃 〃	(22.6)	2.6	0.3	-	-	-	板目取りで作られ、片側を欠損する。	
114	〃 〃	〃 〃	(21.4)	5.5	0.5	-	-	-	板目取りで作られ、片側を欠損する。	
115	〃 〃	〃 〃	(13.8)	(3.3)	0.7	-	-	-	片面には弧を描く沈線状の傷が認められ、端部には2カ所穿孔し、樹皮が残る。	
116	〃 〃	〃 〃	(16.0)	(5.9)	0.8	-	-	-	計5カ所穿孔しており、そのうち2カ所には樹皮が残る。	
117	〃 〃	〃 箱	13.5	2.8	1.1	-	-	-	柁目取りで作られる。	
118	〃 〃	〃 下駄	23.7	(3.0)	6.2	-	-	-	板目取りで作られる。連歯下駄で、約1/2を欠損しており、眼が1孔認められる。	
119	〃 〃	〃 鋏	(31.8)	(9.0)	1.2	-	-	-	板目取りで作られる。刃部の大部分と柄軸部の一部を欠損する。	
120	〃 〃	〃 鋤	(53.5)	(6.4)	2.8	-	-	-	板目取りで作られる。1/2以上を欠損するとみられ、片面には加工痕が明瞭に残る。	
121	〃 〃	〃 田下駄	(13.5)	29.0	2.1	-	-	-	板目取りで作られ、端部のみ残存する。	
122	〃 〃	〃 〃	(30.5)	9.7	2.4	-	-	-	板目取りで作られ、大部分を欠損する。	
123	〃 〃	〃 木鏃	(14.9)	1.0	0.6	-	-	-	先端部と基部を欠損し、断面形は菱形を呈する。	
124	〃 〃	〃 斎串	14.1	1.9	0.2	-	-	-	板目取りで作られる。側面は面取りを行い、上端部を山形に削り、下端部を尖らす。	
125	〃 〃	〃 鳥形	48.0	5.7	2.3	-	-	-	板目取りで作られる。羽部を欠損しており、表面には粗い加工痕が認められる。	

遺物観察表6

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調		焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面			
126	I区 第Ⅷ層	木製品 形代	54.6	7.9	2.1	-	-	-	-	板目取りで作られ、部分的に加工痕が認められる。
127	〃 〃	〃 垂木	(28.7)	3.9	4.4	-	-	-	-	心持材で作られる。片側の端部には挟りが認められるが、もう片側の端部は欠損する。
128	〃 〃	〃 壁板	(18.0)	16.0	2.3	-	-	-	-	板目取りで作られ、大部分を欠損しており、表面には粗い加工痕と加工具による傷が認められる。
129	〃 〃	〃 〃	80.8	10.1	2.0	-	-	-	-	板目取りで作られ、一部が炭化する。
130	〃 〃	〃 建築部材	(41.2)	10.4	1.7	-	-	-	-	板目取りで作られ、片側の端部を欠損しており、矩形を呈する孔が2つ認められる。
131	〃 〃	〃 〃	61.4	4.5	2.8	-	-	-	-	板目取りで作られ、両端を杭状に仕上げ、側面1ヵ所に挟りを施す。
132	〃 〃	〃 不明	(14.1)	2.0	1.9	-	-	-	-	板目取りで作られ、片側の端部を斜めに削り、もう片側の端部は欠損する。中央部には挟りを施す。
133	〃 〃	〃 〃	(22.3)	5.0	1.5	-	-	-	-	板目取りで作られる。片側の端部は両側面を削り、細く仕上げるが、端部は欠損する。
134	〃 〃	〃 〃	(25.5)	(22.2)	2.5	-	-	-	-	板目取りで作られ、大部分を欠損する。側面には挟りを施し、円形を呈する孔を1ヵ所穿つ。
135	〃 〃	〃 〃	(39.0)	(7.9)	1.6	-	-	-	-	板目取りで作られ、両端を欠損し、側面には挟りを施す。
136	〃 〃	〃 〃	(39.3)	6.0	16.5	-	-	-	-	板目取りで作られ、片側の端部は杭状に仕上げるが先端部は欠損する。
137	〃 〃	〃 〃	(41.5)	6.4	1.9	-	-	-	-	板目取りで作られ、片側を欠損する。
138	〃 〃	〃 〃	57.6	6.2	2.2	-	-	-	-	片側端部の側面に挟りを施し、もう片側の端部は断面を楕円状に細く仕上げる。
139	〃 〃	〃 〃	(58.7)	(5.5)	2.3	-	-	-	-	板目取りで作られ、大部分を欠損する。片面と側面に加工痕が認められ、一部が炭化する。
140	〃 第Ⅷ層	弥生土器 壺	21.1	(3.3)	-	-	灰白色 〃	やや不良	-	口縁端部に連続する山形文を施し、口縁部外面にヨコナデ調整、口辺部外面にハケ調整が認められ、
141	〃 〃	〃 〃	15.2	(9.0)	-	-	灰黄色 〃	良好	-	口縁部内外面にヨコナデ、口辺部内外面にハケ、胴部内外面にナデを施す。外面には煤が付着
142	〃 〃	〃 〃	16.0	(6.9)	-	-	灰黄褐色 灰黄色	〃	-	摩耗のため調整は不明瞭であるが、口縁部内外面にヨコナデ調整、頸部外面にハケ調整が認められる。
143	〃 〃	〃 〃	-	(40.8)	50.8	-	灰黄色 〃	〃	-	胴上部に沈線を施す1条の突帯を配する。内面にナデ、外面にヘラミガキ、ハケのちナデを施す。
144	〃 〃	〃 〃	-	(9.5)	-	11.9	灰黄褐色 〃	〃	-	内面と胴部外面に粗いヘラミガキ、胴部外面下端にタタキを施す。
145	〃 〃	〃 〃	-	(14.0)	-	5.6	灰白色 〃	〃	-	内面にハケのちナデ、外面にハケのちヘラミガキを施す。
146	〃 〃	〃 〃	-	(8.8)	-	5.8	灰黄色 〃	〃	-	内面にハケとハケのちナデ、外面にタタキのちハケを施し、底部外面には板状圧痕が認められる。
147	〃 〃	〃 〃	-	(7.8)	-	-	暗灰黄色 〃	〃	-	内面にナデ、胴上部にタタキ、胴下部に丁寧なヘラミガキを施し、胴上部には煤が付着
148	〃 〃	〃 甕	13.2	(16.4)	20.4	-	灰色 黄灰色	〃	-	内面にハケとハケのちナデ、外面全体にタタキを施し、胴部外面下端にはハケ調整も認められる。
149	〃 〃	〃 〃	21.0	(8.9)	-	-	灰黄色 〃	〃	-	口縁端部にヨコナデ、内面にハケとハケのちナデ、外面にハケのちヨコナデとハケを施す。外面全体に煤が付着
150	〃 〃	〃 〃	14.5	(6.8)	-	-	〃 〃	やや不良	-	摩耗のため調整は不明瞭であるが、口辺部内外面にハケ調整が残る。

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
151	I区 第八層	弥生土器 甕	15.0	(5.5)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明である。
152	〃 〃	〃 〃	16.0	(11.5)	18.4	-	灰色 灰黄褐色	良好	摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面と口辺部外面にハケ調整、胴部外面にタタキ目が認められる。
153	〃 〃	〃 〃	18.8	(3.6)	-	-	灰黄色 〃	やや不良	口縁部内面と口辺部外面にハケ、口縁部から口縁部外面にヨコナデを施す。
154	〃 〃	〃 〃	26.8	(7.5)	-	-	灰黄色 にぶい黄橙色	良好	摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面と口辺部外面にハケ調整が認められる。口辺部外面には煤が付着
155	〃 〃	〃 〃	13.8	(4.7)	-	-	浅黄色 灰黄色	〃	口辺部内面と外面全体にハケ、胴部内面にナデを施す。口辺部外面に煤が付着
156	〃 〃	〃 〃	14.4	(6.1)	-	-	灰黄色 黒色	〃	口辺部内外面にハケ、胴部内面にナデ、胴部外面にタタキのちハケを施す。胴部外面には煤が付着
157	〃 〃	〃 〃	16.7	(15.0)	19.5	-	〃 〃	〃	内面に粗いハケとナデ、外面にタタキのちヨコナデとタタキを施す。外面全体には煤が付着
158	〃 〃	〃 〃	18.4	(9.8)	-	-	にぶい黄色 黒色	〃	内面にハケとナデ、外面にタタキのちヨコナデとタタキを施す。外面全体には煤が付着
159	〃 〃	〃 〃	-	(9.8)	-	-	浅黄色 〃	〃	内面にハケ、外面にタタキのちハケを施し、内面下端にはナデが認められる。外面下端には煤が付着
160	〃 〃	〃 〃	-	(16.0)	19.2	5.4	褐灰色 褐黄褐色	〃	内面中央部にハケ、内面下部にナデ、外面全体にタタキのちハケを施す。内面下部には炭化物が付着
161	〃 〃	〃 〃	-	(3.6)	-	4.2	褐灰色 〃	〃	内面にナデ、外面にハケを施す。
162	〃 〃	〃 〃	-	(13.5)	16.6	5.0	灰黄色 〃	〃	内面に強いナデ、外面にタタキのちハケを施す。
163	〃 〃	〃 〃	-	(4.5)	-	4.3	暗灰黄色 〃	〃	内面にナデ、外面にタタキのちハケを施し、底部外面にはナデ調整が認められる。外面の一部には煤が付着
164	〃 〃	〃 〃	-	(3.4)	-	4.0	黒褐色 暗灰黄色	〃	内面いナデ、外面にタタキのちハケを施す。
165	〃 〃	〃 〃	-	(8.2)	-	3.6	灰黄色 黄灰色	〃	内面にナデ、外面にタタキのちハケを施す。外面の一部には煤が付着
166	〃 〃	〃 〃	-	(4.9)	-	3.2	灰黄色 〃	〃	内面にヘラナデ、外面にタタキを施す。
167	〃 〃	〃 〃	-	(14.7)	-	3.0	黒色 灰黄色	〃	内面にナデ、外面にタタキのちハケを施す。
168	〃 〃	〃 〃	-	(6.1)	-	2.7	にぶい黄橙色 灰黄褐色	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にはタタキ目とハケ調整が認められる。外面の一部には煤が付着
169	〃 〃	〃 鉢	22.0	9.6	-	3.7	灰黄褐色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面と体部外面にハケ調整、口縁部外面にヨコナデ調整が認められる。
170	〃 〃	〃 〃	17.4	(6.1)	-	-	灰白色 にぶい黄色	〃	内面にヘラミガキ、外面にタタキのちハケを施し、口縁部内外面にはヨコナデ調整が認められる。
171	〃 〃	〃 〃	16.0	(7.5)	-	-	浅黄色 灰黄色	良好	口縁部内外面にヨコナデ、体部内外面にハケを施す。
172	〃 〃	〃 〃	-	(5.4)	-	3.3	暗灰黄色 〃	〃	内面にハケ、外面にタタキを施す。
173	〃 〃	〃 ミニチュア	-	(4.9)	-	2.7	灰黄色 〃	〃	内面にヘラナデ、外面にタタキのちナデを施す。
174	〃 〃	〃 〃	-	(4.2)	-	-	〃 〃	〃	内面にナデ、外面にタタキのちナデを施す。
175	〃 〃	庄内式土器 甕	16.0	(4.5)	-	-	黒褐色 〃	〃	胴部内面にナデ調整、口辺部外面にヨコナデ調整、胴部外面にタタキ目が認められる。外面全体に煤が付着

遺物観察表8

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調		焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面			
176	I区 第Ⅲ層	須恵器 壺	4.5	11.3	9.8	6.8	灰色 〃		良好	器面には回転ナデを施し、胴中央部に回転ヘラ削り調整が認められる。
177	〃 〃	土師質土器 椀	-	(1.9)	-	6.0	灰黄褐色 にぶい黄橙色		〃	断面台形状の高台が付き、摩耗のため調整は不明
178	〃 〃	〃 杯	-	(1.8)	-	7.7	にぶい黄橙色 〃		〃	器面に回転ナデを施し、底部切り離しは回転ヘラ切りである。
179	〃 〃	〃 〃	-	(1.7)	-	6.5	灰黄色 〃		やや不良	摩耗のため調整は不明で、底部切り離しは回転糸切りである。
180	〃 〃	〃 〃	-	(2.2)	-	6.6	にぶい橙色 灰黄色		〃	摩耗のため調整は不明で、底部切り離しは回転糸切りである。
181	〃 〃	〃 〃	-	(3.0)	-	7.6	にぶい橙色 〃		不良	摩耗のため調整は不明で、底部切り離しは回転糸切りである。
182	〃 〃	〃 〃	-	(2.4)	-	7.9	〃 〃		〃	摩耗のため調整は不明で、底部切り離しは回転糸切りである。
183	〃 〃	〃 〃	-	(2.4)	-	8.0	灰白色 にぶい黄橙色		やや不良	摩耗のため調整は不明で、底部切り離しは回転糸切りである。
184	〃 〃	〃 〃	12.8	(3.0)	-	-	灰黄色 〃		良好	手づくね成形で、摩耗のため調整は不明瞭であるが、内外面に指頭圧痕が認められる。
185	〃 〃	〃 鍋	23.8	(5.5)	-	-	にぶい黄橙色 黒色		〃	内面と口辺部外面には回転ナデ、胴部外面にはタキを施す。胴部外面には煤が付着
186	〃 〃	瓦器 椀	16.0	(5.0)	-	-	黒色 〃		〃	器面にヨコナデを施し、内面には平行する圏線状のヘラミガキを施す。
187	〃 〃	〃 〃	-	(3.0)	-	-	黒色 にぶい橙色		〃	口縁部内外面にヨコナデ、口辺部内面にヘラミガキを施す。
188	〃 〃	瓦質土器 三足鍋	(8.4)	4.4	2.4	-	黒色		〃	大部分を欠損し、表面には指オサエとナデを施す。
189	〃 〃	白磁 碗	17.6	(2.6)	-	-	灰白色 〃		〃	口縁端部が大きく外反し、水平をなす。体部内面には1条の沈線が認められる。
190	〃 〃	石製品 石鏃	(1.9)	(1.5)	0.3	(0.5)	-		-	凹基式で、先端部を欠損する。
191	〃 〃	〃 〃	(3.1)	(1.6)	0.4	(1.6)	-		-	凹基式で、基部を欠損する。
192	〃 〃	〃 石庖丁	(7.5)	(3.7)	0.6	(19.7)	-		-	大部分を欠損し、表面には調整痕が認められる。孔径0.6cm
193	〃 〃	〃 叩石	(9.1)	9.2	4.2	(511.7)	-		-	片面と側面1ヵ所に弱い敲打痕が認められる。
194	〃 〃	〃 〃	(10.2)	(1.07)	(7.1)	(849.7)	-		-	一部が残存し、片面のみ敲打痕が認められる。
195	〃 〃	〃 〃	10.8	9.5	3.9	649.8	-		-	完存し、両面と側面の約2/3に敲打痕が認められる。
196	〃 〃	〃 砥石	14.7	9.0	2.9	563.5	-		-	片面の一部と側面1ヵ所に使用痕が認められる。
197	〃 〃	〃 〃	12.6	14.1	3.6	1116.2	-		-	両面の一部と側面の1ヵ所に使用痕が認められる。
198	〃 〃	〃 〃	24.8	11.9	9.1	2801.7	-		-	両面に使用痕が認められる。
199	〃 〃	木製品 鉢	23.0	8.6	-	12.8	-		-	板目取りで作られ、内面には粗い加工痕が残る。
200	〃 〃	〃 箱	10.9	4.0	3.3	-	-		-	柁目取りで作られる。

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面		
201	I区 第Ⅷ層	木製品 紡錘車	7.7	7.3	0.9	-	-	-	柁目取りで作られる。一部が欠損し、表面には細かな加工痕が認められ、一部が炭化する。
202	〃 〃	〃 田下駄	(25.0)	4.7	1.5	-	-	-	板目取りで作られる。大部分を欠損し、端部側面に抉りを施す。
203	〃 〃	〃 鎌	(17.0)	(10.8)	1.6	-	-	-	板目取りで作られる。刃部は欠損する。
204	〃 〃	〃 鋤	(34.8)	(12.8)	3.3	-	-	-	柁目取りで作られ、刃部は欠損する。
205	〃 〃	〃 〃	26.4	17.9	3.9	-	-	-	板目取りで作られ、柄軸部は欠損する。鉄刃を装着するものとみられる。
206	〃 〃	〃 楯	(35.0)	(8.2)	1.5	-	-	-	一部が残存する。板目取りで作られ、部材を繋ぐ横木と固定用の樹皮が残る。
207	〃 〃	〃 不明	(8.1)	2.0	0.5	-	-	-	板目取りで作られ、一部はが炭化する。全体的に丁寧な加工を施し、円形を呈する孔が1つ穿ち、樹皮が残る。
208	〃 〃	〃 〃	(14.9)	9.8	1.9	-	-	-	柁目取りで作られ、大部分を欠損する。
209	〃 〃	〃 〃	46.2	2.2	2.6	-	-	-	板目取りで作られる。上部の大部分を大きく削り、加工痕が明瞭に残る。
210	〃 〃	〃 〃	(50.6)	18.9	2.8	-	-	-	柁目取りで作られ、大部分を欠損し、一部が炭化する。
211	〃 〃	〃 〃	(55.7)	7.7	3.1	-	-	-	柁目取りで作られ、片側の端部は杭状に仕上げ、もう片側は欠損する。
212	II区 第I層	須恵器 壺	-	(8.9)	-	11.0	灰色 〃	良好	内外面にナデを施す。底部外面にヘラ状原体による「×」印をいれる。
213	〃 〃	土師質土器 小皿	10.3	1.6	-	6.6	橙色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明瞭であるが、底部外面には回転糸切り痕が残る。
214	〃 〃	青磁 碗	-	(3.3)	-	-	オリーブ灰色 〃	良好	内面に草花文を施す。
215	〃 〃	石製品 叩石	9.7	8.5	4.5	501.1	-	-	完存し、両面と側面4カ所に敲打痕がみとめられる。
216	〃 〃	〃 有溝砥石	17.7	11.8	3.7	1250.5	-	-	1条の溝が認められ、溝周辺には弱い敲打痕が存在する。
217	〃 〃	土製品 土錘	4.8	2.7	2.4	20.6	にぶい赤褐色	良好	完存し、孔径0.9cm
218	〃 〃	〃 〃	5.1	2.6	2.4	22.3	〃	〃	完存し、孔径0.9cm
219	〃 第V層	青磁 碗	-	(3.2)	-	-	緑灰色 〃	〃	口縁部内面には雷文を配する。
220	〃 〃	土製品 土錘	3.7	2.8	2.7	(21.6)	橙色	〃	一部を欠損し、孔径1.0cm
221	〃 第VII層	須恵器 壺	7.8	(6.5)	-	-	灰白色 〃	〃	把手状のものにはヘラ削りを施し、器面には回転ナデ調整が認められる。
222	〃 〃	土師質土器 椀	-	(2.3)	-	5.0	〃 〃	不良	摩耗のため調整は不明
223	〃 〃	瓦質土器 鍋	13.6	(3.7)	-	-	灰色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明
224	〃 〃	〃 〃	13.4	(8.2)	-	-	〃 〃	良好	口縁部内外面にヨコナデ、胴部内面と胴下部外面にナデを施し、胴上部外面には指頭圧痕が認められる。
225	〃 〃	青磁 碗	15.6	(3.3)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	外面に蓮弁文を施す。

遺物観察表10

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調		焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面			
226	Ⅱ区 第Ⅶ層	石製品 石鏃	1.6	1.5	0.3	0.5	-		-	完存する。
227	〃	土製品 土錘	3.0	1.5	1.5	(6.1)	にぶい橙色		良好	一部を欠損し、孔径0.4cm
228	〃	〃	(3.1)	1.2	1.1	(2.7)	〃		〃	片側を欠損し、孔径0.4cm
229	〃	〃	3.4	1.7	1.6	8.6	にぶい赤褐色		〃	ほぼ完存し、孔径0.5cm
230	〃	〃	(3.4)	1.6	1.5	(6.0)	浅黄橙色		〃	片側を欠損し、孔径0.6cm
231	〃	〃	4.1	1.2	1.3	(4.6)	にぶい黄橙色		〃	片側の一部を欠損し、孔径0.4cm
232	〃	〃	4.1	3.0	(1.6)	(14.8)	灰色		〃	片側約1/2を欠損し、焼成が非常に良く、瓦質状を呈する。
233	〃	〃	(3.3)	1.7	1.7	(5.9)	にぶい橙色		〃	片側を欠損し、孔径0.7cm
234	〃	〃	5.1	1.6	1.4	6.7	〃		〃	完存し、孔径0.4cm
235	第Ⅷ層	須恵器 蓋	-	(2.1)	-	-	灰色 灰黄色		やや不良	天井部内面にナデ、口辺部内面に回転ナデ、口辺部外面に回転ヘラ削りを施す。つまみ径2.5cm
236	〃	〃 杯	14.3	4.9	-	8.5	灰白色 灰黄色		良好	内外面に回転ナデを施す。
237	〃	〃	-	(2.5)	-	7.8	灰色 〃		〃	器面には回転ナデを施し、底部内面にはヘラ描きの沈線が認められる。
238	〃	〃 皿	16.7	2.0	-	13.2	灰白色 〃		〃	器面には回転ナデを施し、底部切り離し痕はナデ消す。内面には火襷痕が認められる。
239	〃	〃 壺	-	(4.3)	-	-	灰色 〃		〃	頸部から肩部にかけての破片で、器面には回転ナデを施す。
240	〃	〃	-	(3.0)	-	9.8	灰白色 〃		〃	器面には回転ナデを施し、底部切り離しは回転ヘラ切りと考えられる。内面には無数の破裂痕が認められる。
241	〃	〃	-	(2.7)	-	10.2	灰色 〃		〃	胴部外面に回転ヘラ削り、底部内外面に回転ナデを施す。
242	〃	〃	-	(5.4)	-	13.2	灰白色 〃		〃	胴部内面に回転ナデ、底部内面にナデ、胴部外面に回転ヘラ削り、底部外面に回転ナデを施す。
243	〃	〃 甕	-	(6.0)	-	-	灰色 〃		〃	器面には回転ナデを施す。外面にはヘラ描き波状文が認められる。
244	〃	灰釉陶器 水注	-	(6.4)	11.7	-	灰白色 オリーブ黄色		〃	器面には回転ナデを施し、肩部から胴上部には釉がかかる。
245	〃	土師質土器 椀	-	(2.5)	-	6.2	浅黄橙色 〃		不良	摩耗のため調整は不明である。
246	〃	〃	-	(2.2)	-	6.3	〃 〃		やや不良	摩耗のため調整は不明である。
247	〃	〃	-	(2.2)	-	6.8	灰白色 淡黄色		〃	体部外面下端に回転ヘラ削り調整が認められる。底部切り離しは回転糸切りとみられる。
248	〃	〃	-	(2.0)	-	6.8	灰白色 〃		〃	摩耗のため調整は不明である。
249	〃	〃 杯	13.6	4.4	-	6.4	にぶい橙色 橙色		不良	摩耗のため調整は不明である。
250	〃	〃	14.2	(4.4)	-	-	浅黄橙色 〃		良好	内面と口辺部外面には回転ナデ、体下部には回転ヘラ削りを施す。

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
251	Ⅱ区 第Ⅷ層	土師質土器 杯	-	(1.8)	-	5.8	浅黄橙色 橙色	不良	摩耗のため調整は不明である。
252	〃 〃	〃 〃	12.0	3.4	-	5.6	灰白色 にぶい橙色	やや不良	摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面には指頭圧痕が認められる。
253	〃 〃	〃 小皿	9.3	1.7	-	4.4	灰白色 〃	不良	摩耗のため調整は不明である。
254	〃 〃	〃 〃	9.7	1.8	-	5.7	浅黄橙色 〃	良好	摩耗のため調整は不明である。
255	〃 〃	〃 鍋	19.2	(5.0)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にハケ調整、外面にタタキ目が認められる。
256	〃 〃	瓦 平瓦	(8.2)	(6.7)	1.9	-	橙色 〃	やや不良	一部のみ残存し、凹面に布目圧痕、凸面にタタキ目が認められる。
257	〃 〃	〃 〃	(6.8)	(7.3)	1.9	-	にぶい褐色 〃	良好	一部のみ残存し、凹面に布目圧痕、凸面にタタキ目が認められる。
258	〃 〃	石製品 石鏃	1.2	0.9	0.2	0.1 未満	-	-	凹基式
259	〃 〃	〃 〃	1.4	1.2	0.3	0.4	-	-	凹基式
260	〃 〃	〃 叩石	8.0	7.7	3.5	306.6	-	-	側面の2ヵ所に敲打痕が認められる。
261	〃 〃	土製品 土錘	3.6	1.9	1.7	11.0	灰黄褐色	やや不良	完存し、孔径0.7cm
262	〃 〃	〃 〃	4.3	1.3	1.3	(6.0)	明黄褐色	〃	片側の一部を欠損し、孔径0.4cm
263	〃 〃	〃 〃	4.6	1.4	1.3	(7.5)	橙色	良好	一部を欠損し、孔径0.5cm
264	〃 〃	〃 〃	4.6	1.6	(1.2)	(9.6)	にぶい黄橙色	〃	表面に破裂痕が認められ、孔径0.4cm
265	〃 〃	〃 〃	(4.8)	2.8	2.6	(30.0)	〃	〃	両端を欠損し、孔径0.8cm
266	〃 第Ⅸ層	弥生土器 壺	12.6	(9.3)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	口縁端部には刻目、頸部外面には沈線と3条の刻目突帯を配する。
267	〃 〃	〃 〃	17.0	(6.8)	-	-	橙色 〃	〃	口縁部外面にヨコナデ調整、頸部外面にハケ調整がみられ、頸部下端には1条の沈線が認められる。
268	〃 〃	〃 〃	16.6	(8.0)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	やや不良	口縁部外面にヨコナデ調整、頸部外面にハケ調整を施し、頸部下端には3条の沈線が認められる。
269	〃 〃	〃 〃	24.8	(7.4)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良好	頸上部にヨコナデ調整、頸下部にヘラミガキ調整が認められ、頸中央部に1条の突帯を配する。
270	〃 〃	〃 甕	-	(11.7)	-	8.9	にぶい黄褐色 橙色	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部下端にハケ調整が認められる。
271	〃 〃	土師器 〃	29.0	(4.0)	-	-	にぶい黄褐色 〃	やや不良	口辺部内外面にはヨコナデ、胴部内外面にはハケを施す。外面の一部には煤が付着
272	〃 〃	〃 羽釜	21.7	(5.8)	-	-	にぶい橙色 〃	不良	摩耗のため調整は不明である。
273	〃 〃	〃 〃	21.2	(4.8)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にヨコナデ調整が認められる。
274	〃 〃	〃 〃	22.8	(5.8)	-	-	灰黄褐色 にぶい橙色	やや不良	摩耗のため調整は不明である。胴部外面の一部に煤が付着
275	〃 〃	須恵器 椀	15.3	5.7	-	6.2	浅黄褐色 〃	不良	口縁部外面に回転ナデ調整、体部外面下端に回転ヘラ削り調整が認められる。

遺物観察表12

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調		焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面			
276	Ⅱ区 第Ⅸ層	須恵器 椀	15.4	4.9	-	6.2	灰白色 〃	良好	内面と口辺部外面に回転ナデ、体中央部から下部にかけて回転ヘラ削りを施す。内外面に火襷痕が認められる。	
277	〃 〃	〃 〃	-	(2.3)	-	6.4	浅黄橙色 〃	不良	内面にナデ、外面に回転ヘラ削りを施す。内外面に火襷痕が認められる。	
278	〃 〃	〃 杯	-	(3.7)	-	11.2	灰オリーブ色 灰色	良好	摩耗のため調整は不明瞭であるが、体部外面に回転ナデ調整が認められる。内面には自然釉がみられる。	
279	〃 〃	〃 〃	15.0	4.7	-	7.2	黄灰色 灰白色	〃	器面には回転ナデを施し、底部切り離しは回転糸切りである。内外面に火襷痕が認められる。	
280	〃 〃	〃 〃	-	(2.7)	-	5.8	黄灰色 〃	〃	器面には回転ナデを施し、底部切り離しは回転糸切りである。	
281	〃 〃	〃 壺	-	(3.8)	-	14.6	灰色 〃	〃	内外面に回転ナデを施す。	
282	〃 〃	緑釉陶器 椀	-	(1.7)	-	7.4	灰白色 オリーブ灰色	〃	器面には回転ナデを施す。底部外面は露胎である。	
283	〃 〃	土師質土器 〃	15.3	5.8	-	7.0	にぶい橙色 〃	〃	摩耗のため調整は不明である。	
284	〃 〃	〃 〃	16.2	5.0	-	6.8	灰白色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明瞭であるが、体部外面下端に回転ナデ調整が認められる。	
285	〃 〃	〃 〃	-	(3.4)	-	5.4	にぶい橙色 浅黄橙色	〃	摩耗のため調整は不明である。	
286	〃 〃	〃 〃	-	(2.1)	-	6.0	にぶい橙色 〃	不良	摩耗のため調整は不明である。	
287	〃 〃	〃 〃	-	(4.4)	-	6.6	浅黄橙色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明である。	
288	〃 〃	〃 〃	-	(2.0)	-	6.9	灰白色 〃	不良	摩耗のため調整は不明である。	
289	〃 〃	〃 〃	-	(3.5)	-	6.7	にぶい橙色 〃	良好	体部内外面と底部外面に回転ナデ調整、底部内面にナデ調整、体部外面下端に回転ヘラ削り調整が認められる。	
290	〃 〃	〃 杯	13.9	4.0	-	7.4	浅黄橙色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明である。	
291	〃 〃	〃 〃	-	(2.1)	-	6.1	灰白色 〃	〃	底部に穿孔するもので、摩耗のため調整は不明である。	
292	〃 〃	〃 〃	-	(2.2)	-	6.2	浅黄橙色 〃	不良	摩耗のため調整は不明である。	
293	〃 〃	〃 皿	13.5	2.7	-	9.6	にぶい黄橙色 〃	良好	口縁部外面に回転ナデ調整が認められ、体部切り離しは回転ヘラ切りとみられる。	
294	〃 〃	〃 小皿	10.2	1.8	-	5.5	〃 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明である。	
295	〃 〃	〃 鍋	-	(4.3)	-	-	橙色 浅黄橙色	良好	摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部外面にはタタキ目が認められる。	
296	〃 〃	瓦質土器 〃	28.1	(7.0)	28.0	-	灰白色 〃	不良	摩耗のため調整は不明である。	
297	〃 〃	瓦 平瓦	(7.2)	(6.8)	1.7	-	灰白色 にぶい黄橙色	不良	大部分を欠損し、凹面の一部に布目圧痕が残る。	
298	〃 〃	〃 〃	(9.2)	(8.3)	2.4	-	灰黄色 灰色	やや不良	大部分を欠損し、凹面の一部に布目圧痕が残る。凸面に縄目状のタタキ目が認められる。	
299	〃 〃	石製品 柱状片刃石斧	(11.2)	3.0	(0.9)	(50.0)	-	-	大部分が剥離しており、一部のみ残存する。	
300	〃 〃	〃 石鏃	(1.5)	1.2	0.3	(0.5)	-	-	平基式で、先端部を欠損する。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調		焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面			
301	Ⅱ区 第Ⅸ層	石製品 石鏃	1.6	1.8	0.4	0.6	-		-	平基式
302	〃 〃	〃 〃	(1.8)	1.7	0.4	(0.8)	-		-	平基式で、先端部を欠損する。
303	〃 〃	〃 〃	1.7	1.1	0.2	(0.4)	-		-	凹基式
304	〃 〃	〃 〃	(1.8)	1.5	0.4	(0.6)	-		-	凹基式で、先端部と片側の基部を欠損する。
305	〃 〃	〃 叩石	10.7	6.8	3.0	338.4	-		-	側面端部の一部に敲打痕が認められる。
306	〃 〃	〃 〃	13.7	4.5	3.6	352.4	-		-	側面の両端部に敲打痕がみられ、片側には磨石としての使用痕も認められる。
307	〃 〃	〃 〃	10.4	9.5	5.1	790.0	-		-	両面と側面全体に敲打痕がみられ、側面の一部には磨石としての使用痕も認められる。
308	〃 〃	〃 〃	16.9	12.4	4.3	1131.7	-		-	両面に敲打痕が認められる。
309	〃 〃	サヌカイト 剥片	5.7	5.1	0.7	17.0	-		-	
310	〃 〃	土製品 土錘	6.3	4.4	4.4	111.9	浅黄橙色	良好		ほぼ完存し、表面は摩耗のため調整は不明
311	〃 〃	〃 〃	(6.8)	(3.9)	3.8	(48.7)	にぶい黄橙色	〃		大部分を欠損する。
312	Ⅲ区 第Ⅲ層	弥生土器 甕	14.8	(9.0)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃		口辺部内外面にヨコナデ、胴部内面にハケ、胴部外面にタタキを施す。胴部外面には煤が付着
313	〃 〃	〃 〃	-	(2.9)	-	4.6	黄灰色 にぶい黄橙色	やや不良		全体的に摩耗が著しい。
314	〃 〃	〃 鉢	15.1	5.5	-	4.0	にぶい橙色 〃	良好		全体的に摩耗が著しい。
315	〃 〃	〃 高杯	17.3	(6.5)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃		口辺部内外面と杯部内面上半にはヨコナデ、杯部下半にはナデ、杯部外面にはハケを施す。
316	〃 〃	〃 支脚	-	(7.0)	-	-	灰黄褐色	〃		脚部を欠損し、指部も片側のみ残存する。全面に指頭圧痕が残る。
317	〃 〃	須恵器 杯	12.7	4.2	-	9.0	黄灰色 灰黄色	〃		外面に回転ナデ、底部内面にナデを施し、底部切り離しは回転ヘラ切りである。内外面に火襷痕が残る。
318	〃 〃	〃 壺	-	(5.2)	-	8.8	灰色 褐灰色	〃		胴部内面に回転ナデ、底部内面にナデを施す。胴部外面には格子状のタタキ目とナデ調整が認められる。
319	〃 〃	〃 甕	21.4	(4.9)	-	-	褐灰色 にぶい黄橙色	〃		口辺部内外面に回転ナデ、胴部内面にナデとヘラ削りを施す。胴部外面には格子状のタタキ目が認められる。
320	〃 〃	緑釉陶器 椀	13.0	3.6	-	6.4	オリーブ灰色 にぶい黄橙色	〃		軟質系で部分的に緑釉が残存する。摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、口辺部内外面に回転ナデ調整が残る。
321	〃 〃	土師質土器 〃	-	(1.7)	-	5.8	浅黄橙色 〃	やや不良		摩耗が著しく調整は不明である。
322	〃 〃	〃 杯	-	(2.5)	-	8.0	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃		摩耗が著しく調整は不明である。
323	〃 〃	〃 皿	14.1	2.4	-	10.8	橙色 〃	不良		摩耗が著しく調整は不明である。底部切り離しは回転ヘラ切りと考えられる。
324	〃 〃	〃 小皿	-	(1.6)	-	6.0	にぶい黄橙色 〃	やや不良		体部内面に回転ナデ調整、底部内面にナデ調整が残り、内面には煤が付着
325	〃 〃	石製品 石庖丁	7.5	4.6	1.1	45.8	-		-	ほぼ完存し、両端部に抉りを入れる。

遺物観察表14

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調		焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面			
326	Ⅲ区 第Ⅲ層	石製品 叩石	11.8	9.1	3.2	507.4	-	-	-	片側の端部のみ敲打痕が認められる。
327	〃 第Ⅳ層	弥生土器 甕	-	(7.7)	-	7.6	にぶい黄橙色 〃	良好	〃	全体的に摩耗が著しいが、外面にハケ調整が認められる。
328	〃 第Ⅴ層	〃 壺	19.6	(8.7)	-	-	〃 〃	〃	〃	口辺部内外面にヨコナデ、頸部内面にハケ、頸部外面にタタキのちヨコナデを施す。頸部下半には煤が付着
329	〃 〃	〃 〃	-	(4.1)	-	-	灰黄色 にぶい黄橙	〃	〃	外面にはハケ調整が認められる。外面には沈線と刺突した円形浮文を施す。
330	〃 〃	〃 〃	-	(6.2)	-	8.6	黄灰色 にぶい黄橙色	〃	〃	摩耗が著しく調整は不明である。
331	〃 〃	〃 〃	-	(4.7)	-	10.8	にぶい黄橙色 にぶい褐色	〃	〃	内面にナデ、外面にハケを施す。
332	〃 〃	〃 〃	-	(5.3)	-	15.4	にぶい黄橙色 〃	やや不良	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面下端にハケ調整が残る。
333	〃 〃	〃 甕	-	(2.9)	-	6.0	〃 〃	〃	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面に外面にハケ調整とヨコナデ調整が認められる。
334	〃 〃	〃 〃	-	(5.0)	-	7.6	〃 〃	〃	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にハケ調整が残る。
335	〃 〃	〃 〃	-	(5.5)	-	8.0	浅黄色 〃	良好	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にハケ調整が残る。
336	〃 〃	〃 高杯	-	(5.1)	-	-	褐灰色 灰黄褐色	〃	〃	裾部を欠損し、径0.8cmの円孔を穿つ。外面にヨコナデ調整とナデ調整が認められる。
337	I区 SK-5	土師質土器 小皿	9.6	1.9	-	7.8	橙色 〃	やや不良	〃	大部分を欠損し、摩耗のため調整は不明である。
338	〃 SD-17	弥生土器 壺	15.1	(7.2)	-	-	暗灰黄色 灰色	良好	〃	頸部外面には3条の突帯を配し、上下の突帯には刻目が認められる。また、3条の突帯下部には沈線を施す。
339	〃 SD-20	土師質土器 杯	15.2	(3.5)	-	-	灰黄色 灰白色	やや不良	〃	口辺部内外面にヨコナデを施し、体部内外面には指頭圧痕が認められる。
340	〃 〃	〃 〃	15.8	(4.1)	-	-	浅黄橙色 〃	〃	〃	口辺部内外面にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。
341	〃 SD-21	木製品 部材	9.5	11.8	1.9	-	-	-	-	表面の大部分には樹皮が残るが、両端には抉りをいれる。
342	〃 SX-2	瓦器 椀	-	(2.0)	-	4.2	灰白色 〃	良好	〃	内面にナデを施し、外面には指頭圧痕が認められる。内面にはヘラミガキがみられる。
343	〃 SK-13	弥生土器 甕	-	(5.9)	-	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色	〃	〃	口辺部外面にヨコナデ調整、胴部外面にハケ調整が認められる。口縁端部には刻目を配し、外面には煤が付着
344	〃 SK-15	〃 壺	16.0	(7.0)	-	-	灰黄褐色 灰黄色	やや不良	〃	内面にヨコナデとハケ、外面にヨコナデとハケを施す。頸部外面には8条の沈線を配する。
345	〃 SK-25	〃 甕	-	(3.6)	-	6.6	黒褐色 灰黄色	良好	〃	内面にナデ、外面にハケを施す。
346	〃 SK-26	〃 〃	16.0	(7.8)	-	-	褐灰色 浅黄橙色	やや不良	〃	口辺部内外面にヨコナデ、胴部内面にハケ、胴部外面にタタキのちハケを施す。胴部外面の一部には煤が付着
347	〃 〃	〃 〃	-	(17.0)	18.2	-	暗灰黄色 黒色	良好	〃	内面にハケとナデ、外面にタタキを施し、外面全体には煤が付着
348	〃 〃	〃 〃	-	(5.5)	-	3.0	灰黄褐色 〃	やや不良	〃	内面にナデ、外面にタタキを施す。
349	〃 SD-23	〃 壺	15.6	(7.2)	-	-	にぶい黄色 〃	〃	〃	胴部内面にナデ調整、口辺部外面に指オサエのちヨコナデ調整が認められる。
350	〃 〃	〃 〃	-	(4.4)	-	10.3	灰黄色 にぶい黄色	良好	〃	摩耗のため調整は不明である。

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
351	I 区 SD-23	弥生土器 甕	22.7	(6.0)	-	-	灰黄色 浅黄色	やや不良	口辺部外面にヨコナデ調整が認められる。口縁部外面の一部には煤が付着
352	〃 〃	木製品 不明	(5.4)	1.9	1.3	-	-	-	枝状の木に樹皮を巻き付けたもので、片側を欠損する。
353	〃 〃	〃 〃	(47.5)	9.5	1.5	-	-	-	板目取りで作られ、方形を呈する孔を1つ穿つ。上部は両側面を削り、断面が菱形を呈す。
354	〃 SD-24	弥生土器 甕	-	(5.8)	-	-	黒色 にぶい黄褐色	良好	摩耗のため調整は不明瞭であるが、口縁部内外面にヨコナデ調整が認められる。
355	〃 SD-26	木製品 舟形	(37.0)	5.8	3.1	-	-	-	板目材を削り貫いて作られる。船首を欠損しており、船底には斜行する傷が認められる。
356	〃 SD-27	弥生土器 壺	-	(5.3)	-	8.0	にぶい黄橙色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にナデ調整が認められる。
357	〃 〃	〃 〃	-	(9.8)	-	7.5	灰白色 黒褐色	良好	内面にハケ、外面にハケのちヘラミガキを施す。
358	〃 〃	木製品 木鏝	19.0	0.7	0.6	-	-	-	完存し、表面には丁寧な加工を施す。
359	II 区 SB-4	瓦質土器 鍋	-	(3.9)	-	-	黄灰色 灰黄色	不良	摩耗のため調整は不明である。
360	〃 SB-5	土師質土器 杯	12.0	3.6	-	5.6	にぶい橙色 浅黄橙色	やや不良	摩耗のため調整は不明瞭であるが、器面には指頭圧痕が認められる。
361	〃 〃	土製品 土錘	(4.6)	1.7	1.5	(9.9)	黄灰色	〃	片側を欠損し、孔径0.6cm
362	〃 SB-6	土師質土器 椀	-	(1.8)	-	7.0	灰白色 〃	不良	摩耗のため調整は不明である。
363	〃 〃	〃 小皿	9.1	1.4	-	6.2	浅黄橙色 〃	〃	摩耗のため調整は不明である。
364	〃 SA-1	〃 杯	11.8	3.7	-	8.1	〃 〃	良好	器面には回転ナデを施す。
365	〃 SA-2	〃 〃	-	(1.6)	-	7.0	〃 〃	不良	摩耗のため調整は不明である。
366	〃 SK-1	〃 〃	11.2	3.9	-	8.0	〃 〃	良好	全体的に歪み、摩耗のため調整は不明である。
367	〃 〃	〃 〃	11.6	3.1	-	7.0	淡黄色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明である。
368	〃 〃	土製品 土錘	(8.6)	5.0	(2.0)	(71.7)	灰白色	〃	大部分を欠損する。
369	〃 SK-3	瓦質土器 鍋	23.8	(7.1)	25.7	-	黄灰色 〃	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが、口縁部内面にヨコナデ調整が認められる。
370	〃 SK-4	土師器 羽釜	18.0	(4.6)	-	-	灰黄褐色 にぶい黄褐色	良好	器面にはヨコナデを施し、外面には煤が付着
371	〃 SK-7	瓦質土器 鍋	25.2	(5.4)	-	-	褐灰色 〃	〃	内面と口辺部外面にヨコナデ、胴部外面に指オサエを施す。
372	〃 SD-9	土師質土器 鍋	24.0	(4.6)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部外面にはタタキ目が認められる。胴部外面には煤が付着
373	〃 SD-12	弥生土器 壺	-	(4.5)	-	8.4	灰白色 浅黄橙色	〃	内面にナデ、外面にハケを施し、外面の一部にヘラミガキ調整が認められる。
374	〃 SD-25	瓦質土器 鍋	-	(5.3)	-	-	黄灰色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にヨコナデ調整が認められる。
375	〃 SD-34	〃 播鉢	18.6	(6.3)	-	-	灰白色 〃	不良	摩耗のため調整は不明であるが、内面に4条単位の条痕が認められる。

遺物観察表16

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調		焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面			
376	Ⅱ区 SD-34	青磁 碗	-	(2.3)	-	6.4	灰オリーブ色 〃		良好	見込みには劃花文を施す。底部内面は露胎
377	〃 〃	土製品 土錘	(4.2)	1.3	1.3	(5.8)	灰白色		やや不良	片側を欠損し、孔径0.5cm
378	〃 〃	〃 〃	(5.0)	(3.6)	(2.0)	(23.7)	〃		〃	大部分を欠損する。
379	〃 SD-42	〃 〃	4.3	1.7	1.3	(9.9)	にぶい褐色		〃	一部を欠損し、孔径0.5cm
380	〃 SE-1	土師器 壺	14.4	(3.4)	-	-	にぶい褐色 にぶい黄橙色		良好	摩耗のため調整は不明瞭であるが、口辺部内面にヨコナデ調整が認められる。
381	〃 〃	瓦質土器 播鉢	21.2	(5.6)	-	-	灰白色 灰色		〃	内面にナデ、口辺部外面にヨコナデ、体部外面にナデを施す。内面に5条単位の条痕が認められる。
382	〃 〃	石製品 叩石	9.8	8.5	4.6	586.5	-		-	片面と側面全体に敲打痕が認められる。
383	〃 〃	〃 〃	(15.1)	(11.1)	5.3	(1369.0)	-		-	側面1ヵ所に敲打痕が認められる。
384	〃 〃	〃 五輪	27.9	26.4	12.2	1860.0	-		-	風化のため調整は不明である。
385	〃 〃	木製品 曲物	(13.9)	(3.3)	0.5	-	-		-	柁目取りで作られ、大部分を欠損しており、表面には加工痕が認められる。
386	〃 〃	〃 〃	(17.0)	(5.3)	0.4	-	-		-	柁目取りで作られ、大部分を欠損しており、表面には加工痕が認められる。
387	〃 〃	〃 円形桶側	149.3	10.4	2.7	-	-		-	板目取りで作られ、下端部は欠損する。
388	〃 〃	〃 〃	151.0	9.4	2.6	-	-		-	板目取りで作られ、下端部は欠損する。
389	〃 P-1	石製品 砥石	9.7	7.5	3.7	528.8	-		-	片面に使用痕が認められる。
390	〃 P-2	〃 叩石	12.3	12.0	4.7	1090.1	-		-	側面の大部分と片面に敲打痕が認められる。
391	〃 P-3	土師質土器 杯	12.5	(3.5)	-	-	にぶい黄橙色 〃		やや不良	手づくね成形とみられ、摩耗のため調整は不明である。
392	〃 P-4	〃 〃	13.4	4.8	-	5.8	橙色 〃		良好	摩耗のため調整は不明である。
393	〃 〃	〃 〃	-	(2.0)	-	7.8	〃 〃		やや不良	摩耗のため調整は不明である。
394	〃 SK-11	弥生土器 壺	17.4	(11.8)	-	-	褐灰色 にぶい橙色		良好	摩耗のため調整は不明である。
395	〃 〃	〃 甕	-	(6.7)	-	5.8	にぶい黄橙色 にぶい橙色		やや不良	摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にはナデ調整が認められる。胴部内面には炭化物が付着
396	〃 〃	〃 〃	-	(4.2)	-	7.0	橙色 〃		〃	摩耗のため調整は不明である。
397	〃 SK-12	〃 壺	33.0	(5.5)	-	-	にぶい橙色 〃		〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面の一部にハケ調整が認められる。内面には煤が付着
398	〃 〃	〃 〃	-	(10.5)	-	10.5	灰色 橙色		〃	胴下部外面にヘラミガキ調整、胴部下端にハケ調整とナデ調整が認められる。
399	〃 〃	〃 甕	16.8	(4.8)	-	-	橙色 にぶい黄橙色		良好	口辺部外面にヨコナデ調整、胴部外面にハケ調整が認められる。口縁端部に刻目、胴部外面に沈線を配す。
400	〃 〃	石製品 叩石	11.0	9.2	5.2	753.4	-		-	片面に敲打痕が認められる。

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面/外面		
401	Ⅱ区 SK-15	石製品 砥石	15.9	9.0	3.1	625.4	-	-	両面と2カ所の側面に使用痕が認められ、側面1カ所には平面形が三角形を呈する敲打痕が残る。
402	〃 SD-54	弥生土器 壺	-	(6.1)	-	8.2	明黄褐色 にぶい橙色	やや不良	摩耗のため調整は不明である。
403	〃 〃	〃 甕	18.6	(4.4)	-	-	浅黄色 灰色	〃	摩耗のため調整は不明で、口縁端部に刻目を施す。
404	〃 〃	〃 〃	-	(5.0)	-	7.8	黄灰色 灰黄色	良好	摩耗のため調整は不明である。
405	〃 〃	〃 〃	-	(7.8)	-	7.8	にぶい黄橙色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にハケ調整が認められる。
406	〃 〃	石製品 叩石	13.5	10.6	4.9	1032.2	-	-	両面と側面4カ所に敲打痕が認められる。
407	〃 SD-57	須恵器 杯	-	(4.2)	-	10.1	褐灰色 〃	良好	体部内外面と底部外面には回転ナデ、底部内面にはナデを施す。
408	〃 P-5	弥生土器 甕	22.6	(8.3)	21.0	-	にぶい黄橙色 にぶい橙	〃	摩耗のため調整は不明である。口縁端部に刻目、胴部外面に6条の沈線を配す。
409	〃 〃	〃 〃	-	(8.5)	-	7.6	淡黄色 にぶい黄橙色	やや不良	摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部外面にハケ調整が認められる。
410	〃 P-6	土師質土器 皿	-	(1.2)	-	8.4	灰白色 にぶい黄橙色	〃	摩耗のため調整は不明である。
411	〃 P-7	〃 杯	-	(2.5)	-	-	灰白色 〃	〃	摩耗のため調整は不明である。
412	〃 P-8	瓦質土器 鍋	19.6	(5.8)	21.3	-	黒色 〃	良好	摩耗のため調整は不明である。
413	〃 P-9	土師質土器 杯	-	(3.4)	-	6.7	灰白色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明である。
414	〃 P-10	〃 小皿	-	(0.9)	-	5.4	〃 〃	〃	摩耗のため調整は不明であるが、体部外面には回転糸切り痕が認められる。
415	〃 P-11	須恵器 皿	14.8	1.8	-	11.0	にぶい黄橙色 黄灰色	良好	器面には回転ナデを施す。底部切り離しは回転ヘラ切りで、切り離しのあとのナデ調整が認められる。

遺構計測表

遺構計測表1 掘立柱建物跡(SB)

遺構番号	桁行×梁行(間)	規模		柱間寸法		面積(mi)	棟方向(NはGN)	備考
		桁行(m)×梁行(m)	桁(m)	梁(m)				
SB-1	1以上×2	-×6.55	2.20	2.90・3.65	-	N-19°-E	II区上面検出遺構	
SB-2	4×3	7.25～7.50×7.20	1.65～1.95	2.40	53.10	N-75°-W	〃	
SB-3	2×1	4.15～4.40×2.80～2.90	1.80～2.50	2.80・2.90	12.18	N-81°-W	〃	
SB-4	2×1	3.30×2.15	1.45・1.85	2.15	7.10	N-83°-W	〃	
SB-5	6×2	10.60～10.90×4.45	1.50～1.90	1.35～3.10	47.84	N-16°-E	〃	
SB-6	3×2	6.60～6.70×4.10	2.00～2.70	2.00～2.10	27.27	N-74°-W	〃	
SB-7	3×2	5.60～5.65×4.95～5.55	1.75～2.00	2.45～3.10	29.53	N-79°-W	〃	
SB-8	3×1	3.40～3.70×1.70～1.90	0.90～1.60	1.70～1.90	6.39	N-80°-W	〃	
SB-9	4×3	6.65～6.85×8.80	1.50～1.80	2.40～3.45	59.4	N-83°-W	〃	
SB-10	3×2	6.00～6.10×4.10	1.70～2.40	1.70・2.40	24.81	N-14°-E	II区下面検出遺構	
SB-11	3×1以上	7.20×2.30	2.05～2.40	2.30	-	N-12°-E	〃	
SB-12	3×2	4.70×3.20	1.50～1.70	1.40・1.80	15.04	N-11°-E	〃	

遺構計測表2 柵列跡(SA)

遺構番号	形状	柱穴数(個)	規模		柱穴径(cm)	方向(NはGN)	備考
			全長(m)	柱間寸法(m)			
SA-1	南北塀	3	6.66	3.14・3.52	25～36	N-16°-E	II区上面検出遺構
SA-2	東西塀	4	7.46	2.42～2.56	22～41	N-76°-W	〃
SA-3	逆「L」字状	4	11.48	3.32～4.74	28～57	N-83°-W	〃

遺構計測表3 土坑1(SK)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向(NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-1	楕円形	0.92	0.75	8～9	N-68°-E	I区上面検出遺構
SK-2	隅丸長方形	1.22	0.34	7	N-35°-W	〃
SK-3	不整円形	0.92	0.84	7～23	N-32°-E	〃
SK-4	隅丸方形	-	0.82	6～17	-	〃
SK-5	不整隅丸方形	1.34	1.10	6～14	N-74°-W	〃
SK-6	不整長方形	2.54	1.02	6～13	N-17°-E	〃
SK-7	楕円形	1.62	0.46	10～14	N-11°-W	I区下面検出遺構
SK-8	隅丸方形	1.21	0.77	13～15	N-19°-W	〃
SK-9	楕円形	0.88	0.74	2～4	N-12°-W	〃
SK-10	不整長方形	-	0.97	6～10	N-29°-E	〃
SK-11	楕円形	1.16	0.67	7～12	N-18°-W	〃
SK-12	不整長方形	-	0.81	5～12	N-18°-E	〃
SK-13	不整長楕円形	3.18	0.65～1.13	2～8	N-30°-E	〃
SK-14	不整長方形	2.34	0.68	5～8	N-46°-E	〃
SK-15	隅丸長方形	2.36	-	6～10	N-32°-E	〃
SK-16	〃	3.62	1.08	2～6	N-31°-W	〃
SK-17	楕円形	-	0.98	12～19	N-33°-W	〃
SK-18	長楕円形	1.84	0.49	2～4	N-78°-W	〃
SK-19	不整楕円形	1.53	1.23	2～10	N-53°-E	〃
SK-20	不整形	-	0.66	4～17	N-74°-E	〃
SK-21	〃	-	0.32	5～8	N-72°-E	〃
SK-22	長楕円形	1.70	0.68	3～6	N-59°-E	〃
SK-23	-	-	-	17	N-22°-W	〃
SK-24	-	-	-	12～16	N-16°-W	〃
SK-25	-	-	-	29	N-42°-W	〃
SK-26	隅丸方形	1.92	1.53	27	N-79°-E	〃
SK-1	不整形	1.76	1.34	15～27	N-76°-W	II区上面検出遺構
SK-2	隅丸方形	1.32	1.25	17～24	N-81°-E	〃
SK-3	不整形	-	0.69～1.57	2～6	N-11°-W	〃
SK-4	隅丸方形	1.64	1.56	10～127	N-83°-E	〃

遺構計測表4 土坑2(SK)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向(NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-5	隅丸方形	2.10	1.78	21~28	N-88°-E	Ⅱ区上面検出遺構
SK-6	〃	2.14	1.31	12~20	N-75°-E	〃
SK-7	不整隅丸方形	-	1.61	4~21	N-87°-E	〃
SK-8	隅丸方形	1.42	1.33	17~28	N-8°-W	〃
SK-9	不整楕円形	3.84	0.57~0.91	2~11	N-75°-W	〃
SK-10	-	-	0.91	11~18	N-48°-W	〃
SK-11	楕円形	1.49	0.82	4~6	N-12°-W	Ⅱ区下面検出遺構
SK-12	不整形	2.13	1.52	10~14	N-68°-E	〃
SK-13	不整方形	0.98	0.76	6~9	N-61°-E	〃
SK-14	〃	1.28	0.84	9~27	N-54°-E	〃
SK-15	長方形	1.61	0.69	9~11	N-62°-E	〃
SK-16	楕円形	1.69	0.98	10~51	N-44°-W	〃
SK-17	不整方形	0.88	0.66	3~10	N-57°-W	〃
SK-18	楕円形	1.49	1.27	30~32	N-4°-W	〃
SK-19	隅丸方形	1.43	1.21	23~26	N-44°-W	〃
SK-20	不整円形	1.62	1.49	14~45	N-16°-E	〃
SK-21	長方形	1.91	1.24	14~19	N-29°-E	〃
SK-22	不整方形	1.68	0.83~1.05	19~21	N-32°-E	〃
SK-23	隅丸方形	0.99	0.96	8~12	N-46°-W	〃
SK-24	不整楕円形	1.32	1.03	3~11	N-77°-E	〃
SK-25	隅丸方形	0.82	0.77	10~12	N-43°-E	〃
SK-26	〃	0.87	0.83	7~12	N-34°-E	〃

遺構計測表5 溝跡1(SD)

遺構番号	形状	規模			備考
		検出長(m)	幅(m)	深さ(cm)	
SD-1	逆「L」字状	8.80	0.18~0.37	3~13	Ⅰ区上面検出遺構
SD-2	南北溝	31.60	0.27~2.41	3~11	〃
SD-3	東西溝	3.90	0.12~0.41	2~10	〃
SD-4	〃	4.80	0.17~0.33	4~9	〃
SD-5	南北溝	4.80	0.14~0.49	2~10	〃
SD-6	-	3.70	0.22~0.41	5~14	〃
SD-7	-	1.10	0.15~0.42	3~4	〃
SD-8	逆「L」字状	11.00	0.19~0.42	4~8	〃
SD-9	東西溝	1.80	0.19~0.24	1~6	〃
SD-10	〃	9.70	0.13~0.33	2~8	〃
SD-11	〃	2.80	0.17~0.19	4~5	〃
SD-12	-	16.20	0.23~0.61	4~19	〃
SD-13	南北溝	2.90	0.28~0.43	6~9	〃
SD-14	東西溝	15.70	0.32~0.69	3~11	〃
SD-15	-	3.70	0.27~0.34	4~7	〃
SD-16	-	2.50	0.29~0.46	3~6	〃
SD-17	南北溝	2.00	0.15~0.29	4~10	〃
SD-18	逆「L」字状	23.60	0.23~0.56	3~20	〃
SD-19	南北溝	1.30	0.30~0.38	2~7	〃
SD-20	〃	10.70	0.75~2.10	22~48	〃
SD-21	〃	33.10	0.29~0.81	4~10	〃
SD-22	〃	6.80	0.36~0.92	4~14	〃
SD-23	〃	11.60	1.25~2.66	5~60	Ⅰ区下面検出遺構
SD-24	〃	30.20	0.34~1.17	5~16	〃
SD-25	東西溝	1.50	0.12~0.55	3~7	〃
SD-26	南北溝	21.80	0.96~2.04	7~49	〃
SD-27	〃	5.70	-	31~40	〃
SD-1	東西溝	13.40	0.19~0.53	3~10	Ⅱ区上面検出遺構

遺構計測表6 溝跡2 (SD)

遺構番号	形状	規模			備考
		検出長(m)	幅(m)	深さ(cm)	
SD-2	東西溝	10.90	0.19~0.32	2~10	II区上面検出遺構
SD-3	〃	46.60	0.13~0.41	2~10	〃
SD-4	〃	18.70	0.16~0.39	2~14	〃
SD-5	〃	10.50	0.23~0.38	1~7	〃
SD-6	〃	15.90	0.21~0.26	2~8	〃
SD-7	〃	3.10	0.26~0.32	2~5	〃
SD-8	〃	9.10	0.24~0.37	2~10	〃
SD-9	-	49.20	0.27~0.64	3~19	〃
SD-10	-	28.50	0.19~0.41	3~8	〃
SD-11	-	20.60	0.29~0.44	3~15	〃
SD-12	東西溝	28.90	0.36~0.94	2~8	〃
SD-13	〃	3.10	0.17~0.33	2~3	〃
SD-14	-	20.60	0.15~0.40	3~9	〃
SD-15	東西溝	7.70	0.23~0.46	2~10	〃
SD-16	〃	4.10	0.18~0.29	2~5	〃
SD-17	〃	12.80	0.31~0.86	2~9	〃
SD-18	〃	4.10	0.15~0.32	2~3	〃
SD-19	〃	3.60	0.20~0.48	2~5	〃
SD-20	〃	13.40	0.14~0.30	2~5	〃
SD-21	〃	8.20	0.37~0.52	2~8	〃
SD-22	南北溝	2.70	0.12~0.28	2~3	〃
SD-23	東西溝	4.40	0.25~0.52	2~10	〃
SD-24	〃	23.40	0.20~0.61	2~10	〃
SD-25	南北溝	8.60	0.28~0.59	4~12	〃
SD-26	逆「L」字状	19.00	0.18~0.62	2~8	〃
SD-27	南北溝	7.50	0.28~0.59	2~9	〃
SD-28	〃	9.20	0.19~0.71	2~14	〃
SD-29	〃	6.10	0.19~0.38	2~8	〃
SD-30	〃	7.60	0.16~0.37	5~16	〃
SD-31	-	12.90	0.19~0.29	3~7	〃
SD-32	-	21.50	0.32~1.21	2~8	〃
SD-33	東西溝	10.40	0.29~0.42	2~7	〃
SD-34	「コ」字状	50.80	0.34~1.19	3~20	〃
SD-35	-	10.60	0.28~0.75	3~12	〃
SD-36	東西溝	10.50	0.25~0.52	4~9	〃
SD-37	〃	52.60	0.28~0.67	3~19	〃
SD-38	〃	2.00	0.24~0.41	2~4	〃
SD-39	〃	9.10	0.45~0.78	2~14	〃
SD-40	〃	1.50	-	6~8	〃
SD-41	〃	4.70	0.17~0.38	2~10	〃
SD-42	南北溝	7.50	0.19~0.46	2~16	〃
SD-43	〃	7.70	0.31~0.74	2~14	〃
SD-44	〃	8.40	0.34~0.76	5~10	〃
SD-45	〃	9.70	0.24~0.38	3~10	〃
SD-46	〃	12.50	0.24~0.64	5~17	〃
SD-47	〃	6.40	0.29~0.49	3~8	〃
SD-48	東西溝	14.90	0.20~0.74	3~8	〃
SD-49	南北溝	25.50	0.31~0.75	1~6	〃
SD-50	〃	10.90	0.17~0.34	1~10	〃
SD-51	〃	24.80	0.27~0.38	2~9	〃
SD-52	東西溝	6.10	0.26~0.30	2~4	〃
SD-53	南北溝	7.80	0.13~0.46	2~5	〃
SD-54	-	8.70	0.51~1.26	10~16	II区下面検出遺構
SD-55	-	5.60	0.29~0.53	3~10	〃
SD-56	-	13.00	0.18~0.83	3~14	〃

遺構計測表7～9

遺構計測表7 溝跡3(SD)

遺構番号	形状	規模			備考
		検出長(m)	幅(m)	深さ(cm)	
SD-57	-	31.60	0.56～1.09	22～61	Ⅱ区下面検出遺構

遺構計測表8 井戸跡(SE)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向(NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(m)		
SE-1	円形	1.69	1.65	2.56	-	Ⅱ区上面検出遺構

遺構計測表9 性格不明遺構(SX)

遺構番号	平面形態	規模		断面	備考
		幅(m)	深さ(cm)		
SX-1	不整形	1.86～2.18	5～17	不整形の舟底状	I区上面検出遺構
SX-2	〃	-	-	舟底状	〃

圖 版

I ☒



調査前全景 (北東より)



中央バンクセクション (南より)

図版2



上面(東側)遺構検出状態(西より)



上面(西側)遺構検出状態(東より)



上面(東側)遺構完掘状態(西より)



上面(西側)遺構完掘状態(東より)

図版4



下面遺構検出状態(東より)



下面遺構完掘状態(東より)



第Ⅷ層木製品 (33) 出土状態



第Ⅷ層木製品 (118) 出土状態



第Ⅷ層木製品 (119) 出土状態



第Ⅷ層木製品 (126) 出土状態



第Ⅷ層須恵器 (176) 出土状態



第Ⅷ層瓦質土器 (188) 出土状態



第Ⅷ層石製品 (192) 出土状態



第Ⅷ層木製品 (199) 出土状態

図版6



第Ⅷ層木製品(203) 出土状態



第Ⅷ層木製品(205) 出土状態



第Ⅷ層木製品(206) 出土状態



SD-1バンクセクション(南より)



SD-5バンクセクション(南より)



SD-10バンクセクション(南より)



SD-21木製品(341) 出土状態



SD-22バンクセクション(北より)

II 区



調査前全景(西より)



中央バンクセクション(南より)

図版8



上面遺構検出状態(北西より)



上面遺構完掘状態(北西より)

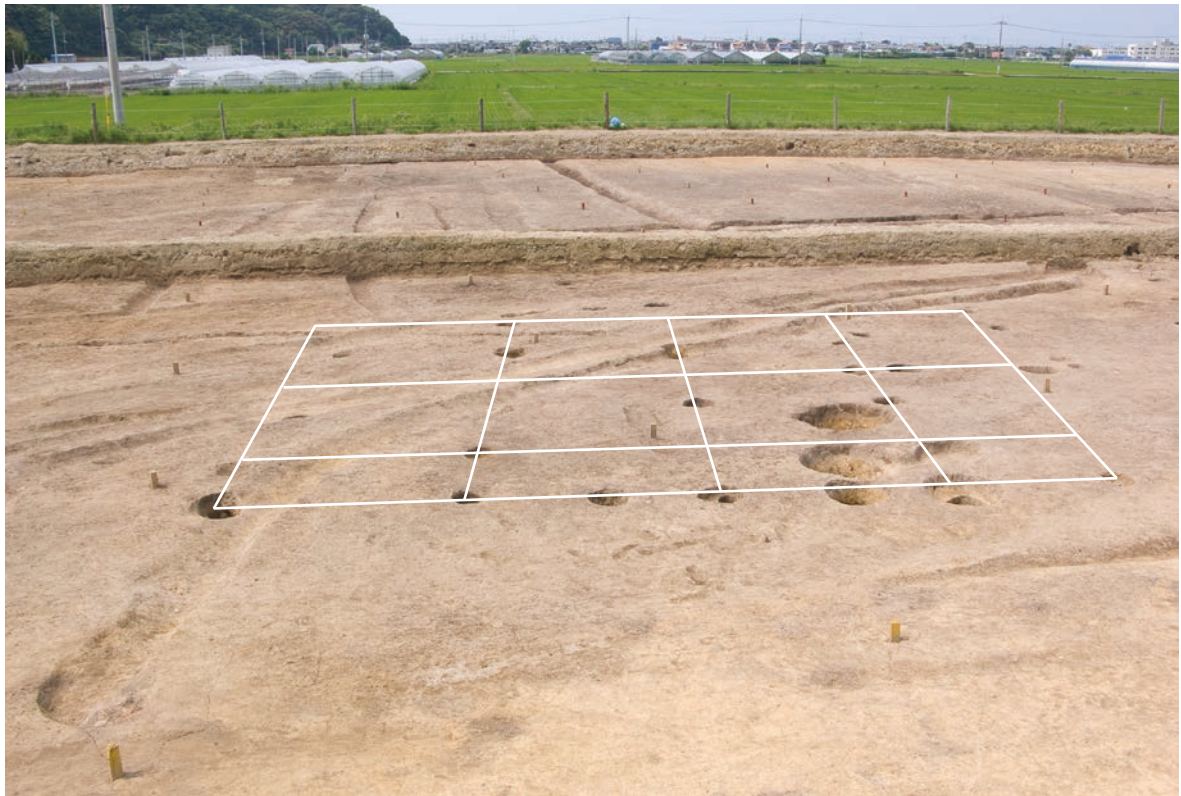


下面遺構検出状態(南より)



下面遺構完掘状態(北西より)

図版10



SB - 2完掘状態(北より)



SB - 5完掘状態(北西より)



SB - 12完掘状態(南より)



SK - 1石組検出状態(北より)

図版12



SK - 1完掘状態(北より)



SE - 1完掘状態(西より)



第Ⅶ層須恵器 (221) 出土状態



第Ⅷ層灰釉陶器 (244) 出土状態



第Ⅸ層弥生土器 (266) 出土状態



第Ⅸ層緑釉陶器 (282) 出土状態



SK-4バンクセクション(西より)



SK-5バンクセクション(西より)



SK-8バンクセクション(西より)



SK-17バンクセクション(西より)

図版14



SK-18バンクセクション(東より)



SK-22バンクセクション(南より)



SK-23バンクセクション(西より)



SD-12バンクセクション(西より)



SD-34瓦質土器(375)出土状態



SD-44バンクセクション(南より)



SD-48バンクセクション(東より)



P-11須恵器(415)出土状態

Ⅲ 区



調査前全景(西より)



北壁セクション(南西より)

図版16



完掘状態(西より)



完掘状態(南より)



第Ⅲ層弥生土器(315)出土状态



第Ⅲ層弥生土器(316)出土状态



第V層弥生土器(328)出土状态



第V層弥生土器(334)出土状态

出土遺物



弥生土器(甕)



弥生土器(甕)



75

弥生土器(鉢)



141

弥生土器(壺)



弥生土器(鉢)



弥生土器(鉢)



175

庄内式土器(甕)



176

須恵器(壺)



土製品(土錘)



弥生土器(壺)

図版24



土師器(羽釜)



弥生土器(壺)



木製品(下駄, 鋏, 斎串)



木製品(箱, 鋏, 鋤)



木製品 (楯・舟形・木鏃)



弥生土器(壺・甕), 石製品(砥石)



弥生土器(壺・鉢・高杯), 石製品(叩石)



弥生土器(壺・甕)

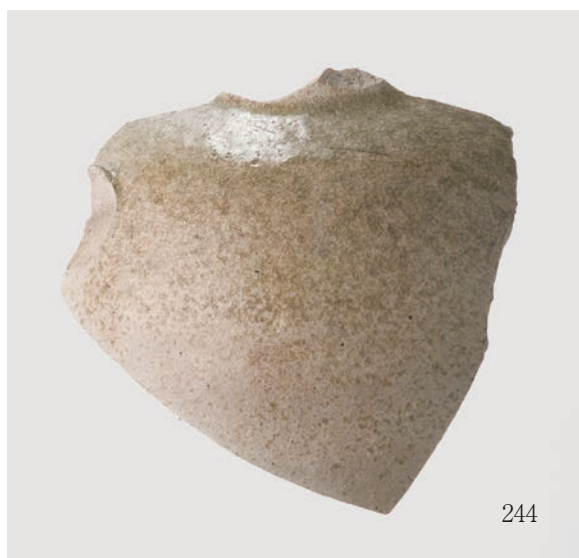


弥生土器(甕), 瓦器(椀), 瓦質土器(三足鍋)

図版32



須恵器(杯・壺), 石製品(叩石・砥石), 木製品(紡錘車)



弥生土器(甕), 須惠器(杯·碗), 灰釉陶器(水注), 石製品(柱状片刃石斧·叩石)

图版34



弥生土器(甕·高杯·支脚), 石製品(砥石), 木製品(部材)



弥生土器(壺・甕), 石製品(叩石・砥石)

图版36



弥生土器(壺·甕·鉢), 青磁(碗)



弥生土器(壺・甕・器台), 土師質土器(杯・碗・高台付小皿), 土製品(土錘), 木製品(田下駄)

图版38



弥生土器(甕), 土師質土器(杯), 瓦質土器(鍋), 瓦(平瓦), 石製品(有溝砥石), 木製品(鉢)



弥生土器(壺·甕·鉢), 須恵器(杯·碗), 土師質土器(碗), 土製品(土錘)

图版 40



弥生土器(壺・甕), 石製品(石庖丁)



弥生土器(壺・甕), 土師質土器(杯), 瓦質土器(播鉢)

図版42



土師器(甕), 土師質土器(小皿), 白磁(碗), 近世磁器(碗), 土製品(土錘), 木製品(椀・杯・把手・付札)



46



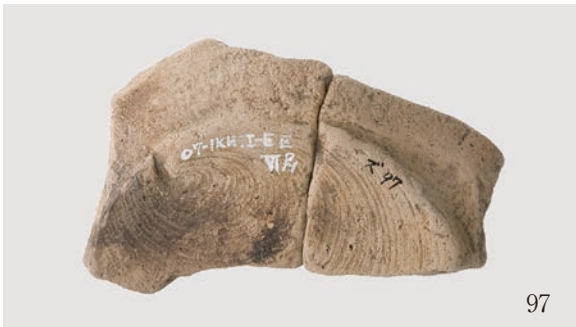
66



77



91



97



98



102

103



125



154



185

弥生土器(甕・鉢), 緑釉陶器(碗), 土師質土器(杯・小皿・鍋), 石製品(石鏃), 木製品(鳥形)

图版 44



須惠器(杯), 土師質土器(小皿), 青磁(碗), 石製品(石鏃·石庖丁), 土製品(土錘)



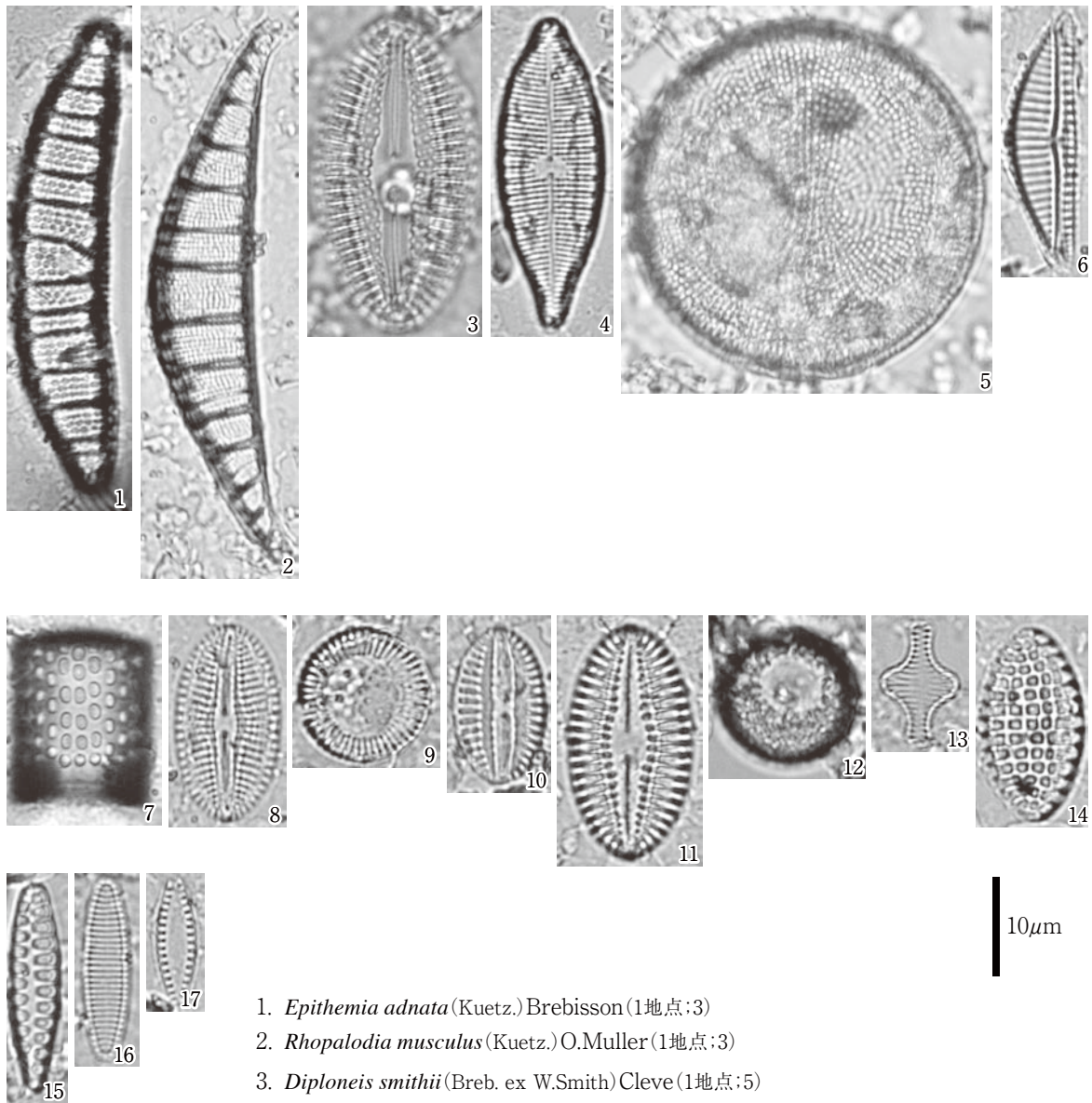
弥生土器(甕), 土師器(甕), 緑釉陶器(椀), 土師質土器(杯・椀・皿・鍋)

图版 46



弥生土器(壺・甕), 須恵器(杯・皿), 土師質土器(杯・小皿・鍋), 瓦質土器(鍋)

自然科学分析

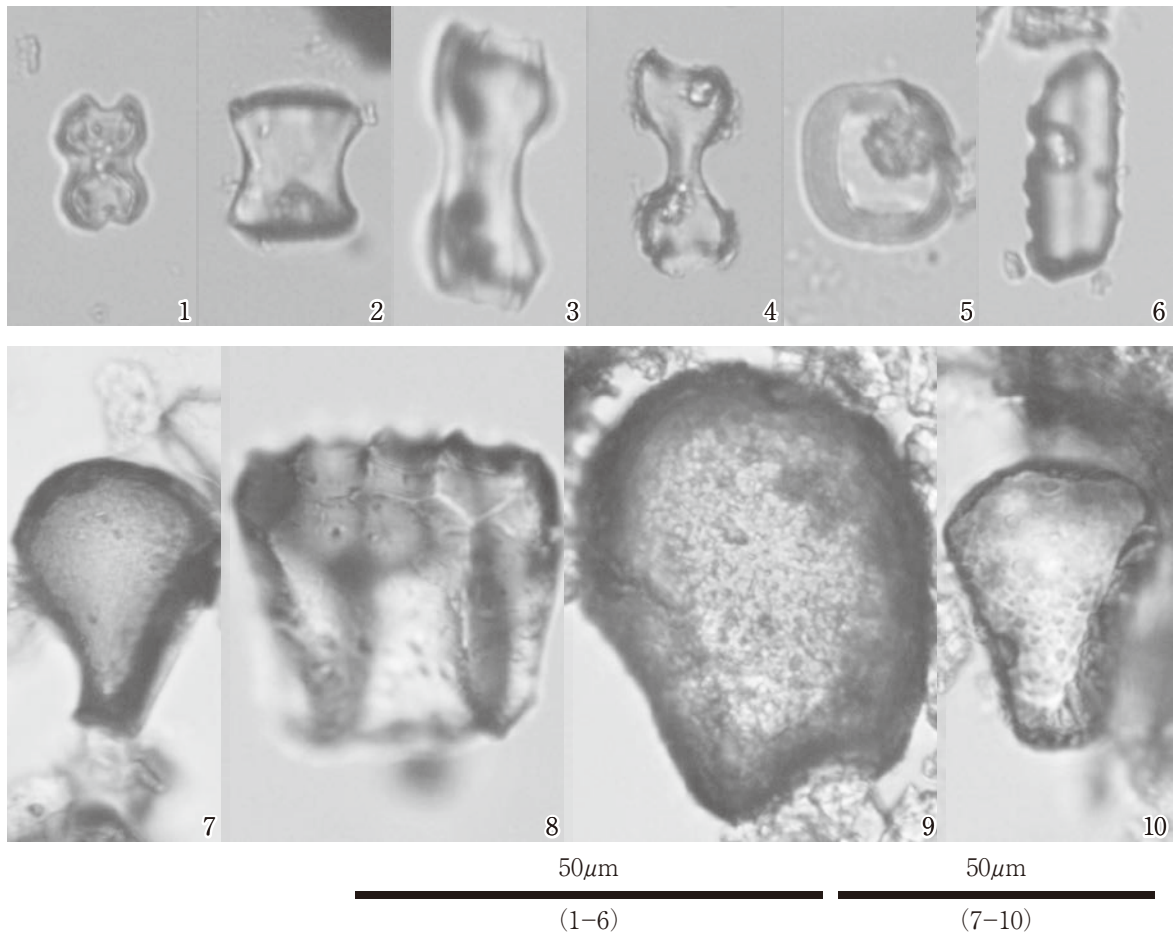


1. *Epithemia adnata* (Kuetz.) Brebisson (1地点:3)
2. *Rhopodia musculus* (Kuetz.) O.Muller (1地点:3)
3. *Diploneis smithii* (Breb. ex W.Smith) Cleve (1地点:5)
4. *Mastogloia smithii* Thwaites (1地点:4)
5. *Thalassiosira lacustris* (Grun.) Hasle (1地点:3)
6. *Encyonema silesiacum* (Bleisch) D.G.Mann (1地点:8)
7. *Aulacoseira crassipunctata* Krammer (1地点:1)
8. *Diploneis ovalis* (Hilse) Cleve (1地点:1)
9. *Cyclotella striata* (Kuetz.) Grunow (1地点:10)
10. *Diploneis suborbicularis* (Greg.) Cleve (1地点:3)
11. *Diploneis pseudovalis* Hustedt (1地点:6)
12. *Pseudopodosira kosugii* Tanimura et Sato (1地点:1)
13. *Staurosira construens* Ehrenberg (1地点:8)
14. *Tryblionella granulata* (Grunow) D.G.Mann (1地点:5)
15. *Opephora martyi* Heribaund (1地点:1)
16. *Fragilariforma exigua* (Grun.) D.M.Williams & Round (1地点:2)
17. *Pseudostaurosira brevistriata* (Grun.) D.M.Williams & Round (1地点:1)



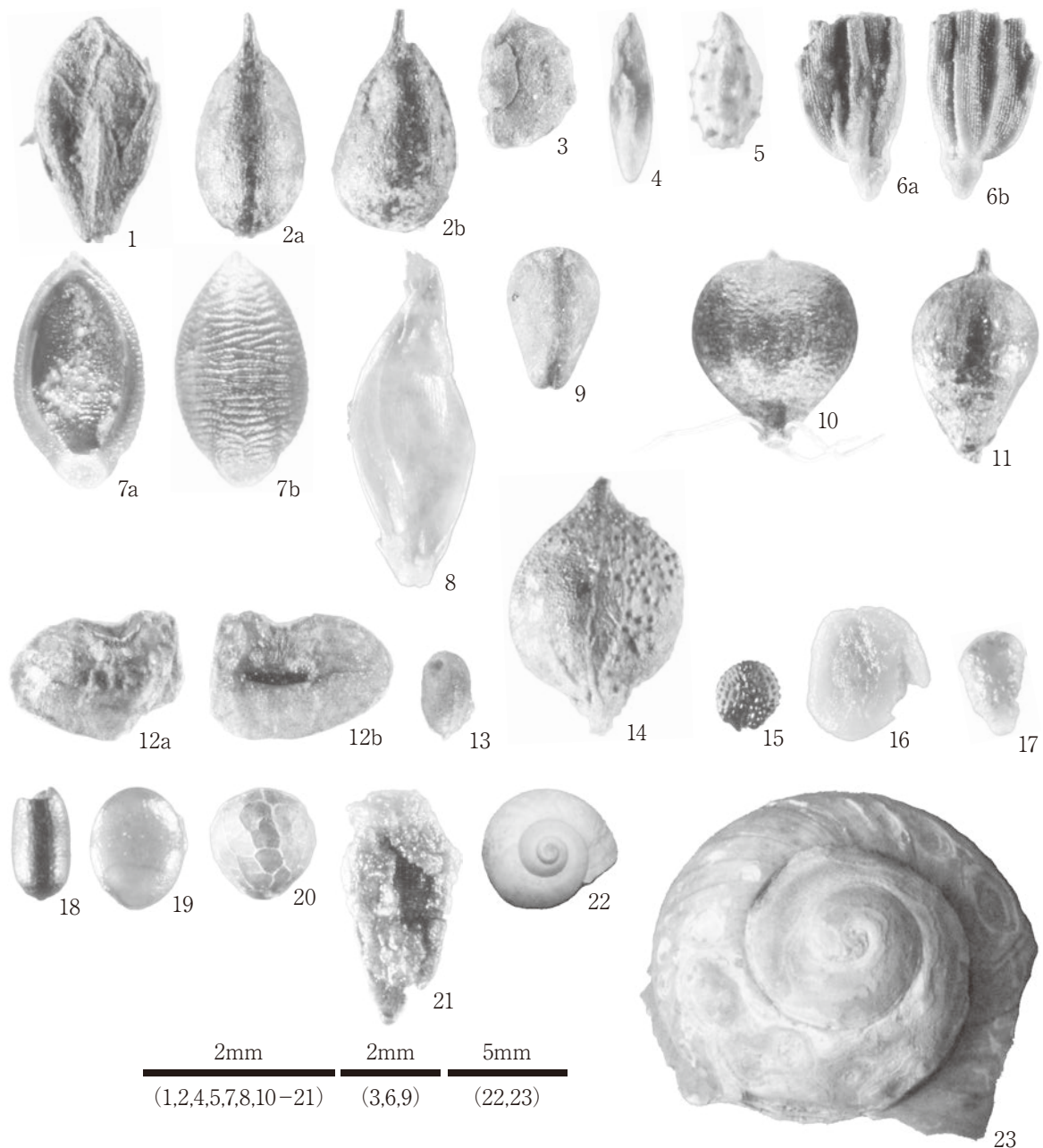
1. モミ属(1地点:2) 2. ツガ属(1地点:2) 3. スギ属(1地点:10) 4. イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科(1地点:4)
 5. マツ属(1地点:3) 6. ブナ属(1地点:9) 7. ハンノキ属(1地点:6) 50μm
 8. コナラ属コナラ亜属(1地点:1) 9. コナラ属アカガシ亜属(1地点:2) (1,2)
 10. ニレ属-ケヤキ属(1地点:3) 11. ガマ属(1地点:2) 12. イネ科(1地点:1) 50μm
 13. カヤツリグサ科(1地点:1) 14. ソバ属(3地点:15) 15. ハス属(1地点:9) (3-15)

花粉化石



- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(1地点:2) | 2. ネザサ節短細胞珪酸体(1地点:2) |
| 3. コブナグサ属短細胞珪酸体(1地点:2) | 4. ススキ属短細胞珪酸体(1地点:2) |
| 5. ヨシ属短細胞珪酸体(1地点:6) | 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(1地点:7) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体(1地点:2) | 8. ネザサ節機動細胞珪酸体(1地点:4) |
| 9. ヨシ属機動細胞珪酸体(1地点:6) | 10. ウシクサ族機動細胞珪酸体(1地点:2) |

図版 50



- | | |
|------------------------------------|------------------------|
| 1. ハギ属 果実(3地点:15) | 2. カワツルモ 果実(1地点:2) |
| 3. ヒルムシロ属 果実(1地点:2) | 4. イバラモ属 種子(1地点:2) |
| 5. スブタ 種子(3地点:15) | 6. イネ 穎(3地点:15) |
| 7. エノコログサ属 果実(3地点:15) | 8. イネ科 果実(3地点:15) |
| 9. ウキヤガラ近似種 果実(1地点:2) | 10. ホタルイ属 果実(3地点:15) |
| 11. カヤツリグサ科 果実(1地点:2) | 12. イボグサ 種子(3地点:15) |
| 13. ミズアオイ属 種子(3地点:15) | 14. タデ属 果実(3地点:15) |
| 15. ナデシコ科 種子(3地点:15) | 16. タガラシ 果実(3地点:15) |
| 17. キジムロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 核(1地点:2) | 18. オトギリソウ属 種子(1地点:2) |
| 19. ヒメシロアサザ 種子(1地点:2) | 20. イヌコウジュ属 果実(3地点:15) |
| 21. タカサプロウ 果実(3地点:15) | 22. マルタニシ? 成貝(SE-1) |
| 23. マルタニシ? 成貝(SE-1) | |

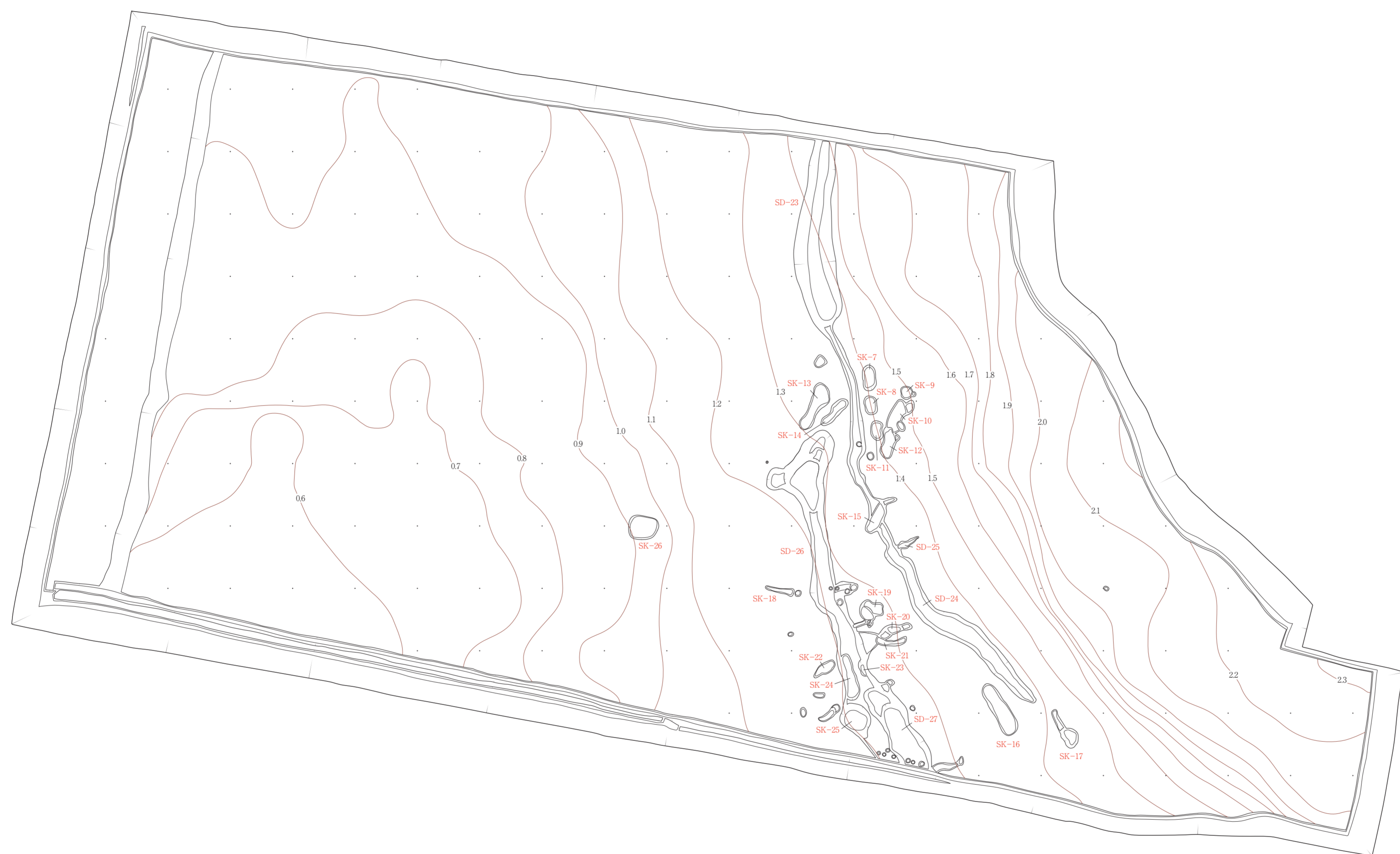
種実遺体

報告書抄録

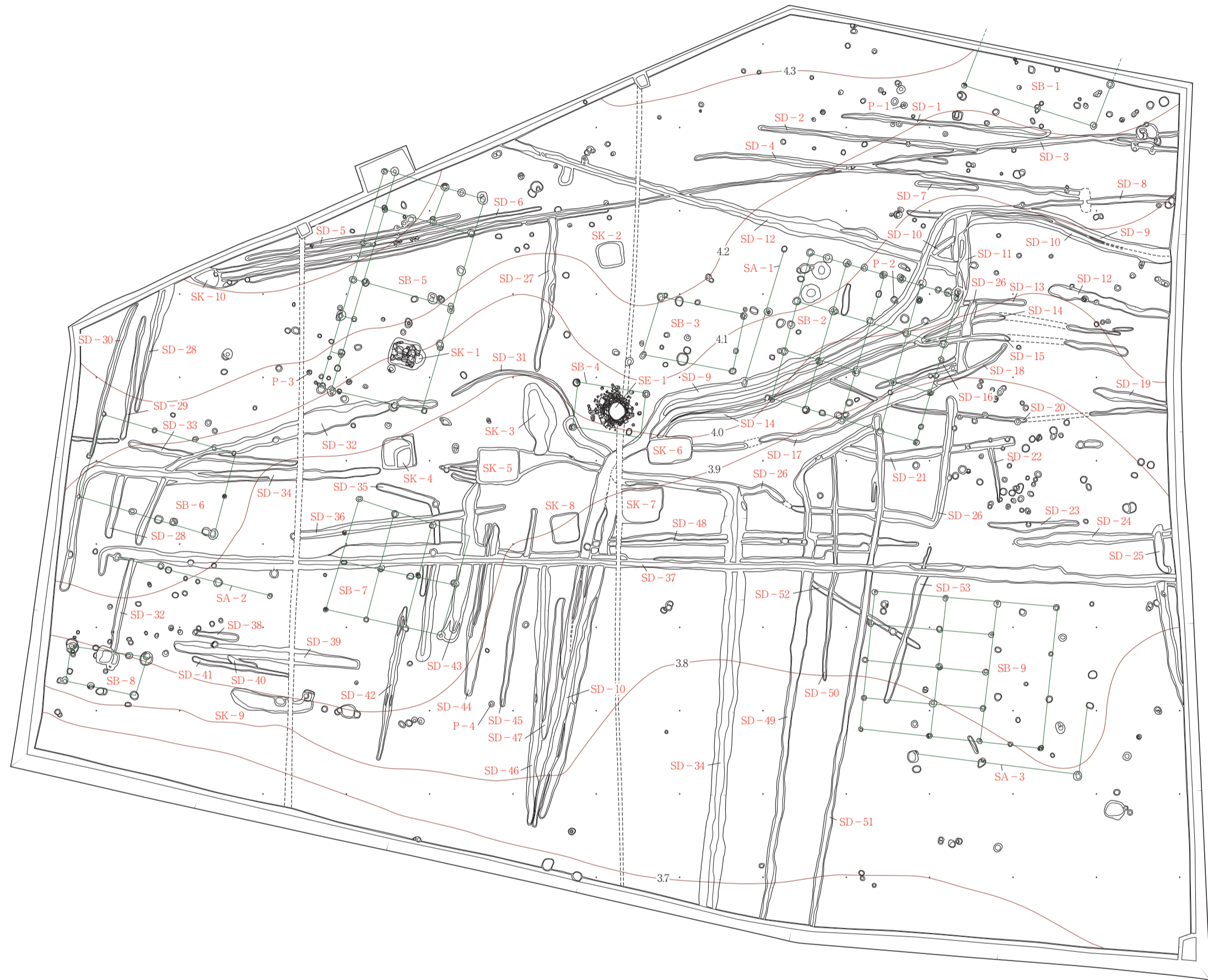
ふりがな		とくおうじひろもといせき						
書名		徳王子広本遺跡						
副書名		南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅵ						
シリーズ名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第136集						
編著者名		下村裕, 井上昌紀, 小川博敏, パリノ・サーヴェイ株式会社						
編集機関		公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター						
所在地		高知県南国市篠原1437-1						
発行年月日		2014年3月20日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とくおうじひろもといせき 徳王子広本遺跡	〒781-5332 こうちけんこうなんし 高知県香南市 かがみちやうとくおうじ 香我美町徳王子	39211	180055	33° 32' 47"	133° 44' 45"	2007.4.26 ～ 2008.3.6 2011.6.14 ～ 2011.8.8	10,770 m ²	記録保存 調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
徳王子広本遺跡	集落跡	弥生時代 古 代 中 世	掘立柱建物跡 土坑 溝跡 井戸跡	12棟 52基 84条 1基	弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器 瓦質土器 土製品 石製品	古代・中世の掘立柱建物跡が検出されており、本地域における当該期の様相を示す貴重な資料を得ることができた。		
要約	<p>徳王子広本遺跡は徳王子大崎遺跡と同様に香宗川左岸に広がる低湿地に向けて北側から派生した丘陵上に立地している。本遺跡では、中世の掘立柱建物跡が計11棟検出されており、当該期の屋敷が存在していたことが明らかとなった。そのうち、8棟は同時期に存在していた一連の建物群とみられ、当該期の屋敷地内における建物の配置を考えるうえで、貴重な資料になると考えられる。</p>							



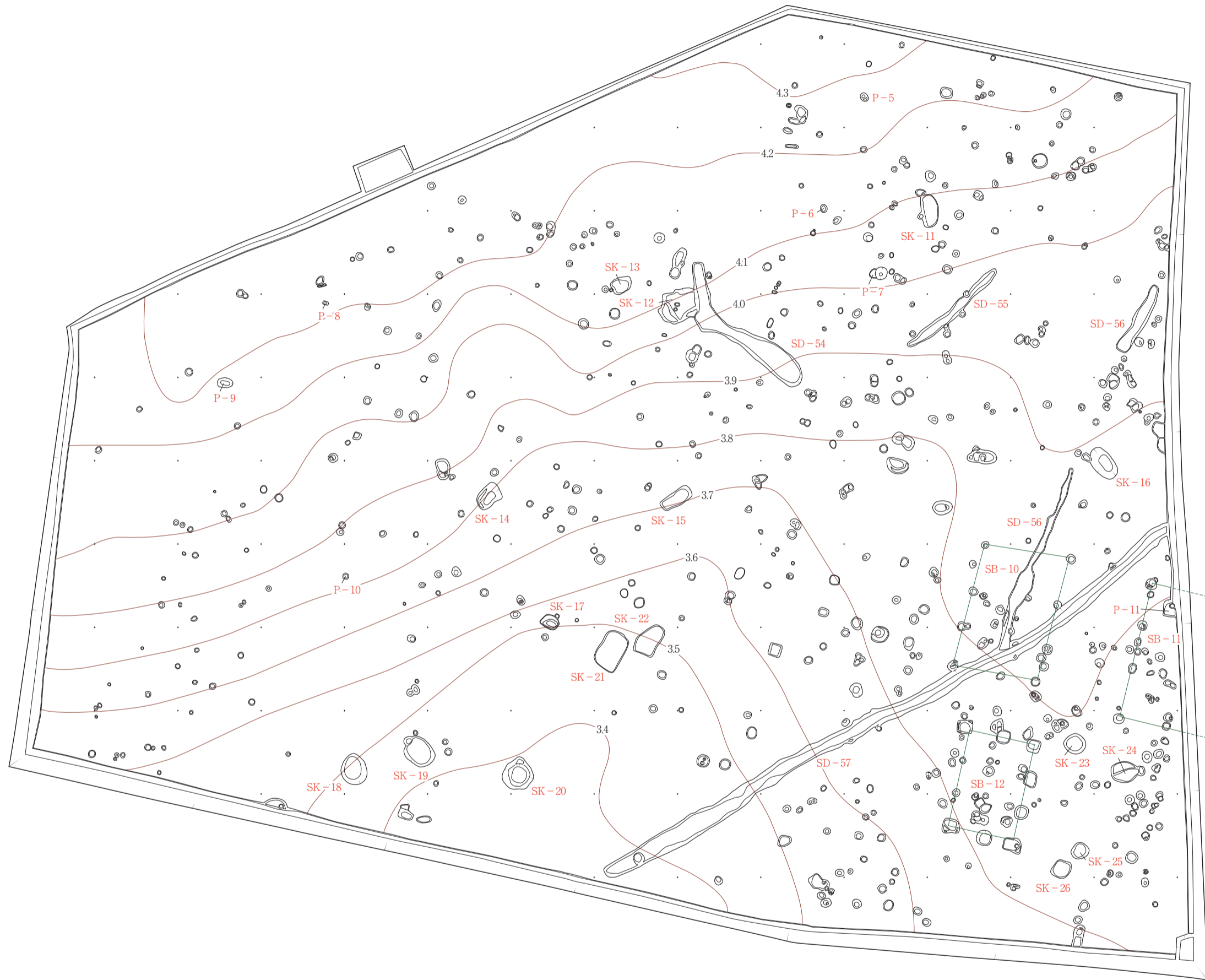
付図1 徳王子広本遺跡第I調査地区(上面)遺構平面図(S=1/200)



付図2 德王子広本遺跡第I調査地区(下面)遺構平面図(S=1/200)



付図3 徳王子広本遺跡第Ⅱ調査地区(上面)遺構平面図(S=1/200)



付図4 徳王子広本遺跡第Ⅱ調査地区(下面)遺構平面図(S=1/200)

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第136集

徳王子広本遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書VI

(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書XI)

2014年3月20日

発行 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 西村謄写堂

